岩手県埋文センター文化財調査報告書第16集

御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書

盛岡市　下猿田II・下猿田III遺跡
雫石町　安庭古墳・伝久・町場II・町場III遺跡

(昭和49年度・54年度)

(財)岩手県埋蔵文化財センター
建設省御所ダム工事事務所

埋文センター調査報告書第16集正誤表

ページ	行	誤	正
2	4	県埋蔵文化財	県埋蔵文化財センター
〃	7	昭和53年度	昭和54年度
17	図版3	（注記）現表さで	現表土で
21	図版6	(C)	（ローマ数字を全て削除）
24	31	写真図版5—	写真図版5—B
25	5	平碗	平埦
32	図版4	(A)墓拡埋土	墓壙埋土
〃	〃	(B) 墓拡完掘後	墓壙完掘後
42	図版3	XI層	IX層
46	31	図版・—①・②・③	図版6—①・②・③
47	図版5		（1と2を入れ換える）
50	1	弥生中期	弥生時代中期
52	図版2	(B)図版—8	図版5—8
53	図版3	(A)竪穴出土状況	遺物出土状況
57	5	現代居住	現在居住
60	15	すみなわこん	すみなわあと
63	27	使用していたので	使用していた
〃	28	それではあるが	ではあるが
88	17	地焼炉	地床炉
〃	28	切り合いに関係が	切り合関係に
89	23	図版6—24、7—34・36	図版8—24、9—34・36
〃	〃	10—1～4、11—16	6—1～4、7—16
〃	〃	図版13—1、3—4	図版13—1、13—4
90	3	図版10—7	図版6—7
〃	10	図版7—40	図版9—40
〃	19	図版6—25・50	図版8—25・10—50
〃	27	図版7—43、10—7	図版9—43、6—7
〃	28	図版8—115	図版15—49
92	図版5	(B—11)黒褐色土	黒色土
〃	〃	〃 非に固く	非常に固く
93	12	図版6—20	図版7—20
94	2	図版6—8・11・	図版7—8・11・
104	15		（削除する）
108	6	図版15—20～57	図版15—27～57
109	6	図版16—62・65	図版16—62～65
139	下段	図写図版15	写真図版15
142	〃	石皿、石皿、石刀、	砥石、石皿、石刀
145	11	雑草灌木	雑草灌木
147	24	〃	〃
159	2		（全て削除する）
200	7	都筑文男	都流文男
200	25	第2臼歯	第2大臼歯
203	7	頸面	頰面
〃	〃	C_3う蝕	（C_3）う蝕
〃	13	第3乳臼歯	第2乳臼歯
〃	31・32		—|—（加える）
204	3	X—線像	X線像
205	2	磨面	唇面
〃	21	tee th.	teeth.
〃	23	基系統	基の系統
〃	25	fo r	for
〃	〃	classifi cations	classifications
〃	29	酒井塚 郎	酒井塚郎
〃	31	Dry op thecus	Dryopthecus
207	(下から)10	幅径	厚径
208	(下から)13	咬耗度耗度	咬耗度
210	下段		ED BAABC
211	〃	（表）（裏）	（頰側）（舌側）
218	写真		（天地を反対に）
237	5	煙滅	湮滅
248	6	形？的	形態的
262	11	蛇天洞	蛇王洞
〃	15	笹津稲洋	笹津備洋
〃	17	発菜沢	発茶沢

御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書

盛岡市　　下猿田II・下猿田III遺跡

雫石町　　安庭古墳・伝久・町場II・町場III遺跡

（昭和49年度・54年度）

序

岩手県内には数多くの遺跡が存在することは広く知られている所であります。昭和55年3月の県教育委員会文化課調査によりますと、県下に所在する埋蔵文化財包蔵地は 4,719ケ所の多きとなっております。この数は今後分布調査の範囲の拡張によって更に増加するものと考えられます。この埋蔵文化財包蔵地は、我々の祖先が残してくれた貴重な文化遺産であります。この貴重な文化遺産を後世に守り伝える責務が我々に課せられているものと考えている所であります。

近年岩手県においても東北縦貫自動車道建設をはじめ、御所ダム建設等大型公共事業が実施され、その対象地内に多くの埋蔵文化財包蔵地が包括されております。これら対象地内の包蔵地について、事業実施以前に事業者と県文化課の間でその取扱い方を協議し、その保護につとめています。しかし事業とのかかわりにおいて発掘調査を行ない記録保存をする所も出て参ります。

当センターにおいては、埋蔵文化財保護の立場に立って、これら事業にかかわる埋蔵文化財包蔵地の発掘調査に取り組んで参りました。発掘調査によってこれまで数々の貴重な資料を得ております。例えば、集落址としては、都南村湯沢遺跡、松尾村長者屋敷遺跡、盛岡市つなぎⅢ遺跡、水沢市膳性遺跡等、遺構・遺物としては盛岡市萪内遺跡の鈴、足跡、弓、大型土偶など数多くございます。又これらの資料の整理、報告書の公刊についても職員一同一丸となって鋭意努力しておる所でございます。

今般センター一丸の努力によって、ここに本報告書を刊行いたすことになりました。内容については不十分の点が多々あるとは思いますが、本報告が、いささかでも関係各位の参考に供され、斯学向上の一助となれば幸甚と存じます。

最後に県教委、委託者をはじめ、関係各位に多大なご協力、ご援助を頂きましたことに感謝申し上げ、今後のご指導、ご協力を合せてお願い申し上げます。

昭和56年3月

(財) 岩手県埋蔵文化財センター
理事長　新　里　　盈

例　　言

1．本書は御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書である。

2．本書は安庭古墳、伝久Ⅰ遺跡（昭和49年調査）、町場Ⅱ遺跡、町場Ⅲ遺跡、下猿田Ⅱ遺跡、下猿田Ⅲ遺跡の発掘調査成果を収録した。

3．各遺跡の担当者は次の通りである。

安庭古墳、伝久Ⅰ遺跡……上野猛、高橋与右衛門

町場Ⅱ遺跡……本沢慎輔

町場Ⅲ遺跡……中川重紀、松野恒夫

下猿田Ⅱ遺跡……本沢慎輔、高橋正之、松野恒夫

下猿田Ⅲ遺跡……高橋正之、本沢慎輔

4．本報告書の執筆分担は次の通りである。

安庭古墳、伝久Ⅰ遺跡……高橋与右衛門

町場Ⅱ遺跡……本沢慎輔

町場Ⅲ遺跡……Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの一部、Ⅴ中川重紀、Ⅳの一部上野猛

下猿田Ⅱ遺跡……Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの１、Ⅳ本沢慎輔、Ⅲの２の(1)高橋正之、Ⅲの２の(2)上野猛

下猿田Ⅲ遺跡……Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅶ高橋正之、Ⅲ、Ⅵ本沢慎輔

5．本報告書に使用した実測図、写真は担当者が分担し、当センター御所分室冬期協力員が協力した。

6．図版凡例は各々図版中に示してある。

7．本報告書の執筆にあたり、石器の石質鑑定は岩手大学教育学部教授橋行一氏に、下猿田ⅡⅢ遺跡の人骨鑑定は岩手医科大学教授野坂洋一郎氏にそれぞれ依頼した。

8．発掘調査には、盛岡市繋地区、土渕地区、雫石町安庭地区、平沢地区、町場地区の方々に御協力をいただいた。

9．調査機構（昭和55年４月）

理事長＝新里盈　副理事長＝古館尚一郎　常務理事兼所長＝菅原一郎　総務課長＝小笠原喜一　庶務係長＝岡沢成治　主事＝佐藤久四郎　立花多加志　及川賀子　技能員＝佐藤春男　調査課長＝瀬川司男　主任専門調査員＝近藤宗光　上野猛　遠藤勝博　山口了紀　国生尚　専門調査員＝村上達夫　畠山靖彦　鈴木恵治　大原一則　田鎖寿夫　小平忠孝　鈴木隆英　四井謙吉　種市進　高橋正之　吉田洋　光井文行　佐藤勝　松野恒夫　高橋文夫　三浦謙一　工藤利幸　中川重紀　高橋与右衛門　本沢慎輔　高橋義介　佐々木清文

本文目次

序　文

例　言

御所ダム関係遺跡の調査経過……1
遺跡群の立地と環境……3

安　庭　古　墳

Ⅰ　はじめに……13
Ⅱ　遺跡の位置と周囲の環境……13
Ⅲ　調査方法と経過……14
　1．調査方法……14
　2．調査経過……14
Ⅳ　基本層序……16
Ⅴ　発見された遺構と遺物……17
　1．遺構……17
　　〔墳丘〕……17
　　〔周溝〕……19
　　〔土壙〕……19
　　〔その他〕……22
　2．遺物……22
　　〔平椀〕……22
Ⅵ　まとめ……25

伝　久　遺　跡

Ⅰ　はじめに……38
Ⅱ　遺跡の位置と立地……38
Ⅲ　調査方法と経過……39
　1．調査方法……39

2．調査結果……39
Ⅳ　基本層序……41
Ⅴ　検出された遺構と遺物……44
1．遺構……44
〔竪穴住居跡状掘り込み遺構〕……44
2．遺物……44
〔土器〕……44
〔石器〕……46
Ⅵ　まとめ……49

町場Ⅱ遺跡

Ⅰ　はじめに……57
Ⅱ　遺跡の位置と環境……57
Ⅲ　調査方法と経過……58
1．調査方法……58
2．経過……58
Ⅳ　発見された遺構と遺物……59
1．近世・近現代の遺構と遺物……59
(1)1号建物址……59
a．遺構……59
b．遺物……60
c．墨縄痕……60
(2)2号建物址……60
a．遺構……60
b．遺物……61
(3)墓址……61
(4)3号建物址……62
(5)4号建物址……63
2．1に先行する建物……63
Ⅴ　まとめ……63

町場Ⅲ遺跡

Ⅰ　遺跡の位置と環境……85
Ⅱ　調査方法と経過……86
Ⅲ　基本層序……87
Ⅳ　調査結果……88
　1．遺構……88
　(2)焼土遺構……88
　(2)ピット……88
　2．遺物……93
　(1)土器……93
　(2)土製品……104
　(3)石器……107
Ⅴ　まとめ……123

下猿田Ⅱ遺跡

Ⅰ　遺跡の位置と環境……145
Ⅱ　調査方法と経過……147
　1．調査方法……147
　2．経過……147
Ⅲ　発見された遺構と遺物……148
　1．近世・近現代の遺構と遺物……148
　(1)1号建物址……148
　　a．遺構……148
　　b．遺物……148
　　c．墨縄痕……149
　(2)2号建物址……149
　　a．遺構……149
　　b．遺物……150
　　c．他の諸遺構……150
　(3)3号建物址……151

(4)4号建物址 …… 151
(5)墓址 …… 151
2．1に先行する遺物 …… 156
(1)縄文時代の土器 …… 156
(2)縄文時代の石器 …… 158
Ⅳ まとめ …… 162
附岩手県下猿田Ⅱ遺跡出土の歯牙鑑定書 …… 200

下猿田Ⅲ遺跡

Ⅰ はじめに …… 237
Ⅱ 遺跡の位置及び立地 …… 237
Ⅲ 調査方法と経過 …… 239
1．調査方法 …… 239
2．経過 …… 239
Ⅳ 基本層序 …… 243
Ⅴ 縄文時代の遺構及び遺物 …… 243
1．遺構 …… 243
陥し穴状遺構Ⅰ号 …… 243
陥し穴状遺構Ⅱ号 …… 244
陥し穴状遺構Ⅲ号 …… 244
陥し穴状遺構Ⅳ号 …… 244
陥し穴状遺構Ⅴ号 …… 244
陥し穴状遺構Ⅵ号 …… 244
2．遺物 …… 248
(1)土器 …… 248
(2)石器 …… 256
3．まとめと若干の考察 …… 260
Ⅵ 近世・近現代の遺構と遺物 …… 263
1．1号建物址 …… 263
a．遺構 …… 263
b．遺物 …… 263
2．2号建物址 …… 264

3．3号建物址 …… 264
a．遺構 …… 264
b．遺物 …… 265
c．隣接する土坑 …… 265
4．4号建物址 …… 265
5．5号建物址 …… 266
c　附岩手県 …… 267
7．まとめ …… 267
Ⅶ　結語 …… 268

図版目次

安庭古墳

図版1．遺跡付近の地形図……12
2．調査トレンチ設定図……15
3．基本層序……17
4．地形測量図……18
5．調査範囲、墳丘土層……20
6．細部実測図……21
7．遺構最終平面図……23
8．遺物実測図……24

伝久遺跡

図版1．遺跡付近の地形図……37
2．グリッド配置図……41
3．基本層序……42
4．竪穴住居跡状掘り込み遺構……45
5．土器拓本及び実測図……47
6．石器実測図……48

町場II遺跡

図版1．町場II遺跡グリッド及び遺構配置図……56
2．1号建物址平面、断面図……67
3．2号建物址平面、断面図、墓址平面図……68
4．3号・4号建物址平面図……69
5．1号建物址出土貨幣……70
6．2号建物址墓址出土貨幣(上)
墓址出土キセル(下)……71
7．3号建物址出土貨幣(上)
建物址出土石白(下)……72
8．石器……73

町場III遺跡

図版1．遺跡付近の地形図……83
2．グリッド、遺構配置図……84
3．基本層序……87
4．E－3焼土遺構、E－7・C－9ピット……91
5．B－11、A－12、D－14No1、D－No2、C－16ピット……92
6．土器実測図(1)……98
7．土器実測図(2)……99
8．拓影図(1)……100
9．拓影図(2)……101
10．拓影図(3)……102
11．拓影図(4)……103
12．土製品実測図(1)……105
13．土製品実測図(2)……106
14．石器実測図(1)……112
15．石器実測図(2)……113
16．石器実測図(3)……114
17．石器実測図(4)……115
18．石器実測図(5)……116
19．石器実測図(6)……117
20．石器実測図(7)……118
21．石器実測図(8)……119

下猿田II遺跡

図版1．下猿田II遺跡位置図…… 146
2．1号建物址平面図…… 170
3．1号建物址…… 171
4．2号建物址と周辺小遺構…… 172
5．3号建物址平面及び断面図… 173
6．4号建物址平面及び断面図… 174
7．墓址平面図…… 175
8．墓址断面図…… 176
9．1号建物址出土貨幣…… 177
10．1号建物址出土貨幣…… 178
11．1号建物址出土貨幣(上)・円盤石製品(下)…… 179
12．1号建物址出土キセル、カンザシ…… 180
13．墓址（3、4、5－1）出土貨幣… 181
14．墓址（5－1）出土貨幣…… 182
15．墓址（5－1、5－2）出土貨幣 183
16．墓址（5－2、6、7）出土貨幣… 184
17．墓址（7、8、10）出土貨幣…… 185
18．墓址(10、11、12－1、12－2）出土貨幣…… 186
19．墓址（12－2）出土貨幣…… 187
20．墓址（12－2、13、15、16）出土貨幣(上)・墓址出土キセル(下)…… 188
21．墓址出土陶磁器、柄鑑…… 189
22．土器(1)…… 190
23．土器(2)…… 191
24．石器(1)…… 192
25．石器(2)…… 193
26．石器(3)…… 194
27．石器(4)…… 195
28．石器(5)…… 196
29．石器(6)…… 197
30．石器(7)…… 198
31．石器(8)…… 199

下猿田III遺跡

図版1．下猿田III遺跡グリッド配置図… 238
2．下猿田III遺跡グリッド配置図 240
3．下猿田III遺跡南北ライン土層断面図…… 241・242
4．陥し穴状遺構配置図…… 246
5．陥し穴状遺構I、II、III、IV、V、VI号平面及び断面図…… 247
6．復元土器実測図…… 251
7．第I群土器拓影図…… 252
8．第II群土器拓影図…… 253
9．第II群土器拓影図…… 254
10．第III群土器拓影図…… 255
11．石器実測図(1)…… 258
12．石器実測図(2)…… 259
13．1号建物址平面図…… 270
14．1号、3号建物址断面図…… 271
15．2号建物址平面、断面図…… 272
16．3号建物址平面図…… 273
17．土壙平面及び断面図、3号建物址柱穴断面図…… 274
18．4号建物址平面、断面図…… 275
19．5号建物址平面、断面図…… 276
20．墓址平面、断面図…… 277
21．建物址、墓址出土貨幣(上)、キセル土製品…… 278

写真目次

安庭古墳

写真1．A　遺跡遠景……29
　　B　墳丘セクション……29
　2．A　周溝部埋土……30
　　B　周溝完掘後（北西部）……30
　3．A　周溝完掘後……31
　　B　墳丘内石敷部分……31
　4．A　墓壙埋土……32
　　B　墓壙完掘後……32
　5．A　調査終了後全景……33
　　B　出土遺物……33

伝久遺跡

写真1．A　遺跡全景……51
　　B　基本層序……51
　2．A　基本層序……52
　　B　土器出土状況……52
　3．A　土器出土状況……53
　　B　掘り込み遺構埋土……53
　4．A　竪穴住居跡状掘り込み遺構（南から）……54
　　B　同上（東から）……54

町場II遺跡

写真1．1号建物址……74
　2．2号、4号建物址……75
　3．曲家、ダム完成後遠景……76
　4．1号、2号建物址出土貨幣……77
　5．3号建物址、墓址出土貨幣及び墓址出土キセル……78
　6．建物址出土土石臼……79
　7．土器及び石器……80

町場III遺跡

写真1．遺跡全景及び土層断面……125
　2．E－3焼土遺構、E－7、C－9、B－11ピット……126
　3．A－12、D－14№1、D－14№2、C－16ピット……127
　4．遺物散布状況……128
　5．遺物出土状況……129
　6．出土土器(A)……130
　7．出土土器(B)……131
　8．出土土器(C)……132
　9．出土土器(D)……133
　10．出土土器(E)……134
　11．出土土器(F)……135
　12．土偶、土製品……136
　13．出土石器(A)……137
　14．出土石器(B)……138
　15．出土石器(C)……139
　16．出土石器(D)……140
　17．出土石器(E)……141
　18．出土石器(F)……142

下猿田II遺跡

写真1．ダム完成後の遺跡全景及び曲家 …… 213
2．1号建物址…… 214
3．1号建物址カマド、礎石、3号建物址…… 215
4．4号建物址、2号建物址…… 216
5．墓址…… 217
6．墓址…… 218
7．墓址…… 219
8．1号建物址出土貨幣…… 220
9．1号建物址出土貨幣…… 221
10．1号建物址出土石製円盤、キセルカンザシ…… 222
11．墓址出土貨幣…… 223
12．墓址出土貨幣…… 224
13．墓址出土貨幣…… 225
14．墓址出土貨幣…… 226
15．墓址出土キセル、陶磁器…… 227
16．墓址出土陶磁器、柄鏡…… 228
17．土器…… 229
18．土器、石器…… 230
19．石器…… 231
20．石器…… 232
21．石器…… 233

下猿田III遺跡

写真1．下猿田III遺跡遠景及び1号建物址 …… 279
2．1号、2号、3号建物址…… 280
3．3号建物址柱穴断面…… 281
4．3号建物址、方形土壙…… 282
5．方形土坑、4号、5号建物址 …… 283
6．5号建物址、墓址、陥し穴状遺構 …… 284
7．陥し穴状遺構…… 285
8．半完形復元土器…… 286
9．A　第I群第1類、第2類土器 …… 287
B　第II群第1類ー第5類土器 …… 287
10．A　第II群第5類土器…… 288
B　第II群第5類、第6類土器 …… 288
11．A　石鏃、石匙、石篦…… 289
B石篦、不定形剥片石器…… 289
12．出土貨幣、出土キセル、ダム完成後の遠景 …… 290

Ⅰ．御所ダム関係遺跡の調査経過

岩手県盛岡市と雫石町にかけ建設される御所ダム用地内に存在する遺跡群の発掘調査は、昭和48年７月より開始された。御所ダムは北上川の支流雫石川に建設されるが、このダム建設は北上川の洪水調節が主たる目的とされている。北上川は古くから改修工事を実施してきたが、その殆んどが下流域すなわち宮城県内に限られ、上流域は長く原始河川に近い状態にあった。

昭和16年に岩手県内に五カ所のダムと遊水池を設け、洪水調節を行なう北上川改修計画がたてられ、同年から田瀬ダム建設が実施された。しかし戦後カサリン、アイオン両台風により計画を大巾に上まわる洪水が起り、昭和27年当初計画の改訂がよぎなくされた。御所ダムはすでに建設された石渕、田瀬、湯田、四十四田ダムの後をうける５番目のダムとして建設されるもので、その目的は洪水調節、盛岡市の上水道用水、ダム地点より下流域地帯の農業用水及び発電等である。これらの条件を満たすための御所ダムの概要は次の通りである。

湛水面積	6,400,000㎡
湛水延長	8.0km
常時満水位標高	180.0m
洪水満水位標高	182.0m
制限水位標高	174.0m
総貯水容量	65,000,000㎥

ダム建設に伴う水没地内の家屋および水田、畑地の水没面積は次のとおりである。

家屋	520世帯
宅地	45.4*ha*
田地	360*ha*
畑地	87*ha*
山林、原野	91*ha*
道路	22km

このような水没地及び宅地の代替地として予定された地域内分布調査において、37カ所の遺跡を確認した。これら遺跡群に対する発掘調査は、建設省御所ダム工事事務所の委託を受けて昭和48年７月より岩手県教育委員会文化課が行なうこととなった。

以下各年度における発掘調査は次のとおりである。

昭和48年度　繋Ⅳ、Ⅴ、野中、下長谷地、元御所Ⅰ、熊野橋遺跡。

昭和49年度　下猿田Ⅰ、新城館、除Ⅰ、安庭古墳、伝久、塩ケ森Ⅰ遺跡及び天沼Ⅰ遺跡の工事用道路部分。塩ケ森Ⅰは一部分の精査を次年度に残した。

昭和50年度　　繋Ⅰ、Ⅱ、戸沢館、塩ケ森Ⅰ遺跡の残り部分。

昭和51年度　　除Ⅱ、塩ケ森Ⅱ、萪内（総面積の$\frac{1}{3}$）、桜松遺跡の道路用地部分。

昭和52年度より財団法人岩手県埋蔵文化財センターが発足し、遺跡の発掘調査は（財）岩手県埋蔵文化財に移行された。

昭和52年度　　繋Ⅲ、Ⅳ、上野、南ノ又、兎野、広瀬Ⅰ遺跡。

昭和53年度　　広瀬Ⅱ、堂ケ沢Ⅰ、Ⅱ、萪内（総面積の$\frac{1}{3}$）、町場Ⅲ遺跡の一部分。

昭和53年度　　萪内（残り$\frac{1}{3}$）、町場Ⅱ、Ⅲ、下猿田Ⅱ、Ⅲ、塩ケ森Ⅰの一部分。なお萪内遺跡は精査が一部未完。

昭和55年度　　萪内遺跡の精査未完部分、塩ケ森Ⅰ遺跡の残り部分。

本年度までに調査が実施せられ終了した32遺跡であり、現在までに判明した遺跡の性格は縄文時代の集落跡及び土器散布地が圧倒的であった。縄文時代を主体とする遺跡数は23カ所、平安時代もしくはそれ以降のものと考えられる遺構、遺物を主体とする遺跡数は7カ所、他に遺跡とされながら何ら遺構、遺物の出土をみなかった地点2カ所が存在した。

本報告書においては、昭和49年度以降発掘調査を行なった遺跡のうち、下記の6遺跡についての調査結果を収録した。

安庭古墳においては、15～16世紀頃に構築されたと推定される周溝を有する土壙1基と若干の灰彩陶器破片が確認された。

伝久Ⅰ遺跡においては、竪穴住居跡状遺構1基と若干の縄文土器及び土師器の細片が確認された。

町場Ⅱ遺跡においては、縄文後期初期と推定される土壙7基、焼土遺構1基が検出され、又特殊土製品、土偶等の出土をみた。

町場Ⅲ遺跡においては、近世～近現代に於ける礎石建物跡4棟と古銭及び若干の縄文土器片、石器類が確認された。

下猿田Ⅱ遺跡においては、近世～近現代に於ける礎石建物跡3棟、掘立柱建物跡1棟、墓壙16基と古銭及び若干の縄文土器片、石器類が確認された。

下猿田Ⅲ遺跡においては、縄文時代と推定される陥し穴状遺構6基、近世～近現代に於ける礎石建物跡2棟、掘立柱建物跡3棟、墓壙3基、性格不明土壙2基がそれぞれ検出されている。遺物としては縄文早期中葉から前期初頭に編年される土器片及び石器類が出土している。

以上が御所ダム用地内に於ける遺跡と発掘調査の経過ならびに本報告書の概要である。

Ⅱ．遺跡群の立地と環境

北上川右支流雫石川に建設される御所ダムに関係する遺跡群は37個所である。これら遺跡群の立地はダム建設上の工事その他および周辺の地形から次の２つに大別される。

(1)ダム貯水池内に水没する雫石川岸近くに広がる沖積段丘上に位置するもの、すなわち標高180ｍ以下に存在する遺跡群。

(2)ダム建設に伴う付替道路部分にあたる洪積世低・中位段丘面上に位置するもの。すなわち標高 182ｍ以上に存在する遺跡群。特に標高 184ｍを基準とする付替道路予定地内にあるもの。

(1)に属するもの18遺跡、(2)に属するもの19遺跡である。(2)のうち標高が 182ｍより低いものも存在するが、これは道路予定地内で盛土される部分となるためである。現在までの調査結果によれば貯水地内に水没する遺跡群は比較的新しい時代のものが多く、道路予定地内にあるものは、それらより古い時代のものが多くみられる事は他地域における遺跡群の分布の状態と同様の結果を示しているといえよう。各遺跡ごとの立地とその周囲の環境を記す前に御所ダム周辺の地形面区分について若干記すこととする。

地形面区分ー盛岡市繋地区を中心としてー（図版－Ｂ）

北上川本流域に対する地形学的な調査研究は、相当広範囲に亘って進められている。特に中川久夫等の調査研究には特筆すべきものがあり、その業績に負う所が多い。しかし、北上川支流域に対する地形、地質の調査研究は部分的や個人的に行われており、その成果も公式に発表されたものは少ない。雫石川流域についても同様である。

本項では、繋地区遺跡の立地をより明確に把握するために、岩手郡滝沢村字塩の森付近より岩手郡雫石町西安庭付近までの範囲の地形面区分（特に段丘）を試みた。実際の区分に当たっては国土地理院発行の25,000分の１地形図、空中写真の判読、国土調査に関連する地形分類図（50,000分の１）等を参考にした。現地調査は種々の制約から小範囲についてのみ行ったので、細部についての事実誤認がある可能性のあることを付記しておく。

当地域は、黒沢川、竜川、葛根田川、南川、戸沢川、矢櫃川の各支流の内竜川を除く他の支流がほぼ同地点で合流しているために地形も非常に複雑である。特に雫石川と南川の左岸にみられる地形と右岸にみられる地形では若干の相違がみられるが、これは段丘堆積物の供給源、堆積に働いた営力等の差に起因するものと考えられる。

雫石川流域の地形は標高の高い方から山地、丘陵、河岸段丘、河岸平野等に大別されるが、それらは、標高、起伏、構成物等によって更に細分される。標高の高い方から順次説明を加える。

〔山　地〕

雫石川右岸には南昌山、赤林山、箱ケ森を主峰とする標高 850m±の山群がある。それらの北西側には大欠山、湯の館山等の標高 350m±の中起伏山地が多く存在し、中起伏山地の麓には小規模な段丘がへばりついている。また、これらの山群は大小数多くの沢や谷が山腹斜面を開析して雫石川に合流している。雫石川左岸には雫石町七ツ森山群（標高 348m）、滝沢村鳥泊山山群（標高 389m）があり、ともに麓には平野部が形成されている。これらの山群は安山岩、凝灰岩、チャート等で構成されている場合が多く、七ツ森山群は第４紀火山岩より成る。

これらの山地の現況はほとんど山林である。

〔丘　陵〕

丘陵地とみられる地域は雫石町塩ケ森、松ケ森山群（標高 265m±）と雫石町西安庭地内の女助山北麓にみられる（標高270～300m±）地形が相当すると考えられる。これらの丘陵は凝灰岩や安山岩で構成される場合が多いが、塩ケ森の場合は石英粗面岩や安山岩質の第４紀火山岩より構成され、七ツ森と同時期の火山活動によって形成されたものである。女助山北麓の場合には凝灰岩によって構成され、現地表面には若干の起伏がみられる。

〔段　丘〕

段丘は洪積段丘と沖積段丘に大別されるが、雫石川流域では洪積段丘３面、沖積段丘２面が認められる。高位面よりＨ面、Ｍ面、Ｌ面、沖積段丘古期・新期の順に説明を加える。

Ｈ面：高位段丘に相当する面は雫石町西安庭旭台、清水沢地区に広範囲に亘ってみられる。他には、雫石町西安庭籬野、雫石町繋字新城、高見、雫石町板橋、盛岡市繋字尾入野等に中位段丘の段丘崖沿いに残丘上の小丘としてみられる。標高は雫石町西安庭旭台清水沢地区では220～250m であるが、他は、205～220m である。現河床との比高は60～70m を測る。堆積物は雫石町繋字塩ケ森地区の土層観察によれば、礫層は全体としてクサリ礫が多く礫層の上面には0.5m±の黄橙色火山灰が堆積している。

Ｍ面：中位段丘とおもわれる段丘は雫石町繋字塩ケ森、新城地区、盛岡市尾入野、山根地区、雫石町板橋・仁沢瀬地区、滝沢村仁沢瀬地区、雫石町西安庭等の各地区に広範に亘って観察される。盛岡市繋温泉地区には、中位段丘相当面は観察されない。標高は190～210mであり、現河床との比高は40～50mである。上位段丘面とは比高10m±であり、緩傾斜の段丘崖が観察される。堆積物は、主として新鮮な砂礫分からなり、その上面を 1.5m内外の、黄橙色火山灰が堆積している。雫石町繋字新城・盛岡市繋字尾入野地区には火砕泥流の堆積がみられ、小岩井

泥流に相当するものと考えられる。

L面：低位段丘相当と考えられる面は、盛岡市繋温泉・除地区、雫石町下平、桜松、町場、戸沢、安庭地区にみられ、標高は180～200mであり、現河床とは20m±である。上位段丘面とは比高10m±であり明瞭な段丘崖が観察される。段丘堆積物は、繋Ⅲ遺跡の例では、新鮮な砂礫層の上にシルトが0.5～1.0m堆積しており、火山灰の堆積はみられない。

沖積段丘古期面：沖積段丘古期面と考えられる面は、盛岡市繋萪内河原・下繋・猿田・尾入野・北の浦・雫石町西安庭字広瀬・町場・安庭・皂角・天沼・兎野地区等にみられる。標高は160m～170mであり現河床とは比高10m±である。上位のL面との比高は10～15mである。堆積物は新鮮な砂礫層の上面に直接黒色シルトまたは腐植質土が堆積している。

沖積段丘新期面：各河川流域の両岸に細長くみられ、増水時には一部冠水する部分も含まれている。現河床との比高は3～5mの場合が多い。堆積物は新鮮な砂礫層の上面に砂質の腐植質土が堆積している。

扇状地・谷底平野：扇状地は開析扇状地と現成扇状地に大別されるが、開析扇状地は洪積段丘として残存しており、繋Ⅲ遺跡の立地する段丘も洪積低位段丘相当の開析扇状地とおもわれる。

現成扇状地は、立石沢下流域、萪内沢下流域の沖積段丘古期面上にみられ、その中でも、立石沢下流域の扇状地は沖積段丘古期面とは比高5～10mである。

谷底平野は崖錐性扇状地とともに盛岡市繋地区の沢や谷沿いに形成されている。

ついでダムサイト周辺の地質的観察を略記するとダムサイト東側部分には安山岩質集塊岩が発達しており西側部分では角礫凝灰岩が堆積して、その上に火山泥流堆積物が広がっている。角礫凝灰岩の下部には凝灰岩質頁岩が堆積している。東側部分の安山岩質集塊岩はダムサイト付近で現雫石川流路のほぼ中央部まで地下で張りだしており、その上に旧河床堆積物がのり、さらにその上に火山泥流堆積物が存在し、最上部は段丘堆積物が堆積している。ダムサイトより上流部では地下部分の岩石の質は明確に観察しえないが地上よりの観察によれば凝灰岩質の岩石が段丘堆積物の下部に広く分布しているようである。遺跡内における土層等の記述は各遺跡の報告の中に述べられているので、この章では記述しない。

御所ダム周辺一帯について述べると、ダム貯水池北西側は岩手山より広がる広大な高地の末端部が中位洪積世段丘面となって雫石川にのぞんでいる。段丘面上は一部を除いて水田として開発され平坦地化されている。この平坦地は多少の起伏をもって広く雫石町地内に広がっている。南側は奥羽山脈より派出した一支脈の末端部が標高300～400mの小山の連なる小山脈を形成して雫石川のすぐそばまで張り出している。その小山脈より流出する小河川によって形成される扇状地が雫石川によって作られた段丘を区切るような形で発達している。このような地形

の上に存在する遺構群は特に雫石川右岸に発達した河岸段丘上に多くみられる（図版－C）。

下猿田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡は雫石川右岸のダムサイトに近い所にある。東南にそびえる大欠山の末端部に張り出した小さな尾根上台地の先端部に存在する。遺跡群は標高 182m から 174m の間にあり、下猿田Ⅰ遺跡は付替道路予定地であり他の２遺跡は水没地内にある。

繋Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ遺跡は繋Ⅳ遺跡が宅地として埋め立てられる以外すべて道路用地にかかっている。標高180～184m の間に存在している。付近一帯は畑地および宅地として利用されていた。繋Ⅲ遺跡、繋Ⅴ遺跡は共に南側山地より派出した台地の末端部に形成された段丘上に位置しており両者は山地より流出した小河川が形成した扇状地によって分けられている。この扇状地上に繋Ⅳ遺跡が存在した。繋Ⅰ・Ⅱ遺跡は繋Ⅲの東側にやはり沢によってそれぞれ区切られた低位段丘上に位置している。繋Ⅵ遺跡は南側山地に築かれた館址の末端部に存在し多分に館構築の際の影響をうけた地点である。

南ノ又遺跡は繋遺跡群の存在する段丘より一段と低い段丘面上に位置している。この段丘は雫石川によって形成された古期沖積世段丘面の上位面と同様のレベルにあるが遺物包含層の下部には凝灰岩質の風化土の堆積がみられ、低位洪積世段丘の最低位部ともみられる。
科内遺跡も南ノ又遺跡同様標高 174m 以下で遺跡中心部の標高168.25m である。　付近は例外なく畑地、水田として耕作されていた。南ノ又遺跡と共に水没地内にある。

上野・除Ⅰ・Ⅱ遺跡は、 182m 内外の標高にあり上野、除Ⅰは道路用地であり除Ⅱは洪水時水位の高さにあるがダム工事用砂利採取のため破壊されるので調査の対象となった。除Ⅰ遺跡は背後山地より流出する沢によって作られた谷地であり堆積土も相当水分を含んでいる。上野遺跡は後背山地より派出した細い尾根状台地の先端部にあって標高 182m の高さにある。

町場Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡ともに標高174～182m の間にあり一部水没地は除Ⅱ遺跡同様砂利採取用地とされていた。この遺跡群の付近は宅地、畑地、水田として利用されていた。

田屋館遺跡は南側山地より細長く延びた尾根状台地の末端部分にあたり山林である。この遺跡は一部斜面が水没となるのであるが遺跡の中心とみられるのは台地上に存在する。また館址としてもダム用地内には、ほとんどかかわることがない。

戸沢館遺跡　標高 182m 内外にあり道路用地である。水田として利用されていた。

伝久遺跡　水田地内であり標高は 184m である。道路用地に予定されている。

以上が御所ダム貯水池南側に存在する遺跡群であるが道路用地に予定されている地域に存在する遺跡は２、３の例を除いて縄文時代中期、後期に属するものである。

他方ダム貯水池北側の部分では下流域からみると堂ケ沢Ⅰ・Ⅱ、新城館遺跡が南側の下猿田遺跡群に対応する位置にある。北側一帯は前述のごとく段丘面が発達していず洪積世中位段丘面から急な傾斜で雫石川現河床におちる。

堂ケ沢Ⅰ・Ⅱ・新城館遺跡　中位段丘面を切りこんで北より雫石川におちる沢によって形成された斜面に位置する。前者は道路および水没に関係し、後者は道路用地である両者ともに山林であった。標高184～180mの間である。

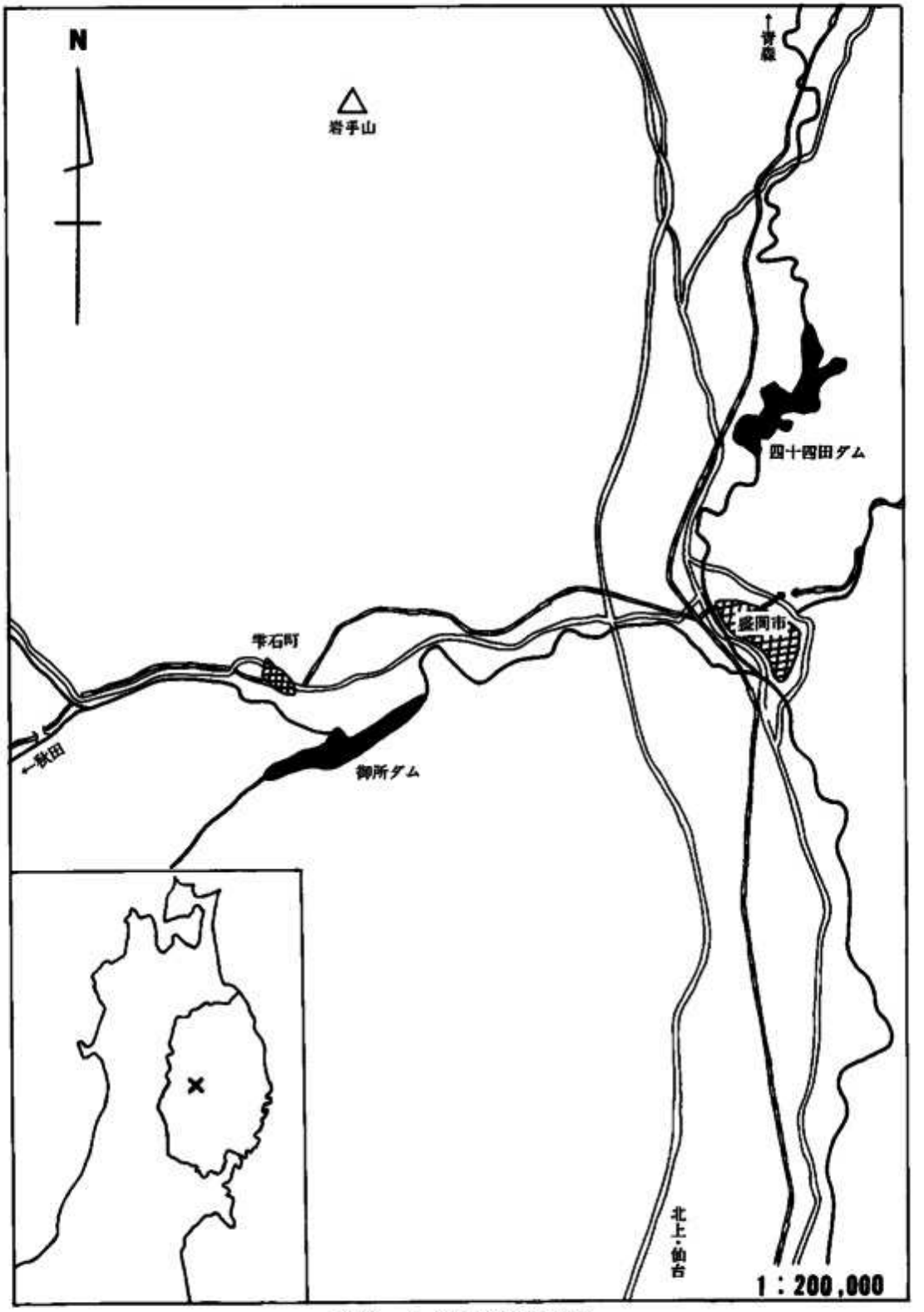
塩ケ森Ⅰ・Ⅱ、元御所Ⅰ・Ⅱ、野中、下長谷地、熊野橋遺跡は元御所Ⅰ・Ⅱ遺跡以外すべて道路用地であり新城館遺跡同様中位段丘面上に位置する。これら遺跡群の所在する上流部分では段丘崖の下に雫石川の氾濫原が広がっている。塩ケ森Ⅰ遺跡はこの中位段丘面上に周囲を沢もしくは谷地によって区切られた孤立丘状の地点に存在し丘の裾に広がる。ゆるやかな斜面上に元御所Ⅰ・Ⅱ遺跡がある。付近一帯は山林・原野である。

兎野、安庭古墳　雫石川の氾濫原と雫石川に合流する南川の氾濫原上に存在し、標高は 174 m および 180m を測る。

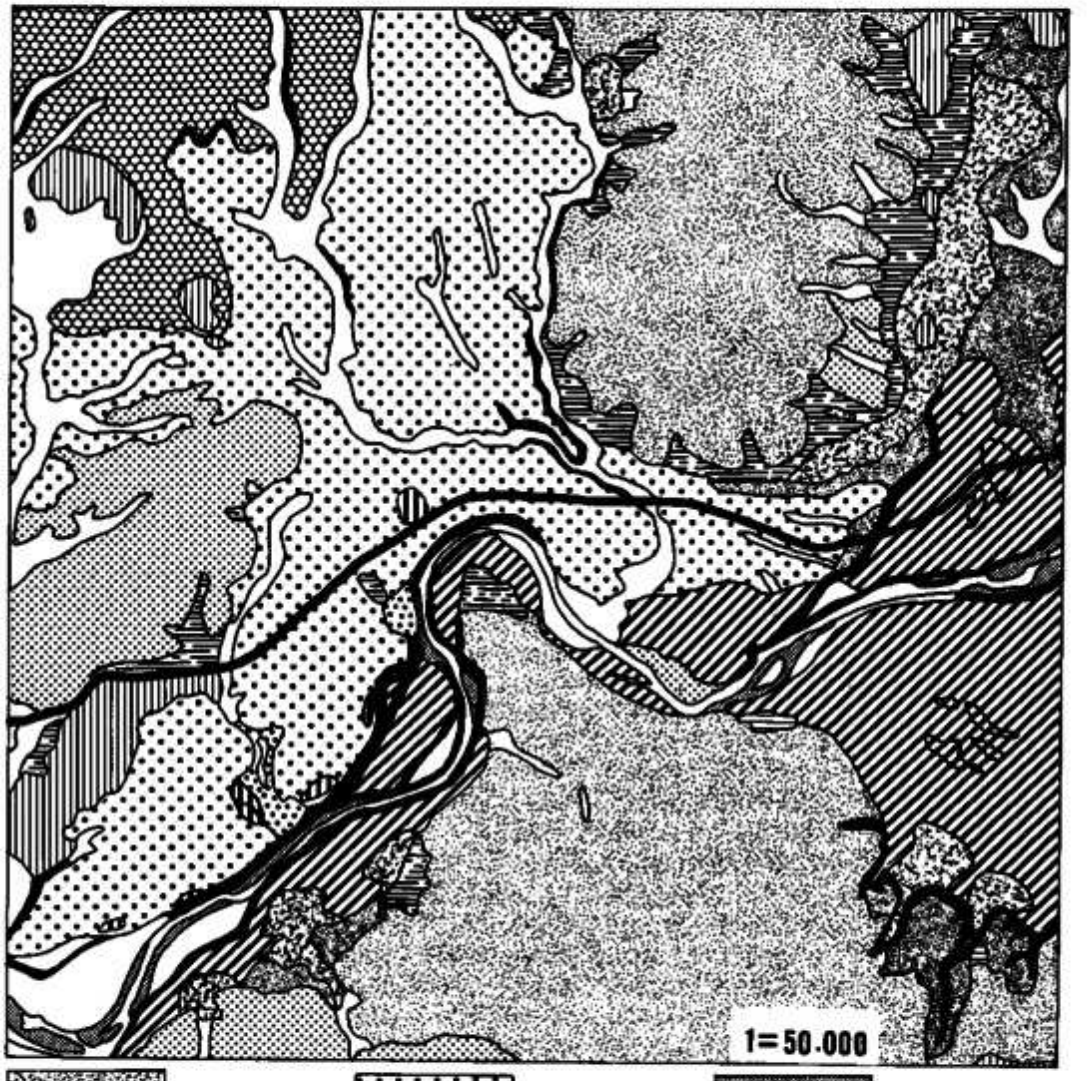
天沼Ⅰ・Ⅱ遺跡　南川左岸の低位段丘面上に存在する。

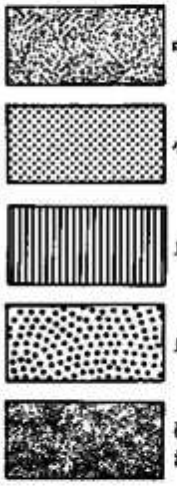
以上各遺跡の立地等についての概略を記したが、総体的にみれば一部の遺跡を除いて洪積世低位段丘上および沖積世古期段丘上にほとんどの遺跡が集中している。各遺跡の時代的な性格よりみて初めに述べたように特別な差異は認められない。

（地形面区分の項は高橋与右エ門による）

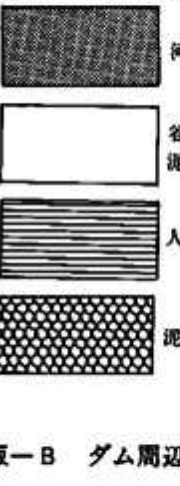


図版―A　御所ダム位置図


1=50.000


中起山地
小起伏山地
丘陵地 I
丘陵地 II
砂礫段丘 I
洪積低位面

火山灰砂台地
洪積中位面
火山灰砂台地
洪積高位面
砂礫段丘 II
沖積古期面
扇状地
崖錐性扇状地

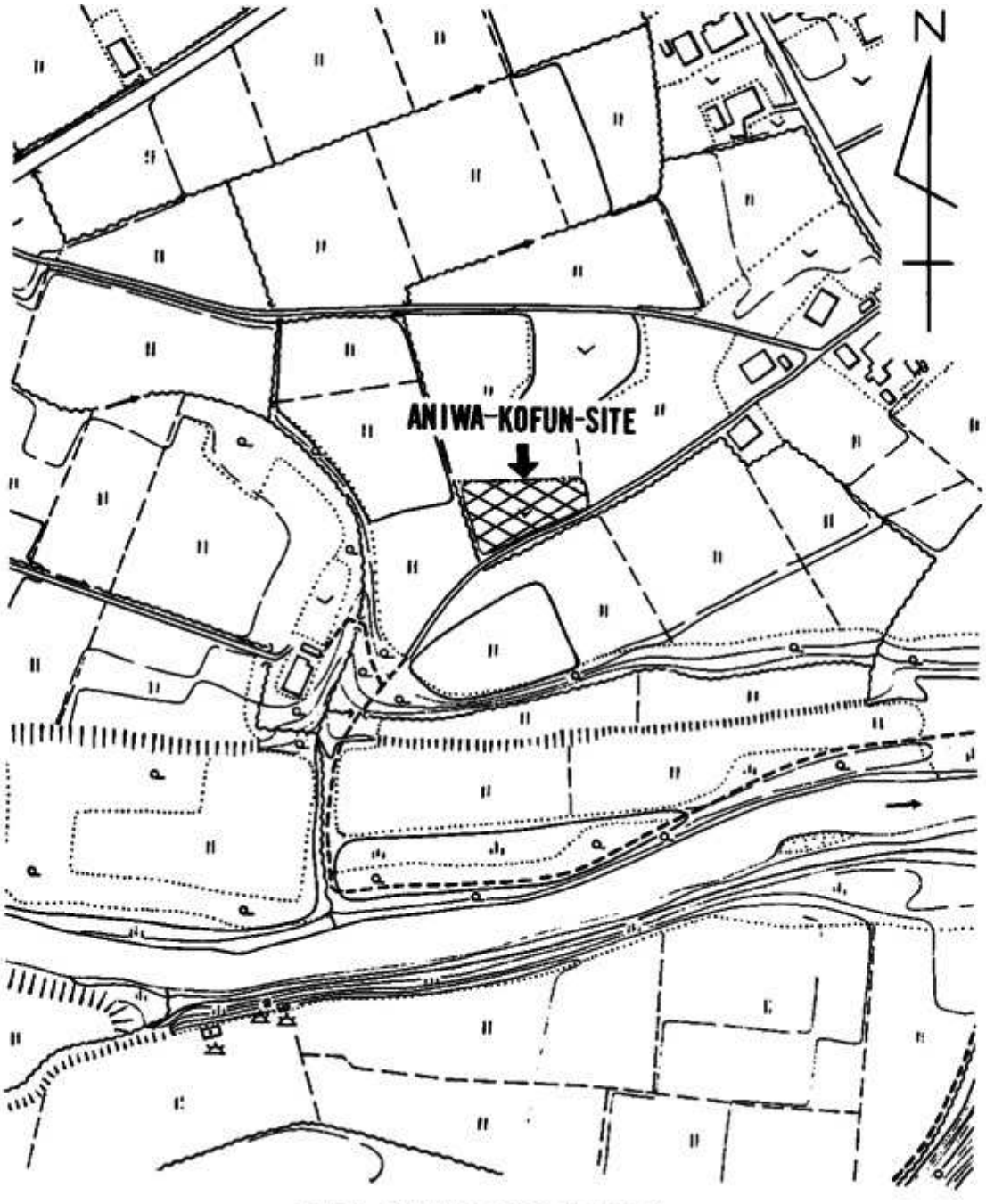

河原
谷底平野と
泥炭平野
人工改変地
泥流地形

図版－B　ダム周辺の地形

1 下猿田Ⅰ
2 下猿田Ⅱ
3 下猿田Ⅲ
4 つなぎⅠ
5 つなぎⅡ
6 つなぎⅢ
7 つなぎⅣ
8 つなぎⅤ
9 つなぎⅥ
10 南ノ又Ⅶ
11 森内
12 上野
13 除Ⅰ
14 除Ⅱ
15 広瀬Ⅰ
16 広瀬Ⅱ
17 町場Ⅰ
18 町場Ⅱ
19 町場Ⅲ
20 田居館
21 戸沢館
22 伝久
23 堂ケ沢Ⅰ
24 堂ケ沢Ⅱ
25 新城館
26 塩ケ森Ⅰ
27 塩ケ森Ⅱ
28 元御所Ⅰ
29 元御所Ⅱ
30 桜松
31 野中
32 兎野
33 下長谷地
34 安庭古墳
35 熊野橋
36 天沼Ⅰ
37 天沼Ⅱ
大欠山
320.0
湯ノ舘山
337.45
220.0
168.25
等高線は5m間隔

図版－C　ダム周辺の地形

安　庭　古　墳



図版１　遺跡附近の地形図(1/2500)

Ⅰ．はじめに

本遺跡に対する発掘調査は、御所ダムの建設に関連する遺跡発掘調査の一環として行なわれたことは衆知の通りであるが、分布調査によってその存在が確認されるまでの経過について若干触れておきたい。

安庭古墳の存在は地元では早くから知られていた。地元の古老田屋館久蔵氏（明治25年生・故人）の生前の話しによれば、明治の頃には遺跡付近は赤松の古木が繁茂していたことから、昼でも薄暗い場所であったので、馬車道があったにもかかわらずあまり人も通らなかったという。子供の頃には、あそこは暗くなると化物が出るから、付近に近づいてはならないと親に良く言われたそうである。其の後、昭和20年頃までに３回ほど伐採が繰り返えされ、畑地として開墾されたのは昭和20年以降のことであるという。安庭古墳はかつて10数基が南川と併行して直線的に並んでいたというが、畑地として開墾される際に、ほぼ中央にあったもっとも規模の大きな「塚」１基を残して他は削平してしまったという。現に我々が現地で確認したのは１基のみであった。以上の様な経過を経て、御所ダムの建設に伴う水没地域内の遺跡分布調査によってその存在が確認され、調査に至ったものである。

我々が発掘調査の為に現地に入った時には、「塚」を中心として周囲30m四方位の範囲を残して、他は砂利採取の為にブルドーザーで削られ、孤立丘となっていた。

Ⅱ．遺跡の位置と周囲の環境（図版－１）

安庭古墳は岩手県岩手郡雫石町西安庭字幸輔地内に所在し、岩手県交通バス路線「鶯宿温泉線」安庭停留所の南方500ｍの地点である。本遺跡の所在する雫石町西安庭字幸輔は盛岡市の中心部（市役所付近）より約19km西方で、雫石町の中では中央よりやや南に位置している。雫石川は、岩手山と烏帽子岳の中間より流れ出る葛根田川と、秋田駒ケ岳より流れ出る竜川に水源をもとめ、両川が合流してその名も雫石川と変えて遺跡の東方を東流しており、約18km東方で北上川と合流している。さらに、南川・矢櫃川・黒沢川の各支流とも遺跡の東方500ｍ地点で流れを合わせ、遺跡地を含めた付近一帯は古い時代の氾濫原である。また、遺跡の南方300ｍを南川が東流し、遺跡は南川の新期氾濫原との段丘崖浴いに位置している。遺跡の立地する地形面上には安庭の集落が営まれていたが、御所ダムの建設によって水没する為に移転した。遺跡は安庭集落の南はずれに位置しており、「塚」の周囲は水田や畑地として利用されている。遺跡の立地する地形は、地形面区分では沖積段丘古期面に相当し、標高は175ｍ前後である。

Ⅲ．調査方法と経過

１．調査方法　（図版－２）

Ⅰ章で述べた様に、周囲がほとんど削平を受けており、「塚」状の高まりも他に確認されなかったことから、現存する「塚」は１基のみと断定した。現状で地形図を作成する為の基準杭は20m×20mの正方形になる様に４点設定した。其の後、地形図より現状のほぼ中央に位置する様に１m巾のトレンチを直交する様に設定し、南北トレンチを「Ａトレンチ」・東西トレンチを「Ｂトレンチ」と命名した。

発掘はトレンチ方式で開始したが、周溝や葺石の存在が確認された場合には全面調査に切り換えられる様に配慮し、分層発掘に徹した。

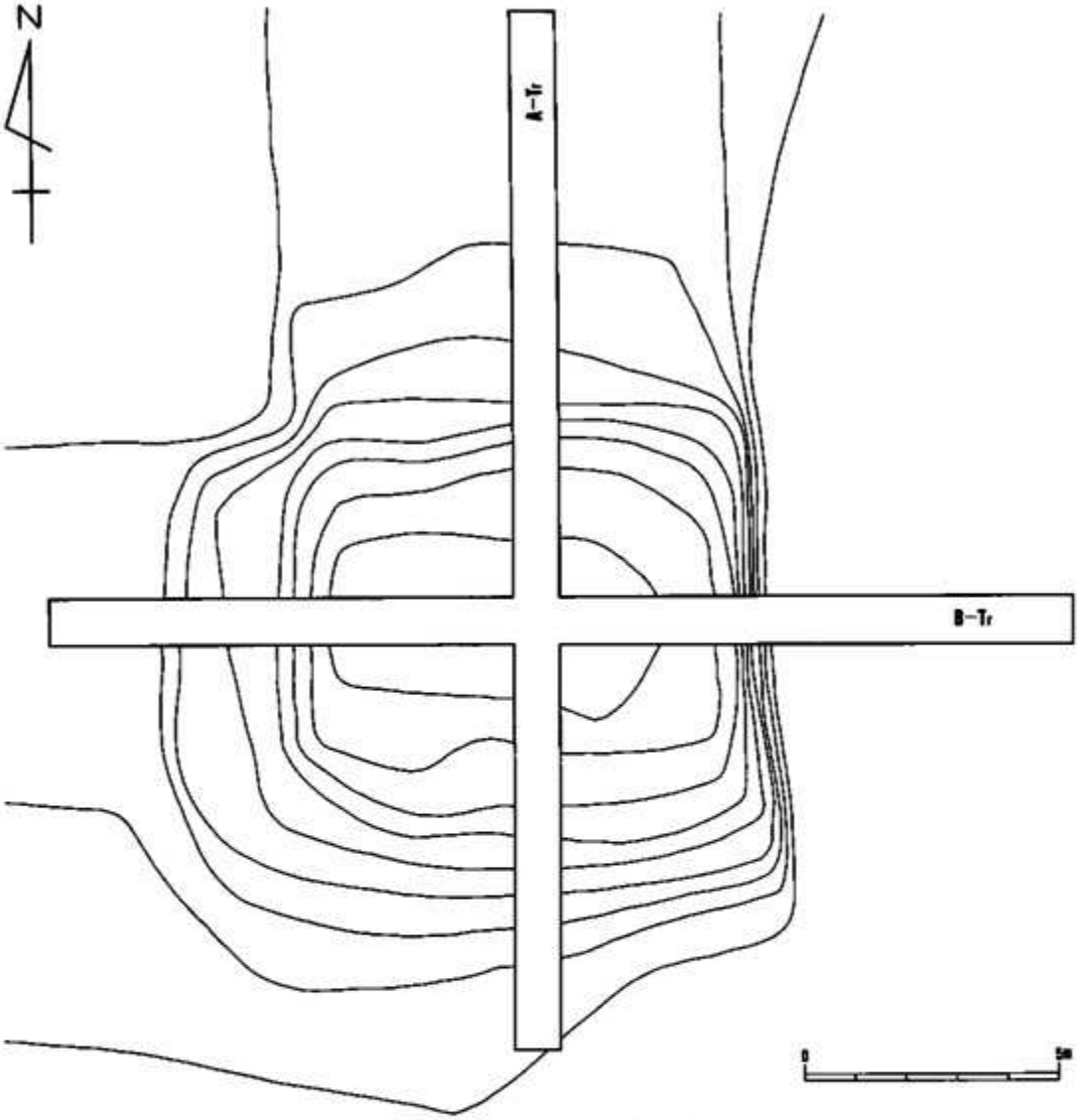
実測は、地形・遺構全体図は平板測量で行ない、縮尺は$\frac{1}{100}$とした。なお、地形図の等高線は10cm間隔とした。埋土土層図や細部の平面図等は縮尺$\frac{1}{20}$で実測した。

写真撮影は35mmカメラ２台を使用し、モノクロームとカラーリバーサルの２種類のフィルムを使用して撮影した。撮影は土層・遺物の出土状況・遺構細部・完掘後全景は必らず撮影し、その他にも必要に応じてメモ的に撮影を行った。

出土遺物は、出土地点・出土層位を確認した上、平面図に記録し写真撮影の後収納した。

２．調査の経過　（図版２）

調査は昭和49年７月１日より開始された。遺跡指定範囲の旧地目は畑地であったが、用地買収後数年間作付けも行なわれず放置されていた為に、調査時における現状は荒地と化しており、よもぎやかや等の宿根性草本類や柳の若木等が繁茂していた。従って、まず刈払いを行った後、雑物を除去して遺構の現状を把握することに努めた。その結果、墳丘は１基だけしか残存していないことが確認されたので、地形測量を行う為の基準点を設定した。基準点は墳丘の周囲に20m×20mの正方形になる様に設定し、地形測量や遺構平面図等の各種実測図を作成する際の基点として利用した。地形測量は縮尺$\frac{1}{100}$で行ない、等高線は10cm間隔とした。次いで、地形図上での墳丘ほぼ中央に位置する様に１m巾のＡトレンチ（南北方向）・Ｂトレンチ（東西方向）を設定し、まず、トレンチ内の表土を除去し周溝や葺石の存在を確認することに留意した。その結果、葺石は存在しないことが明らかになり、周溝はほぼ全周していることが判明した。トレンチで確認された周溝の全容を検出することに努め、それと併行して墳丘面全体におよぶ表土剝ぎを行い、葺石の存在の有無を再確認した。その結果、墳丘裾部で若干の礫が検出されたものの墳丘頂部では検出されなかったことから、調査時点には葺石が存在しなかったものと断定した。しかし、旧地主の佐々木氏（雫石町西安庭字安庭地内）の話しによると、畑として開



図版２　調査トレンチ設定図

墾する際に相当数の川石（河川礫）を取り除いて削平したとのことであるから、かつて、構築時には葺石が存在した事が推定された。また、周溝埋土内にも（特に南側に多かった）河川礫が検出されていることから、葺石が周溝内に転落したことが考えられた。周溝は、検出作業の結果墳丘を全周し、墳丘の平面形は方形を呈することが判明した。次いで、周溝の全掘を開始したが、埋土内には特に遺物も含まれておらず、瀬戸窯古瀬戸期の灰釉系陶器の破片が２個発見されたにすぎない。周溝が完掘された後は主体部の検出を主とした調査に切り換え、それと併行して周溝の平面図作成を行った。主体部の検出は墳丘中央部を掘りさげる方法によったが調査時の地表面より30cmほど掘りさがった土層で小砂利を多く含むやや固い砂質シルトが堆積している範囲が検出され、精査の結果墓壙状の土壙が検出された。土壙の埋土には遺物がまったく含まれておらず、性格を示すものは検出されない。しかし、土壙底面には小砂利が敷き詰められており、墳丘に直接伴う土壙であろうことは容易に推定された。また、墳丘構築時の地表面と考えられる土層では河川礫が検出され、酸化鉄と考えられる赤褐色を呈する面の範囲も確認された。以上の様な発掘調査の経過を経て、平面図や土層図を作成した後完掘後全景写真を撮影して、調査に伴う全作業を終了した。

現場撤収は昭和49年８月25日に行った。

Ⅳ．基本層序（図版－３）

本遺跡の基本層序は次の通りである。上位層よりⅠ層・Ⅱ層とした。

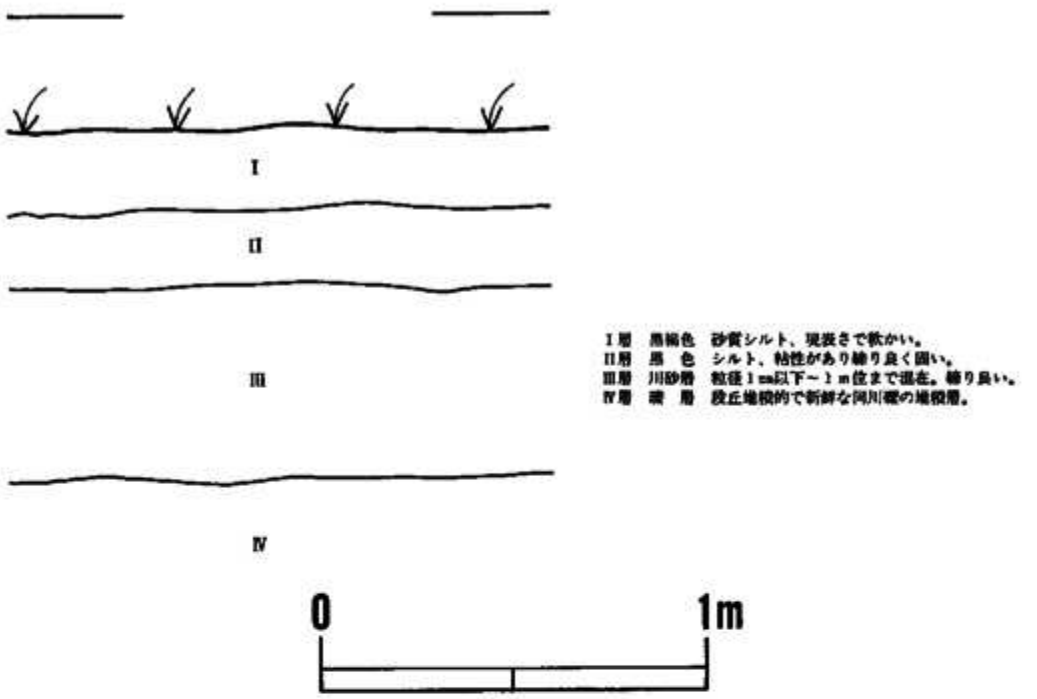
Ⅰ層――現在の表土で畑地として利用されている。土性は比較的粘性の少ないシルトで、色調は黒褐色を呈している。若干ではあるが砂粒を混入し、締りがなく軟かい。層厚は15cm～20cmを測る。

Ⅱ層――表土の起源となった土層で、粘性をもち締り良く固い。土性はシルトで砂粒等をほとんど混入せず、腐植質に富んでいる。色調は黒色を呈し、層厚は20cm位である。

Ⅲ層――沖積地を示す川砂層で粒径は１mm以下のものから１mm位まで各種混在している。比較的締り良く、粘性は全くない。層厚は50cm位である。

Ⅳ層――新鮮な河川礫の堆積層である。本沖積段丘の基盤となる凝灰岩の上層を構成している。層厚は確認していないので不明である。

以上の様に本遺跡には火山灰や黄褐色を呈する砂質シルトの堆積が観察されず、川砂層の上に直接黒色シルトが堆積していることから、沖積地であることを証明しているものと考える。



図版３　基本層序

Ⅴ．発見された遺構と遺物

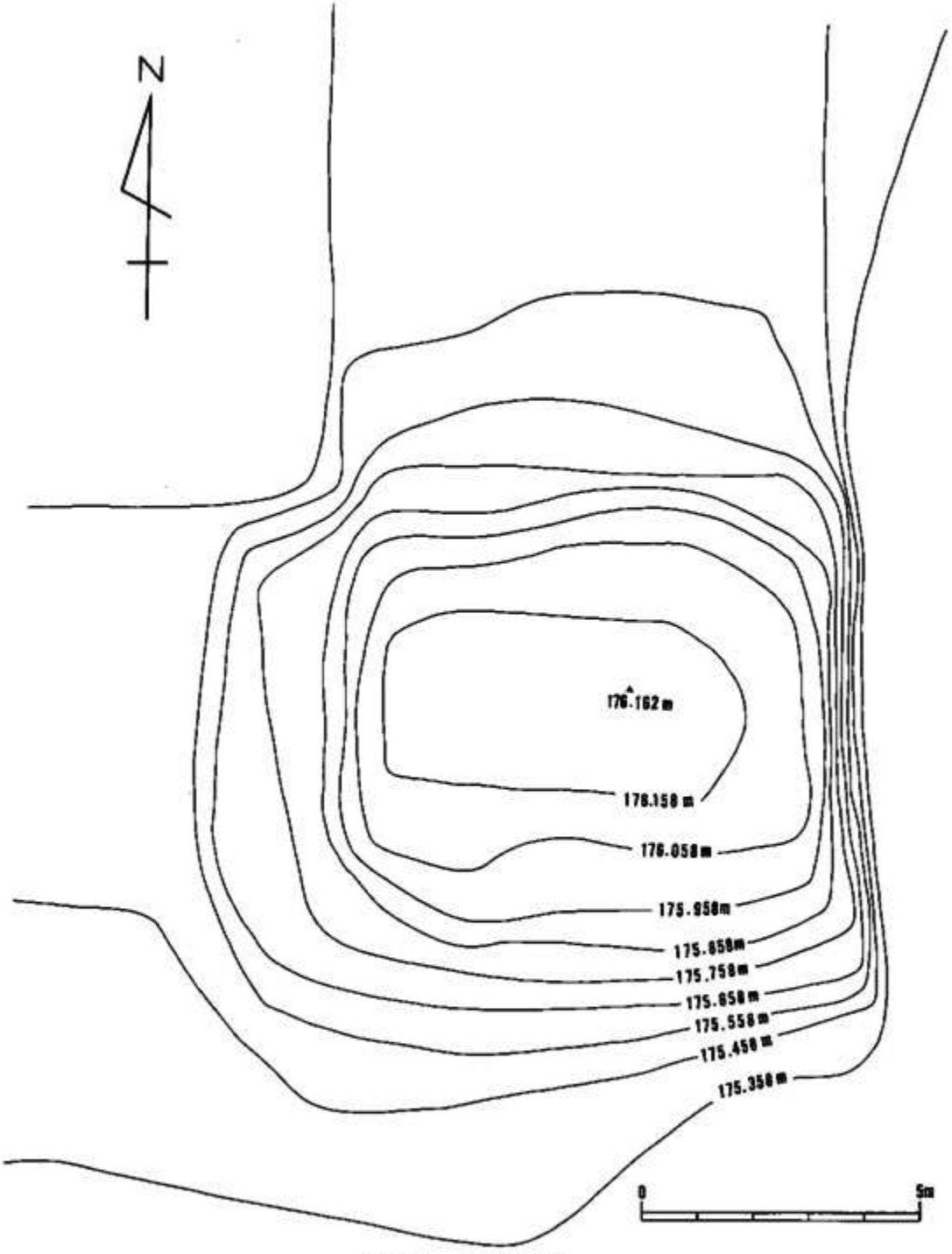
１．遺　構

調査によって、周溝を有すること、主体部ともいえる土壙をもつこと、構築時には葺石が存在したらしい事等が明らかになった。ここでは墳丘・周溝・土壙の項に分けて記述したい。

〔墳　丘〕（図版－４・５）写真図版Ｂ

地形測量の結果から、現存する墳丘の高さは95cmを測り、全体規模は東西12m・南北14m位と推定された。また、等高線の走り方や現状の観察から東側裾部が削平されていることは明らかであったので、平面形は隅丸長方形を呈するであろうと推定された。

調査の結果、周溝を含めた全体規模は東西16m・南北14.5mを測り、墳丘の周囲には巾1.5m～2.0mほどの周溝が全周している。従って、墳丘自体の平面規模は東西12.5m・南北11mで平面形は東西に長い長方形を呈していることが判明した。また、前述の様に東側裾部は削平を受けていた。墳丘頂部は削平されて畑地として利用されていたことから、東を除いた他の三方


N
176.162m
176.158m
176.058m
175.958m
175.858m
175.758m
175.658m
175.558m
175.458m
175.358m
0
5m

図版４　地形測量図

に向って緩やかに傾斜している。

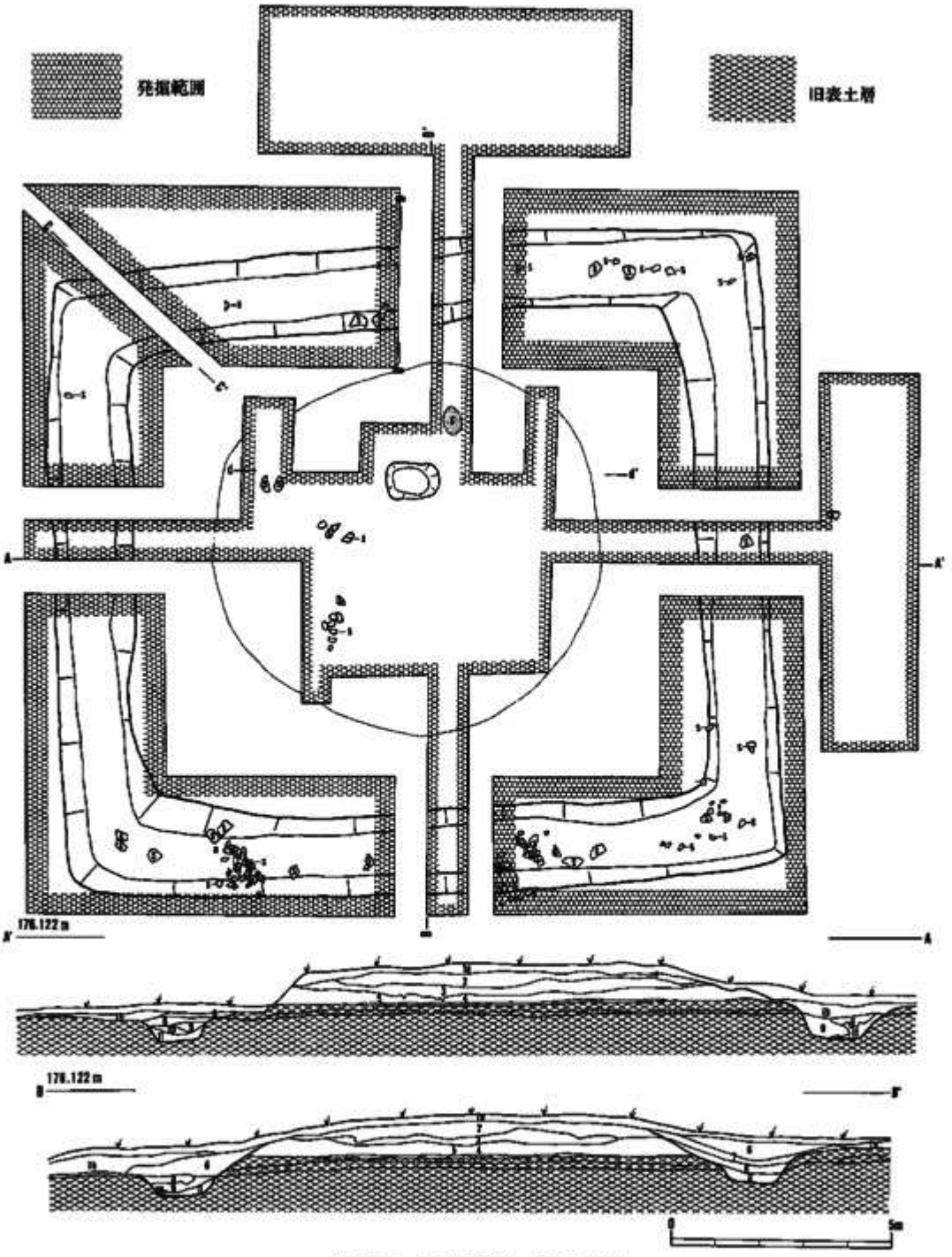
墳丘の構築方法を、封土の土層断面図や土性で観察すると、周溝を掘りあげた際の残土を封土として利用し、構築したものと考えられる。構築の順序は、最初は周溝の周囲に盛り土し、次第に中心部に盛り土していったものと推定され、現在確認できる封土の厚さは約70cmである。封土の土性は、表土を除くと4層に区分されているが、上層ほど砂質がかっており、下層ほど粘性の強い傾向がみられた。色調では1層は暗褐色を呈しているが2層・3層は黒色である。4層は全体的に赤味が強く、分布範囲も墳丘内に限定されていることや、固結している部分も観察されることから、構築時に「紅ガラ」か何かの赤色顔料が地表面に散布されたものと考えられる。1層には小礫や細礫の混入が比較的多かったが、2層には礫が混入していない。3層下位面（本来は基本層序II層上面か？）には、墳丘西部で礫が混入し、あるまとまりをもって検出された。また、表土の第I層を除去した面で最近の「ゴミ穴」がほぼ中央で、南西裾部では「炭焼き窯」跡が検出された。墳丘裾部や周溝埋土内で円礫や亜円礫が63個検出され、墳丘上より転落したものと推定された。この事から構築時には墳丘上に葺石が存在したことが推定される。

〔周　溝〕（図版6－C・写真図版2－A・B、3－A）

周溝は墳丘裾部を全周しており、規模は上縁巾で最狭1.5m・最広で2.0mを測り、底面巾は0.8cm～1.0mである。深さは構築時の地表面より0.7m位でほぼ一定している。底面は凸凹もなくほぼ平坦である。埋土はやや砂質がかったシルトで構成され、全層を通じて粘性が強い。色調は褐色から黒色まで差異がみられるもののどの層も大同小異である。

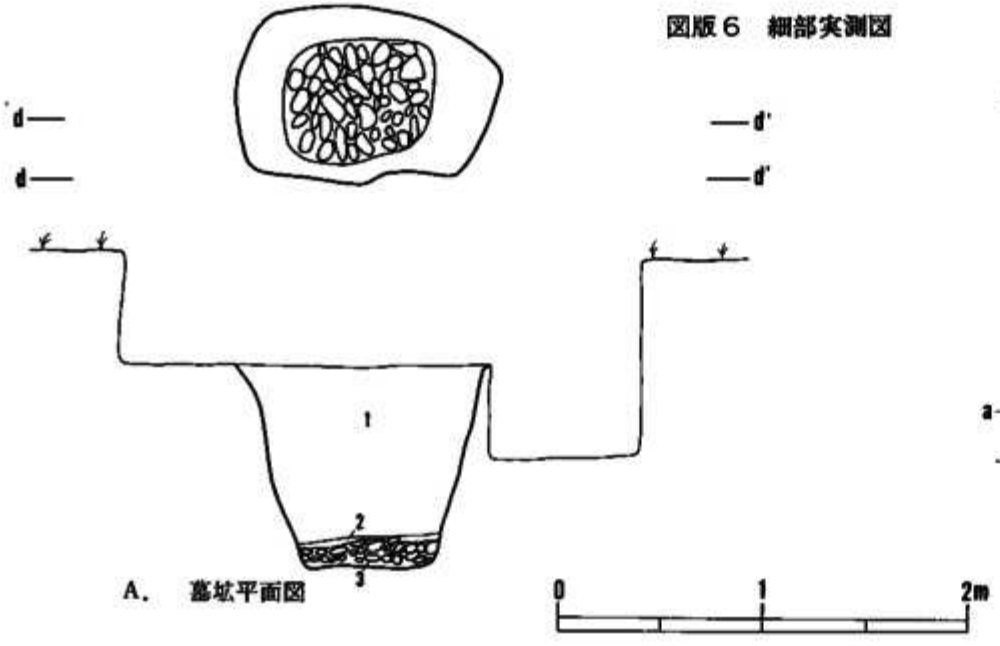
〔土　壙〕（図版6－A・写真図版4－A・B）

墳丘中央部やや北寄りに上縁1.2m×0.8m・底面0.9m×0.6m・深さ0.8mの規模を測り、平面形が東西に長い隅丸方形を呈する土壙が検出された。この土壙は表土を除去した2層上面で小砂利が多く混入し、固く締っていて明るい褐色を呈するシルトの広がる範囲が検出されたが、この土層の下位に位置している。2層上面では土壙の存在が不明であったことから、2層を更に掘り下げて3層の上面で土壙の存在が確認された。このことから、この土壙は2層で封をされた様な状態にあったものと推定される。埋土は小礫・黒色土・黄褐色砂質シルトが乱雑に混り合った土で構成され、明らかに人為的に埋め戻された様相を呈している。埋土最下層には4cm～5cmの厚さで腐植質の黒色土が堆積していた。土壙の底面には粒径5～10cm位の礫が10cm位の厚さで全面に敷かれ、更に突き固められていた。埋土内や底面に木片・金属類・その他副葬品や遺物と考えられるものは発見されていないが、本遺構に伴う主体部に相当する土壙

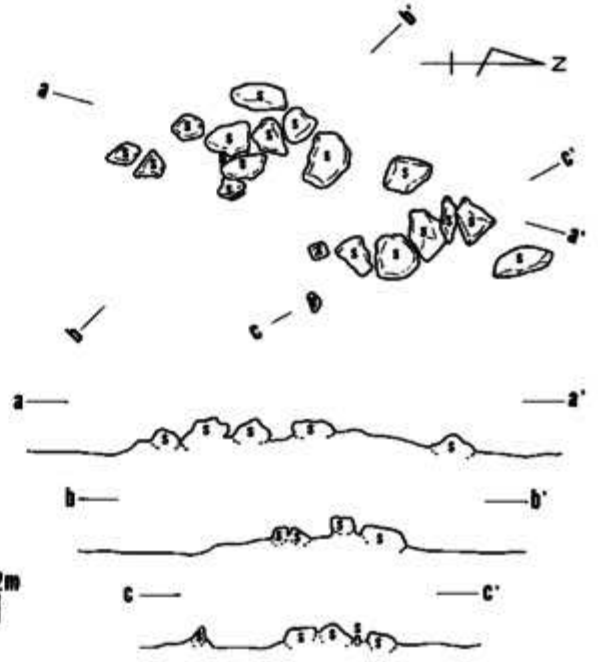


図版５　調査範囲・墳丘土層

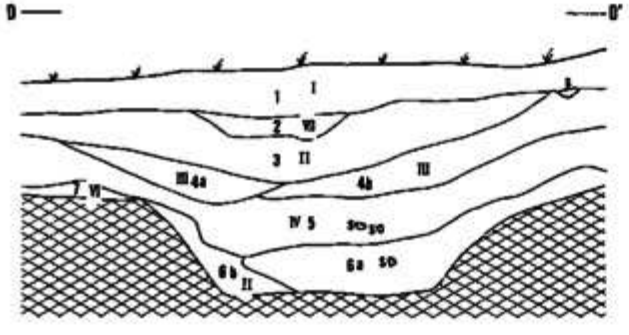
図版６　細部実測図



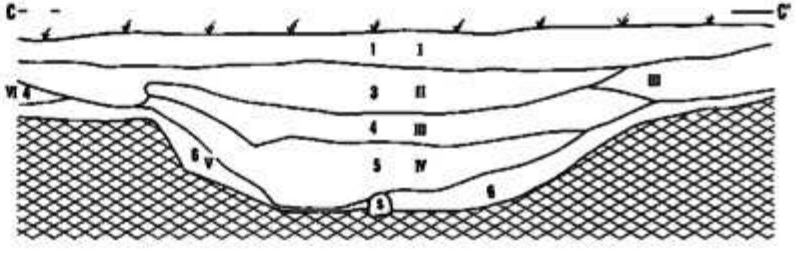
A.　墓坑平面図



B.　墳丘部石敷遺構



C.　周溝部埋土土層



図版－5　墳丘土層

1a層　黒褐色、砂質シルト、現表土。
1b層　黒褐色、砂質シルト、表土、1a層より軟い。
2層　極暗褐色、砂質シルト、黄褐色砂粒の混入多い。
3層　暗褐色、砂質シルト、やや粘性ある。
4層　黒色、粘性のあるシルト。
5層　赤褐色の酸化鉄混入層。
6層　黒褐色、シルト、細砂の混入が多い。
7層　明黄褐色、川砂層。
8層　黒色、シルト、粘性あり。
9層　暗褐色、砂質シルト。
10層　黒褐色砂質シルト、粘性あり。
11層　黒色、シルト、粘性強い。

図版6－C　周溝部埋土土層

1層　黒褐色、砂質シルト、現表土。
2層　灰褐色、砂層、やや粘性あり。
3層　黒色、シルト、腐植質の堆積多い。
4a層　極暗褐色、シルト、腐植質の混入あり。
4b層　暗褐色、シルト。
5層　黒褐色、シルト、腐植質の混入あり。
6層　褐色、砂質シルト。
7層　褐色、砂質シルト、黄褐色砂の混入あり。

図版－6B　墓壙埋土土層

1層　黒色シルトと黄褐色砂の混合した土。
2層　黒色、腐植質の混入したシルト。
3層　礫の敷かれた層。

であろう。

〔その他〕（図版6－B・写真図版3－B）

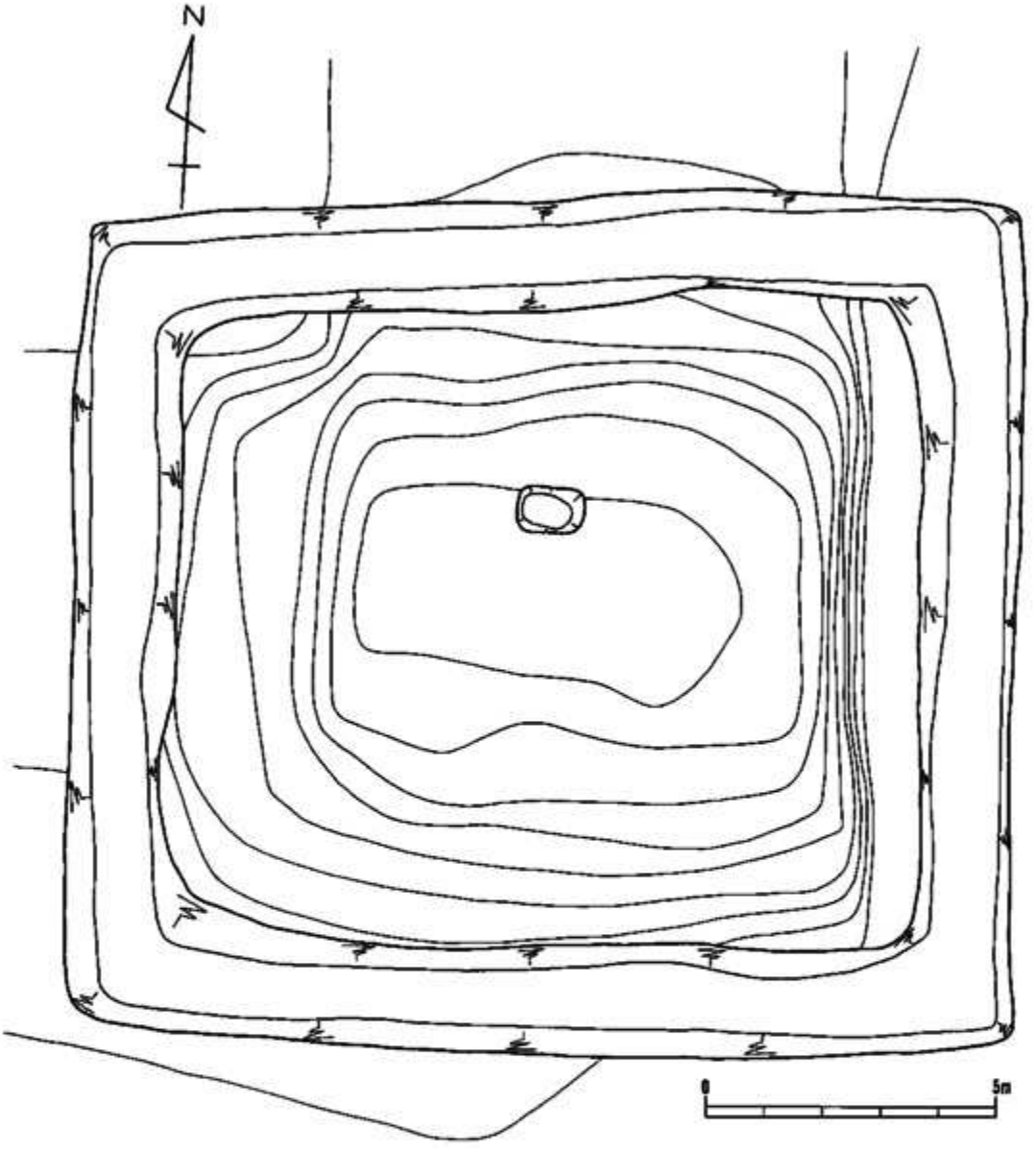
上記の人為的に構築された遺構以外に、墳丘封土を上位層より次第に除去し、調査時の地表面より85cmほど下位の構築時の地表面と覚しき層位面に達した所、墳丘中央やや南西寄りで1.5m×2.0mの範囲に粒径30cm～40cmを測る扁平なやや大形の河川礫を、28個敷き並べた部分が検出された。また、この河川礫が置かれた面には、赤色顔料が散布されたと推定される範囲が検出された。散布された範囲は直径8mほどの円形を呈し、墳丘のほぼ中央に位置している。また、墳丘中央やや北東寄りの同位面で60cm×60cmの範囲を示す焼土層も検出されている。しかし、これらの性格を示す様な遺物は発見されていない。

2．遺　物

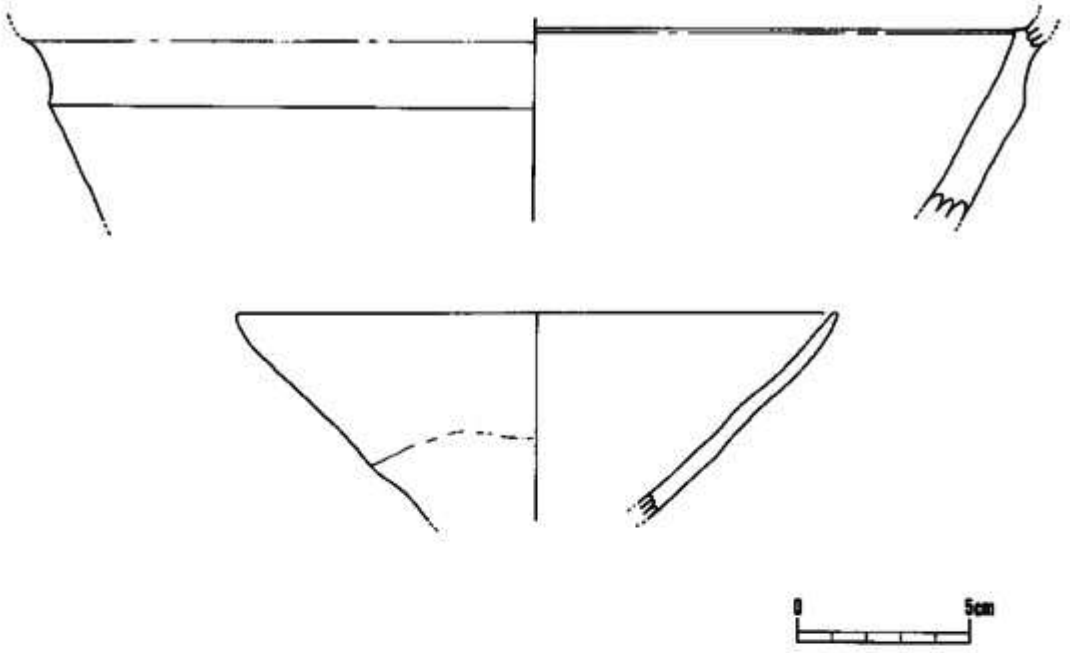
本遺構に直接伴う遺物は墳丘封土内より発見された灰釉陶器の破片1個と、周溝埋土内より発見された灰釉陶器破片2個の合わせて3個のみである。前述の様に土壙内よりは発見されていない。ここでは各破片ごとに説明を加える。

〔平　埴〕（図版8－下）

この破片は調査時の地表面より40cm下位の墳丘中央やや北寄りの封土内より発見した。破片は口縁部より体部下位に達しているが底部を欠失しており、全体の$\frac{1}{6}$ほどが残存している。大きさは口縁部の直径17.5cm・器高6cm～7cm位と推定される。胎土の粒子は若干粗いが良く揃



図版 7　遺構最終平面図



図版８　遺物実測図

っており、色調はやや黄色味を帯びた淡い灰褐色を呈している。器厚は５㎜前後を示すが口縁部付近は次第に薄くなり、口唇は丸味をもっている。釉は外面では口唇より体部下位まで充分にかけられ、一部は「なだれ」も観察される。しかし、体部下位には釉がかけられておらず、素地肌である。内面にはほぼ均一に全面に亘ってかけられている。なお、内外面とも全体に細かな貫入が入っている。破片の形態や釉より推定される器種は平椀であり、瀬戸窯の焼成と推定される。時期的には古瀬戸期第５段階頃の生産品と酷似しており、15世紀末に位置づけたい。

(2)折縁深皿（図版８－上）

この破片は北側周溝部埋土内で出土したものである。頸部より胴部の若干部分にかけての小破片であるので、全体の形態や大きさは不明であるが、頸部の造りや破片のカーブ等から折縁深皿の破片であろうと推定される。胎土は粒子が若干粗いが良く揃っており、色調はやや黄色味を帯びた淡い灰褐色を呈している。器厚は８㎜～10㎜であるが頸部寄りほど薄くなっている。釉は内外ともに充分にそして均一にかけられており、色調は淡い緑色を呈している。器表内外ともに貫入が観察される。釉や器形から考えて、瀬戸窯の焼成と推定され、時期的には古瀬戸第５段階頃と考えられ、15世紀末に位置づけたい。

(3)平椀（写真図版５－　）

この破片は北側周溝部埋土内で出土した。口縁部の小破片であるので全体の形態や大きさは

不明であるが、口唇の造りや破片のカーブから平椀の破片と推定したものである。胎土は粒子が粗いが良く揃っており、色調は黄色がかった淡い灰褐色を呈している。器厚は3㎜～6㎜を測るが口唇に向って次第に薄くなり、口唇は丸味をもっている。釉は内外ともに充分にそして均一にかけられ、色調は淡い緑色を呈している。内外ともに全面におよぶ細かな貫入が入っている。器種は器形より考えて古瀬戸期の平碗と考えられる。時期的には前者二個の破片と大差のない時期と考えられ、15世紀末頃に位置づけたい。

Ⅵ．ま　と　め

以上、前章までは調査の経過と結果についてのべてきたが、ここでは調査結果にもとづいて、若干の考察を加えてまとめとしたい。

調査の結果、「塚」は周溝で区画されており、人工的に構築されたことが明らかとなった。それと同時に主体部と考えられる「土壙」も検出されている。しかし、性格を示す様な遺物は何んら出土していない。構築された年代については、塚の封土内や周溝埋土内より出土した瀬戸窯古瀬戸期に焼成されたと推定される灰釉の平椀・折縁深皿の年代からある程度推定することが可能である。これらの平椀や折縁深皿は釉や器形から判断すると、古瀬戸期第5段階頃に相当する様である。実年代では15世紀～16世紀に位置づけられている。以上の様なことから、[1][2]塚の構築された年代を16世紀頃に考えたい。

板橋　源　は本遺跡の様に高塚をもつ遺跡は岩手県内に80数ケ所が知られているとし、三崎一夫は[3]さらに、その中でも北上市周辺での分布が多いことを強調し17ケ所を報告している。これら[4]は全て十三塚と呼称されているか、または、十三塚と考えられる遺跡のみであることから、それ以外の単独や数基で存在する塚も含めると相当数に達するものと考えられる。十三塚は13基の塚をもって構成されることを基本としているが、13基ではなくともそれに近い数で構成されている場合が多い。少くとも単独や数基で構成される場合はないといわれている。雫石町内では本遺跡以外に、町内繋字新城「イタコ塚」・町内八卦「八卦堂古墳」・町内長山字小松「五輪森古墳」・町内西安庭字九十九沢「地森」・町内上野字和野「蝦夷森」・町内西安庭字用の沢「塚」・町内高前田「高前田古墳」・町内長山字晴山「晴山古墳」・町内御明神「虚空蔵古墳」の9遺跡が知られ、その中で高前田古墳・晴山古墳・虚空蔵古墳の3遺跡では複数の塚が存在するが、[5]他遺跡では単独で存在する。なお、高前田古墳と晴山古墳は古代に属する古墳であろうといわれているが確認されていない。虚空蔵古墳は実際に調査も行なわれ、調査報告書が刊行されている。他地域の遺跡でも同じ様な塚が発掘調査されており、その概要が「北上市史[6]第2巻」・「岩手県雫石町虚空蔵遺跡調査報告書」・「和賀町梅の木遺跡古墓群について」等の報告の[7]中で多く紹介されている。他遺跡の調査結果[8]をまとめてみると、性格が「墳墓」とな[9]

る塚と、「経塚」となる塚に大別される様である。調査によって人骨の出土している例は、紫波町「御在所遺跡」⑪・北上市「イタコ塚」⑪・北上市「行人塚」⑫・北上市門覚の「塚群」⑬・和賀町「梅の木古墓群」⑭・北上市「十三菩提塚」⑮・北上市「宝積古墓群」⑯・北上市「亀ケ森古墓」⑰・北上市「鬼柳古墓群」⑱・紫波町「墳館遺跡」⑲等があり、それらの中で前者4遺跡は土葬墓で後者5遺跡は火葬墓の様である。梅の木古墓群では土葬墓・火葬墓ともに検出されている様である。それに対して人骨や埋納遺物を伴わない塚の例としては和賀町岩崎「蝦夷塚」⑳・江刺市玉里「薬師堂山の塚」㉑・花泉町阿惣沢「塚」㉒・矢巾町白沢「狄森古墳」㉓・雫石町御明神「虚空蔵遺跡」㉔が知られている。また、これ以外に一字一石経塚が各地で知られているが、ここでは省略する。現在までに確認されたり、調査された塚の特徴は(1)複数で存在する場合が多い。(2)周溝をもつ場合が多い。(3)形態的には円塚だけで構成・円塚の中に方塚が混在・方塚だけで構成の3類型が知られている。(4)塚の内部には主体部ともいえる「土壙」をもつ例が多く、土壙は平面規模に比較して浅い場合と深い場合がある等が、明らかにされている。これらの諸特徴を本遺跡での調査結果と比較すると良く一致し、本遺跡の場合もこれらの塚と同じ性格をもつ塚と考えられる。それでは墳墓なのか経塚なのかということであるが、まず、同じ町内に存在し発掘調査の行われた虚空蔵遺跡の例と比較してみると(1)方形を呈する。(2)周溝をもつ。(3)土壙をもつ。(4)遺物を伴わない。(5)複数で構成するといった共通要素をあげることができる。しかし、細部についてみると、土壙の構造や規模に大きな差がみられる。すなわち、虚空蔵遺跡の1号塚ではA土壙が直径1.4mの円形で深さ32cm・B土壙は長径1.75m短径80cmの不整長方形で30cm、2号塚では長径90cm短径65cmの楕円形で深さ40cm、3号塚は長径1.1m短径65cmの不整隅丸長方形で深さ30cm、と報告されており、平面規模はともかくとして深さが浅く、形態も舟底形を呈する様である。虚空蔵遺跡の性格は特殊な経塚として結論づけられているが、当遺跡の場合もこの様な経塚の類いと考えられなくもないが、深さが深いことに疑問を感じる。土葬人骨を出土した北上市イタコ塚の例では墓壙の規模が1.9m×1.6m深さ1mと報告されている。本遺跡のそれを墓壙と考えた場合、直葬による座葬であれば墓壙としての役目を充分に果せる規模である。木棺に納棺されないで直葬された場合、屍体の痕跡を残さないで腐敗する可能性を考慮しなければならない。この様にしてみてくると、遺物や人骨を伴出しないというだけで経塚として結論づけるのは問題がありそうである。特に経塚と結論づけられている虚空蔵遺跡と比較した場合、本遺跡の例は経塚というよりは墳墓と考えるのが妥当の様である。

以上の様なことから、安庭古墳は、いわゆる古代の古墳に属する塚ではなく、室町時代後半期に構築された墳墓的性格の強い塚であろうと考える。

なお、遺跡の所在する地域の地籍が西安庭字幸輔というのは、時代は不明であるが、昔この地に「幸輔」という長者が住んでおり、塚（安庭古墳）はその幸輔長者の墓であるという伝説

があり、それが故にこの地を幸輔と呼び、そのまま地籍となったものであるという。

最後に、本遺跡の調査に当り、川口甚一氏をはじめとする盛岡市繋地区や雫石町安庭地区の方々10名、また、整理作業にあたっては当埋蔵文化財センター第4整理室勤務の室内整理員の方々より多大なるご協力を頂いた。ここに記して深甚なる謝意を表する。

引用参考文献

① 檜崎彰一　「日本陶磁全集」　中央公論社

② 檜崎彰一　「日本の美術 No.133 古瀬戸」　至文堂

③ 板橋　源「北上市立花十三菩提塚」岩手大学教育学部研究年報27　北上市史第2巻所収
佐々木博康

④ 三崎一夫　「岩手県の十三塚ー北上川中流域の密集地帯を中心にー」　北上市史第2巻所収

⑤ 雫石町史所収の遺跡地名表や筆者の実地踏査による。

⑥ 伊東信雄　「岩手県雫石町虚空蔵遺跡」　雫石町教育委員会
板橋　源

⑦　「北上市史第2巻」　北上市史刊行会

⑧ 注④に同じ

⑨ 本堂寿一　「和賀町梅の木古墓群について」岩手の文化財　岩手県文化財愛護協会

⑩ 斎藤　淳　「御在所遺跡」岩手県文化財調査報告書 第52集　岩手県教育委員会

⑪ 本堂寿一　「鹿島館遺跡調査報告書Ⅰ」文化財調査報告書第14集　北上市教育委員会

⑫ 北上市二子町飛勢に所在する。注⑦に紹介あり。

⑬ 北上市相去町門覚に所在する。注⑦に紹介あり。

⑭ 注⑦に同じ。

⑮ 注①に同じ。

⑯ 菊池啓治郎「口内町宝積古墓群の調査」古代23号　北上市史第2巻所収

⑰ 注⑦の中に紹介あり。

⑱ 桜井清彦　「鬼柳町古墓群調査報告」　北上市史第2巻所収
菊池啓治郎

⑲ 斎藤　淳　「境館遺跡」岩手県文化財調査報告書第52集　岩手県教育委員会

⑳ 菊池啓治郎「和賀郡岩崎村福田堰夷塚発掘報告」岩手史学研究18　岩手史学会

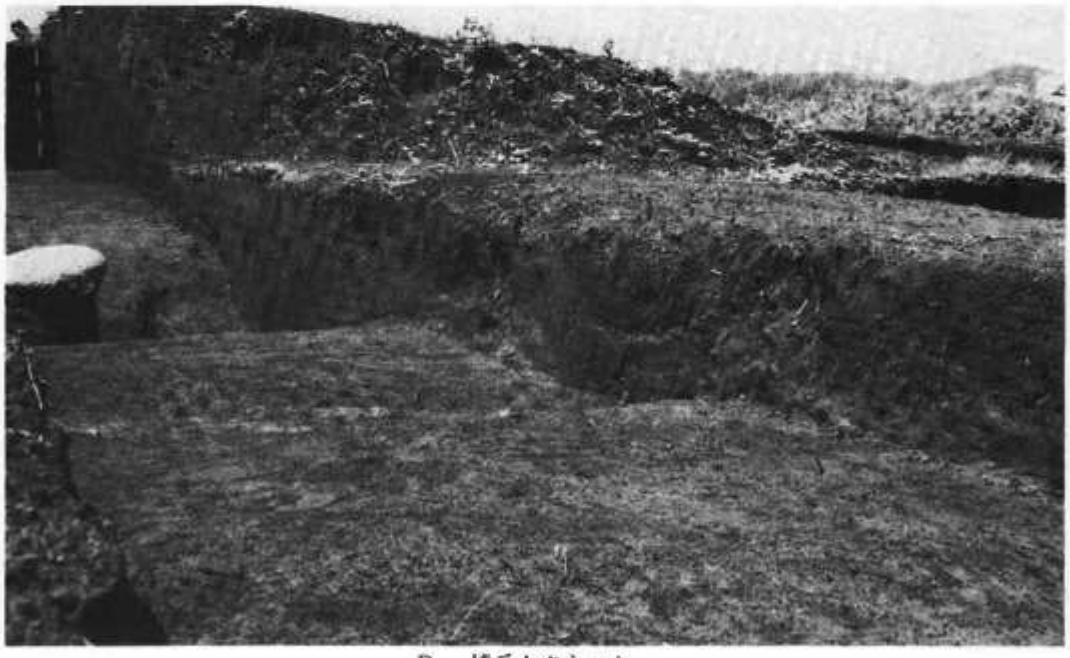
㉑ 注④に紹介あり。

㉒ 草間俊一　「花泉阿憩沢遺跡調査概報」岩手史学研究21　岩手史学会

㉓ 注④に紹介あり。

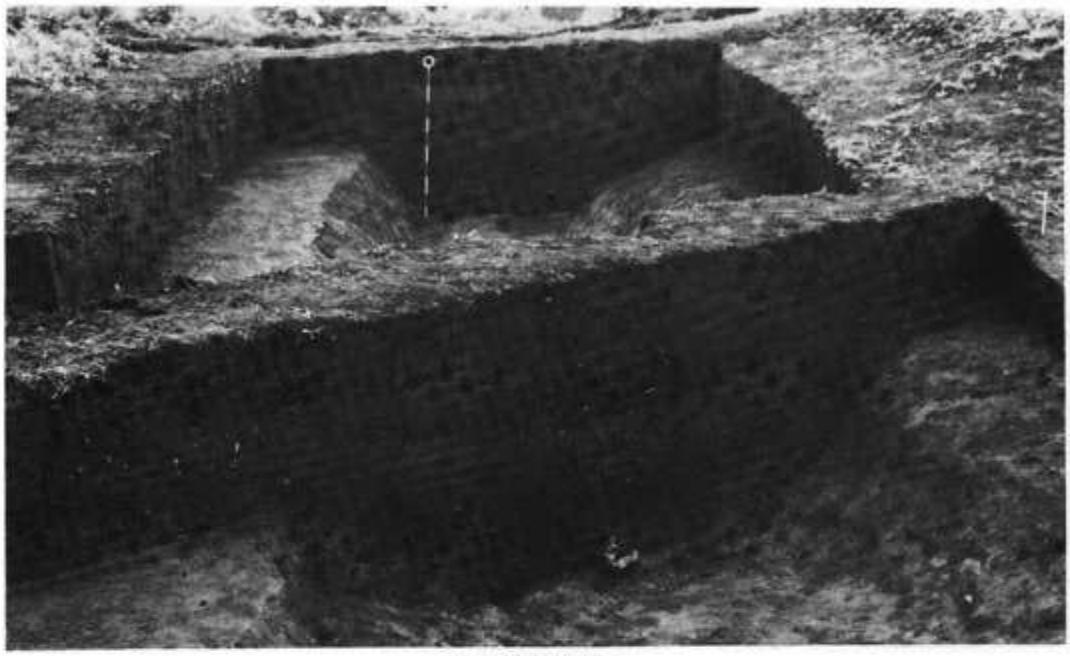
㉔ 注④に紹介あり。

A. 遺跡遠景



B. 墳丘セクション

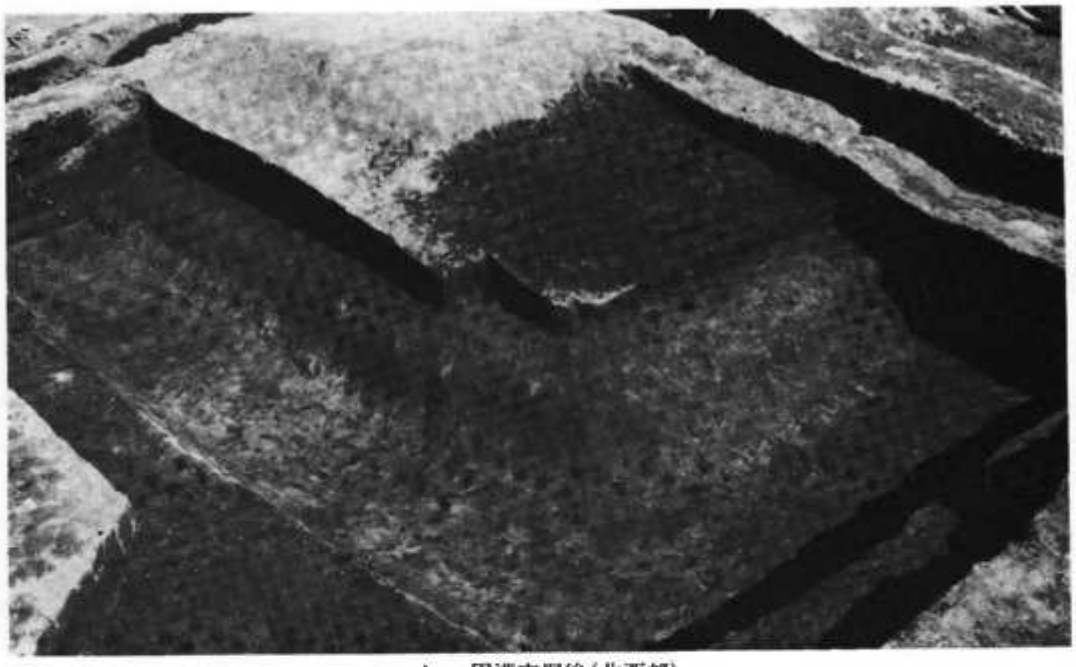
写真図版1



A. 周溝部埋土

B. 周溝完掘後(北西部)

写真図版 2

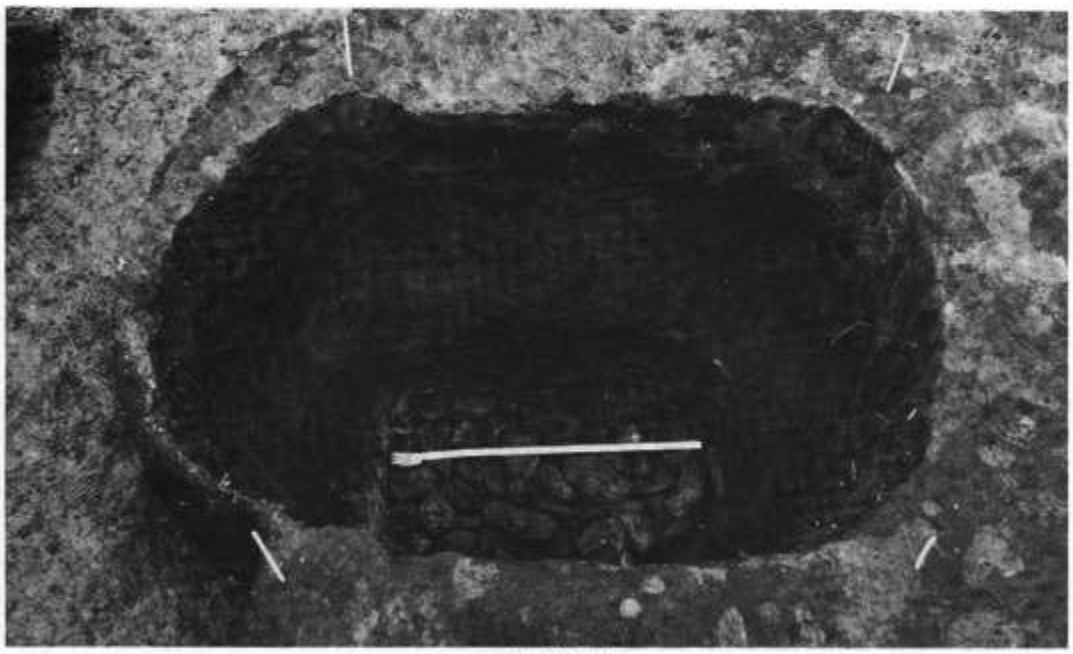


A. 周溝完掘後(北西部)

B. 墳丘内石敷部分

写真図版 3

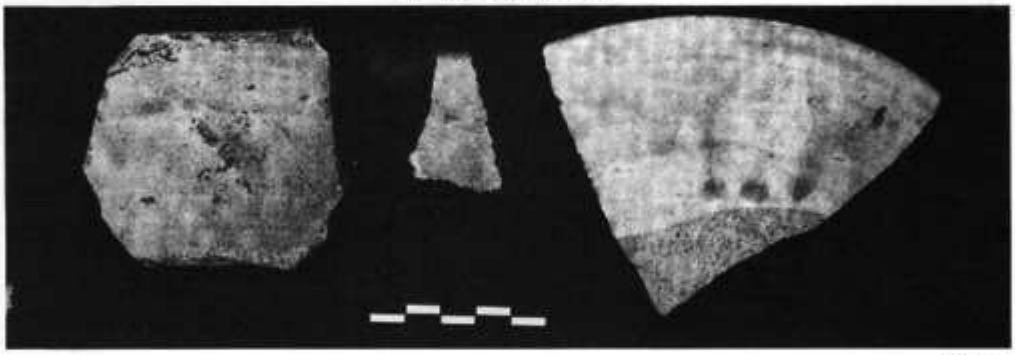
A. 墓拡埋土



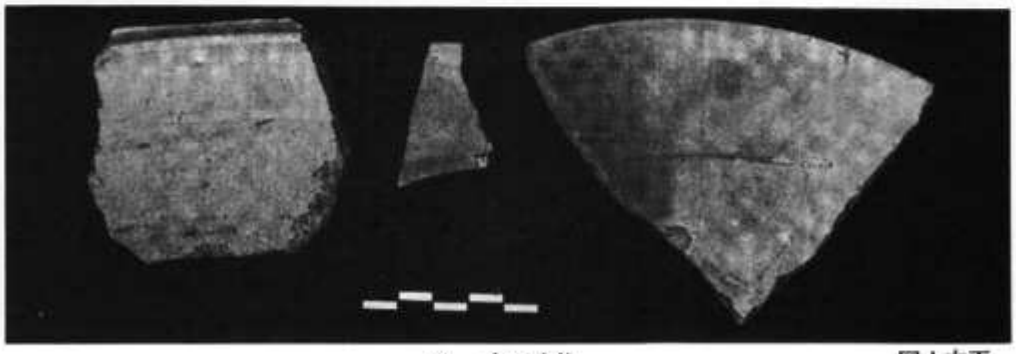
B. 墓拡完掘後

写真図版 4

A. 調査終了後全景



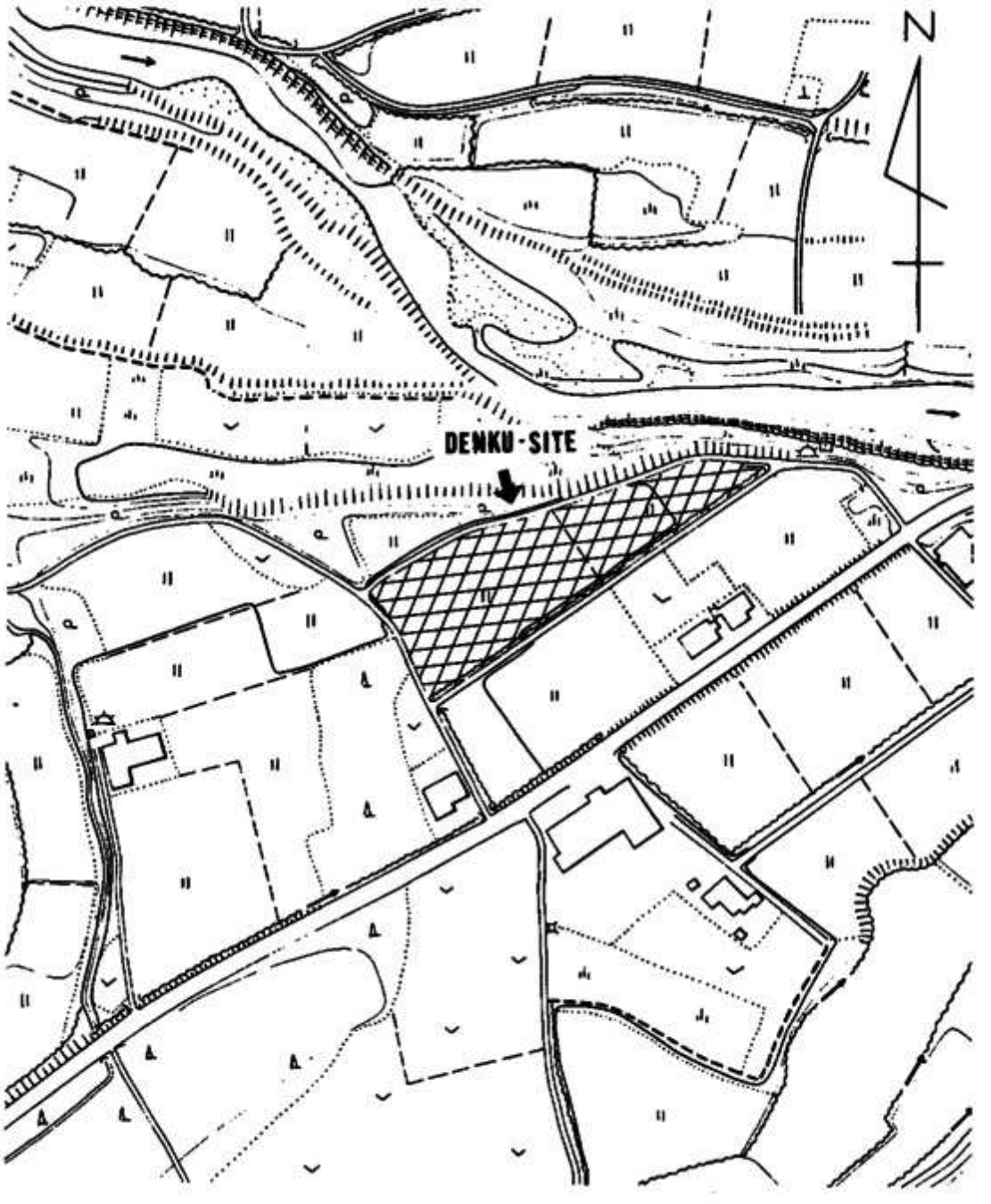
外面



B. 出土遺物　　同土内面

写真図版５

伝　久　遺　跡



図版１　遺跡附近の地形図(1/2500)

I．はじめに

本遺跡の調査は御所ダムの建設に関連する発掘調査の一環として行われ、工事着工以前に発掘調査し、記録保存することを目的としている。この遺跡は昭和48年度に行われた水没地内に対する第２回の分布調査で、土師器の破片が採集されたことからその存在が知られた。発掘調査は昭和49年度に岩手県教育委員会文化課によって行われ、その当時、岩手県教育委員会文化課に臨時職員として在籍していた上野猛と筆者が調査を担当した。

II．遺跡の位置と立地

伝久遺跡は岩手県岩手郡雫石町西安庭字伝久に所在し、県道「盛岡－横手線」と南川に狭まれた南川右岸に位置している。雫石町西安庭字伝久は岩手県交通バス路線「鶯宿温泉線」御所公民館前停留所で下車し、遺跡は停留所の北方50ｍの地点である。

遺跡は南川右岸の洪積低位段丘上に立地し、東・南・西の各方向には同位の段丘面が続き、ともに水田として利用されている。遺跡の標高は185ｍ前後を測り、上位の洪積中位段丘は、南方200ｍに明瞭な段丘崖で限られており、比高は15ｍ～20ｍである。遺跡北側の直下は南川が東流し、1.5km東方で雫石川に合流している。南川との比高は７ｍほどである。南川の対岸には本遺跡の立地する地形面と同位面が存在し、天沼遺跡（縄文中・晩期・平安時代）が立地している。天沼遺跡の更に北には洪積中位段丘が存在している。

遺跡範囲の調査時に於ける現況は、買収時には水田であったが、その後数年間作付けをしなかったために、よもぎやかや等の宿根性草本類や柳の若年木等が繁茂し荒地と化していた。また、地元の川口善一氏談によると、本遺跡は水田となる以前は果樹園であり、昭和40年頃の開田ブームの時に、水田化されたという。現状では、Ａブロック・Ｂブロックは同一面であるがＣブロックとは明瞭な段差で限られていた。A･Bブロックのほぼ中央はすでに重機によって表土が剥がされ地山面が一部露出しており、最近の攪乱であることは明白であった。表土を剥がされた部分には遺構や遺物は検出されず、大規模な遺跡にはならないものと推定された。

Ⅲ．調査方法と経過

1．調査方法

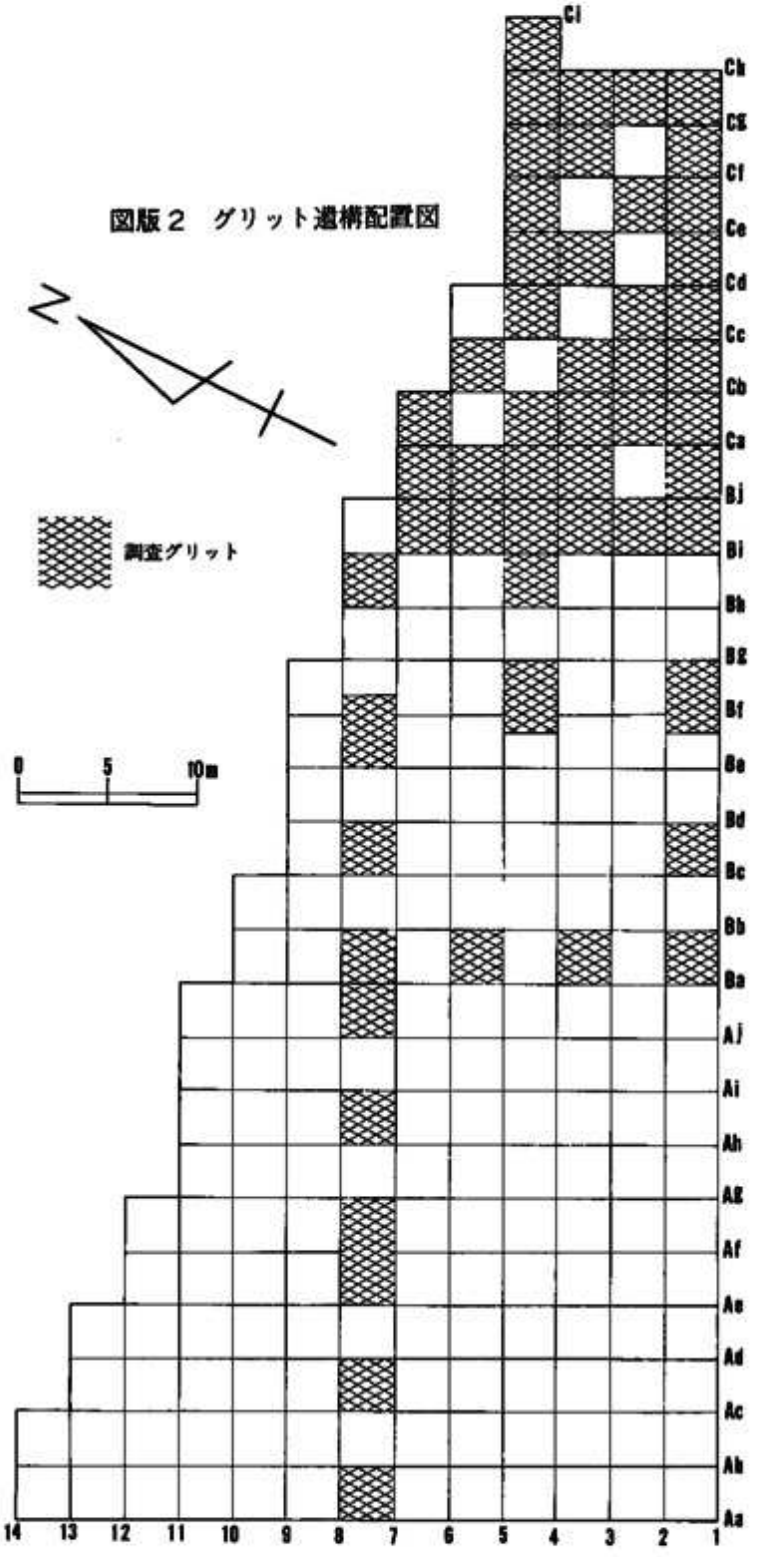
調査区は30m×30mで西よりＡブロック～Ｃブロックまで大区画し、各ブロックは更に３ｍ×３ｍの小区画を行い、調査の最小単位は３ｍ×３ｍとした。グリッド軸は南北軸で南より１～13まで命名し、東西軸は西端部分より各ブロックごとにａ～ｊまで命名し、各グリッドの呼称は各大区画名を頭に冠し、続いてａ－１・ｂ－１・ｃ－１という様にし、Aa－１・Ba－1・Ca－１という様に呼称した。遺構名はグリッド名と遺構の種類名を組合せて、Aa－１住・Ba－１住・Ca－１住という様に命名した。土壙名についても住居址の命名に準じた。発掘は住居址４分法、土壙２分法で行った。実測図は原則として$\frac{1}{20}$で行い、その他の縮尺も利用した。実際の実測図作成は作業員の中から実測班を編成して行い、指導や点検は調査員が行った。粗掘り中の出土遺物は破片のみであったことから、一部は写真撮影の後、出土地点と出土層位を確認の上収納した。遺構に伴う場合は実測図に記入し、写真撮影の後収納する予定であったが遺構内からの出土はなかった。実際の調査は期間のこともあって、全面調査はできず、当初は遺構や遺物の検出される範囲を把握することに留意し、検出された部分を拡張していく方法を採用した。調査の結果は少量の土器片・石器剥片が出土し、住居址状掘り込み遺構が１基検出されたのみで他に遺構と認定できるものは認められなかった。

2．調査の経過

調査は昭和49年９月５日より開始され、まず、調査区域内の刈払いをし、雑物を除去することから行われた。次いで、調査区の設定を行ったわけであるが、東西軸を調査区域の南端に存在する水田の畦畔を基準線として利用し、南北軸は東西軸に直交する様に設定した。

粗掘りは全て人手によって行い、東西軸７ラインより開始した。当初、市松で粗掘りを行い遺構や遺物が検出された場合、拡張する様に計画されたことは前述の通りであるが、Ａ７ラインを東に３ｍごとに３ｍ×３ｍで粗掘りの結果、遺構・遺物とも検出されなかった。この付近は調査以前に重機によって表土が剥がされていることは前述の通りであり、残っている表土の厚も15cm位と薄く、水田とされる際にも重機による削平が行われていることが明白となったことから、Ａブロックは遺構・遺物ともに存在しないものと断定し、Ａブロックは他に粗掘りを行わなかった。引き続きＢブロック部分の粗掘りを開始したが、Ａブロックと同様に遺構は検出されなかった。しかし、Ｃブロック寄りで器表面に縄文の施文された土器片が少量出土した。このことから、Ａブロック・Ｂブロックは水田や畑地として利用される際に、表土が削平されＣブロックの方に押し出したものと考え、遺構・遺物とも存在しないものと断定した。次いで

図版２　グリット遺構配置図



Cブロックを集中的に粗掘りをし、遺構・遺物の存在を確認することに留意した。その結果、遺物は北端の崖寄りや、Bブロック寄りに集中していることが明らかとなり、この部分の表土を全て剝いだ所、竪穴住居址状の土層変化部分が検出され、精査の結果、人為的に掘りこまれた遺構であることは明らかになったが、炉址や柱穴が検出されなかったことから、住居址として認定するには不充分であった。また、埋土内で遺物が全く出土せず、時期を明確にしえなかった。しかし、粗掘り中に土器表面に縄文の施文された土器片が周囲で出土している。これらの遺物は実測図を作成しないで、写真撮影の後収納した。他には遺構と認定し得る様な土層変化は認められず、他には遺構が存在しないものと断定した。以上の調査を全て完了した後、昭和49年11月9日に現地を撤収した。

Ⅳ. 基 本 層 序

基本層序の土層説明に入る前に、遺跡地内の地形を概括すると、A・Bブロックはほぼ連続した平坦面であり、基本的な層序もほぼ同じである。しかし、CブロックはCライン付近より東に向って次第に傾斜しており、それにつれて層序も大きく変化している。A・Bブロックの層序とCブロックのそれを比較した場合、上位のⅠ・Ⅱ・Ⅲ層は共通しているが下位のⅣ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層は共通性に乏しい。これはA・Bブロックは削平を受けていることと、Cブロック東端に埋没谷が存在し、埋没谷に流入して堆積した部分がA・Bブロックに欠けているためである。更に、CブロックではA・BブロックのⅣ層にみられる様な黄褐色のシルト層が欠けており、段丘礫層の上に直接、黒色や黒褐色または灰褐色等を示す粘土質シルトが堆積している。

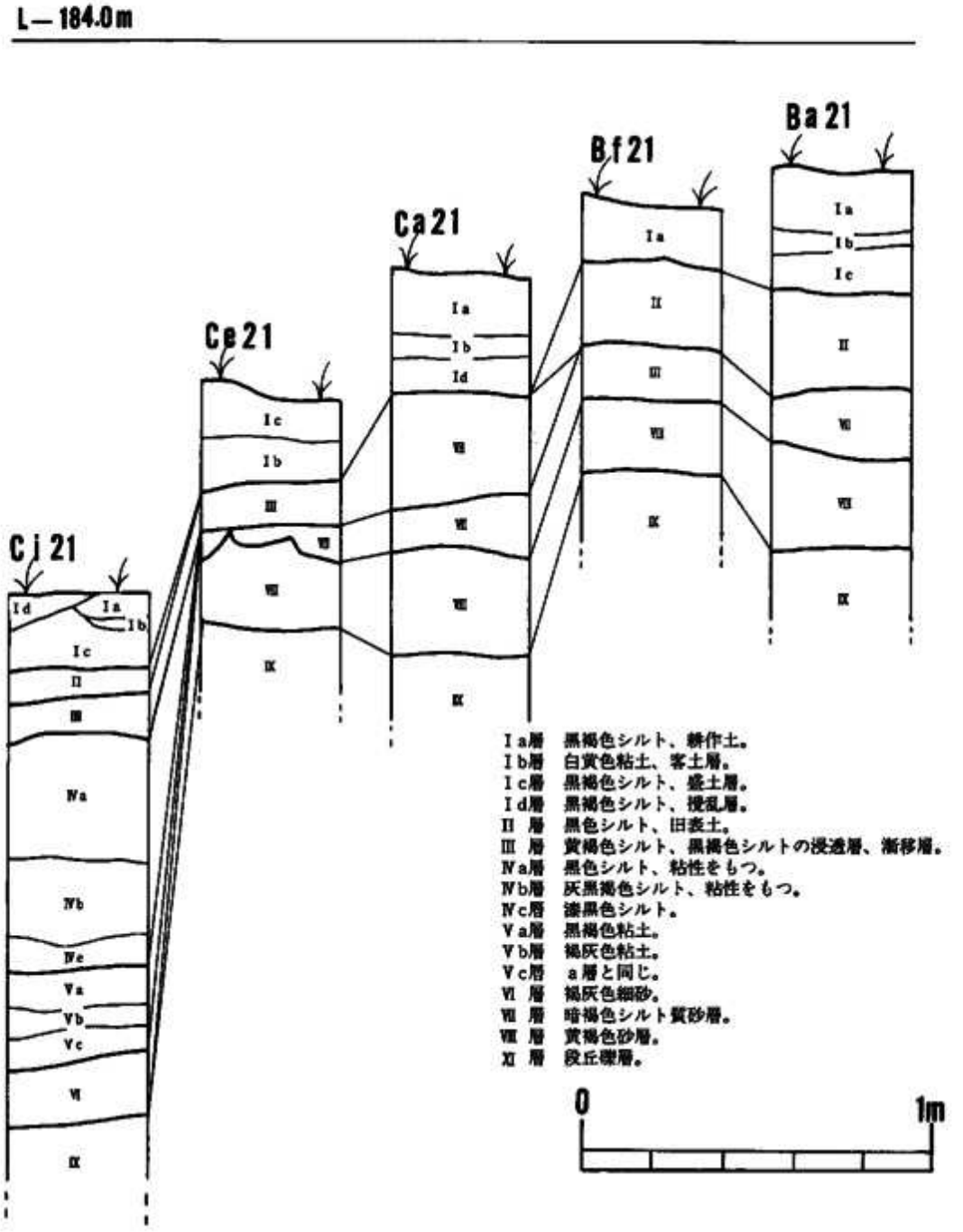
以上の様なことを認識しつつ、ここではA・BブロックとCブロックをあわせて、本遺跡の基本層序として記述している。なお、土層名は上位層よりⅠ・Ⅱ・Ⅲ層とした。

Ⅰ層――表土や耕作土であり、この遺跡では人為的に盛土された部分であり、4層に細分されている。

a層―現在の表土で耕作土として利用されている。A・B・C各ブロックともに共通しており、盛土されている。色調は黒褐色を呈し、土性はシルトである。礫等の混入はない。層厚は位置によって若干異るが、全体的にみると10cm～20cm位である。

b層―この層は開田された際に水漏れ防止の為に客土された土層である。土性は粘土で色調は白黄色を呈する。層厚は5cm～10cm位でほぼ全面で観察される。

c層―開田の際に盛土された土層で、部分的に欠く場合もあるが、Cブロックでは全面を覆っている。色調はa層と同じ黒褐色を呈し、土性はシルトである。層厚は10cm～20cmである。


L—184.0m
Ba21
Bf21
Ca21
Ce21
Cj21
Ia
Ib
Ic
Id
II
III
IV
VI
VII
VIII
IX
Ia層　黒褐色シルト、耕作土。
Ib層　白黄色粘土、客土層。
Ic層　黒褐色シルト、盛土層。
Id層　黒褐色シルト、撹乱層。
II 層　黒色シルト、旧表土。
III 層　黄褐色シルト、黒褐色シルトの浸透層、漸移層。
IVa層　黒色シルト、粘性をもつ。
IVb層　灰黒褐色シルト、粘性をもつ。
IVc層　漆黒色シルト。
Va層　黒褐色粘土。
Vb層　褐灰色粘土。
Vc層　a層と同じ。
VI 層　褐灰色細砂。
VII 層　暗褐色シルト質砂層。
VIII 層　黄褐色砂層。
XI 層　段丘礫層。
0
1m

図版３　基本層序

d層―重機によって最近撹乱された部分である。A・B・C各ブロックともに観察されるが、A・Bブロックの方が面積的に広い。色調は黒褐色を呈し、土性はシルトである。締りもなくフカフカしている。礫等の混入もなく、層厚はそれぞれによって差があり一様でない。

II層――黒色を呈するシルトで礫等の混入はない。開田の際にCブロックの盛土に使用された土である。全体的に良く締り固い。層厚は10cm～30cmである。

III層――II層と質的に近似しているが、色調や粘性の違いによってII層と区別した。
黄褐色のシルトに黒褐色シルトが浸透した層で漸移層である。色調は暗褐色を呈しII層より粘性の強いシルトである。下位ほど色調が明るくなる。層高は30cm位である。

IV層――IV層としたのはCブロックの埋没谷の堆積層であり、腐植土を基調とした黒色土系の土層である。粘土質シルトで構成され、色調によって3層に細分される。

a層―黒色を呈する腐植壌土。非常に粒子の細いシルトで粘性をもつ。締りはなく軟い。

b層―灰黒褐色を呈する粘性の強いシルト。軟い。

c層―漆黒色を呈する腐植質の多く混入したシルト。軟い。

V層――この層はCブロックの埋没谷に流入して堆積した土層で、強い粘性をもち、酸化鉄とおもわれる赤色粒子の混入の多い層である。色調によって3層まで細分されている。

a層―黒褐色を呈し、強い粘性をもつ粘土。酸化鉄とおもわれる赤色粒が少量混入し、腐植質の混入がみられる。締りはない。

b層―褐灰色に酸化鉄とおもわれる赤色粒が混入した強粘性の粘土。

c層―a層とほぼ同一の地層である。

VI層――褐灰色の細砂に粘土質シルトが少量混入した層で、良く締っていて固い。

VII層――Bブロックにだけ観察される土層で暗褐色を呈するシルト質砂層。

VIII層――Bブロックにだけ観察される土層で、黄褐色を呈する砂層。

IX層――段丘礫層。

Ⅴ．検出された遺構と遺物

1．遺　構

本遺跡の調査では竪穴住居址状の掘り込み遺構が1基検出されたのみである。以下にその状態を述べる。

〔竪穴住居址状掘り込み遺構〕

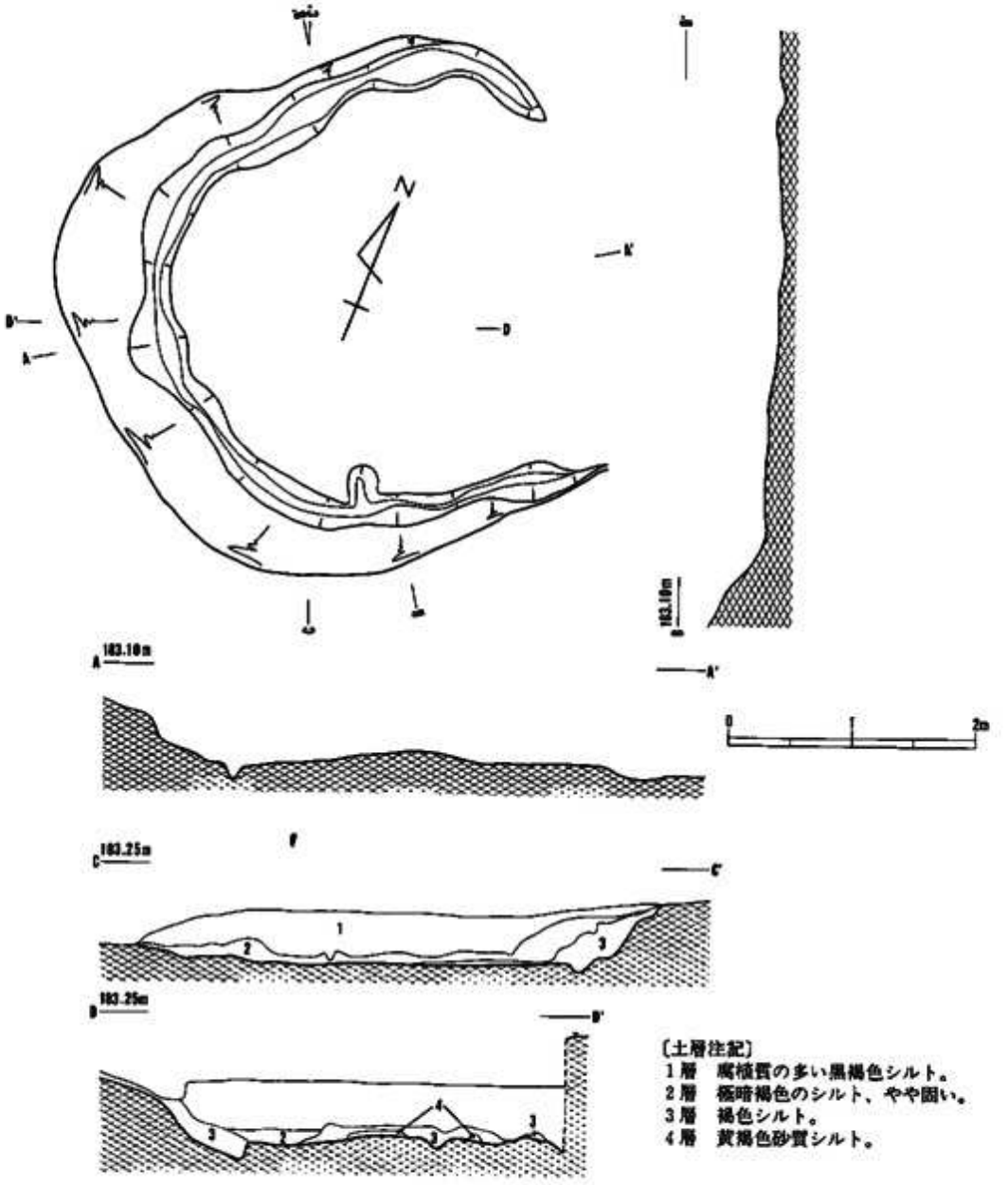
この遺構はグリッドBj－4を中心とする位置で検出された。この付近は東に向う緩傾斜地であるために、北東部分の壁は検出されなかった。規模は南東―北西方向で3.8m位を測り、南西―北東方向は不明である。平面形は隅丸のほぼ方形を呈する。壁高は最っとも高い位置で50cm位であり、上縁に向って上開き状を呈している。埋土は4層に分類され、上位より1層が腐植質の多く混入した黒褐色シルト、2層は極暗褐色シルト、3層は褐色シルト、4層は黄褐色砂質シルトでそれぞれ構成されている。埋没を土層図で観察すると、自然堆積によって埋没したものと推定される。床は凹凸が激しいが、段丘礫層の上に黄褐色粘土で貼床されたと考えられる形跡が認められた。床面の周囲には巾が10cm～20cmと不規則であるが壁溝状の溝が検出された。壁の検出されなかった東部分を除いて他は全周している。柱穴や炉址は確認されていない。埋土内や床面で遺物は出土していない。以上の様なことにより所属時期や性格は不明である。

2．遺　物

分布調査の際には土師器の破片が表採されていたが、発掘調査では土師器の破片は全く出土していない。出土したのは土器表面に縄文の施文された土器と無文土器の破片や石器および石器剥片である。ここでは土器と石器にわけて説明を加える。主要遺物は実測図や拓本を作成したわけであるが、その後は当埋蔵文化財センター御所分室に収蔵していたが、御所ダム関連遺跡の調査が終了後、御所分室を廃止して本室へ撤収の際に、膨大な遺物の中にまぎれ込んでしまった。其の後、本報告書執筆中にも再三再四にわたって探したが、原稿締め切りまでに探しだせなかった。従って、本報告書には実測図と拓本図は掲載しているが、残念乍ら写真撮影ができかねたので、遺物写真は掲載していない。

〔土　器〕

出土した土器片は総数で210ケであるが、その内で1個体が全体の$\frac{1}{4}$ほど残存しており、他は全て小破片である。破片には口縁部9ケ・底部5ケが含まれ、他は胴体部の破片である。出土地域はCブロックに限られ、特に、竪穴住居址状掘り込み遺構の周囲からの出土が多かった。



図版４　竪穴住居跡状掘り込み遺構

全体的にみて小破片が主体であるのであまり細分することは避けた。ここでは(1)縄文だけのもの。(2)縄文と沈線による施文のもの。(3)無文のものの3グループに分類された。しかし、出土地域がほとんど同地域であることや、全て同一層位で出土していることから、時期的に近接した時期に属するものであろう。

(1)、このグループには2個(①、②)の破片が含まれるが、ともに口縁部破片で表面には口縁上端まで撚糸文の施文されたものである。①は斜行する不整の撚糸文が付され、体部より口縁部に向って次第に薄くなり、もっとも厚い部分で6mm、口縁上端部分で2mm位である。内面は撫でによる調整が行われ、口唇部は丸味をもっている。器形は小破片なので定かでないが鉢形を呈するものと推定される。②は複合口縁を呈する破片で口縁部には斜行する撚糸文が付されている。器厚はもっとも厚い部分で約1cmで口縁上端に向って若干薄くなる。口唇は丸味をもっている。器形は①と同じく鉢形を呈するものと推定される。

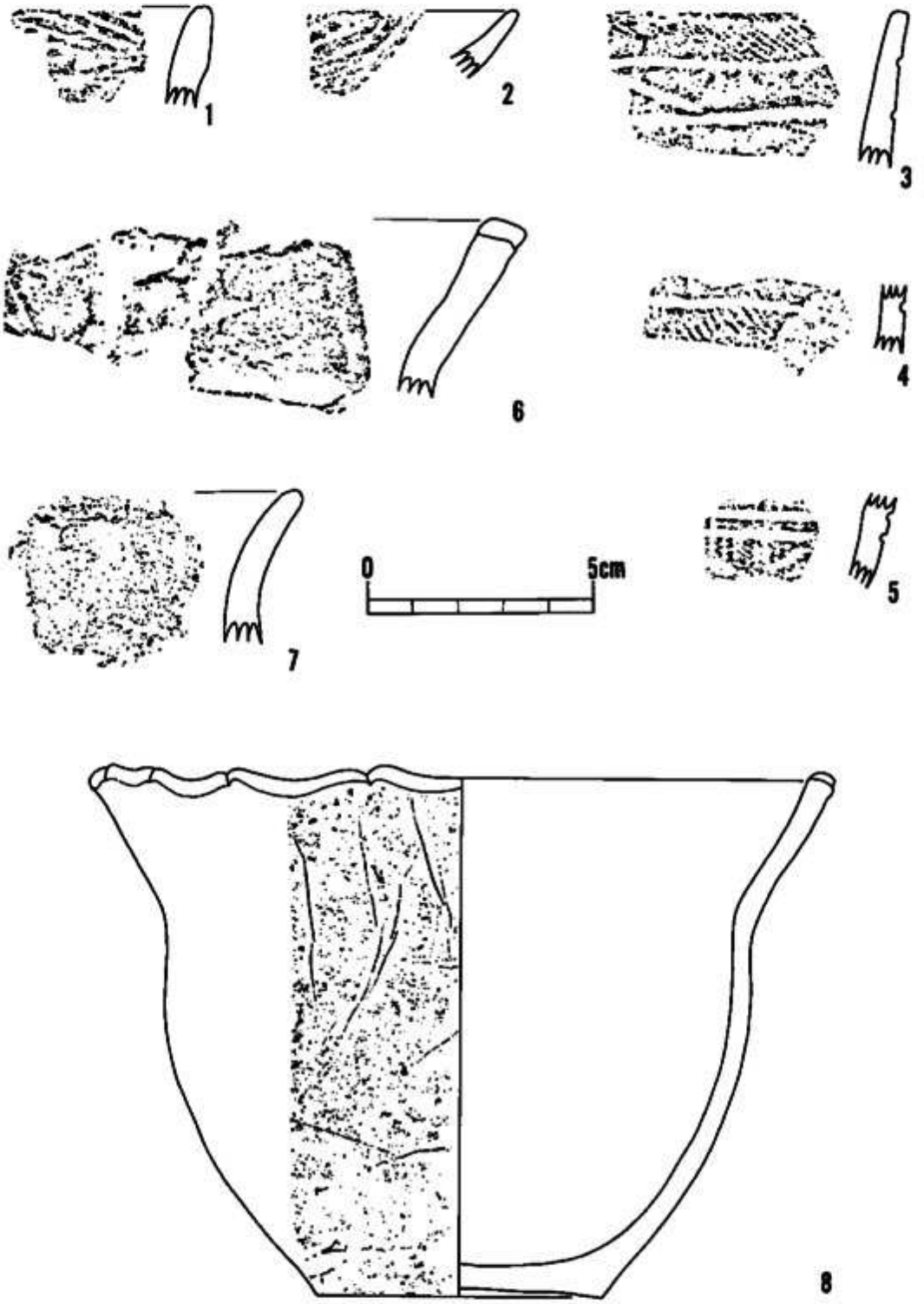
(2)、このグループは体部に細い縄文が施文され、更に、丸棒状工具によって沈線が付されている。沈線と沈線の間は磨消される場合がある。③、④、⑤の土器片が相当する。③は口縁上端より1.2cmと2.4cm下方に各1条の平行する沈線が付され、沈線と沈線の間は磨消している。器厚は7mm前後を測り、口縁上端に向って次第に薄くなっており、口縁は平らに撫でられている。器形は深鉢形もしくは鉢形を呈するものと推定される。④⑤の破片も③とほぼ同じである。

(3)、このグループは体部に縄文や沈線が付されない、いわゆる無文土器である。⑥、⑦ともに口縁部破片であるが、⑥は波状口縁を呈し、口唇は平らに撫でられている。器厚は9mm位である。⑦は平縁で口縁上位ほど外弯している。器厚は8mmで口唇に向って次第に薄くなり、口唇は丸味をもっている。⑧は全体の$\frac{1}{2}$ほど残存しており、本遺跡出土土器の中で復元された唯一の土器である。口縁部の直径14.5cm・底径6cm・器高11.5cmの鉢形土器である。器表は内外ともに良く撫でられている。底部は若干上げ底となっており厚さは5mmである。体部は底部より外傾しながら立上り、底部より7cm位上に胴部最大径(13cm)をもち、更に2cm上で大きく外反して口縁に続いている。口縁にはほぼ3cmごとに小突起を有し、全体的に小波状口縁を呈するものと推定される。

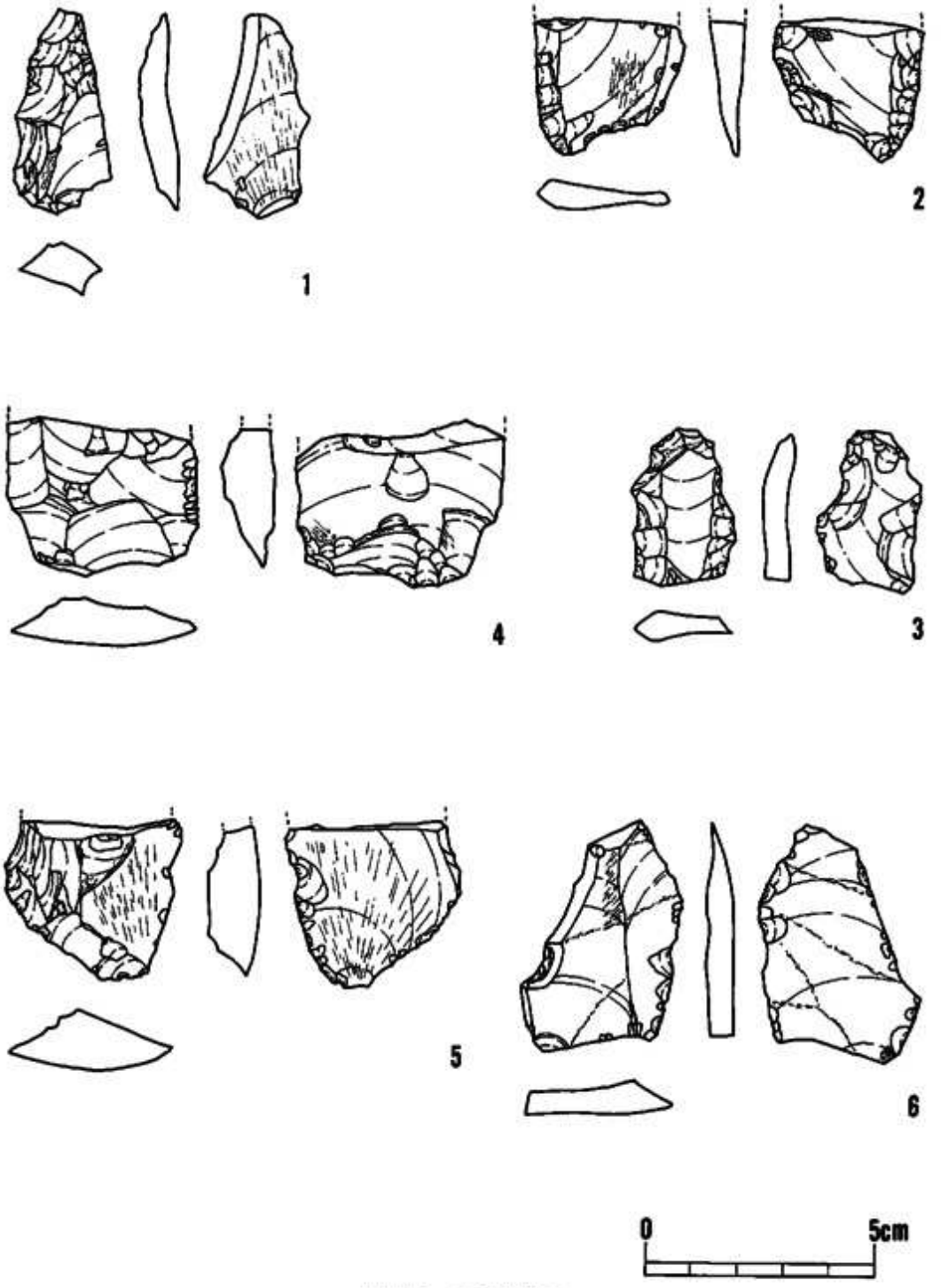
〔石　器〕

本遺跡の調査によって石器と認定し得るもの3点、刃部に使用痕をもつ剥片3点、その他使用痕をもたない石器剥片34点がそれぞれ出土した。本項では、その中で石器として認定し得るもの3点、使用痕をもつ3点についてだけ記述し、その他の石器剥片については省略する。

石器として認定した3点(図版●－①･②･③)はいずれも欠損品であるので全体の大きさや形態は不明である。①の調整剥離は片面からだけであるが、②･③は両面から剥離調整されてい



図版5　土器拓本および実測図



図版６　石器実測図

る。その中でも②は丹念に調整されている。③は両側縁に調整痕をもっている。これら3点の中では①の調整がもっとも粗雑であると同時に、全体的にみても粗雑である。形態的には定形的な石器とは考えられず不定形石器の範囲に入るものであろう。用途は石匕と同じ切削具と考えられる。④・⑤・⑥の3点はいずれも側縁に小剥離痕をもっているが、二次調整としての剥離痕とは認定しがたい。おそらく、剥片をそのまま使用し、刃こぼれしたものであろう。④・⑤は欠損しているので大きさ、形態ともに定かでない。

Ⅵ. ま　と　め

以上の調査結果から若干の考察を加えてまとめとしたい。

本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居址に近似した掘り込み遺構1基のみである。しかし、炉址や柱穴が検出されておらず、住居址として断定するには問題がありそうである。所属時期についても、埋土内や床面から遺物が出土していないので明確にしがたい。遺構周囲より出土した遺物は、1)体部地文に細い不整撚糸文をもつ。2)一部に複合口縁がみられる。3)無文土器も出土している。4)磨消縄文がみられる等といった特徴がみられる。量的に少いことは問題もあるが、この様な特徴を具備している土器は、縄文時代の土器では後期に属するものの中に近似したものがあるが、他には見当らない様である。しかし、縄文時代後期に属する土器には、地文として細い不整撚糸文をもつものは知られていない。以上の様なことを総合して考えると出土土器は弥生時代に属する土器と考えるのが妥当であろう。時期的には磨消縄文をもつものは前半に、無文土器は後半～末期に位置づけられるであろう。これらの土器が出土する範囲は、遺構の周囲に限定されており、遺構と関連する遺物と考えて誤りないものと考える。以上の様なことから、掘り込み遺構は弥生時代に属するものと考えたい。住居址か否かについては、岩手県内の他遺跡での調査結果と比較しながら考えてみたい。

岩手県内の弥生時代に属する遺跡の調査で、住居址が検出されているのは2遺跡で、他に住居址状遺構が1遺跡で知られている。その中で長谷堂貝塚遺跡[1]の例では平面形がやや不整であるが3.1m×3.3mのほぼ円形を呈し、床面ほぼ中央に石囲い炉を設けている。大渕遺跡[3]の例では6.9m×6.1mの胴張方形を呈し、床面ほぼ中央に石囲い炉を設置している。長谷堂貝塚遺跡の場合には柱穴は検出されず、大渕遺跡では壁柱穴が検出されているが、主柱穴は検出されていない。以上が住居址として確実に認定し得る遺構の例である。住居址状遺構は常盤遺跡[2]で検出されている。それによれば東西3.2m×南北2.5m・壁高42cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈している。壁直下の床面には周溝が掘られ全周している。柱穴や炉址は検出されておらず、住居址とは断定していない。以上の3例と本遺跡の例を比較した場合、常盤遺跡の例に近いものと推定される。すなわち、竪穴式である・周溝をもつ・ほぼ方形を呈する・柱穴や炉址が検出さ

れない等の共通性をもっている。時期的には長谷堂貝塚遺跡の場合には弥生中期・枡形囲式期、・大渕遺跡では弥生時代初頭谷起島式土器併行期常盤遺跡の例では弥生時代後期天王山式土器併行期にそれぞれ位置づけられている。

以上の様に他遺跡で検出された例と比較してみた場合、常盤遺跡の例に近似しており、他の2例での検出例とは異っていることは明らかであり、住居址として断定するには根拠が不足している。しかし、弥生時代に何んらかの意味をもって人為的に掘り込まれたことは明らかであり、弥生時代の遺構例として貴重な資料を提供したものといえるだろう。岩手県内で弥生時代に属する遺構が少い今日、今後の調査例の増加を待って再度検討を加える必要がある。従って、ここでは一応弥生時代に属する竪穴住居址に近似した掘り込み遺構として結論づけておきたい。

本遺跡の調査によって、以上述べて来た様なことが判明したのであるが、調査以来報告まで5年間という長い年月を経ている。その間、調査過程や結果の忘却・主要遺物の行方不明等、調査員としての不手際を反省しつつの報告とならざるをえなかった。この責任は担当者としての筆者にあることを明記したい。

最後になったが、本遺跡の調査に当り、川口甚一氏をはじめとする盛岡市繋地区・雫石町西安庭地区の方々10名、整理にあたっては当埋文センター第4整理室勤務の室内整理員の方々より多大なるご助力をいただいた。ここに記して深甚よりの謝意を表したい。

引用参考文献

① 及川　詢　「長谷堂貝塚」昭和46年度緊急調査報告　岩手県教育委員会
② 　「大渕遺跡」文化財調査報告書第9集　(財)岩手県埋蔵文化財センター
③ 伊東信雄　「常盤遺跡」水沢市史第1巻所収　水沢市教育委員会

A. 遺跡近景

B. 基本層序

写真図版 1

A. 基本層序

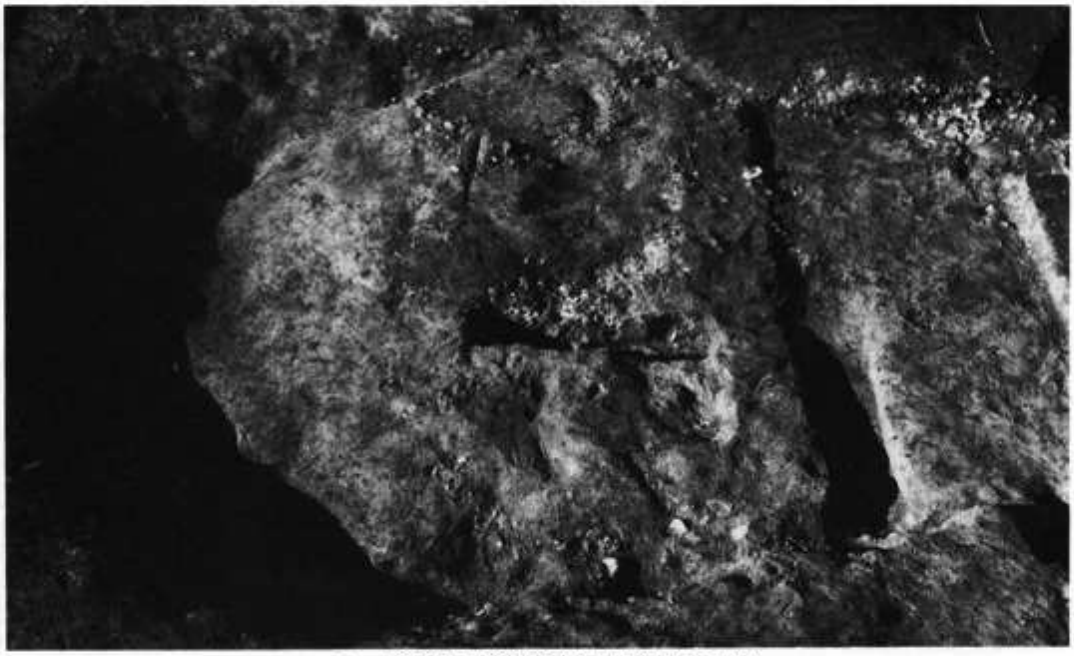
B. 土器出土状況(図版 - 8)

写真図版 2

A. 竪穴出土状況

B. 掘り込み遺構・埋土土層

写真図版３

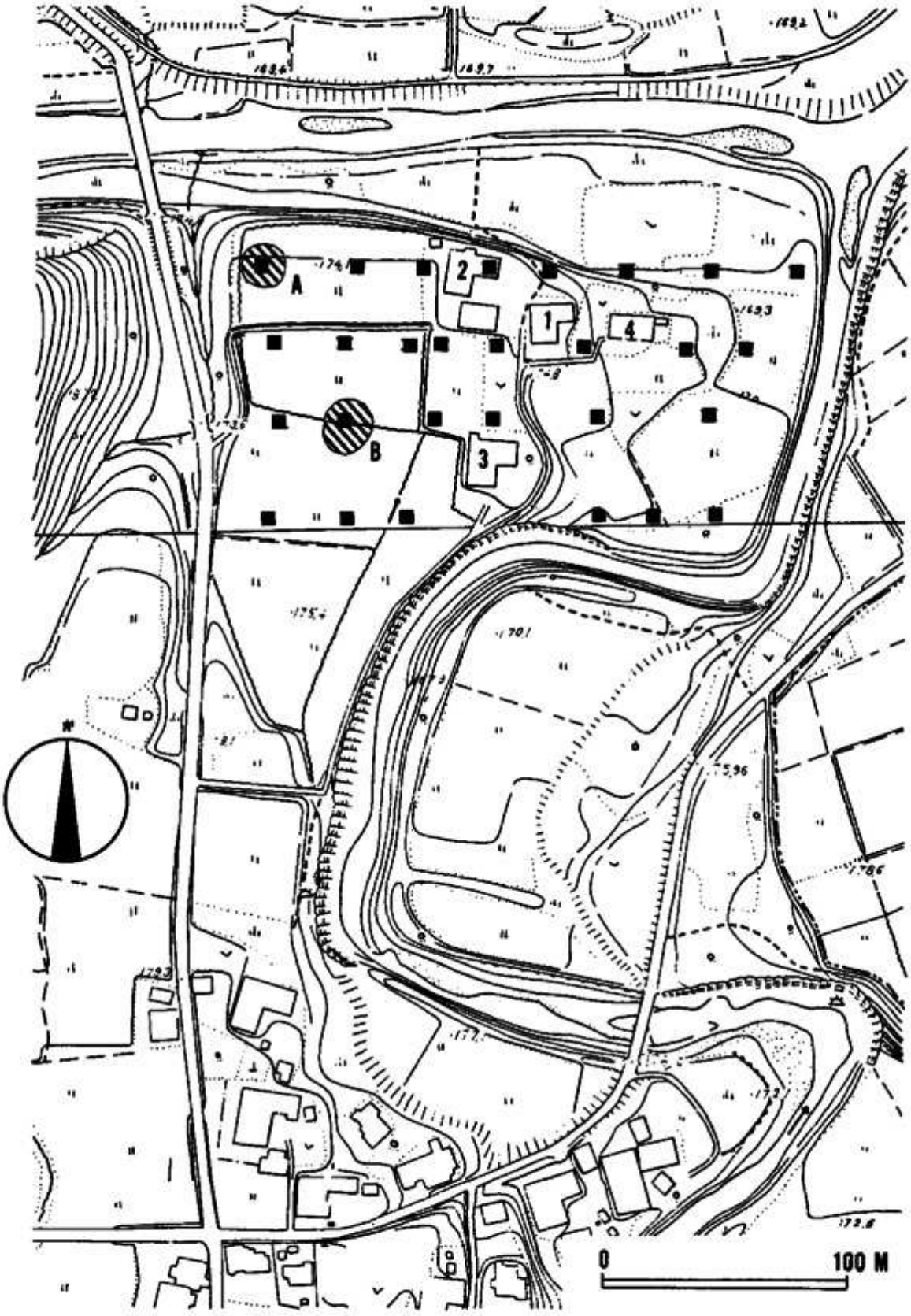


A. 竪穴住居跡状掘り込み遺構(南から)

B. 同土(東より)

写真図版 4

町 場 Ⅱ 遺 跡



図版1　町場Ⅱ遺跡グリット及び遺構配置図

Ⅰ．は　じ　め　に

人間生活の三要素である衣、食、住のうち、住の考古学的発掘調査は過去に古代を中心に多くの調査成果をあげてきたが、住の変遷がひとたび中世の鎌倉時代に入るや一般的に竪穴式住居が掘立柱建物に変わることや、また調査成果としての絶対量がかなり不足していることもあって、一般民家の形態・機能はほとんど不明である。また、現代居住している建物にしても建て改えもあって創建当初の建物形態が理解されているようでそうではない。ましてや居住している建物の１代前（時代にして江戸時代から明治大正時代）でも建物自体の文献史料は少なく中世では皆無といってもいい。

たとえば御所ダム水没補償によって移転した後に残された土台の礎石建物は、一般的民家の土台であり、最近まで使用されていた建物にしても調査を重ねることによって礎石やそのスパン(間)、床面遺物などから創建当初の輪郭がうかび、その下層を掘り下げて新たに発見された場合の建物は、その前時代の建物として間断無く住の変遷が形づくられていく。

これら御所ダム工事に関する移転家屋は全体で520軒ほどあるが、この内、数はあまりに少ないが今回発掘調査区域にそれらが見られるので、建物址も発掘調査の対象に加えた。町場Ⅱ、遺跡をはじめ下猿田Ⅱ、下猿田Ⅲ遺跡内にはダム水没補償によって移転した家屋の土台である礎石列が多数見うけられる。これらの礎石建物址は曲家と直家や付属建物に分けられ、型も一定しているので便宜上厩（うまや）をⅠ区、土間（にわ）をⅡ区、台所をⅢ区、常居（じょうい）をⅣ区、座敷をⅤ区と分け、間仕切りされた小室や庇はそれぞれの区に含めて記述した。図版中の１からの数字は貨幣の出土番号、マイナスの付いた数字は５cmごとのコンターを表わす。大文字のアルファベットは断面図やエレベーション図の始まりの点、小文字のアルファベットは貨幣以外の遺物の位置をあらわす。

Ⅱ．遺跡の位置と環境

町場Ⅱ遺跡は岩手県岩手郡雫石町町場に所在し、盛岡駅から西に向かう田沢湖線雫石（しずくいし）駅より直線にして南東３kmの位置にある。地形的には北上する矢櫃川と南川、雫石川の合流点のはさまれた洪積世低位段上面のもっとも低い位置にある。

周辺遺跡としては東１km雫石川右岸に縄文中期の除遺跡、南１km矢櫃川右岸に縄文中期の広瀬遺跡、左岸に縄文後期町場Ⅲ遺跡、当遺跡に接した西丘陵端に縄文前期中期初頭の田屋館遺跡などが点在する。

また当遺跡の現状は発掘調査に入る時点で水没補償がすでに数年前に終わり、家屋などすべてが移転したため、雑草木がおいしげり荒廃した土地と化していた。かつての地目は、家屋４世帯分と畑地と水田である。

Ⅲ．調査方法と経過

1．調査方法

御所ダム水没区域内の移転民家520世帯の内、町場Ⅱ遺跡には4世帯あり、調査開始時にはすでに建造物は撤去され土台も重機などにより一部攪乱されているが、地下遺構はほぼ保存されている様なので、発掘調査の一部に4世帯の民家調査を加えた。

また、当調査区はこれら民家に先行する遺物がほとんど表採されず、よって遺物の散布と土の流れを把握するため、当区域を広範囲に2×2mのグリット28ケ所を東西に連続的に設定し掘り下げた。その結果によって、表土から順に精査する区域と、重機を利用して埋土を一挙に除去したのち精査に入る区域とに分けた。

遺構の測量は東北X系の測量基準にあわせるため東日本測量設計株式会社に依頼し、その成果をもとに各遺構ごとに相対座標をつくり、それに拠ることとした。

基準点1　X＝－37,206.60m
Y＝＋14,137.41m
H＝　174.586m
真北方向角－0°6′18″
基準点1から基準点2への方向角と距離
97°12′35″

基準点2　X＝－37,216.29m
Y＝＋14,214.18m
H＝　170.976m
真北方向角－0°6′20″
基準点2から基準点1への方向角 277°12′35″

2．経　過

現場へは4月9日に入り、現場設営と雑草かん木のしげった遺跡内の刈り払いを開始した。4月19日からは民家の表土はがしと、土層観察と遺物の密度調査を行なった。5月7日にはグリット掘りの結果遺構遺物の発見されなかった地区を設定し、大型ユンボを1週間入れ遺構の確認される面まで掘り下げたが、遺構遺物はまったく発見されなかった。

発掘期間も終わりに近づいた5月22日に基準点測量の成果がとどいたので、発掘調査した遺構を中心にして測量のためのグリットを組む。5月23日から民家平面図作製開始。6月1日、2号建物址地裏の近世墓を掘り下げる。6月6日町場Ⅱ遺跡発掘調査が終了し、資材とプレハブは次の発掘地点下猿田Ⅱ遺跡へ向う。

Ⅳ．発見された遺構と遺物

1．近世・近現代の遺構と遺物

(1) 1号建物址

1号建物址の相対座標点0は以下のとおりである。

X＝－37,200.00m

Y＝＋14,151.00m

a．遺　構

当建物址は標準型のいわゆる南部曲り家の礎石建物址である。主屋はN－13°－Wとほぼ南北方向を指し、東側に土間と厩が直角につき出している。全体の規模は東西約18m、南北16.6mを測る。発掘調査開始時点では、礎石は、約10cmほどの表土で覆われてわずかに頭を出していた。ダムによる水没補償が決まった後、建物をとりこわした材を焼きすてたようで、その炭化材がⅣ区～Ⅴ区の間に散在していた。土間、母屋等をⅠ～Ⅴ区に分け、以下に各区の説明を行う。

Ⅰ区は東西5.7m、南北6.0mの厩で、北と東の礎石が欠損していたり、移動して不明瞭な礎石列が所々にみられる。礎石の内側は皿状に掘りくぼめられており、その深さは30cmである。ここの地面は非常に堅くしめられている。内部の北方には方形の土坑が認められるが、撹乱である。この土坑内には炭化材が多量に投げ込まれていた。

Ⅱ区の土間は東西5.8m、南北6.5mの規模である。Ⅲ、Ⅳ区より4～5cmほどレベルが高く、その分だけ周囲の礎石は埋まっている。床面はほぼ平坦にならしており、非常に堅くしまっている。北面は礎石が欠損している所がある。礎石の北は下り石段になって外に降りられる。北東隅には柔らかい黒色土が東西1.6m、南北1.4mの方形に広がっている。そのわきから径27cm、厚さ12cmを測る上石臼（a）の完形品が出土した。

Ⅲ区の台所は東西6.5m、南北6.5mの規模である。人頭大の河原石を積み上げ、その上にコンクリートで枠をし設た炉址が置かれている。この炉址の周囲の覆土からは多量の貨幣が出土した。床面下の土は暗褐色を呈し、柔らかくしまりはない。

Ⅲ区の中央に南北にやや長い、3.8m×5mの隅丸長方形の平面プランが確認された。掘り下げた結果、上層はバラス混じりの暗褐色土で、1号建物址の礎石や炉址の下方に入り込んでおり、1号建物址より古い遺構と判明した。この遺構は、たちあがりから床にかけて非常に堅くしまっており、直ご家の一画をなす厩址とも推定される。また、底面から出土した2枚の新寛永通宝銅一文銭（No54、No55）から、上位の礎石を持つ1号建物址とは時期的にそれほど離れていない建物址と確認できた。しかし、この建物に伴なう礎石や柱穴については発掘期間の関係で追求することができなかった。

Ⅳ区の常居は東西9.0m、南北4.7mの規模である。Ⅲ区と同様な炉址があり、周囲の床面

上から10枚の貨幣が出土した。

Ⅴ区の座敷は東西5.0ｍ、南北5.4ｍである。桁行の１間はⅢ、Ⅳ区では約2.4ｍを測るのに対し、ここでは1.9ｍと短くなっている。南辺半間の梁行礎石は一部欠損している。

ｂ．遺　　物

１号建物址区域から出土した貨幣は、江戸時代初期に鋳造されたいわゆる古寛永通宝から現代も通用している五円、十円硬貨まであり、いずれも同一面から検出されている。総数は64枚を数え、１号建物址にともなう貨幣は62枚（２枚は１号建物址より旧い直ご家厩址内出土）である。そのうち主に江戸時代に流通した寛永通宝などの貨幣は21枚で全体の34％を占めている。次いで明治時代以後昭和23年まで鋳造された貨幣は19枚で31％、現行貨幣は22枚で約35％となり、３期ともほぼ同じ割合を示す。

１号建物址はダムによる水没補償によって近年こわされたので、使用下限は最近の建造物であるが、創建の上限は江戸時代の後期または明治時代初期にさかのぼるものと考えられる。

ｃ．墨 縄 痕（すみなわこん）

１号建物址に伴う礎石のうち、五箇所の礎石上面から十字状の墨書が発見された。(図版２のｂ～ｆの礎石上面)。これは創建当初上屋のスパンを画する時使用された墨縄の痕跡かと思われる。各スパンは以下のようになる。

ｂ－ｃ間＝ 3.30m　　ｃ－ｆ間＝ 5.71ｍ

ｄ－ｅ間＝ 3.81ｍ　　ｅ－ｆ間＝ 1.90ｍ

ｂ－ｃ間はⅣ区とⅤ区にまたがっており、異なるスパンが使用されているので除外する。他のｃ－ｆ、ｄ－ｅ、ｅ－ｆ間は１間から３間を指し、その１間の平均値は1.903ｍ（１間＝６尺の場合、１尺は0.317ｍ）となる。

(2)　２号建物址

２号建物址の相対座標点０は以下のようになる。

Ｘ＝－37,180.00ｍ

Ｙ＝＋14,120.00ｍ

ａ．遺　　構

母屋の長辺はＮ－12°50′－Ｅとわずかに東に傾いてはいるが、当建物址は南面した曲り家の礎石建物址である。全体は東西18.2ｍ、南北16.7ｍで１号建物址とほぼ同規模である。礎石は１号建物址に比べやや小ぶりである。ここも各区ごとに以下のように説明する。

Ⅰ区（厩）は東西5.8ｍ、南北5.8ｍと正方形に礎石が回り、その内側に掘り込みがある。深さ30cmを測り、平面は隅丸方形で皿状に窪み、非常に固くしまった面となっている。南に礎石の欠損した所が見られ、馬の出入口と考えられる。また北の厩の外側に石臼の破片が土溜め石と混って発見された。

Ⅱ区は東西4.8ｍ、南北5.8ｍで非常に堅い床をもつ土間（内庭）である。北東の隅に2×1ｍの東西に長い区域が北壁に接し、土間をやや掘り窪めてある。東西の壁は板でかこい、内はソフトな暗褐色土である。

Ⅲ区は東西7.6ｍ、南北5.8ｍの規模をもつ。また同区中央やや南よりに、凝灰岩切石片（炉址残がい）が多数散在し貨幣3枚もそれに混って出土した。ダム水没補償後、家屋の取りこわしの際2つの炉もこわされたと思われる。

Ⅳ区は東北9.6ｍ、南北4.8ｍ、Ⅴ区は東西9.6ｍ、南北6.1ｍ。

Ⅴ区の南礎石群を中心に黄褐色土の壁土が礎石をおおっており、表土からは礎石を発見する事ができなかった。またⅤ区の東にも、壁土崩壊土にまざってカーボン焼土が多量に混入し、さらに灰白色の石灰も含まれていた。

b．遺　物

貨幣についてはNo1新寛永銭がⅣ区床直から出土した以外No2－5はⅢ区出土である。No3の一銭以外はすべて江戸時代流通した寛永通宝銭である。1号建物址出土貨幣に比べ極端にその数が少ない。

(3) 墓　址

墓址2基（図版3の下段）の相対座標点0は以下のようになる。

X＝－37,164.00m

Y＝＋14,120.00m

a．1号墓址

2号建物址の北西に接して、東西に3基（実際は4基）つらなって近世墓址が発見された。同所はダム水没補償後家屋移転に際し、墓も掘って人骨などを移転したとの事を地主関係者から聞いた。結局それの取り残しで、忘れさられた墓を発掘調査した事になる。

調査期間の関係で、精査できなかったので、その概略を記述する。1号墓址は径0.8ｍの不整円形を呈している。北東、北西それぞれの隅から棺の隅金具（鉄製）が出土した。棺は方形であり、墓の底面プランも方形に近い事から、同墓のプランは検出時において不整円形を呈してはいたが、元来墓の掘り方は方形を呈していたと思われる。覆土は黄橙色土の大ブロックを

多量に含む暗褐色土で、さらさらした土である。骨はもろく、土壙の南から出土した両骨盤、右の大腿骨、中央から出土した腰椎の一部が北前方にころげ落ちたように発見された。頭骨などの輪郭はつかむ事はできた。

副葬品としては、新寛永銅一文銭１枚と、キセルの吸口と雁首１対が覆土中より発見された。

b．２号墓址

２号墓はプラン確認時点では一個の方形土壙と思われ掘下げ開始したが、途中から東西に分けられ、２個の墓址になったが共に１号墓と同規模である。西を２－１号墓址、東を２－２号墓址とする。

２－１号墓址の覆土は黄褐色土大ブロック中に地山小角礫が多量に入り、この覆土が東接した２－２号墓址に深く入り込み、壁の立ち上がりが２－２墓址の覆土を切っているので、２－１号墓址の方が新しい。骨片はまったく発見されず、副葬品としては、新寛永鉄一文銭が３枚と新寛永銅一文銭が４枚、覆土下層より出土した。角釘片は多数出土している。

２－２号墓址はソフトな黄褐色土で地山小角礫はほとんど混っていない。頭骨の一部が発見されたが土と同化が進んでいるため取り上げと同時に風化した。副葬品はない。

c．３号墓址

３号墓址も１号墓址とほぼ同規模であり覆土も同様でさらさらしている。部位不明な小骨片と、新寛永鉄一文銭５枚と、新寛永銅一文銭３枚が覆土中より見つかった。

(4)　３号建物址

３号建物址（曲り家）は、２号建物址の南約70mの同一テラスにあり相対座標点０は基準点－１から南41.91mである。

X＝－37,248.51m

Y＝＋14,137.41m

ただ同建物址は、ダム水没補償後の家屋解体時に、重機による攪乱で礎石の大半が移動し、平面復元はほとんど不可能であるが、厩の一部が保存されていたので調査の対象とした。礎石の大きさは１号建物址と同じであるが、ひとかかえもする礎石も発見されている。全体の規模は東西19.2m、南北15.4mを測るが、西と南の推定礎石列はまだ移動の可能性はある。

貨幣は表採、攪乱出土も含めて16枚出土し、江戸時代（近世）流通した貨幣は７枚で44％、近代貨幣は５枚で31％、１円～10円玉などの現行貨幣は４枚出土で25％で、寛永通宝などの近世貨幣がやや多い。

(5) 4号建物址

当建物址の相対座標点0は以下のようになる。

X＝－37,200.00m

Y＝＋14,183.00m

1号建物址の東に位置し、遺跡内では東端で、最もレベルの低い矢櫃川ぞいの位置にある。建物内の北東に厩、南東に土間を配する直ご家で、東西に長い建物である。長軸はE－4°40′－Sである。

I区（厩）は東西3.7m、南北3.9mで東に馬の出入口があり、その南のII区（土間）は東西4.8m、南北3.9mで、I区の礎石内は皿状に窪んで非常に堅い床面をもっているが、II区はさらに堅さを増している。III区（台所）は中央やや東よりに炉址があり、やはり他の民家と同様に炉址周辺に貨幣が散っている。V区（座敷）は東西4.8m、南北7.8mで西の梁行礎石はやや移動している。

時間の関係で調査できなかったが各礎石の下に平面が礎石よりやや大きく、深さ40～50cmの柱穴状の穴が発見され、覆土は大きな方では拳大石を含む砂利で、いわゆる「どうつき」がなされている。

出土貨幣は、近代貨幣4枚で19％、現行貨幣17枚で81％、主に炉址の周辺で発見された。江戸時代流通した寛永通宝などのいわゆる穴あき銭は1枚も出土しなかった。

2．建物址に先行する遺物

北に延びた西の丘陵には、縄文前期から中期初頭にかけた大遺跡が所在するが、当遺跡では、調査期間を通して縄文土器や石器はほとんど発見されなかった。しかしそれでも2×2mのグリット掘りのA、Bから繊維を含んだ土器の細片、曲り家の表土中から縄文式土器の細片や剝片が数点出土した。

V．ま　と　め

今回は特異の曲り家3軒と直ご家1軒が調査できた。

しかし特異とはいっても岩手県内には多々あり、数年前まで使用していたので平凡な曲り家それではあるが、出土した貨幣などからこれらの民家の築造年代は50～100年前へさかのぼることはできそうだし、1号建物址（曲り家）のようにそれより旧い厩を調査でき、土台をのせた礎石上に墨縄で書かれた印も発見できた。これは創建当初の造営尺を考える上では重要な資料となる。

出土遺物としては石製品、木、銅、鉄、陶磁器などを出土したが、現在ほとんど使用されてない石臼、キセル、貨幣を報告した。　（文責・本沢慎輔）

町場II遺跡　1号建物址

番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
1	十銭白銅貨	近代	大正10年	1921	2.20	3.67	円	171.964	III		
2	桐一銭銅貨	〃	〃	〃	2.30	3.73		171.945	〃		
3	一円アルミ貨	現代	昭和40年	1965	2.00	1.00		171.913	〃		
4	新寛永銅一文銭	近世	元文3年	1738	2.30	2.37	方	171.905	〃		秋田鋳
5	竜一銭銅貨	近代	明治10年	1877	2.80	7.12		171.905	〃		
6	半銭銅貨	〃	明治15年	1882	2.20	3.50		171.904	〃		
7	一円アルミ貨	現代	昭和39年	1964	2.00	1.00		171.953	〃		
8	十銭白銅貨	近代	大正10年	1921	2.20	3.68	円	171.953	〃		
9	古寛永銭	近世			2.50	3.50	方	171.924	〃		
10	〃	〃			2.40	3.41	〃	172.035	V		
11	新寛永鉄一文銭	〃			2.20	2.45	〃	172.036	〃		
12	古寛永銭	〃			2.48	1.67	〃	172.036	〃	半われ、半欠	
13	新寛永鉄一文銭	〃			2.30	2.13	〃	172.028	IV		
14	〃	〃			2.20	1.95	〃	172.027	〃		
15	新寛永銅一文銭	〃	寛保元年	1741	2.21	2.19	〃	172.027	〃		背元
16	新寛永鉄一文銭	〃			2.32	2.94	〃	172.011	〃		
17	新寛永銅一文銭	〃			2.22	2.21	〃	172.000	〃		
18	文久永宝銭	〃	文久3年	1863	2.70	3.86	〃	172.017	〃		草文
19	一円アルミ貨	現代	昭和38年	1963	2.00	0.98		172.017	〃		
20	〃	〃	昭和36年	1961	2.00	1.00		171.916	III		
21	新寛永銅一文銭	近世			2.40	2.66	方	171.860	〃		
22	一円アルミ貨	現代	昭和39年	1964	2.00	1.00		171.862	〃		
23	新寛永銅一文銭	近世	元文3年	1738	2.30	2.77	方	171.862	〃		秋田鋳
24	旧十円銅貨	現代	昭和27年	1952	2.30	4.39		171.897	〃		
25	五厘銅貨	近代	大正7年	1918	1.87	2.10		171.850	〃		
26	一円アルミ貨	現代	昭和45年	1970	2.00	1.00		171.850	〃		
27	一円黄銅貨	〃	昭和24年	1949	1.95	2.56		171.643	〃		
28	竜一銭銅貨	近代	明治18年	1885	2.75	6.96		171.643	〃		
29	一円アルミ貨	現代	昭和39年	1964	2.00	0.98		171.834	〃		
30	〃	〃	昭和31年	1956	2.00	0.99		171.834	〃		
31	大型五銭白銅貨	近代	大正9年	1920	2.05	4.23	円	171.844	〃		
32	小型五十銭黄銅貨	〃	昭和23年	1948	1.85	1.77		171.843	〃		
33	菊五銭白銅貨	〃	明治24年	1891	2.05	4.60		171.890	〃		
34	旧五円黄銅貨	現代	昭和25年	1950	2.17	3.66	円	171.854	〃		
35	一円アルミ貨	〃	昭和39年	1964	2.00	1.00		171.577	〃		
36	新寛永銅一文銭	近世			2.30	2.84	方	171.934	〃		
37	一円アルミ貨	現代	昭和41年	1966	2.00	0.99		171.907	〃		
38	菊十銭アルミ貨	近代	昭和16年	1941	2.18	1.20		171.907	〃		
39	桐一銭銅貨	〃	大正11年	1922	2.30	3.70		171.860	〃		
40	無孔五円黄銅貨	現代	昭和24年	1949	2.15	3.73		171.842	〃		
41	五銭アルミ貨	近代	昭和16年	1941	1.85	1.19		171.862	〃		
42	一円アルミ貨	現代	昭和39年	1964	2.00	1.00		171.862	〃		
43	新寛永鉄四文銭	近世			2.80	5.39	方	172.413	IV		
44	新寛永鉄一文銭	〃			2.70	4.70	〃	171.953	〃		
45	新寛永銅四文銭	〃			2.80	5.31	〃	171.925	V		
46	古寛永銭	〃			2.38	3.00	〃	171.928	III		
47	一円アルミ貨	現代	昭和36年	1961	2.00	0.98		171.510	I		
48	桐一銭銅貨	近代	大正10年	1921	2.25	3.75			III		
49	竜一銭銅貨	〃	明治19年	1886	2.70	6.53			IV		
50	新寛永鉄四文銭	近世			2.90	6.25	方		〃		
51	新寛永鉄一文銭	〃			2.25	2.40	〃		〃		
52	桐一銭銅貨	近代	大正9年	1920	2.30	3.76			〃		

番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
53	新寛永鉄四文銭	近世			2.90	5.85	方		不明		
54	新寛永銅一文銭	〃			2.30	2.68	〃		Ⅲ		旧馬屋
55	新寛永銅一文銭	〃			2.25	2.43	〃		〃		背「元」旧馬屋
56	新十円銅貨	現代	昭和41年	1966	2.30	4.50			不明		
57	五厘銅貨	近代	大正5年	1916	1.85	2.06			〃		
58	烏一銭アルミ貨	〃	昭和15年	1940	1.74	0.85			〃		
59	旧十円銅貨	現代	昭和27年	1952	2.30	3.98			〃		
60	旧五円黄銅貨	〃	昭和25年	1950	2.20	3.43	方		〃		
61	新十円銅貨	〃	昭和41年	1966	2.30	4.46			〃		
62	小型五十銭黄銅貨	近代	昭和23年	1948	1.86	2.70			〃		
63	旧十円銅貨	現代	昭和27年	1952	2.30	4.20			〃		
64	〃	〃	〃	〃	2.30	4.46			〃		

町場II遺跡　2号建物址

番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
1	新寛永鉄四文銭	近世			2.85	5.54	方	床直	Ⅳ		
2	新寛永銅一文銭	〃	寛文2年	1668	2.49	3.00	〃	〃	Ⅲ		背文
3	烏一銭アルミ貨	近代	昭和13年	1938	1.71	0.86		〃	〃		
4	新寛永銅一文銭	近世	寛文2年	1668	2.25	2.01	方	〃	〃		背文
5	〃	〃			2.40	1.96	〃	〃	〃		

町場II遺跡　3号建物址

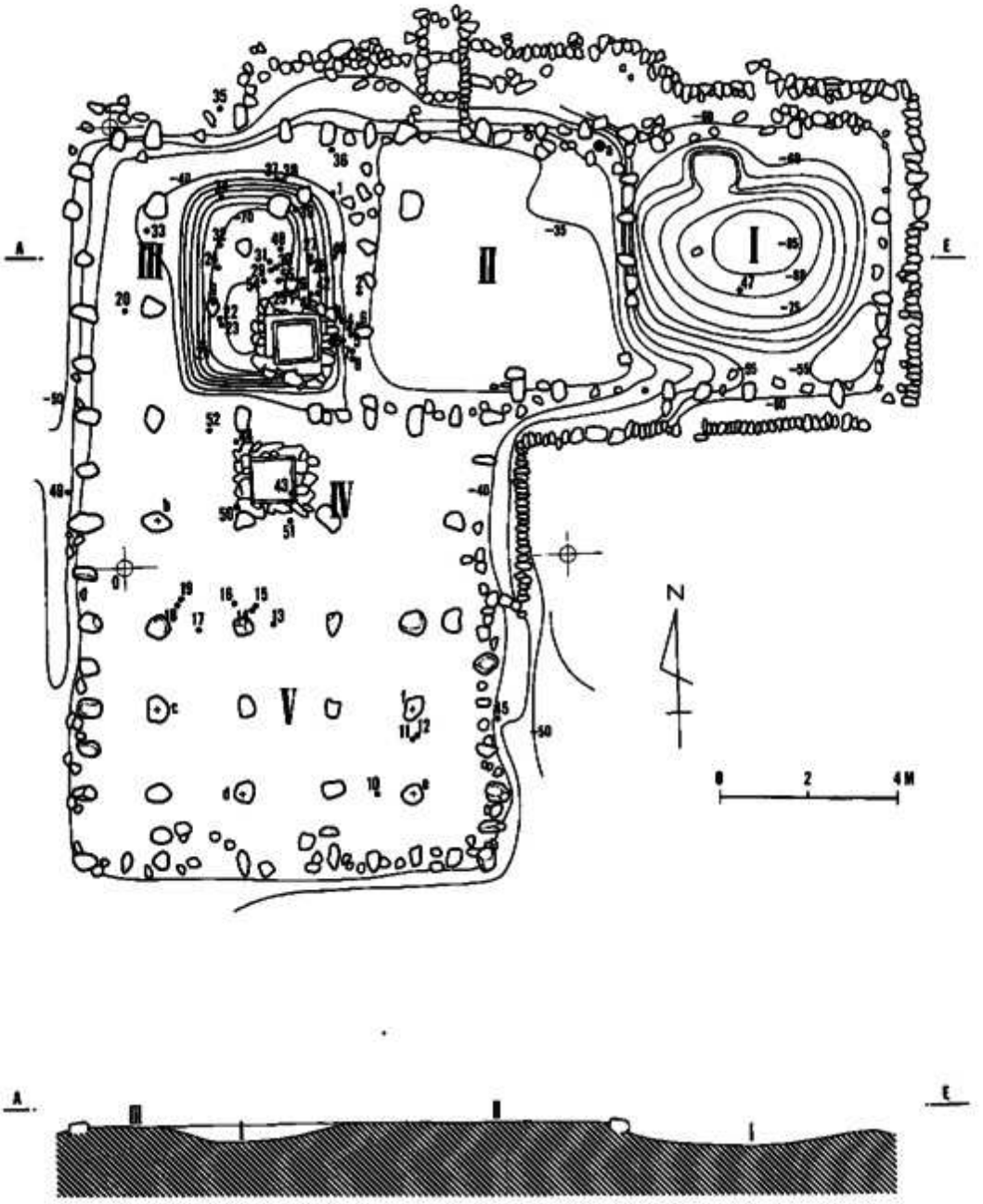
番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
1	一円アルミ貨	現代	昭和40年	1965	2.00	0.96		不明	不明		
2	〃	〃	昭和31年	1956	2.00	0.99		〃	〃		
3	〃	〃	昭和39年	1964	2.00	1.00		〃	〃		
4	富士一銭アルミ貨	近代	昭和16年	1941	1.61	0.63		〃	〃		
5	竜一銭銅貨	〃	明治18年	1885	2.70	6.35		〃	〃		
6	新寛永銅一文銭	近世			2.30	2.43	方	〃	〃		
7	〃	〃			2.40	2.30	〃	〃	〃		
8	竜一銭銅貨	近代	明治18年	1885	2.78	6.13		〃	〃		
9	〃	〃	明治19年	1886	2.80	6.80		〃	〃		
10	旧十円銅貨	現代	昭和28年	1953	2.33	4.50		〃	〃		
11	新寛永銅四文銭	近世			2.80	4.40	方	〃	〃		
12	新寛永銅一文銭	〃			2.35	3.07	〃	〃	〃		
13	古寛永銭	〃			2.36	3.65	〃	〃	〃		
14	新寛永銅一文銭	〃			2.30	2.75	〃	〃	〃		
15	桐一銭銅貨	近代	大正11年	1922	2.30	3.68		〃	〃		
16	文久永宝銭	近世			2.70	3.73	方	〃	〃		草文

町場II遺跡　4号建物址

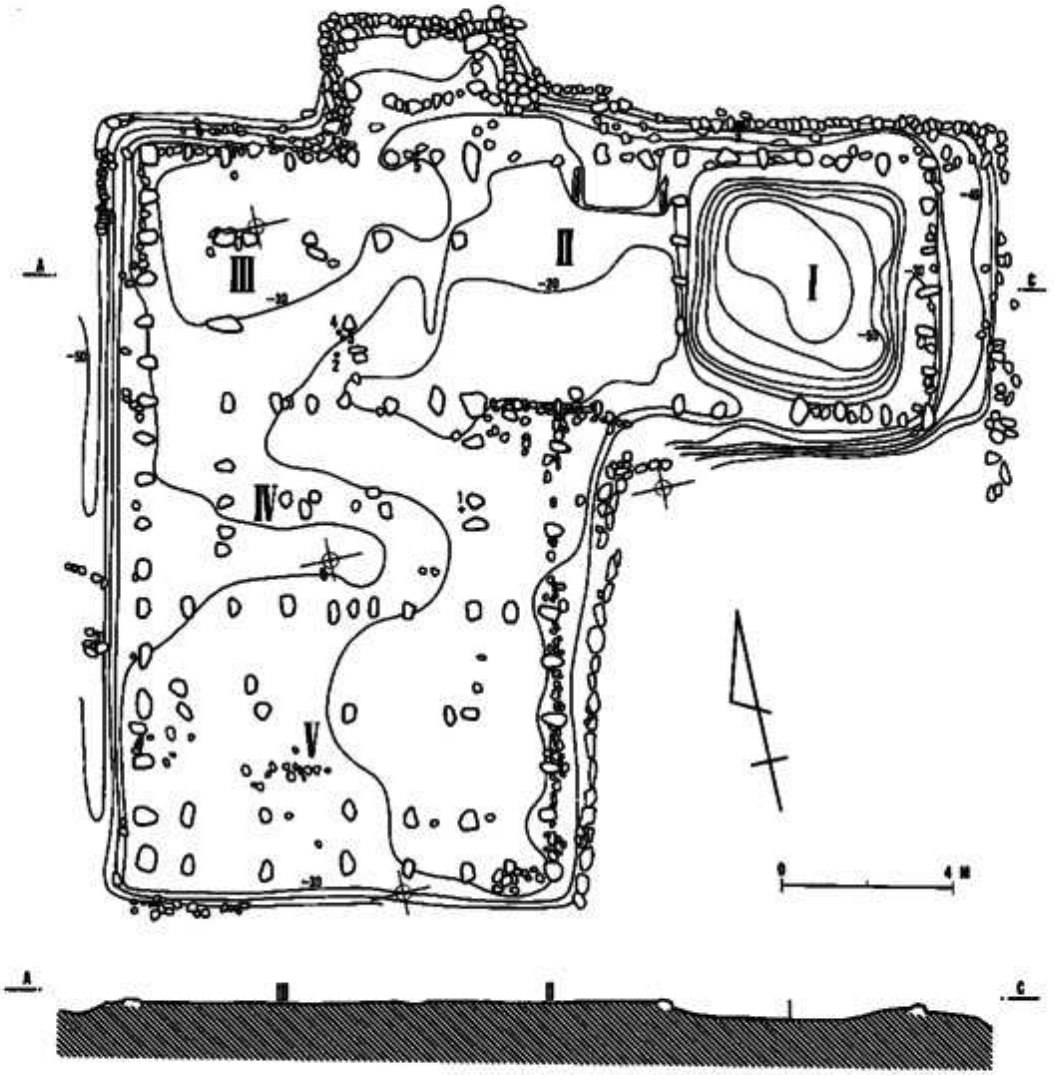
番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
1	一円アルミ貨	現代	昭和39年	1964	2.00	0.96		不明	III		
2	〃	〃	昭和42年	1967	2.00	0.96		〃	〃		
3	旧五円黄銅貨	〃	昭和25年	1950	2.20	3.67	円	〃	〃		
4	烏一銭アルミ貨	近代	昭和13年	1938	1.73	0.58		〃	〃		
5	一円アルミ貨	現代	昭和40年	1965	2.00	0.98		〃	〃		
6	新十円銅貨	〃	昭和41年	1966	2.30	4.33		〃	〃		
7	十銭白銅貨	近代	大正14年	1925	2.20	3.70	円	〃	〃		
8	新十円銅貨	現代	昭和36年	1961	2.34	4.40		〃	〃		
9	富士一銭アルミ貨	近代	昭和17年	1942	1.60	0.64		〃	〃		
10	〃	〃	〃	〃	1.60	0.64		〃	〃		
11	一円アルミ貨	現代	昭和41年	1966	2.00	0.96		〃	〃		
12	新五円黄銅貨	〃	昭和38年	1963	2.20	3.55	円	〃	〃		
13	旧十円銅貨	〃	昭和28年	1953	2.33	4.38		〃	不明		
14	〃	〃	昭和29年	1954	2.33	4.42		〃	〃		
15	新十円銅貨	〃	昭和35年	1960	2.33	4.50		〃	〃		
16	新五円黄銅貨	〃	昭和39年	1964	2.19	3.62	円	〃	〃		
17	一円アルミ貨	〃	昭和41年	1966	2.00	0.92		〃	〃		
18	〃	〃	昭和39年	1964	2.00	0.99		〃	〃		
19	〃	〃	昭和40年	1965	2.00	0.97		〃	〃		
20	新五円黄銅貨	〃	昭和39年	1964	2.20	3.35	円	〃	〃		
21	一円アルミ貨	〃	昭和40年	1965	2.00	0.97		〃	〃		

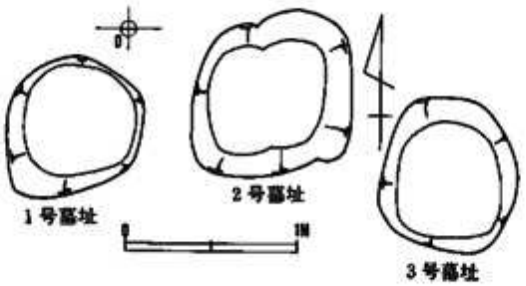
町場II遺跡　墓址

番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
	1号墓址										
	新寛永銅一文銭	近世			2.30	2.20	方	不明	不明		
	2号墓址										
	新寛永鉄一文銭	近世			2.50	1.90	方	不明	不明		
	〃	〃			2.50	3.05	〃	〃	〃		
	〃	〃			2.40	2.80	〃	〃	〃		
	新寛永銅一文銭	〃			2.30	2.49	〃	〃	〃		錆秋田
	〃	〃			2.30	2.80	〃	〃	〃		
	〃	〃			2.20	2.00	〃	〃	〃		
	〃	〃			2.30	1.95	〃	〃	〃		
	3号墓址										
	新寛永鉄一文銭	近世				1.95	方	不明	不明		
	〃	〃				2.20	〃	〃	〃		
	〃	〃				2.20	〃	〃	〃		
	〃	〃				3.15	〃	〃	〃		
	〃	〃			2.70	5.10	〃	〃	〃		
	新寛永銅一文銭	〃			2.40	2.63	〃	〃	〃		
	〃	〃			2.28	2.55	〃	〃	〃		
	〃	〃			2.30	2.70	〃	〃	〃		

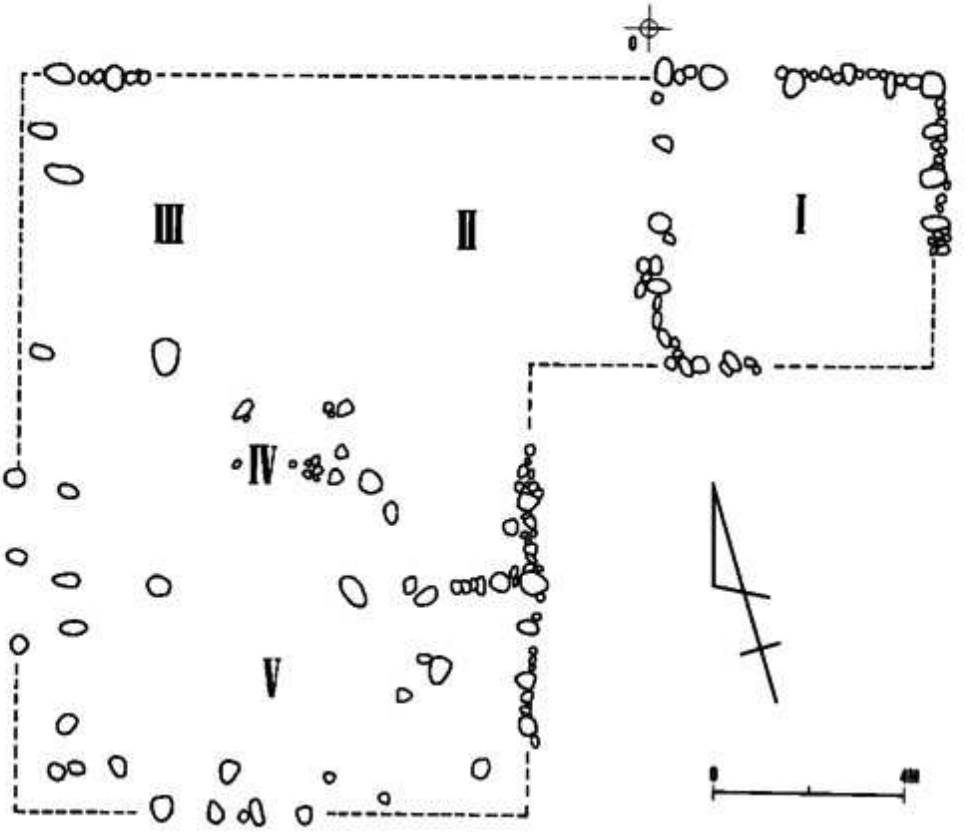


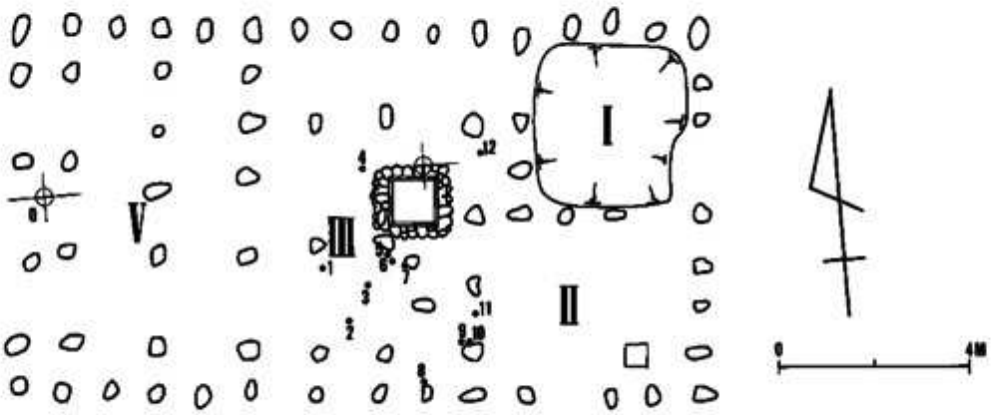
図版２　１号建物址



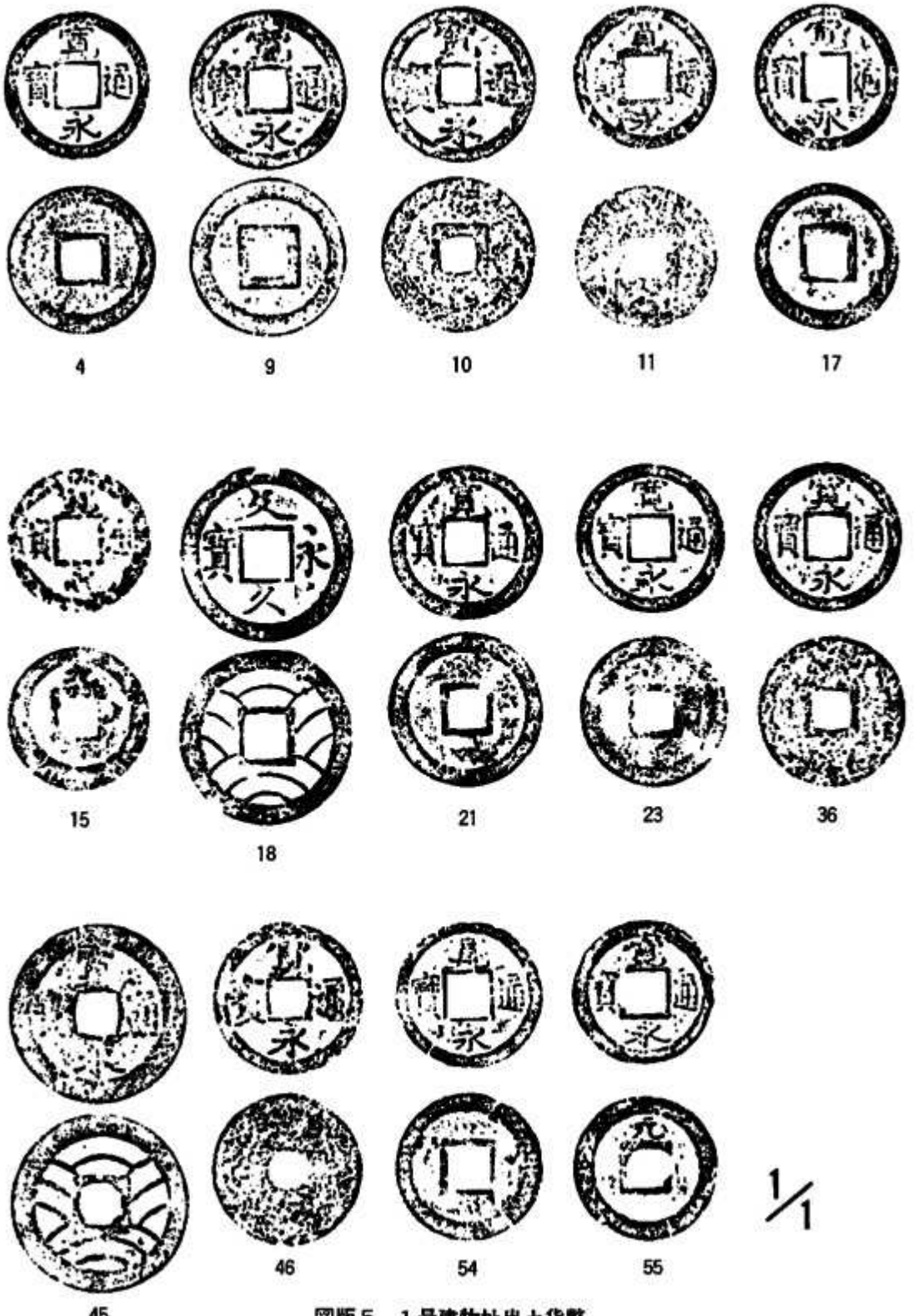


図版３　２号建物址(上)墓址(下)

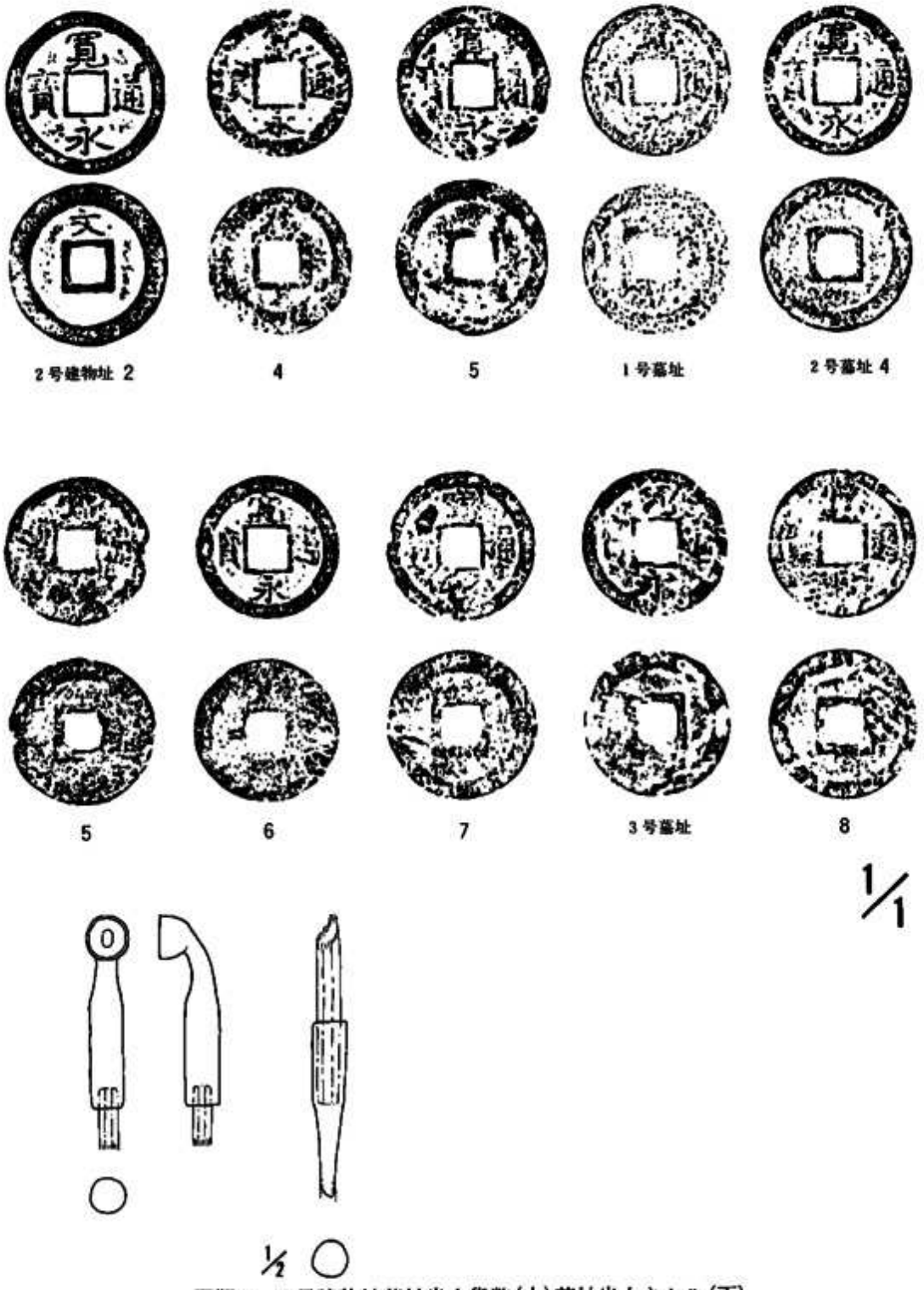




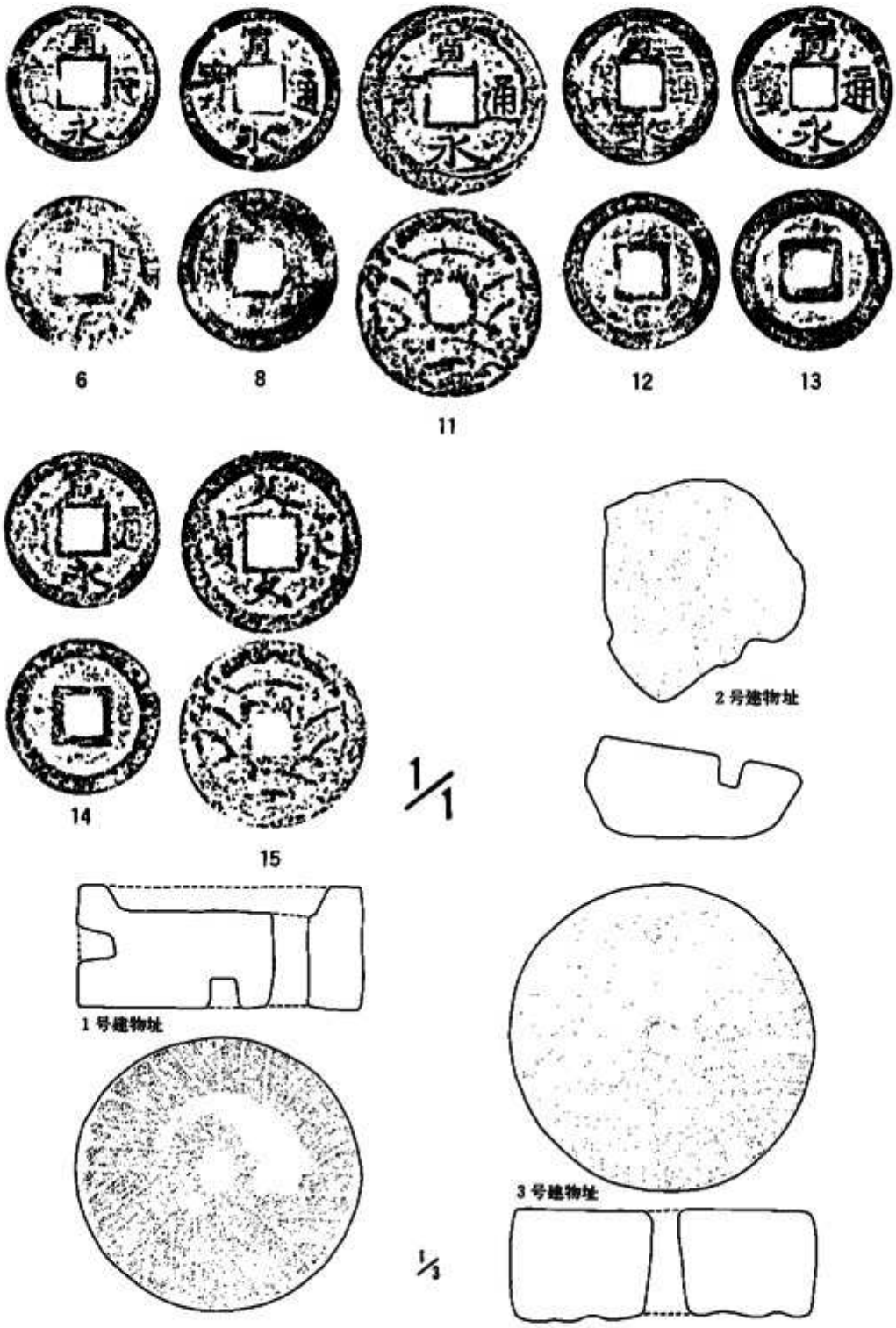
図版４　３号建物址（上）４号建物址（下）



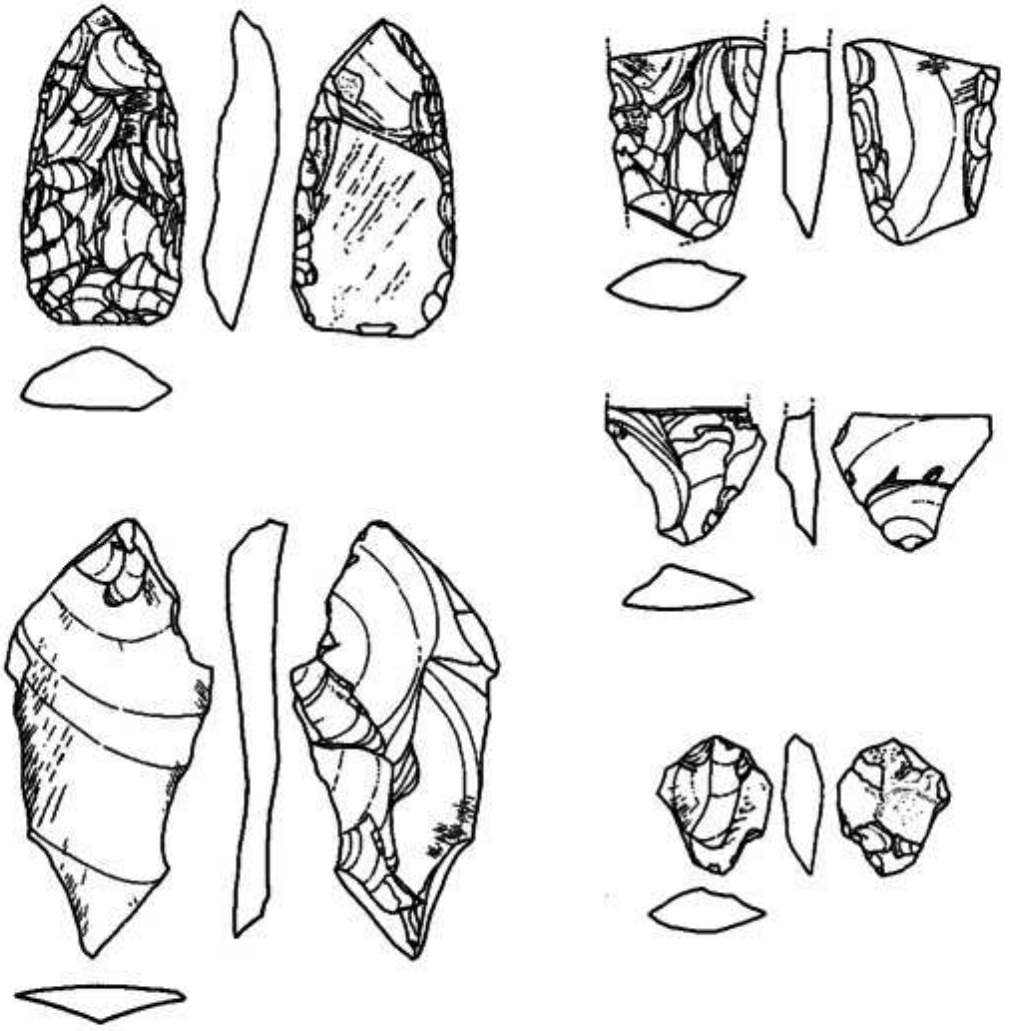
図版５　１号建物址出土貨幣



図版6　2号建物址墓址出土貨幣(上)墓址出土キセル(下)



図版7　3号建物址出土貨幣(上)建物址出土石臼(下)



図版８　遺跡内出土の石器

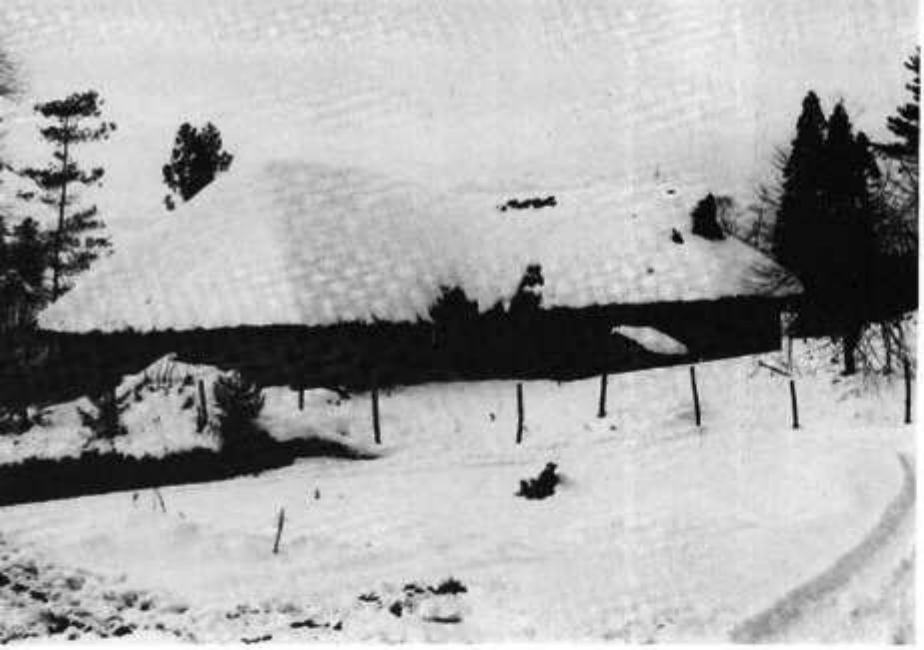
写真図版１　１号建物址

2 号建物址

2 号建物址

4 号建物址

写真図版 2



一般曲り家遠景

御所ダム完成
後の遺跡遠景

1号建物址 4

9

10

11

17

15

18

21

23

36

45

46

54

55

2号建物址 2

4

5

1号墓址

2号墓址 4

5

写真図版４　１号・２号建物址、墓址出土貨幣

2号建物址 6

7

3号墓址 7

8

3号墓址 6

7

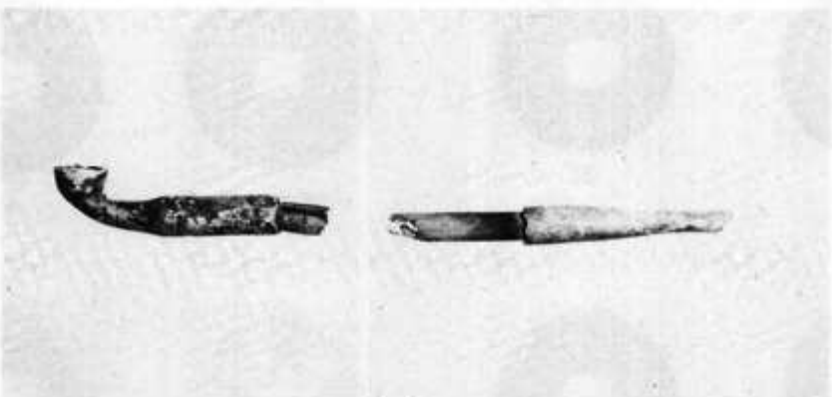
11

12

13

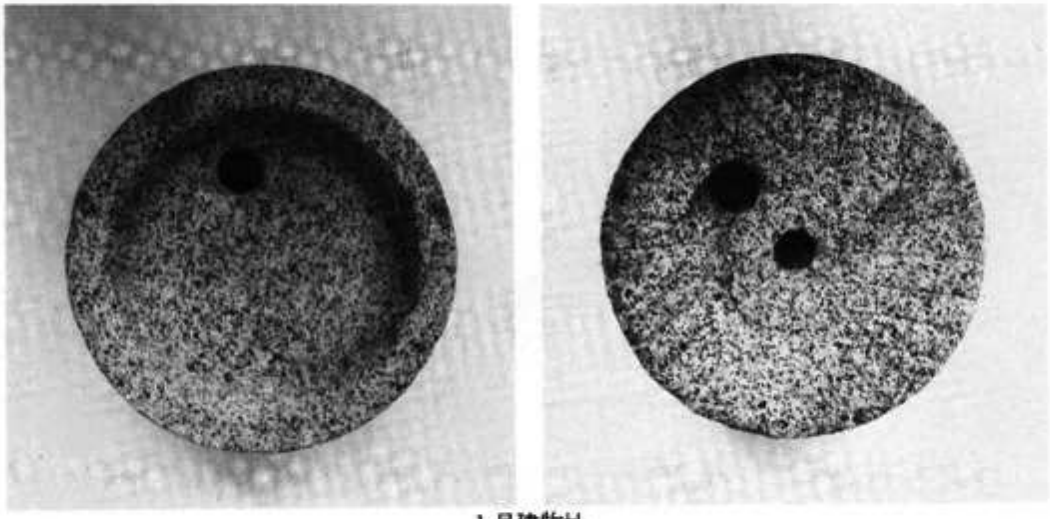
14

16

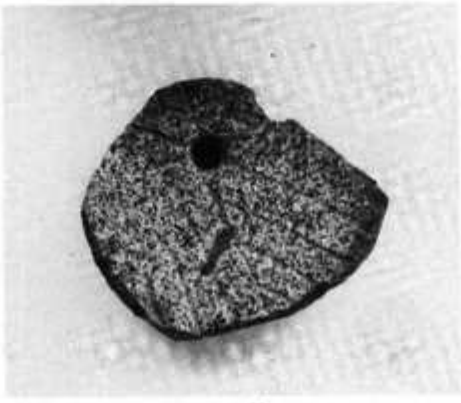


1号墓址出土キセル

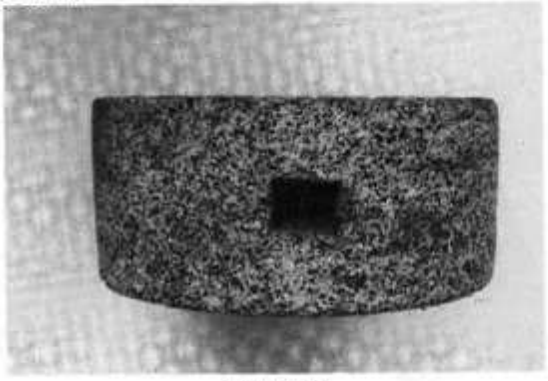
写真図版5　墓址出土貨幣・キセル



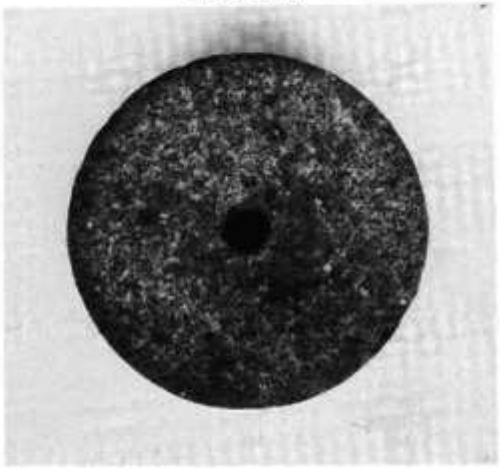
1 号建物址

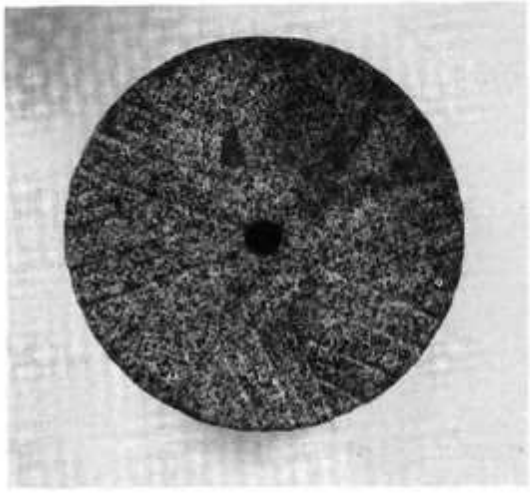


2 号建物址

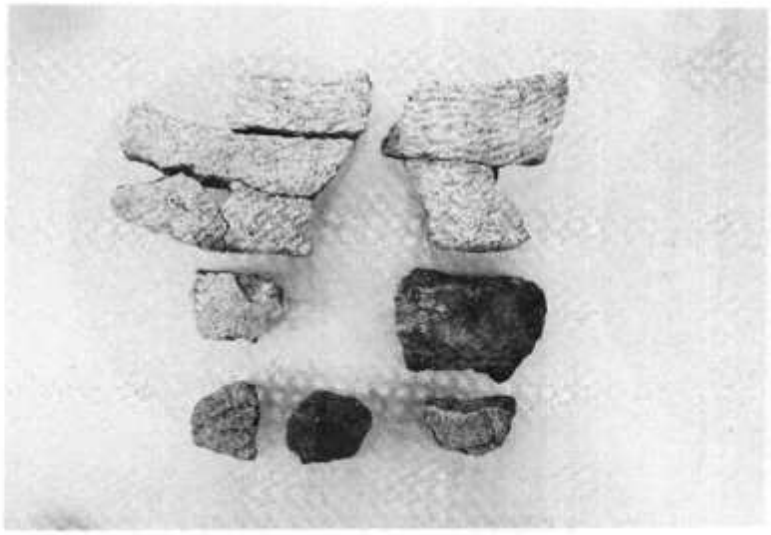


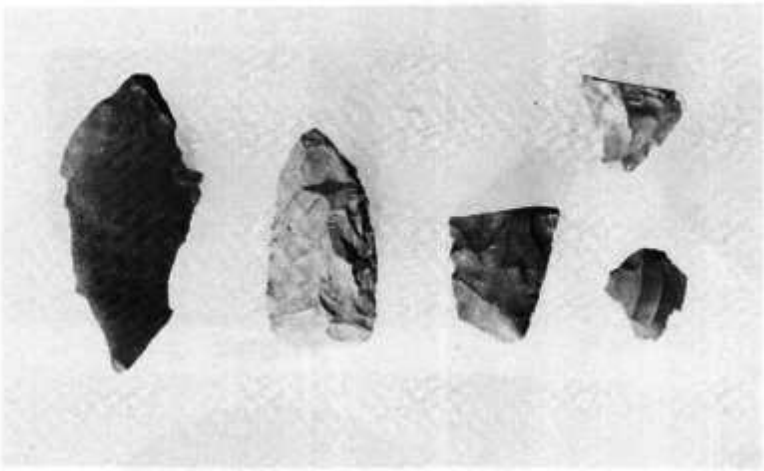
3 号建物址

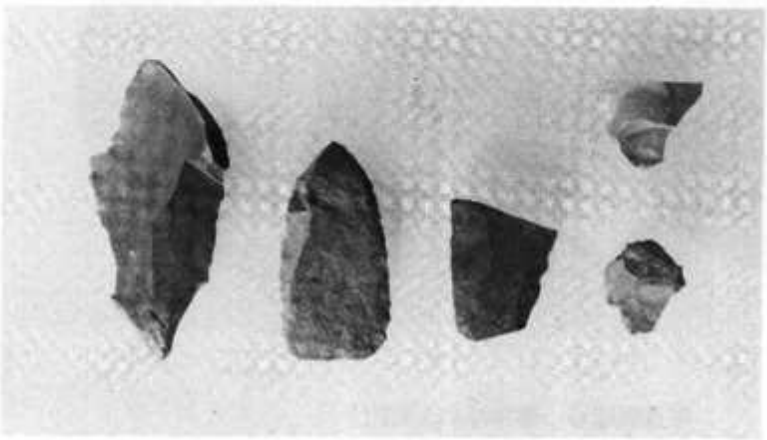




写真図版６　建物址出土石臼



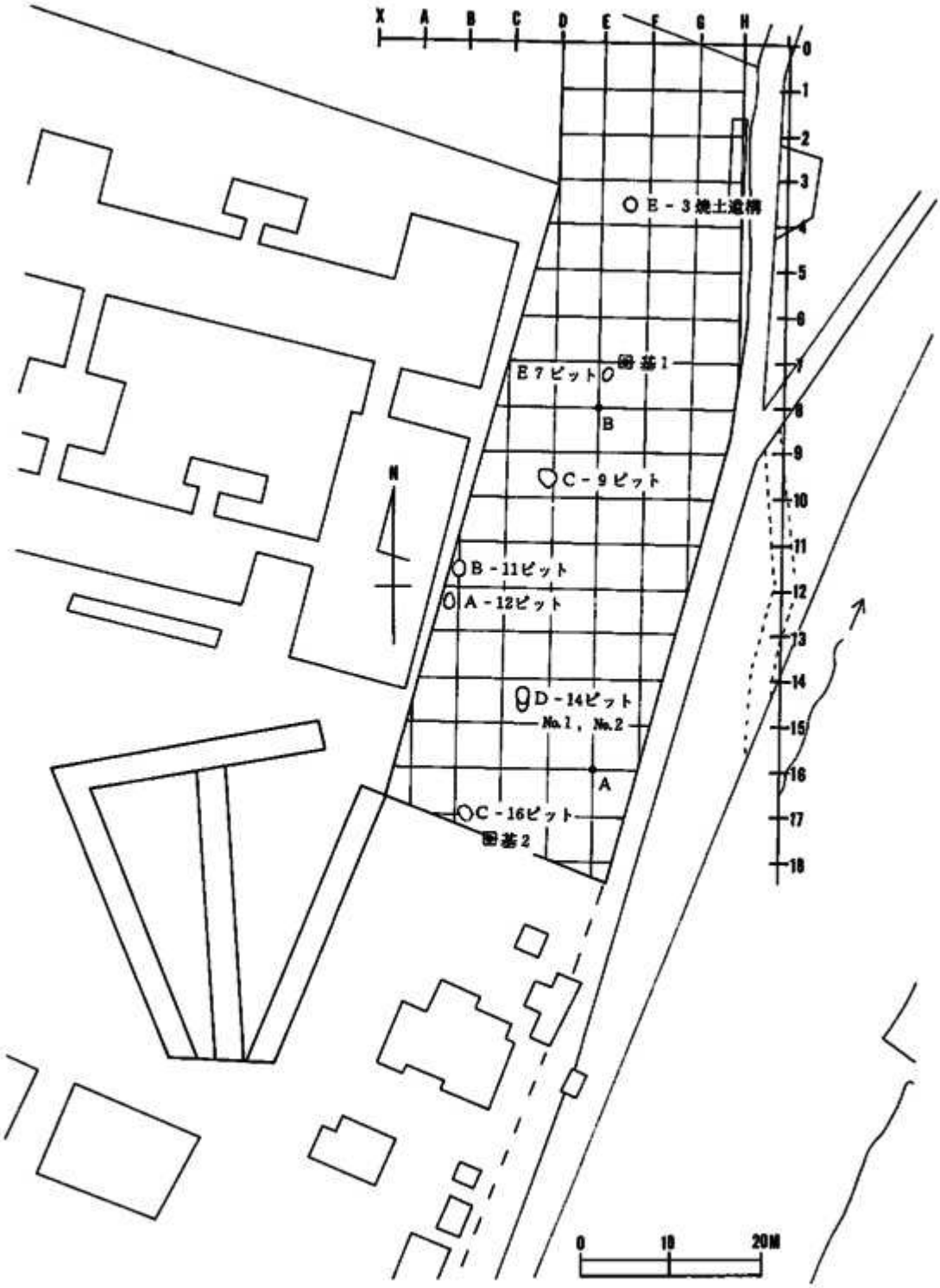




写真図版７　建物址に先行する遺物

町 場 Ⅲ 遺 跡

図版1　遺跡附近の地形図（1／2500）



図版２　町場Ⅲ、グリット・遺構配置図

Ⅰ．遺跡の位置と環境

町場－Ⅲ遺跡は、岩手県岩手郡雫石町西安庭第25地割字町場77の１地内にある。盛岡、秋田間を結ぶ国道46号線の尾入十文字から県道盛岡、鶯宿線へ入り、繋温泉よりさらに約2.5km南西に位置している。そこは国鉄田沢湖線雫石駅より南東約3.2kmの地点でもあり、雫石町の南部に位置する。

遺跡の北方約800mには雫石川、矢櫃川、南川の合流点があり、合流点の北方には岩手山の裾野を形成するなだらかな傾斜面を有する台地が広がり、遺跡の南側には西方より男助山、女助山、須賀倉山、滝沢山、高倉山、大石山、毒ケ森、箱ケ森等の標高500m以上の山々が連なっている。遺跡の東側を北流する矢櫃川は須賀倉山付近を源流として流れ、遺跡はこの矢櫃川に形成された河岸段丘上にある。

遺跡は標高182m前後の所にあり、南から北にかけてゆるやかに傾斜している。東側を流れる矢櫃川との比高差は17m前後で川岸は急峻な崖となっている。西側は緩やかな傾斜をもち、湿地をはさんで、パイロット・ファームとして開拓された丘陵台地状の洪積世段丘へと続いている。

遺跡及び遺跡の周辺は、御所ダム工事関連開発が開始されるまでは宅地、畑地、学校用地などに利用されていたが、調査開始時には一部に畑地が残されていた以外は砂利採取等が行なわれ、旧地形とは様相を異にしていた。周辺の遺跡としては矢櫃川をはさんで対岸に広瀬Ⅰ、Ⅱ遺跡があり、本遺跡の北方には町場Ⅰ、Ⅱ遺跡、洪積世段丘上に中世館址と縄文時代との複合遺跡である田屋館跡があり、雫石川の対岸には桜松遺跡などがある。

II. 調査方法と経過

調査は、1978年（1次）、79年（2次）の2カ年に亘って行なわれた。1次調査は旧安庭小学校の校庭部分1,000㎡を対象とし、2次調査は1次調査区の東側畑地と宅地部分1,700㎡が対象であった。

第1次調査の主たる方法はトレンチによる発掘調査であったが、2調査ではグリットを設定して行なった。グリットの設定にあたっては調査区の南側と北側に任意の2点を設けた。2点間の距離は53.29mで北側の杭を基1（X＝−37,664.00m　Y＝+14,100.65m）、南側の杭を基2（X＝−37,714.81m Y＝+14,084.59m）とし、その2点よりさらにA点（X＝−37,110.00m　Y＝+14,100.00m）とB点（X＝−37,710.00m　Y＝+14,100.00m）を設け、A・B2点を利用して5m×5mの相対座標によるメッシュを調査区全域をカバーできるよう設定した。グリットの名称は南北軸に北からアラビア数字で1から17まで、東西軸は西よりアルファベットでAからGまでそれぞれ命名し、各グリットの呼称は北西隅の東西軸、南北軸の名称を組み合せて、E−1グリット・E−2グリットとした。遺構名も遺構北西隅の位置するグリット名で呼称しB−11ピットとし、同一グリットで切り合い関係にある遺構は、新旧関係からさらにNo1、No2等を付け加えた。

調査期間は1次調査では78年10月2日より約1カ月間の調査であり、また、校庭であることから整地されており、機械力によるトレンチを入れ遺構の検出に努めた。調査の結果、遺構、遺物とも検出されなかった。校庭は遺跡周辺に見られる黒色土層下の砂礫層を主として整地したものであり、上部の黒色土は削除されたものと思われる。

2次調査は79年7月2日から約2カ月間の調査である。発掘は土層観察用の深掘りを4カ所に入れて調査区の土層を観察することにより開始した。その結果、深掘断面に土器・石器及びピットが確認され、黒色土層中に遺構・遺物を包含することが確められ、黒色土層中での検出、精査にあたることにした。全調査区をグリット単位で掘り下げたところ、遺構は先の黒色土層であるIII層上面において焼土・ピット等が検出され、これらの形状、伴出遺物等の精査にあたった。遺物はI層からII・III層上面にかけて縄文土器・石器が多数検出され、これらはグリットごとに取り上げた。また部分的であるがIII層以下砂礫層まで掘り下げて調査した結果、III層以下には文化層が存在しないことが確められたので、II・III層上面までで調査を打ち切り、9月10日ですべてを終了した。

Ⅲ. 基 本 層 序

本遺跡は先の「位置と環境」で述べた通り、畑地・学校用地・宅地として利用されており、全体的に表土の削除・攪乱が進行している。基本層序は図版３に示したとおりであり、調査区の西側Ｂ－11グリット付近の表土層から比較的良好に残っている地点のものである。なお、土層の色調は「新版・標準土色帳　５版　1976・９」によった。

第Ⅰ層　7.5ＹＲ2/1　黒色シルト質土層　遺物を包含するシルト質の表土層で牧草地・宅地として利用され、耕作等による攪乱を受けている。

第Ⅱ層　7.5ＹＲ5/3　褐色土層　粘性のある粒子の細かいシルト質の柔らかい土でⅢ層上面と同一面で部分的にみられⅢ層面に載っている。

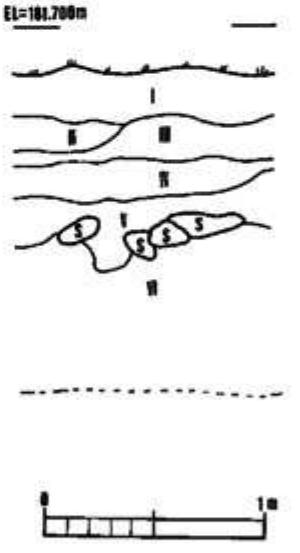
第Ⅲ層　7.5ＹＲ3/2　黒褐色土層　柔らかいシルト質の土で暗褐色土が地域によって混じる部分がある。この層の上面が遺構検出面である。

第Ⅳ層　7.5ＹＲ2/1　黒色土層　粘性のあるシルト質の柔らかい土で、遺物が混入していない層である。

第Ⅴ層　7.5ＹＲ3/3　極暗褐色土　粒子の荒い砂土とⅣ層の黒褐色土の混じる層で締まりがなくボロボロしている。

第Ⅵ層　10ＹＲ5/6　黄褐色砂礫層　径10cm大以上の風化礫と荒い砂土との混合土層で、部分的に粒子の細かい砂層を間にはさんでいる。層上面はゆるやかな起伏をなしている。

以上が深掘りにおける土層観察の結果であり、調査地における土層の基本層序は砂礫層の上に黒褐色土が載るものであり、Ⅵ層にみられる起伏は河川による侵蝕堆積によってできたものと考えられ、また上位の層（第Ⅲ層～第Ⅴ層）が削平され消失した部分ではⅠ層下位にⅥ層が露出してみられる。特に調査地の北側Ｅ－３グリット付近では顕著にみられた。



図版３　基本層序図

Ⅳ. 調 査 結 果

調査の結果、焼土遺構1基とピット7基の遺構が検出された。遺物は土器・石器の破片や完形品が出土し、比定される時代も縄文時代前期初頭より弥生時代に至る。土器片は縄文時代後期初頭の頃のものが多く発見されている。

以下、遺構と遺物に分けて述べる。

1. 遺　構

遺構としては焼土遺構1基とピット7基だけである。

(1) 焼土遺構（図版4・写真図版2）

E－3グリットにおいて1基検出された。検出面はⅠ層の下位面にⅤ層が露出している地域である。焼土の広がりは直径70cmの円形状にみられ、焼土の厚さは10cmであった。焼土の下位にみられる石は焼けており、この場所にて火を焚いたことは間違いなく、住居址に伴う焼土と考え住居址のプランの検出に注意したが、住居址の痕跡等を見出すことはできなかった。この焼土遺構は現地性のもので、地焼炉として使われ生活の場であることは間違いないが、住居址として確定づけることはできない。遺物は焼土内から縄文土器細片を1片得たのみである。

(2) ピ ッ ト

ピットは総計7基検出され、いずれも基本層序Ⅲ層上面の確認である。下位の砂礫層は起伏があり一概に言えないが、殆どは黒色土層中や礫層上面までの掘り込みであり、B－11ピットだけが礫層の一部を掘り込んでいる。形態は平面形が長方形状を呈するものと円形状（楕円形）を呈するものの2形態に分けられる。検出面よりの深さは円形状のものは一般的に浅く、長方形状を呈するものは深い。壁はいずれもごく僅かに固さが残っている程度である。

E－7ピット（図版4・写真図版2）

E－7グリットに位置し、Ⅴ層の砂礫層が露出している西側で検出された。調査時において礫がみられる部分もピットの可能性ありとして切り合いに関係があるのではないかと考えられたが、調査が進行するにつれ、単独のピットであることが確認されたものである。規模は検出面上縁で長径1.60m×短径1.31m、深さ0.75mを測る。平面形は隅丸長方形状を呈する。壁は直立ないしは外傾しながら立ち上がり、また東側では前述の礫が多くみられる。埋土は5層よりなる。1層は黒褐色土で褐色土が小ブロック状に混じり柔らかい。2層は黒褐色土の粘性の

ある土で混入物はない。3層は暗褐色土と黒褐色土との混合土層に砂が混入しザラザラしている。4層は粘性のある黒褐色土層である。5層は黒褐色土と褐色土の混合土層で粘性がある。出土遺物は1層と2層からフレイクが2片出土しただけである。

C－9ピット（図版4・写真図版2）

このピットは調査地の西側C－9グリットに位置する。検出面からは直径30cm大の偏平な石が17個南北軸に沿うように検出され、ピットであることが確認された。規模は検出面縁で長径1.90m×短径1.70m、検出面よりの深さ0.30mを測り、平面形は南北に長い楕円状である。壁は外傾しながら立ち上がっている。埋土は2層よりなり、1層は黒褐色土層で砂と小礫が混じり、縄文土器片が検出面上の石の下より検出された。2層は極暗褐色土層で粘性があり柔かく、焼土粒や2cm大の焼土塊や土器片を含む。出土遺物は1・2層より2片出土したが、いずれも縄文土器の細片である。

B－11ピット（図版5・写真図版2）

このピットはB－11グリットに位置し深掘りの際に検出された。ピットの掘り込み面は深掘りの土層断面より基本層序Ⅲ層上面からの掘り込みであり、基本層序Ⅴ層砂礫層まで掘り込まれていることが確認できた。規模は検出面上縁で直径1.60m、深さ0.80mを測り、平面形は円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は5層よりなる。1層は黒褐色土で柔かく、微量の炭化物・チップ等が入っている。2層は黒褐色土の粘性のある土で褐色土が小ブロック状に混じり、土器片等が多く入っている。3層は黒色土で柔かく粘性があり小礫を含む。4層は黒色土で3層より柔かく、径30cm大の礫が20数個入っている。5層は黒褐色土で非常に固く締まり層も水平であることから貼り床と考えられる。出土遺物は1層・2層から土器（図版6－24、7－34・36、10－1～4、11－16）・土製品（図版13－1、3－4）と石器（図版14－7・17、15－59、17－80・84・88・91・102、21－158）である。土器はいずれも縄文時代後期初頭のものであり、土製品・石器も共伴して出土していることより同時期のものであろうと思われる。

これらの土器等は破片であることや出土状態からみてピット廃棄後に捨てられたものと思われる。

A－12ピット（図版5・写真図版3）

このピットはA－12グリットにあり、B－11ピットの西側に位置する。検出面のピット上部からは大型甕の土器破片が検出されている。規模は検出面上縁で直径1.37m、深さ0.45mを測

り、平面形は円形を呈する。壁はゆるやかに外傾しながら立ち上がっている。埋土は黒褐色土で柔かく粘性があり、褐色土が小ブロック状に混じっている単層である。遺物はピット上部で検出された土器（図版10－７）で縄文時代後期初頭の頃のものである。

Ｄ－14ピットNo１（図版５・写真図版３）

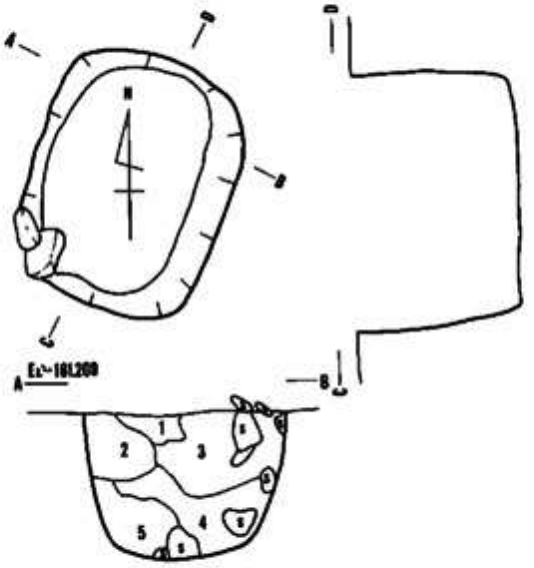
Ｄ－14グリットに位置し、Ｄ－14 ピットNo２を切っているピットである。規模は南北 1.52 m、深さ0.58ｍを測り、平面形は南北に長い楕円形状を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は４層よりなるが色調はいずれも黒褐色土であり、土質・固さ・含有物等によって分けられる。１層は柔らかく褐色土が混じる。２層は固く締まり僅かに粘性がある。３層は柔らかく砂混じりの層である。出土遺物は３層より縄文時代後期土器片（図版７－40）と石器（図版15－58）がある。

Ｄ－14ピットNo２（図版５・写真図版３）

Ｄ－14ピットNo1 に北側を切られているピットで規模は東西1.04ｍ、南北は推定で1.70ｍ前後を呈し、深さ0.80ｍを測る。平面形・断面形ともＤ－14No１ピットと類似した形態を呈するようである。埋土は黒褐色土を主体としたものであるが、含有物等の違いより３層に分けられた。１層は柔らかく暗褐色土が混じる粘性の少ない土で遺物が入っている。２層は粘性があり、炭化物粒が僅かに認められる土で土器片も僅かに入っている。３層は粘性がなくザラザラした粒子の比較的荒い砂土との混土である。出土遺物は縄文土器片（図版６－25・50）がある。

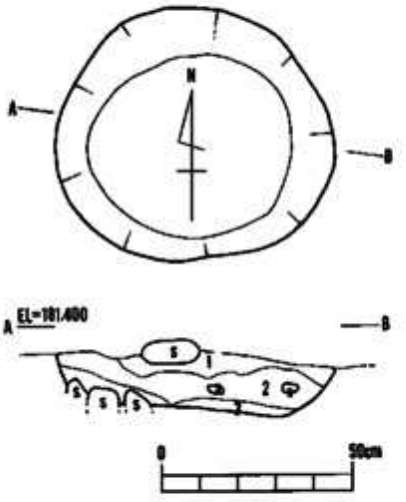
Ｃ－16ピット（図版５・写真図版３）

調査区の南側Ｃ－16グリットに位置する。検出面で30cm大の礫１個と土器片が数点確認された。規模は検出面上縁で直径1.30ｍ、深さ0.20ｍを測り、平面形は円形を呈する。壁はゆるやかに外傾しながら立ち上がっている。埋土は２層よりなる。１・２層とも黒褐色土であり基本的には同一の土層と思われるが、含有物の違いにより２層に分けられる。１層は褐色土が僅かに混じる粘性の少ない土で、土器片が数片入っている。２層は小礫を含む混じりけのない土で１層よりも粒子が粗い。遺物は検出面上と埋土中より縄文後期土器片（図版７－43、10－７）と石器（図版８－115）を検出したが、土器片の一部はＡ－12ピット検出の土器と接合するものであった。すなわち、Ｃ－16ピットとＡ－12ピットは同一時期かと思われる。



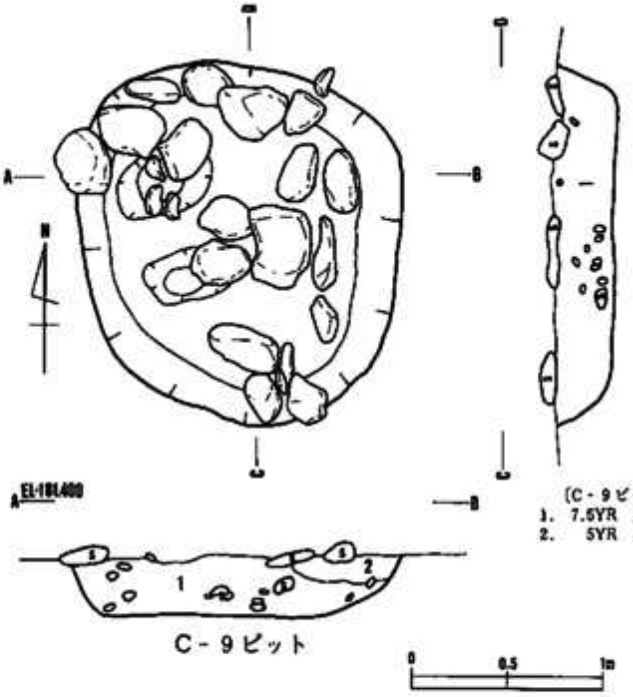
E－7ピット

〔E－7ピット注記〕
1. 7.5YR 3/4 黒 色 土 褐色土の小ブロックが混じっている。
2. 7.5YR 3/4 黒 色 土 粘性あり。
3. 10YR 3/4 暗 褐 色 土 砂と黒色土との混土。
4. 7.5YR 3/4 黒 色 土 粘性あり。
5. 7.5YR 3/4 黒 色 土 粘性あり、褐色土との混土である。



E－3焼土遺構

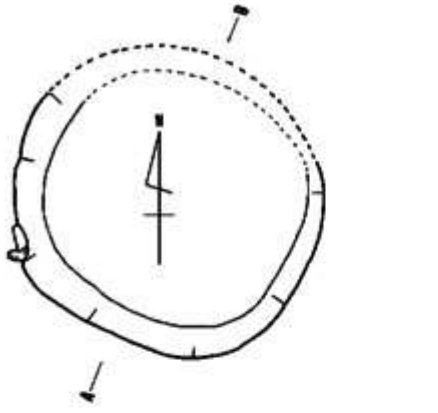
〔E－3焼土遺構注記〕
1. 5YR 3/4 黒 褐 色 土 焼土粒や炭化物が微量に混じり土器片を含む。
2. 5YR 3/4 暗赤褐色土 褐色土が焼けた状態にあり焼土塊が見られる。
3. 5YR 3/4 黒 褐 色 土 粘性あり褐色土を含み下位の縁は焼けた部分もある。

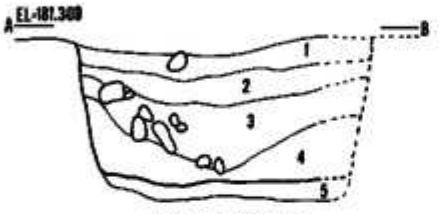


C－9ピット

〔C－9ピット注記〕
1. 7.5YR 3/4 黒 褐 色 土 固くしまっている。
2. 5YR 3/3 極暗赤褐色土 粘性あり焼土塊を含む。

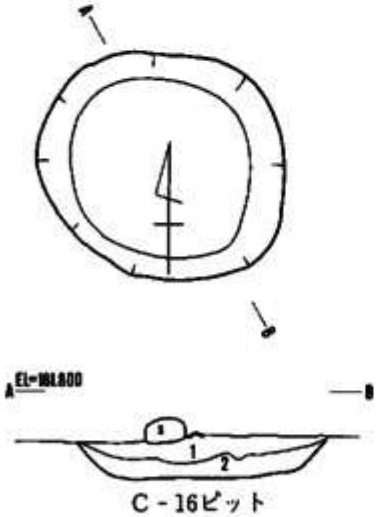
図版４　Ｅ－３焼土遺構、Ｅ－７ピット、Ｃ－９ピット





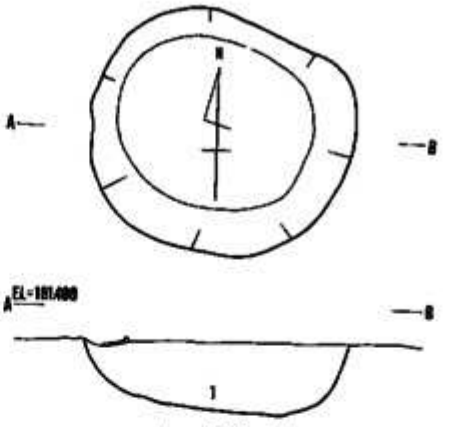
B－11ピット

〔B－11ピット注記〕
1. 7.5YR 3/1 黒色土 粘性あり微量の炭化物を含む。
2. 7.5YR 3/2 黒褐色土 粘性あり小礫を含む。
3. 7.5YR 3/1 黒色土 柔かく、粘性あり径10～20cm位の礫を含む。
4. 7.5YR 3/1 黒色土 3層より柔かい。
5. 7.5YR 3/2 黒褐色土 非に固くしまっている。



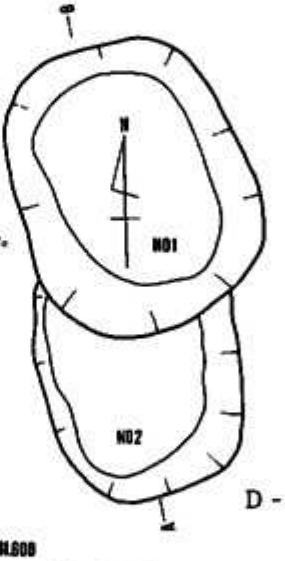
C－16ピット

〔C－16ピット〕記
1. 7.5YR 3/2 黒褐色土 褐色土が僅かに含まれている。
2. 7.5YR 3/2 黒褐色土 小礫を含む。

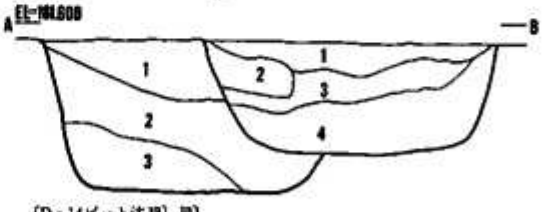


A－12ピット

〔A－12ピット注記〕
1. 7.5YR 3/1 黒色土 粘性あり

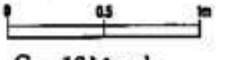


D－14ピットNo.1，・No.2



〔D－14ピット注記〕記
1. 7.5YR 3/2 黒褐色土 褐色土、黒色土の混土
2. 7.5YR 3/1 黒色土 固くしまっている。
3. 7.5YR 3/2 黒褐色土 土器片を含む。
4. 7.5YR 3/2 黒褐色土 砂が混じっている。

〔D－2ピットNo.2注記〕
1. 7.5YR 3/2 黒褐色土 柔かく時褐色土が混じっている。
2. 7.5YR 3/1 黒色土 粘性があり炭化物粒が僅かに入っている。
3. 7.5YR 3/2 黒褐色土 ザラザラした粒子の花り砂土との混土である。



図版５　B－11ピット、A－12ピット、D－14ピットNo.1・No.2、C－16ピット

2．遺　物

町場ーⅢ遺跡の調査で検出された遺物は、土器・土製品・石器などである。これらはピット埋土中のものを除けば表土層からⅢ層上部にかけての出土であるが、調査地は牧草地・学校用地・宅地あるいは畑地として利用され、整地・削平・攪乱をうけている事などから、層位的な把握、時期差というものは明確にできない。以下、土器・土製品・石器の順に説明する。

(1) 土　器

町場ーⅢ遺跡出土の土器は土製品を除いたすべてが小破片であり、摩滅しているものが多く、器形がわかるものが少ないため、ここでは施文方法および胎土等の違いにより６類に分類して説明する。

第１類　胎土に繊維を含む土器片である。（図版６－20、８－１～３、写真図版８・11）

拓影図１～３は、いずれも小破片であるため器形は不明である。１は口縁部破片で平坦な口唇部に指頭によって小波状口縁風にしているものである。断面形は箱形に近い形状を示す。縄文は小粒の斜縄文ＬＲと押圧縄文ＲＬによって口唇直下より施文されている。２、３は体部の破片で、２は複節の斜縄文ＲＬＲによって施文されている。３は単節斜縄文ＬＲによって施文される。実測図20は乳頭状の突起を有する尖底深鉢の底部土器片で、底部近くまで縄文ＬＲを施文されたもののようであるが、潰れているため明確ではない。

胎土はいずれも小石、石英粒、粗砂などが混入するもので焼成は普通である。器内面の調整は良好とはいえず凹凸があり、繊維痕が随所に認められる。色調は灰褐色から暗褐色を呈する。器厚は、拓影１が５mmで、２、３は８mmである。実測図20は８mm位であるが均一ではない。

第２類　粘土紐を貼りつけることによって立体的な文様をつくっている土器類である。（図版８－４～６・写真図版８）

いずれも粘土紐に沿って棒状の工具によってなでつけて浅い沈線が施文されている。隆起線は断面が丸みをおびているのが特徴である。６は深鉢型土器の口縁部破片である。口縁は幾分内弯し、波状を呈するもので、把手状のものがついていたようである。口縁部は厚い隆帯で文様を構成し、体部には頸部付近より縦方向に剣状突起を有する渦巻状文を施文している。地文は拓影図４・５・６とも斜縄文ＬＲで施文されている。器厚は６の口縁が2.5cmの厚さを持つが、体部および拓影図４・５は10mm前後である。

胎土はいずれも小石、石英粒、粗砂等が混入している。焼成は良好とはいえず脆弱である。色調はいずれも赤褐色から褐色を呈する。

第３類　縄文部もしくは無文部の上に沈線によって文様を構成している土器である。（図版６－８・11・13・14、８－７～26、９－27～38、写真図版９・10）

器形については全体的なものとして把握できないが、実測図８の壺形土器、実測図11の深鉢型土器、実測図13・14にみられる小型土器などあるが、拓影図の土器破片の大半は深鉢型土器と推定される。施文方法は半截竹管工具（図版８－７～10、９－31・34～37）や篦状もしくは棒状工具によって沈線を地文部や無文部の上に施文して文様を構成している。

拓影７は口縁部破片で口縁は幾分外反し、先細となっている平縁のものである。体部は若干ふくらみかげんである。文様は地文をＲＬの撚糸文を体部に施文後、２条の平行沈線で口縁上部にめぐらし、体部には山形状の沈線文を２条の平行沈線によって描いている。全体的な文様の割付けは不明である。実測図８は胴上部復原資料の壺形土器である。頸部は幾分締まり、胴部は張っている。文様帯は頸部の２条の平行沈線によって口縁部無文帯と体部縄文帯に分けられ、体部への地文はＬｒの斜縄文が斜位もしくは横位に施される。文様は頸部より体部に篦状工具による並行沈線によって長楕円形文を施文し、沈線間は地文が部分的にすり消されている。また頸部には一定の間隔で孔が穿たれているようである。拓影８－10は竹管状工具によって沈線が描かれ、実測図８と同様の文様構成をなすものと思われる。ただし沈線間にはすり消しがない。縄文はいずれも斜縄文ＲＬで施文される。拓影11～22は口縁部分の資料で体部については不明である。いずれも無文地の上に篦状工具による並行沈線によって稚拙な曲線文や長楕円形文、および斜行する沈線文を描いているものである。口縁は若干外反するものが殆んどであり、平縁（11・13・18・22）のものと小波状（12・14・16・17・19～21）を呈するものがある。拓影図11～14・16・18～21・22は口唇直下に１条ないし２・３条の平行沈線をめぐらしている。14・17の口唇部には沈線を施文する同一の工具によって刻みをつけている。16は壺の口縁の破片かと思われるもので、口縁直下に刺突を有する。19～21は並行沈線間に押捺縄文ＲＬが施されるもので、同一個体と思われるものである。拓影23は口縁部が直立し先細となり口縁が小波状を呈するもので、口唇部には縄文が施行されている。文様は頸部付近に比定される位置に篦状工具による２条の平行沈線をめぐらし口縁部分をすり消して無文帯とし、体部には縄文を有するものである。縄文は斜縄文Ｌｒが施文されている。沈線は篦状工具によって無文部、縄文部の区別なく施文され、口縁上部に並行沈線による楕円状文を施し、その部分を基点として平行沈線を横斜方向にめぐらしている。体部には斜行する沈線を胴下部に垂下させている。拓影24は23と同じく並行する沈線によって無文部と地文部を区画しているものである。並行沈線によって予め区画した後に体部に縄文を施文したものらしい。縄文は斜縄文ＬＲが施文されてる。無文部には並行する沈線によって長楕円形文が描かれている。拓影25～27は並行する２条の沈線による半円状と直線とを組み合わせて文様を構成している。実測図11は深鉢形土器の胴下部

資料と思われる。胴中央付近に沈線をめぐらし沈線より下位を縄文のみにしている。縄文は斜縄文ＬＲが施文される。底部は平坦で無文である。拓影31～34は平行沈線を頸部あるいは胴中央部付近にめぐらし、これより下位には縄文のみを施文しているものである。拓影31～32は口縁部資料で31は波状を呈し、波状頂部には刺突を伴うものである。口縁部より頸部付近は縄文がすり消され無文となっている。沈線は半截竹管工具によって口縁上部と頸部付近にそれぞれめぐらしている。体部には斜縄文Ｌｒが施されている。32は平縁で内湾する口縁部資料である。沈線は篦状工具によって施文され楕円形文が口縁部分にめぐっている。文様の接点には竹管による刺突を有する。35～39は胴部破片で全体的な文様構成は不明であるが、部分的にすり消しているところがみられる。実測図13・14は小型の土器で、13には小型の台がついている。14は小破片で器形が判然としないため小型皿状の土器として載せたが、あるいは蓋かもしれないものである。いずれも器表面は無文地であり、沈線によって横位に文様を展開している。

胎土はいずれも小石・石英粒・粗砂等が混じるが良く調整されており、内面の仕上げも良好である。焼成も良く、色調は殆んどが表裏とも鈍い黄褐色から褐色を呈するが、拓影10・28は表面が黒褐色を呈する。器厚はいずれも７㎜前後である。

第４類　沈線とすり消し縄文によって文様を構成する土器類である。（図版６－１～５・７、７－９・10・12、９－39～49、10－50～63、写真図版６・７・９・10）

本類には刺突のあるもの、並行沈線のもの、隆帯のあるものなどあるが、いずれもすり消し縄文を伴っているものであることから本類に入れた。

これらは、いずれも小破片であり、器形全体として把握できるものはない。口縁はいずれもゆるやかな波状を呈しているものであり、拓影39、実測図９以外はすべて口縁部が外反し、頸部が引き締まり、肩部ないし胴上部付近にふくらみのある深鉢形を呈するものと思われる。

地文や文様の表現としての縄文は単節斜縄文ＬＲを斜位や横位に施文するものが多く、ＲＬで施文するもの（拓影43、51、54、57～59、67、実測図１）は少ない。文様は棒状工具による直線や曲線の沈線で区画し、その後すり消しを行なっているものであるが、全体的な文様の構成は破片であるため詳細は不明である。拓影40、42～50、55及び実測図１～５、９、10、12などは沈線によって区画されたなかをすり消しているもので、拓影39・41・51・56～63及び実測図７などは並行する沈線間内に縄文を残すものである。沈線によって区画されたなかをすり消しているものの中には三角状文と渦巻状文の組み合わせによって文様を構成するもの（実測図２～４・９、拓影40・52）、長楕円状文による文様を構成するもの（拓影42・44・53、実測図３）、方形状に区画されたなかをすり消して文様を構成するもの（実測図１）がある。実測図５・拓影42は波状口縁頂部に刻みを有するものである。実測図10は口唇部上に顔面状の突起を

有するもので、実測図9に伴って出土し、また胎土等も類似することから同一個体と思われるものである。沈線間内に縄文を残すものの中には、1片だけの資料であるが口縁部をすり消しているもの（拓影39）、平行沈線間が狭くすり消し部が広いもの（拓影41）、平行沈線によって口縁部や胴部をめぐっているもの（拓影56～62）などがある。拓影51～55、57は文様の接する部分等に竹管による刺突がみられるものであり、拓影58は平行沈線間内の縄文帯に〔フ〕字状の沈文を施しているものである。実測図7と拓影63は胴部に2本の隆帯をめぐらしているものでいずれも隆帯間をすり消し、隆帯上には棒状の工具によって実測図7は横圧、拓影63は刺突による文様を施している。実測図7は隆帯より下位には文様が施されないものである。隆帯間や隆帯上部には沈線による長楕円形状文や渦巻状文を隆帯に沿うように施文している。また実測図7にみられるように文様帯と地文部を区画するものに拓影62、実測図3などがある。実測図12は台付土器の台部であり、4面に窓を有するものである。

胎土はいずれも小石・石英粒・粗砂等を混入し良く調整されており、内面の仕上げも良好である。色調は表面が鈍い黄橙色から黄褐色を呈するものが多く、拓影43・44・54～58は明赤褐色を呈する。裏面はいずれも鈍い黄褐色から鈍い褐色で、表面よりも明るい色調を呈している。器厚は5㎜～6㎜を呈するもので、拓影50・63、実測図7は1㎝前後である。

第5類　粗製土器を一括した。（図版6－6・10－64～70・11～71～76、写真図版10・11）

本類は前述の3・4類土器と共伴して出土しているもので同一時期と考えられる。口縁部分が無文やすり消されて無文となっているもの（拓影64～70、実測図6）と口縁上部より体部にかけて縄文や撚糸文を施しているもの（拓影71～76）に分けられる。

器形は口縁部が〔く〕字状に外反するもの（拓影66、実測図6）と幾分外反するもの（拓影60～65、67～70・72）及び直立するもの（71・73）に分けられるが実測図6を除いた以外はいずれも深鉢形を呈するものと思われる。地文は単節斜縄文ＬＲ（拓影64～72）と撚糸文（拓影73～76）を呈するものに分けられる。

実測図6・拓影64～66・69・70は頸部付近に縄文側面の押捺文が1本めぐるもので、拓影69は口縁上部にも押捺文があり、押捺文間をすり消して口縁上部に縄文の残されているものである。拓影64も同様と思われるが剥落しておりはっきりしないものである。拓影70は折り返し口縁で、折り返し部分に縄文があるものである。拓影71・72は口縁部分のみの破片であり全体器形は不明であるが、口縁上部より単節斜縄文ＬＲを体部に施文した深鉢形土器と思われる。拓影72の頸部には、縄線文一条がめぐっている。拓影73～76は撚糸文であり、拓影73は単節の縦の撚糸文である。拓影74～76は網目状撚糸文が施文される土器で、74は口縁部分を欠いている肩部付近の土器破片と思われる。75・76は胴部破片である。

胎土はいずれも小石・石英粒・粗砂等が混じるが、良く調整されている。焼成も良好であるが、3・4類の土器よりは脆弱である。器厚はいずれも7mm前後である。

第6類　無文の小型土器類である。（図版7－15～19、実測図15～19）

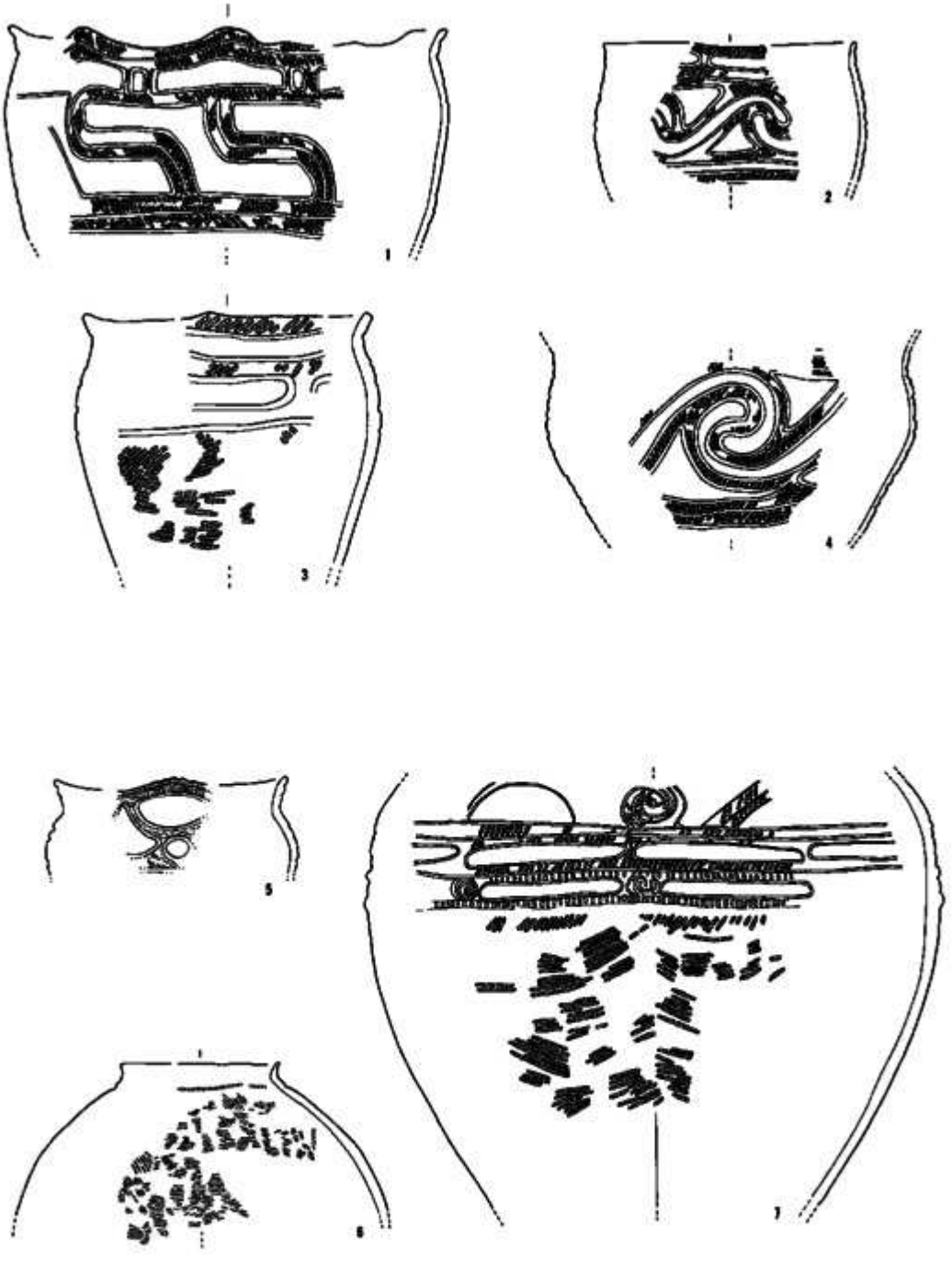
器形はコップ状（17）や壺形（16）、台付土器（15～19）とあるが器形全体としては把握されない。実測図15は部分的に篦状工具による整形痕がみられる。16はB－11ピット出土のもので前述した4類の実測図土器に伴って出土している。胎土はいずれも小石・石英粒・粗砂等を含んでいるが、量的に多くない。焼成も普通である。器厚はいずれも5mm前後である。

底　部（図版11－81～85、写真図版11）

平底の底部に圧痕のみられるもので、3・4類と同一時期のものと思われる。81は木の葉の圧痕が残っているもので、82～85は網代痕が残っているものである。82は織物でいう綾織りと呼ばれるもので、83～85は平織と呼ばれるものである。

以上述べた以外に縄文時代晩期中葉（大洞C_1～C_2）に属するとみられる土器片（図版11－77）と弥生時代（天王山併行）に属するものとみられる土器片（図版11－78～80）がある。晩期中葉に属する土器は1片の出土で胴部中央付近の破片で4条の平行沈線と単節斜縄文RLが施文されているものである。胎土の調整は良好で焼成も非常に良い。色調は表裏とも鈍い橙色を呈している。器厚は5mmである。

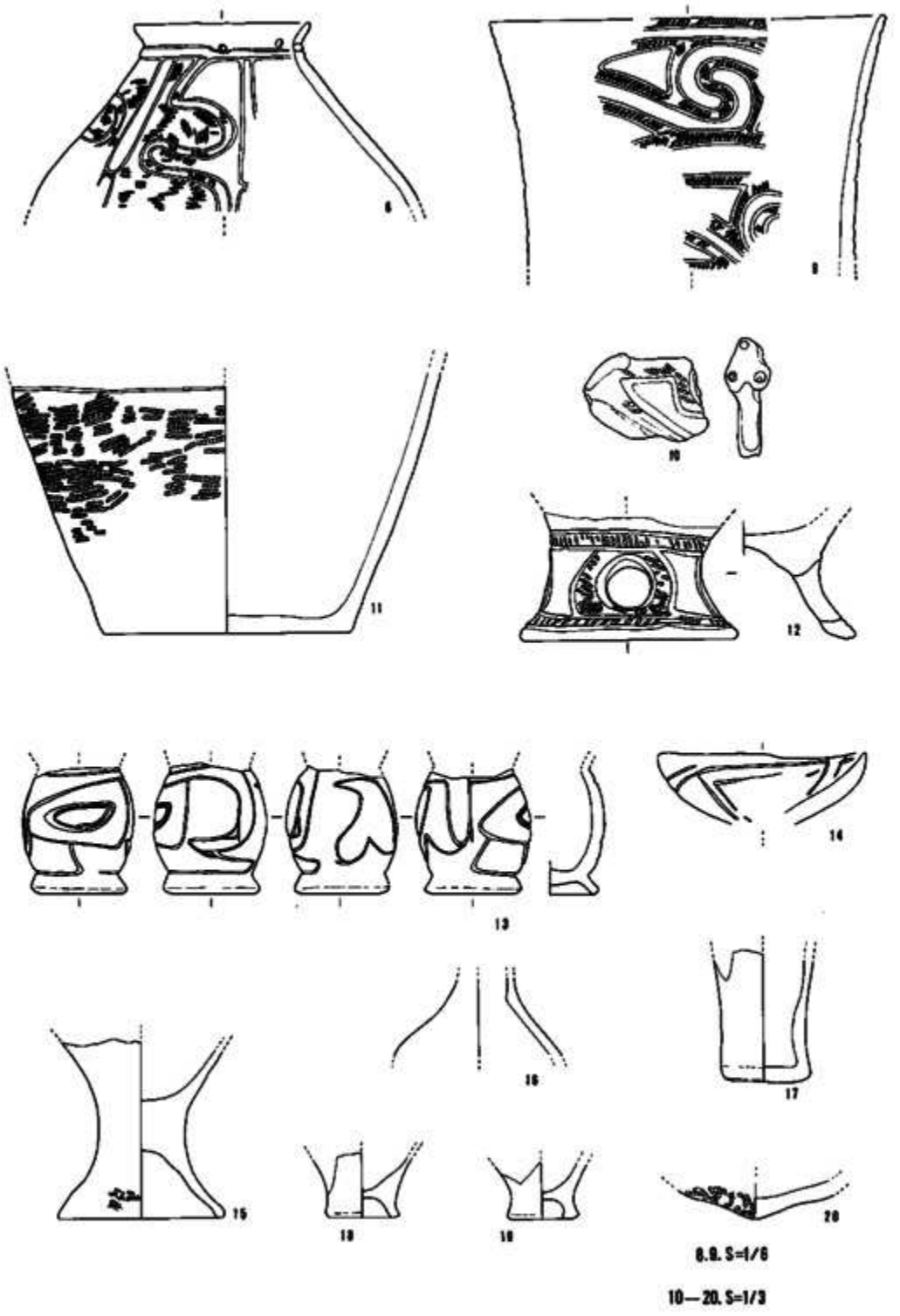
弥生時代に属する土器はF－8グリットのII層上面で検出された。拓影78・80は同一個体と思われる。口縁部付近の土器片で地文は撚糸文で頸部付近より横位に施文している。胎土の調整は良好で焼成も非常に良い。色調は浅黄橙色を呈する。器厚は5mmである。拓影79は胴下部の破片と思われるもので撚糸文を縦位に施文しているものである。胎土の調整は良好で焼成も良好である。色調は暗褐色を呈する。器厚は6mmである。



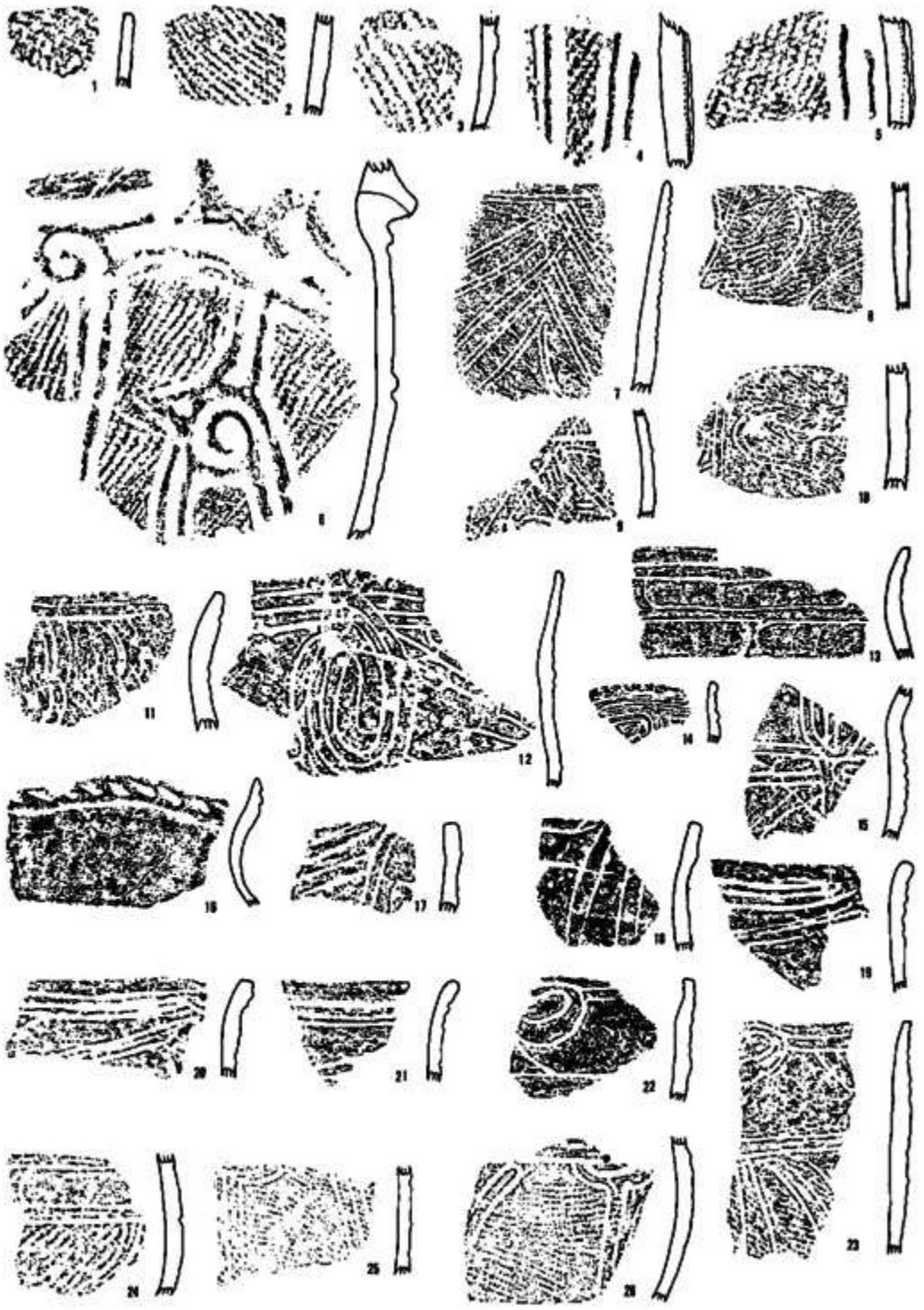
1.2.4.5.6.7. S=1/6

3. S=1/3

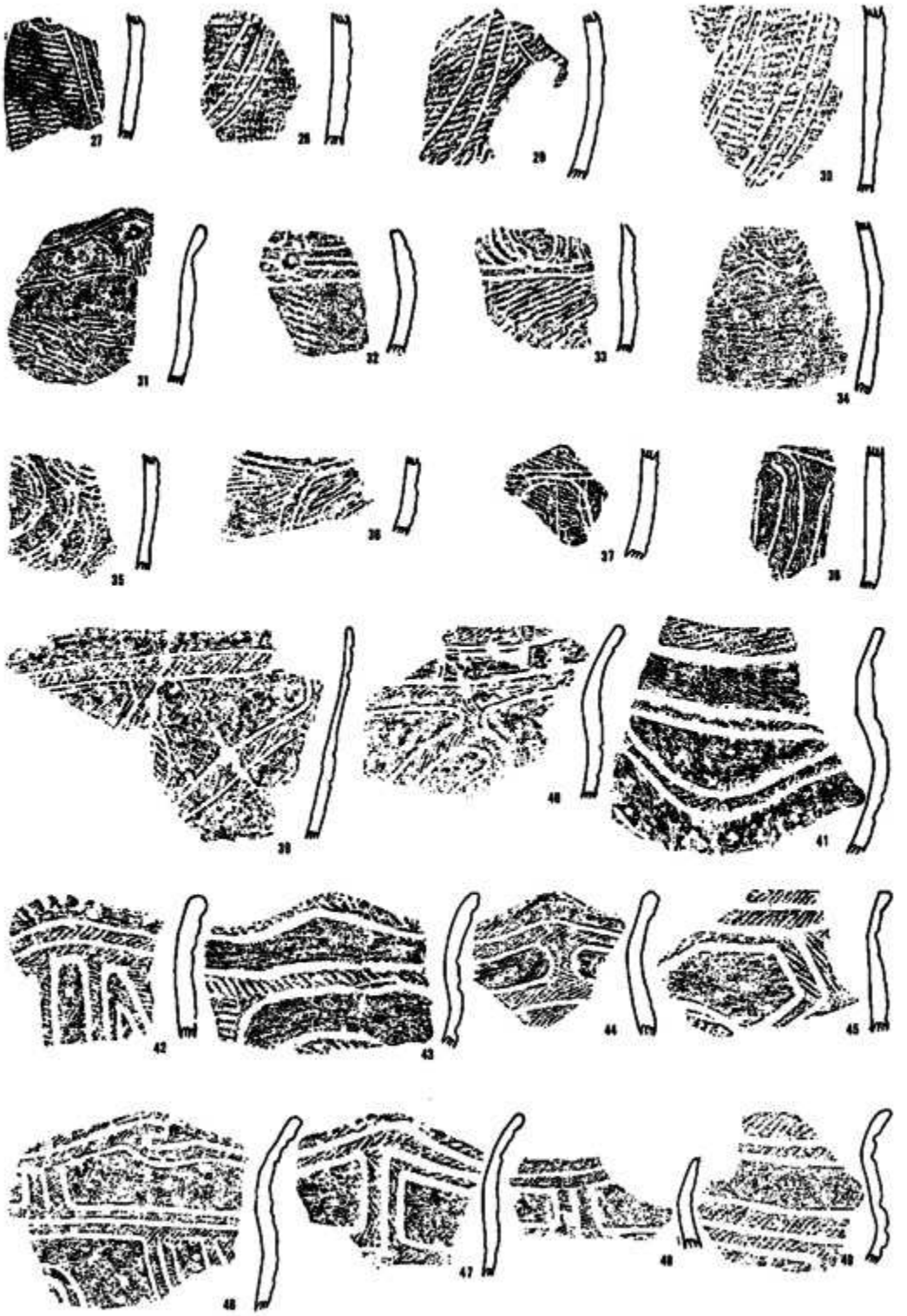
図版６　土器実測図１



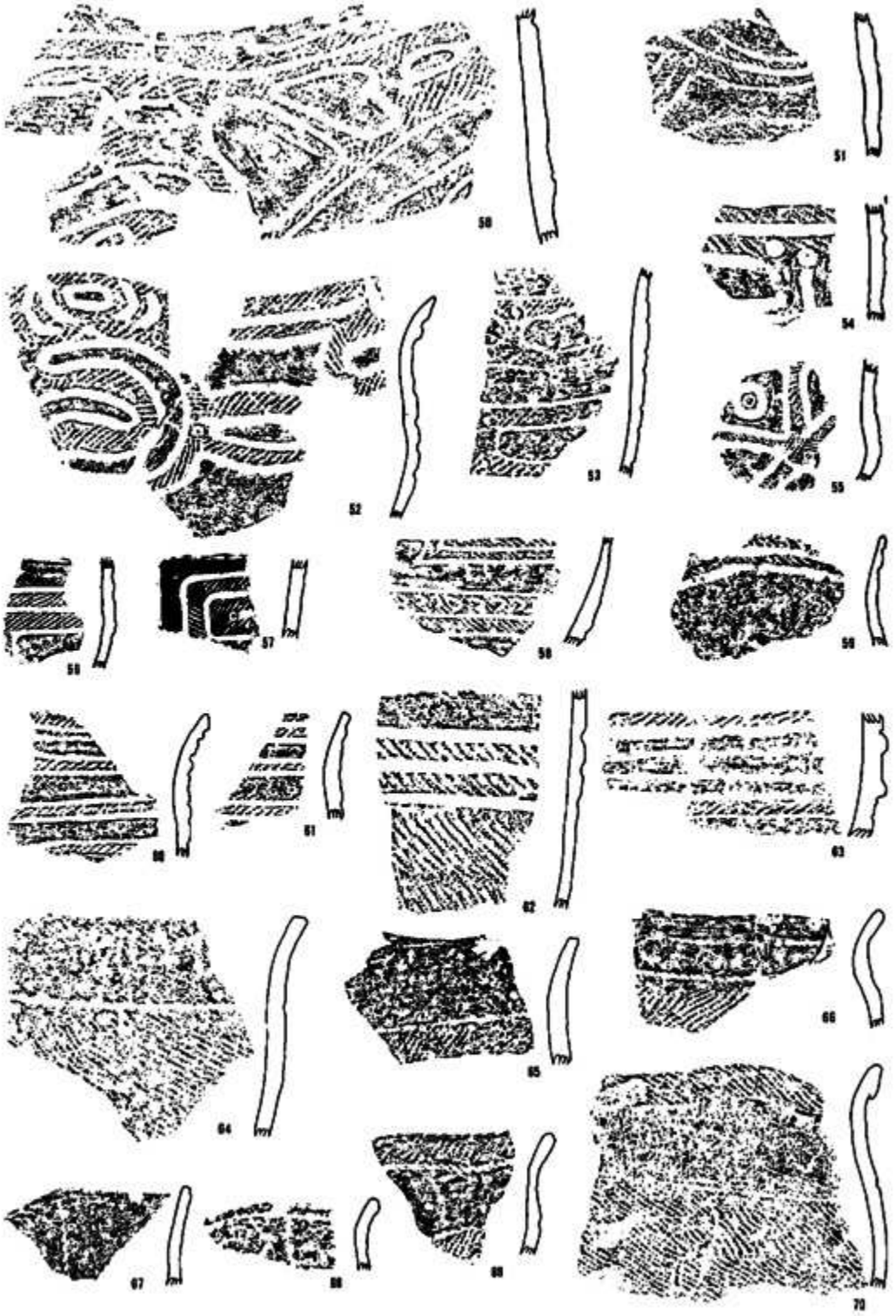
図版 7　土器実測図 2



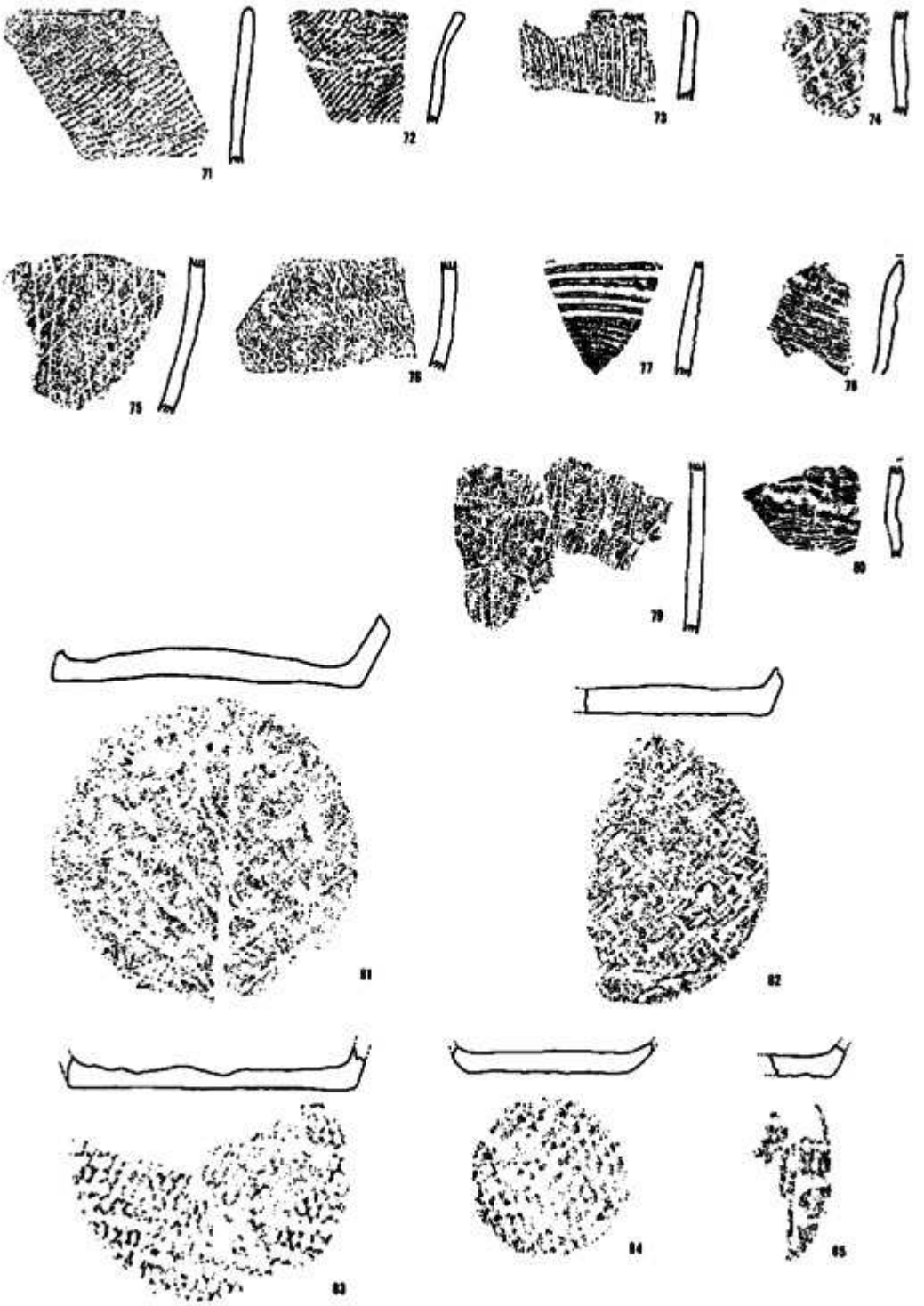
図版８　拓影図１



図版９ 拓影図２



図版10　拓影図3



図版11　拓影図4

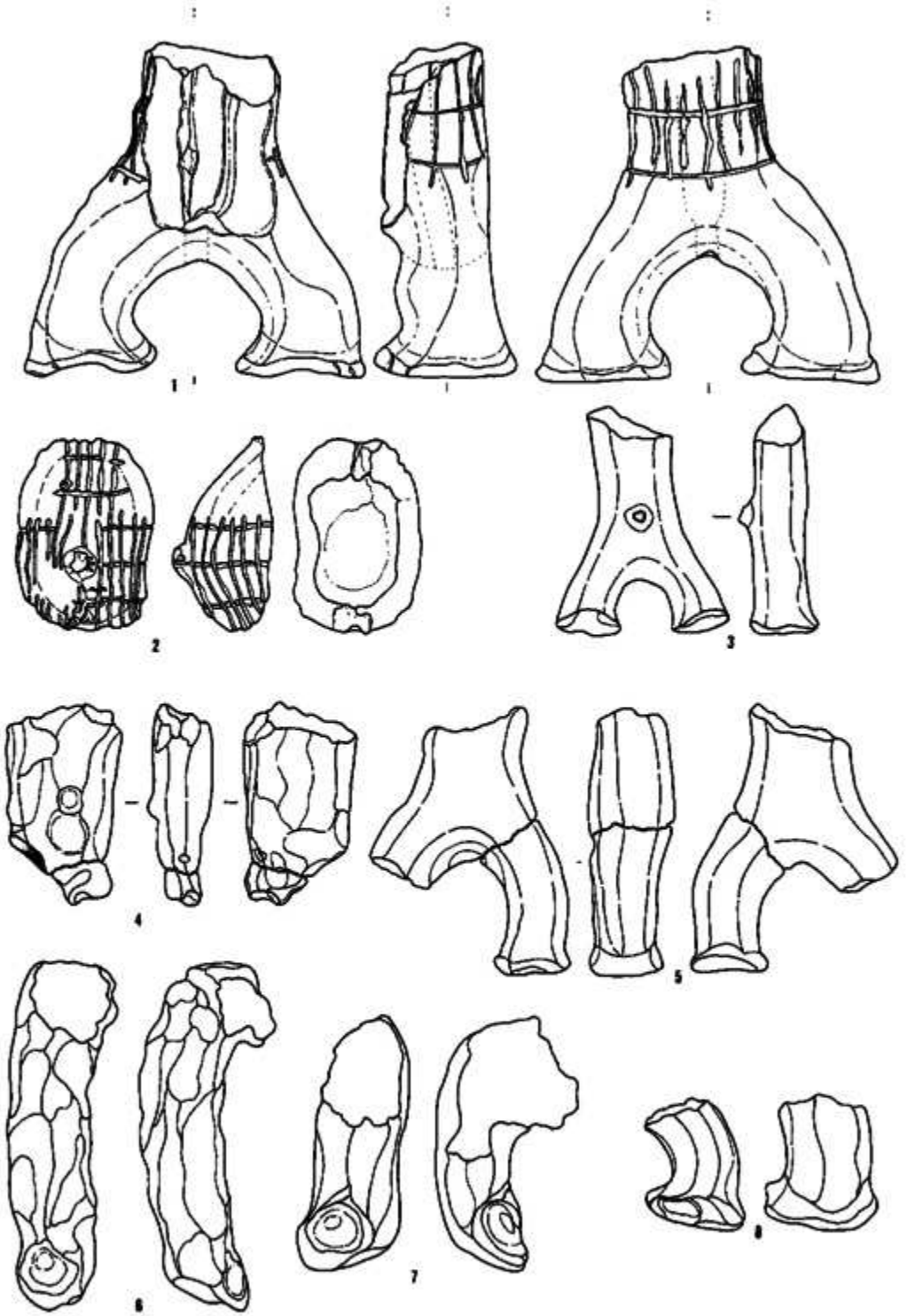
(1) 土製品

本遺跡からの土製品の出土総数は13点であり、内訳は①土偶８点、②鐸形土製品２点、③円盤状土製品２点、④耳栓１点である。これらの土製品はいずれも３・４・５類の土器と共に出土している。

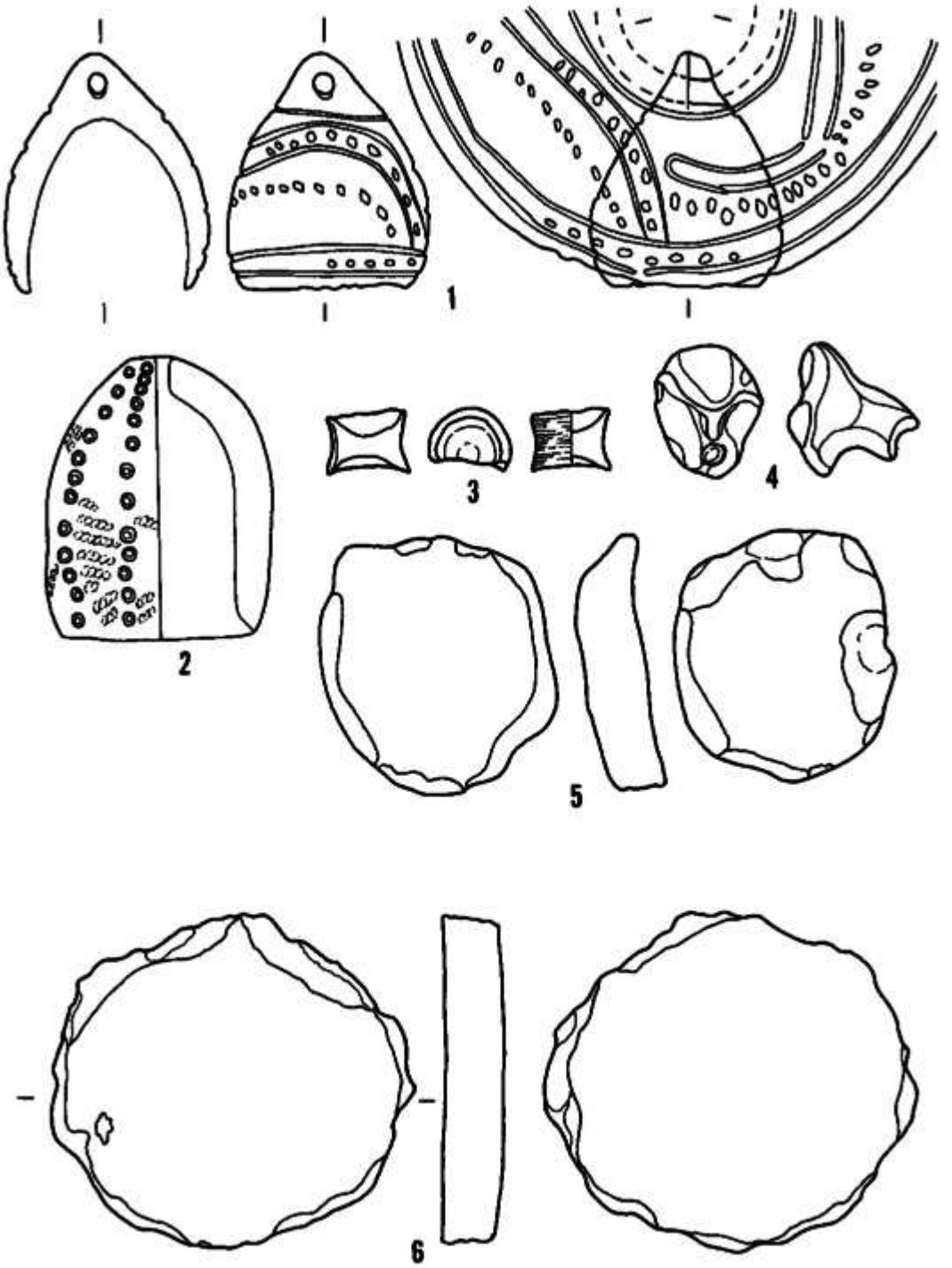
① 土 偶（図版12－１～８、写真図版12）

土偶は８点出土したがいずれも欠損品である。図版12－１はＧ－６グリットII層からの出土で胴上半部と腹部を欠いている。胴部には沈線により衣類のようなものを表わし、胴央部には股間にぬける孔が穿たれている。脚はＯ脚で胴部に比して短く、足先の部分には指を表わしたであろう沈線が数本みられる。現存する部分の計測値は、高さ10cm、胴部幅５.１cm、胴部の厚さは３.１cmである。図版12－２はＥ－３グリットII層上面からの出土で土偶の腹部と思われるのでここに載せたものである。１と同様に沈線によって衣類のようなものを表わしている。内部は中空となっている。計測値は縦５.４cm、横３.９cmである。図版12－３はＢ－16グリットの精査中に出土したもので胴上半部を欠いている土偶である。

精査中に出土したもので胴上半部を欠いている土偶である。全体は無文で胴部にはへそが突き出している。脚は短くＯ脚である。現存する部分の計測値は高さ6.65cm、脚部幅2.35cm、胴部の厚さは1.65cmである。なお欠損部をみるとアスファルト状の物質がついている。図版12－４はＢ－11グリットIII層上面からの出土で、胴部部分だけのものである。へそは胴下半につけられ、全体は無文で篦状工具によってなでつけられたと思われる痕跡がある。右脚部のつけ根部分にはアスファルト状の物質が付着している。現存する胴部幅は３.１cmで、腹部の厚さは１.４cmである。図版12－５はＧ－２グリットで粗掘中に出土したものである。胴上部と右脚部を欠損している。体部は無文であり、へそがないものである。脚部はＯ脚を呈する。現存する部分の計測値は高さ7.65cm、胴部2.85cm、脚部の厚さは２.３cmである。図版12－６・７は土偶の腕部分であり、それぞれＣ－12、Ｇ－６グリットIII層上面よりの出土である。いずれも篦状工具による整形痕がみられるもので、手の部分はスプーン状にくぼんでいる。長さは図版12－６が10cm、図版12－７が７.６cmであるが、図版12－６は手の大きさに比べて非常に長いのが特徴的である。図版12－８はＤ－14グリットのIII層上面で検出された土偶の左足である。脚はＯ脚を呈するようである。長さは3.16cmである。図版13－４は小型のため土偶かどうかはっきりしないものであるが細い粘土紐と刺突によって顔面状に目鼻口と思われる表現が見られるところから土偶の類に入れた。あるいは図版11－10にみられる口縁部分の突起としていたものかもしれない。現存する高さは２.２cmで、幅１.８cm、長さ２cmである。



図版12　土製品実測図 1



図版13　土製品実測図２

② 鐸形土製品（図版13－1・2、写真図版12）

鐸形土製品は2点出土した。いずれも完形品であり、時期は縄文時代後期のものである。

図版13－1はB－11グリット埋土2層中からの出土で体部にふくらみがあり、頂部につまみ部分をつくり出し、さらに貫通しているものである。器表面には細い沈線と刺突の併用によって文様を横方向に展開しているものである。図版13－2はB－16グリットII層上面からの出土で、図版13－1より若干大きめのものである。頂部から内部へ孔が貫通している。器表面には縄文を軽く施文したのちに竹管による刺突を縦方向に10列均等に施文して文様を構成しているものである。

③ 円盤状土製品（図版13－5・6、写真図版12）

2点の出土であり、いずれも土器片の周囲を打ち欠いて円盤状に作っているものである。図版13－5はA－15グリット出土のもので両面とも無文である。直径4.05cm、厚さ1.1cmである。図版13－6はD－17グリット出土のもので底部破片を利用したものである。直径5.9cm、厚さ1cmである。

④ 耳　栓（図版13－3、写真図版12）

B－11ピット埋土2層よりの出土で約半分を欠いている。形状は臼形を呈し、器表面は無文である。直径1cm、高さ0.95cmである。

(3) 石　器

石器類の出土数は、若干の加工痕及び使用痕と思われるものがみられる石片類を除き、明らかに石器として加工され、また使用されたと考え得るものが158点発見された。その内訳は以下の通りである。

石　鏃	57点
石　錐	4点
石　匕	5点
石　槍	3点
石ベラ	10点
スクレーパー類	47点
石　斧	16点
凹　石	6点
磨り石	3点

石　皿	2点
砥　石	3点
石　刀	2点

石器類は出土したものを全てを図化して収録した。最初に記した通り、剥片類に若干の加工を施したものも存在したが、加工痕が明瞭で明らかに石器として使用しうるものにのみ留めた。

① 石　鏃（図版14－1～27、15－20～57、写真図版13）

a　細身で長い鏃である。先端、基部ともにほぼ同一の形態を呈し、両端ともに鋭く加工されていないものである。両縁辺の加工は急角度の剝離が行なわれており、胴部中央付近には細長く第1次剝離の部分を残すもの（図版14－3・4）、第1次剝離の部分を残さないもの（図版14－2・5・6）、基部が若干巾広く作られているもの（図版14－1）などがある。

b　二等辺三角形に近い形態を示すものである。両縁辺はゆるやかなカーブを描き、さらに基部も僅かに丸みを有するもの1点が発見されている（図版14－7）

c　基部に抉り込みを有する細長い鏃である（図版14－9・10）。図版14－9は比較的ゆるやかな抉り込みを有するが、図版14－10は鋭く抉り込みが作られ、基部左右の先端部は燕尾状に近い形に作り出されている。

d　器長に比して幅広の胴部を有する変形菱形を呈する。他のものに比して加工痕も粗く、肉厚で横断面を菱形に近い断面を呈するものである。（図版14－11）

e　有茎の鏃である。全体の形及び茎部の作り出しの相異によってさらに細分される。

e－1　左右の縁辺部がほぼ並行な線を呈し、茎部が長めに作り出され、茎部左右の部分に抉り込みのみられないもの（図版14－19、15－34・37）、及びそれに類するもの（図版14－17・18、15－39・41）などがある。先端は余り鋭利ではない。

e－2　左右縁辺部はほぼ直線を呈する三角形であり、先端部は鋭く作られている。茎部も殆んど左右対称となる三角形状を呈する（図版14－12～15・20～23・25～27、15－28～33・35・36・40・42～54）。茎部の作り出しは左右の逆刺がほぼ直線のもの（図版14－25～27、15－30・31・35）、ゆるやかに丸みを有するもの、内側に深く抉り込んだもの（図版15－42・47・48・52・53）などがみられる。大きさも図示した通り大小様々である。

石鏃中、以上の分類に入らなかったものとしては、図版14－8・16、15－56・57がある。このうち図版14－8・16の2点は明瞭は石鏃としての形態は呈していないが、小型で先端部を作り出している点からみて石鏃の未成品と考えてこの項に載せた。また、図版15－57はカリマタ状のものであり、図版15－56は茎部に抉り込みが認められ、石匕のミニチュア品の可能性も考えられる。

② 石　錐（図版15－50～61、写真図版13）

僅か4例が発見された。明瞭に石錐としてこの形態を呈するものは1例のみであるが、先端部にかけてやや細く尖るように作られており、断面もほぼ四角形に近い形を呈している。図版15－60は細く作り出された先端部分が欠損しているものである。

③ 石　匕（図版16－62・65、図版17－98、写真図版13）

完成品2例、未成品1例、欠損品2例の出土をみた。すべて縦形のものである。図版16－63のものは表面に左右からの押圧剥離によるとみられる並行な細長い剥離による加工が加えられているが、裏面はつまみ部の作り出し部分を除き2次加工は行なわれていない。図版16－62は表面の半分近くに原石の自然面を残しており、2次加工の痕はつまみ部分以外にはみられない。

図版16－64は未成品であろうかと考えられるが、これ自体でも充分石器として使用できたと思われる。横剥ぎの剥片の打面部分を残し、他方の縁区部に刃部を形成している。他の2例、図版16－65及び図版17－98はいずれも欠損品であるが、図版16－63同様、表面に細かい加工を有し、裏面は第1次剥離面のまま残されている縦形石匕の一部である。

④ 石　槍（図版16－66～68、写真図版14）

石槍は3点検出されている。このうちの大型木葉形のものは全体の約⅓を欠損している（図版16－66）。2次加工の剥離は全体的に粗いが、両側縁、すなわち石槍の左右刃部をなす部分は比較的細かい加工がみられる。縦断面にみられる如く石槍として完成されたスムーズな線を示しておらず、欠損部との関係が問題になりそうである。図版16－67は前者に比して小型のものであるが、裏面に第1次剥離面を多く残し、僅かにバルブ部分をつぶすのみの加工にとどめられている。縦・横の断面形も不規則な形を示しており、さらに細部加工を行なう途上にあるものとみて良いであろう。また表面左縁辺部にのみ、すなわち裏面の第1次剥離面を残している側縁部のみに若干の細部加工とみられる部分があり、石槍として使用されるより、あるいはサイド・スクレーパーとして使用される石器かとも考えられる。図版16－68は67同様、裏面の一部に第1次剥離面が残っている。表面は全面に剥離痕があるが、裏面は左右両刃部にのみ細かい加工が施されている。3例ともに先端部の加工は鋭くない。図版16－68は、あるいは後述する石ベラの範疇に含まれているかもしれない。

⑤ 石ベラ（図版16－69～78、写真図版14）

石ベラとした石器は10例が出土した。石ベラとした加工及び形態は図版16－69～78までに示した如く、両面もしくは半両面加工の石器であり、横断面は比較的肉厚であり、縦断面の基部

すなわち石ベラの刃部と目される部分に急用度で刃部を形作るものを含めた。図版16−70・72・75などはその典形的な形態である。

⑥ **スクレーパー類**（図版17−79〜103・18−104〜124、写真図版14・15）

スクレーパー類はサイド・スクレーパー、エンド・スクレーパー、ラウンド・スクレーパーの3種類に分類される。

a　ラウンド・スクレーパー（図版17−82〜95、写真図版14）

すべて小型のものである。ラウンド・スクレーパーは本来片面加工のものが多く、小型の剥片の表面の周囲に急角度の刃部を作るための加工が加えられ、裏面は第1次剥離面のまま残されているのが一般的である。当遺跡出土のラウンド・スクレーパーは、小型で両面加工のものが大半を占めている。刃部はほぼ全周に巡り、丁寧に加工されている。形態的にはほぼ円形を示すものから長円形、または三角形に近いものまであり、三角形に近いものには石鏃の未成品と考えられるものも存在する。

b　エンド・スクレーパー（図版17−102・103、写真図版15）

エンド・スクレーパーとしたもので明確なものは図版17−102 に示したもののみである。図版17−103 に図示したものは、裏面の打面及びバルブの一部に縦方向に細かい剥離が施され刃部を形成している。刃部の形成箇所が裏面からであり、（しかも不完全なもの）エンド・スクレーパーであるかどうかは多少の疑問が残るものである。

c　サイド・スクレーパー（図版17−96・97・99〜101、18−104〜124、写真図版15）

ほとんどのものが不定形の剥片の長軸の一縁辺部に片面から細部加工の施されたものであるが、2〜3例のものはごく一部分のみに両面よりの加工が加えられている。

⑦ **石　斧**（図版19−125〜140、写真図版16）

すべて磨製石斧である。いずれの石斧も両面・両側面ともに加工時につけられたと思われる擦痕をとどめている。擦痕のみられる部位・方向ともに特に一定のものはないが、刃部近くと頭部直下の平坦な面に特に明瞭に認められる。小型・大型の両方がある。

⑧ **凹み石**（図版19−141〜146、写真図版17）

いずれも偏平な河原石の中央部分に1〜3箇所のくぼみ部分を持つものである。図版19−141・145は裏面にも若干の使用痕とみられるような浅いくぼみ状のものがみられるが明確なものではない。

⑨ **大型粗製刃器状石器**（図版20－147・148、写真図版17）

大型肉厚の原石もしくは剥片の一部にエンド・スクレーパーにみられるような急角度の並行した剥離により刃部が形成されている。いわゆる石刃核ともみられるような形態を呈するものであるが、打面と石刃状剥片の剥離痕が残された縁辺部、もしくは打面部分に使用痕とみられる擦痕をとどめているのが特異な点であり、本遺跡の周辺では、広瀬II遺跡の他、上野・南ノ又・繁III等の遺跡からの発見が報告されている。大型粗製刃器、もしくはコア・スクレーパーなどと呼ばれるものである。

⑩ **磨り石**（図版20－149～151、写真図版17）

3例が出土した。いずれも円形、もしくはそれに近い形態のもので、全体が良く磨耗しているものである。

⑪ **石　皿**（図版20－152・153、写真図版18）

いずれも欠損品である。一部に明瞭に縁辺部を形成しているものと、平坦な面のままのものとの2例がある。

⑫ **砥　石**（図版21－154～156、写真図版18）

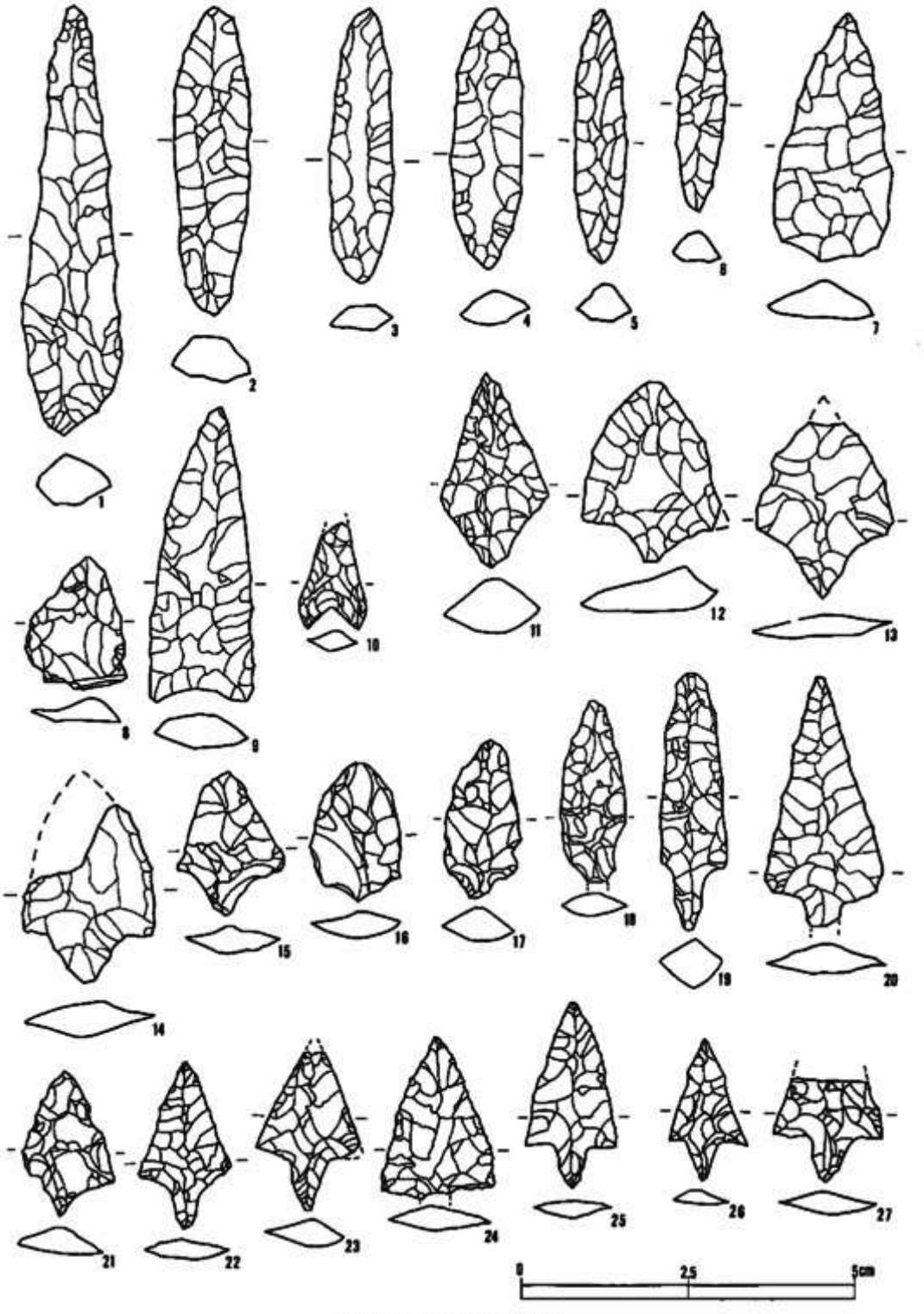
石皿の破片を利用したものとみられるもの2例、長楕円形の自然石をそのまま利用したもの1例が発見された。いずれも平坦面の中央部分に数条の浅い溝を残している。溝などに明瞭な擦痕は少ない。溝には太いものと細いものがあり、溝の断面形は細い方がV字状、太い方はU字状を呈しているようである。

⑬ **石　刀**（図版21－157・158、写真図版18）

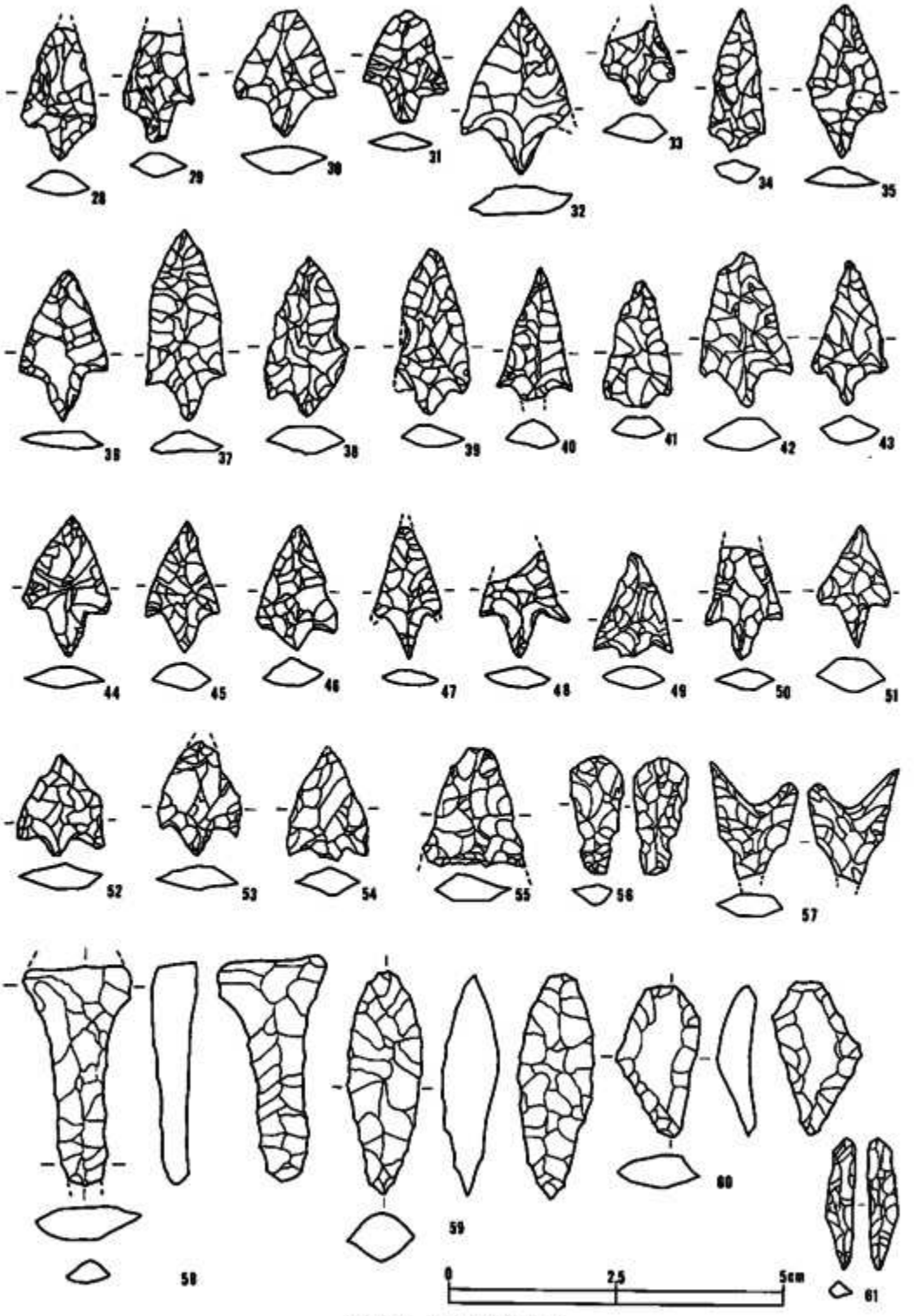
両者ともに石刀の破片であると考えられる。158は、ごく一部分のみの残存部であるために石剣か石刀かの判定は難しい。157は大部分に加工痕かと考えられる剥離痕がみられ、剥離痕以外の部分は磨かれている。一端が僅かに破損しているが、ほぼ完形品と思われ、しかも研磨が全面に及んでいないことから未製品とも考えられる。

以上のうち遺構に伴って出土した石器は次の通りである。

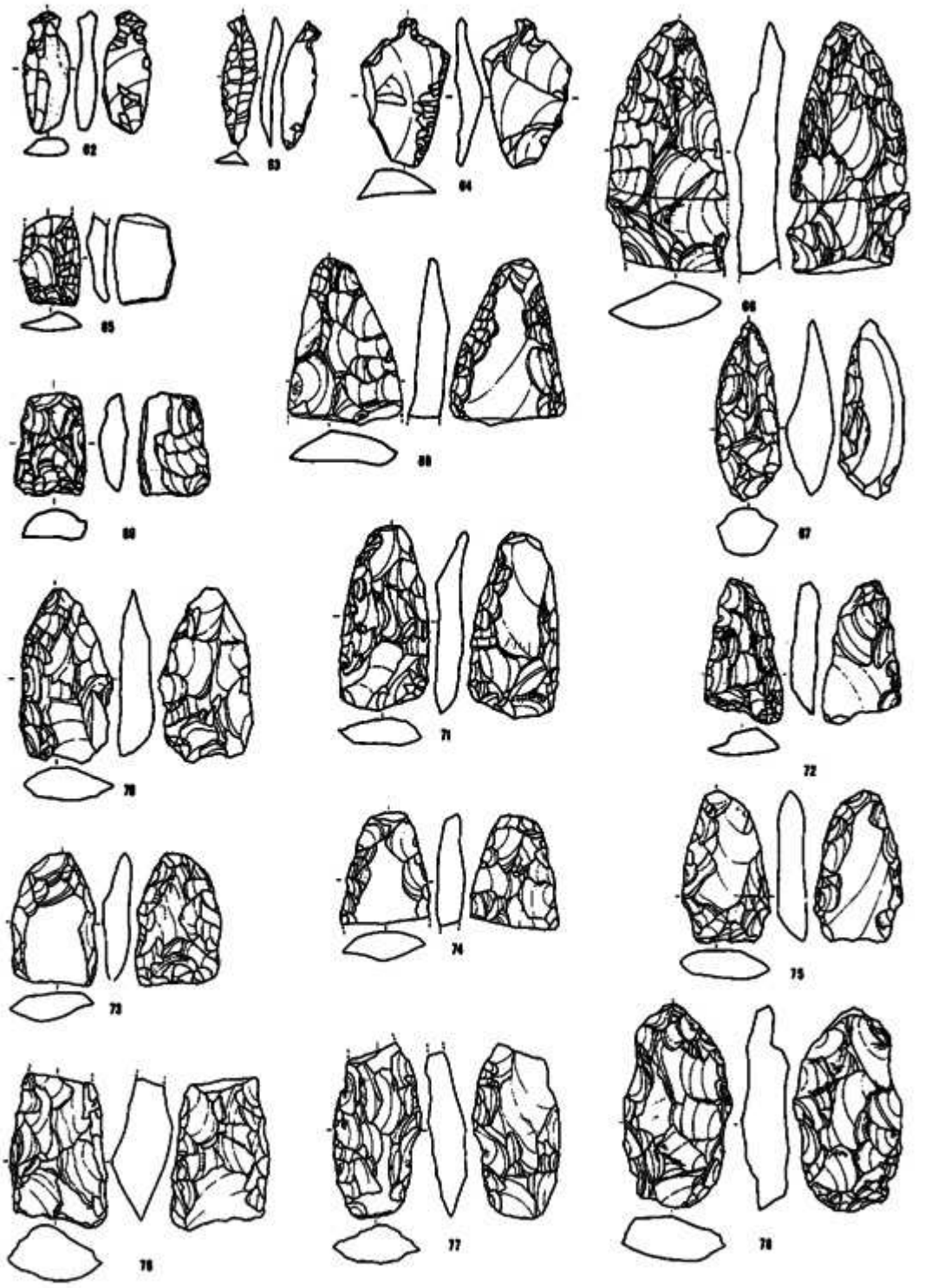
B－11ピット出土石器：7・17・59・80・84・88・91・102・158、D－14ピットNo1出土石器：58、C－16ピット出土石器：49、これら遺構に直接関係ある石器以外の石器の出土地は第I層より第III層上面にかけてであり、出土状態に特に目立つ特殊性はみられない。



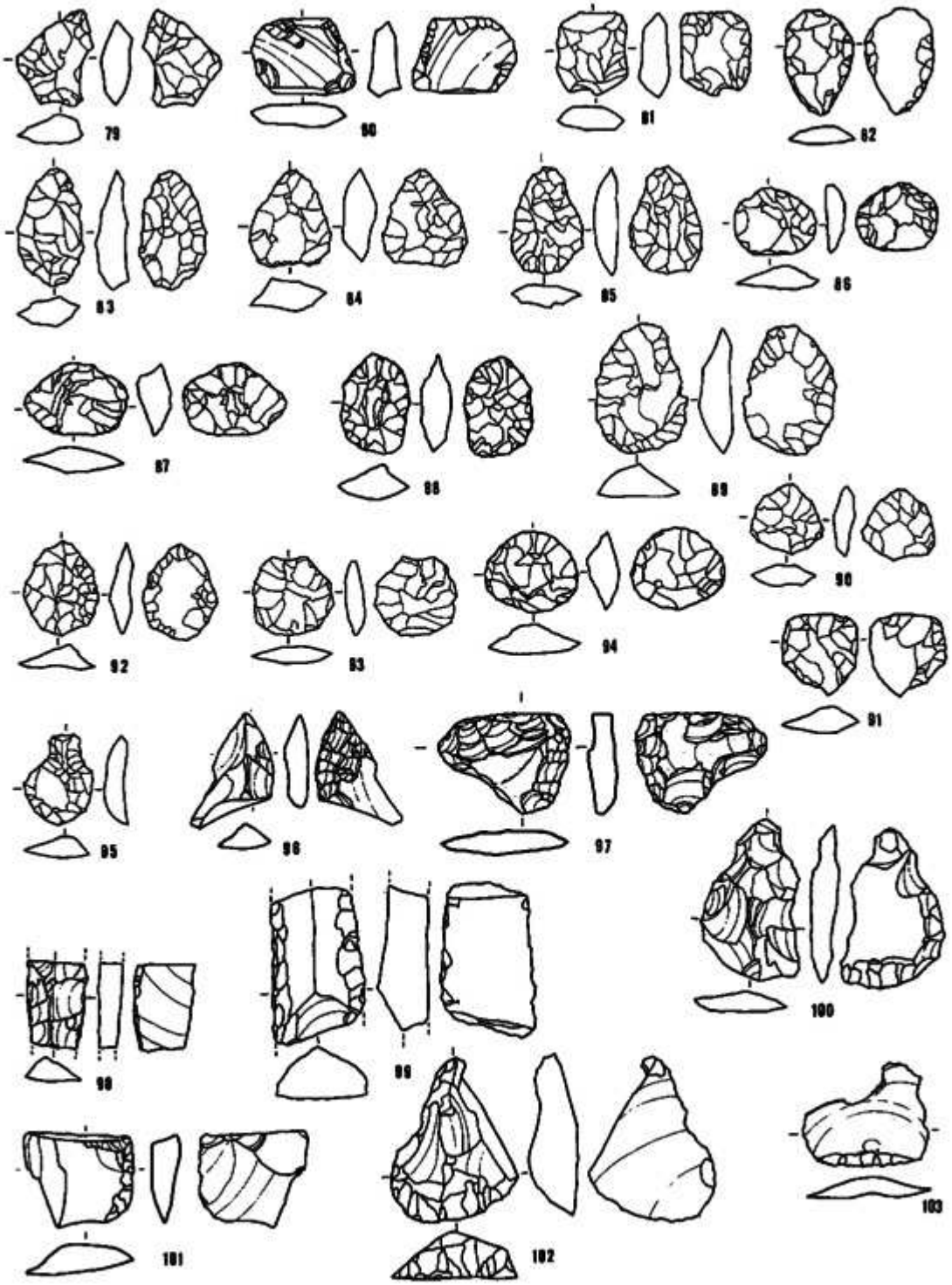
図版14　石器実測図１


28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
0
2.5
5cm

図版15　石器実測図２

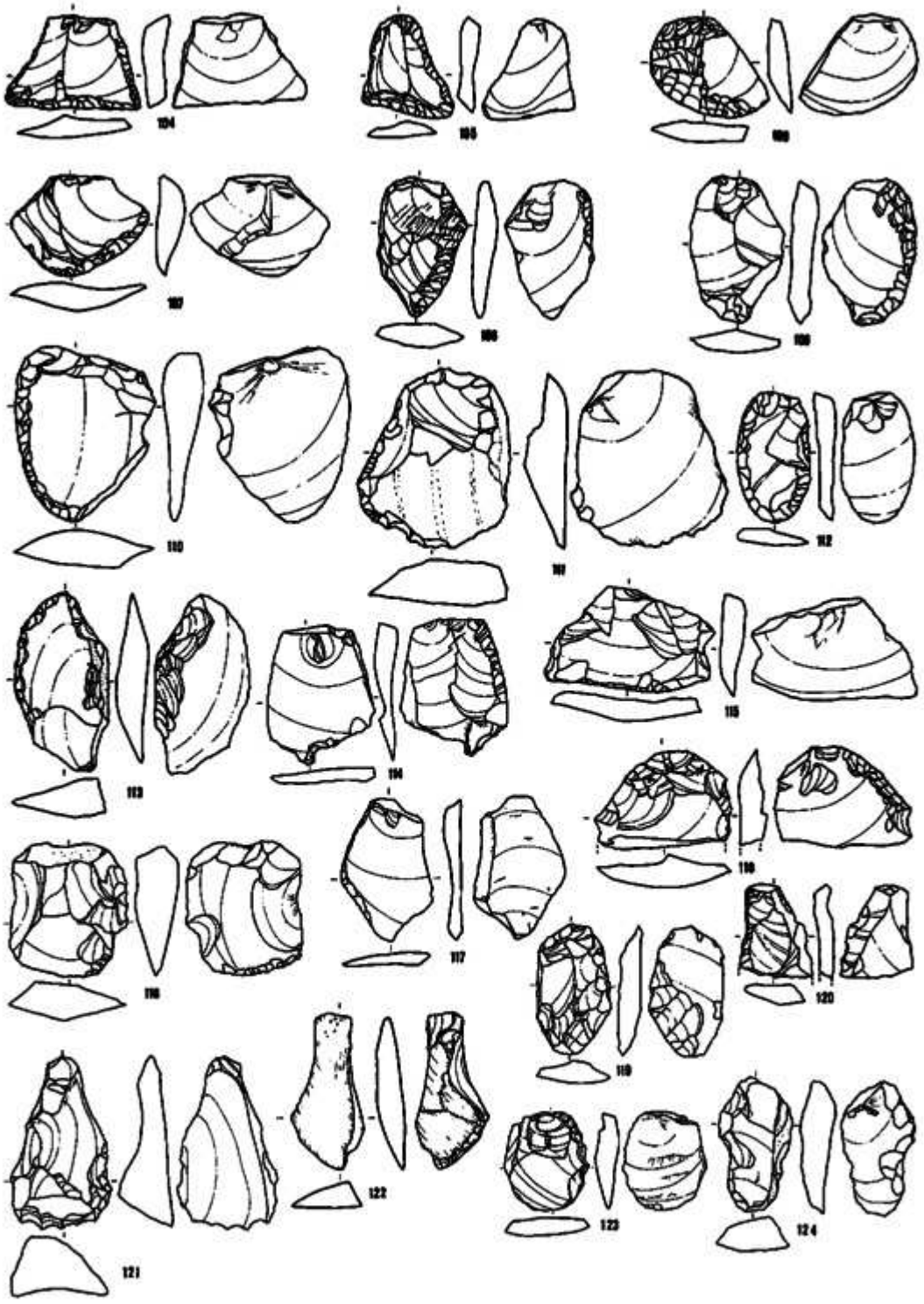


図版16　石器実測図３

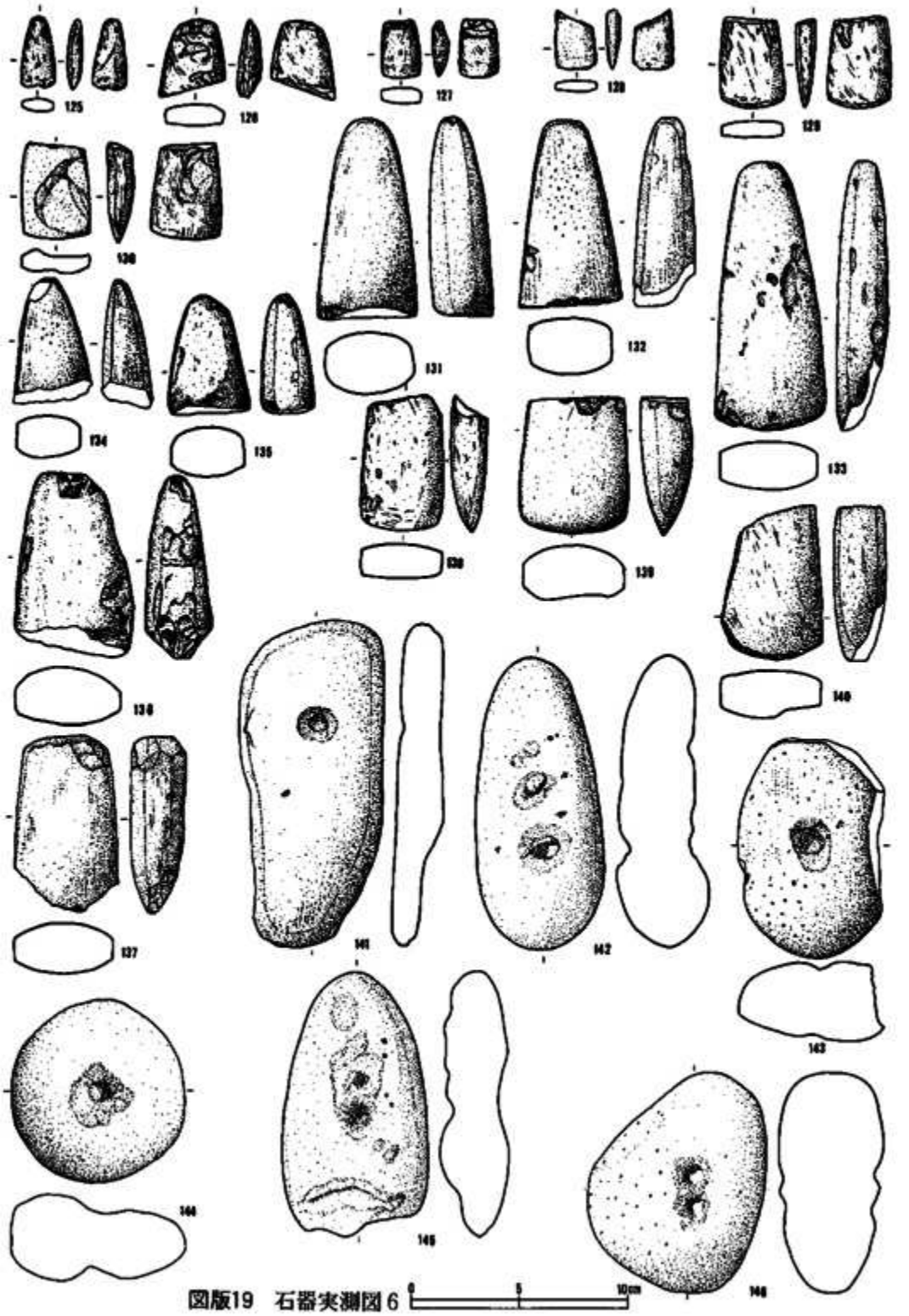


図版17　石器実測図4

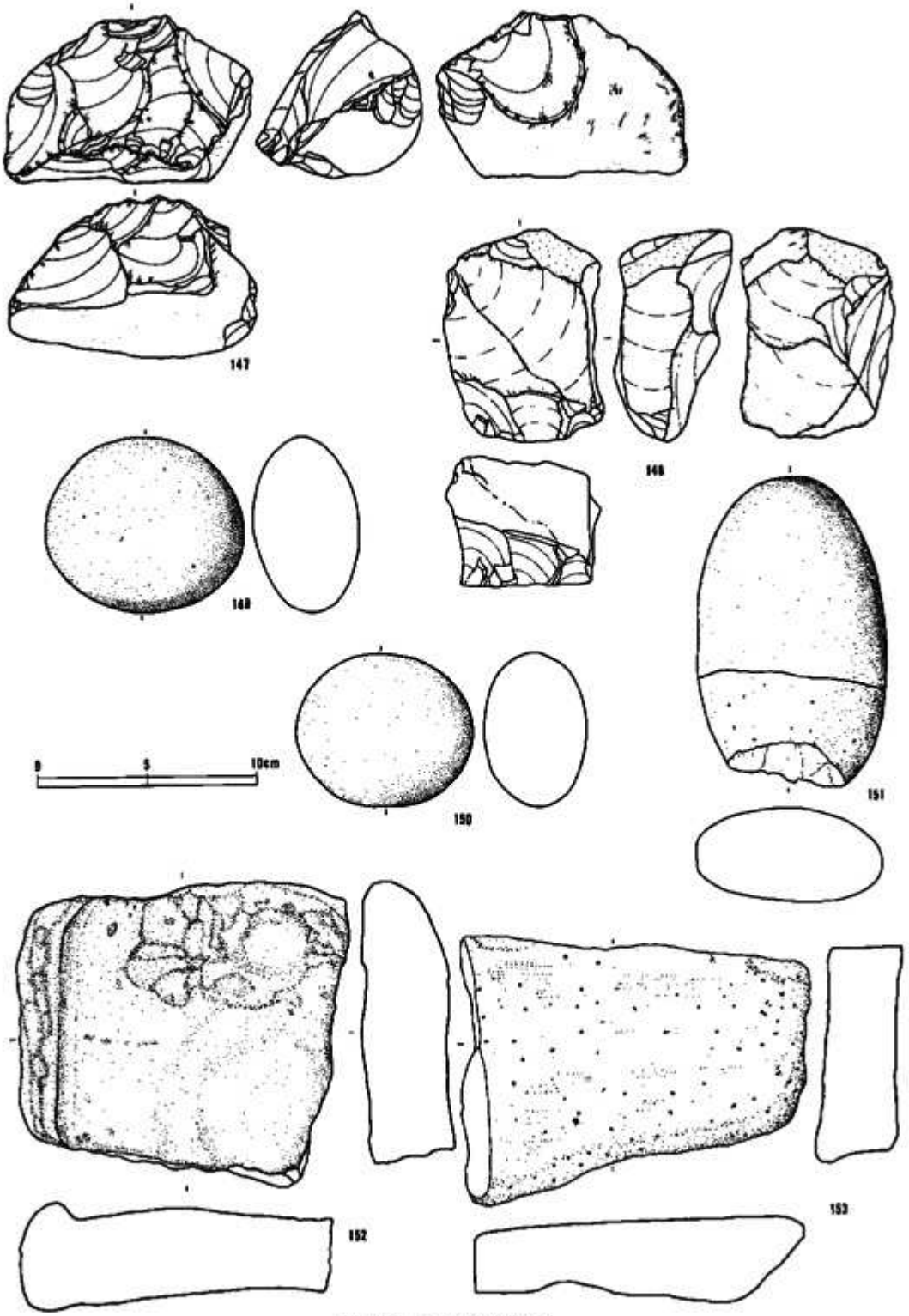
0　5　10cm



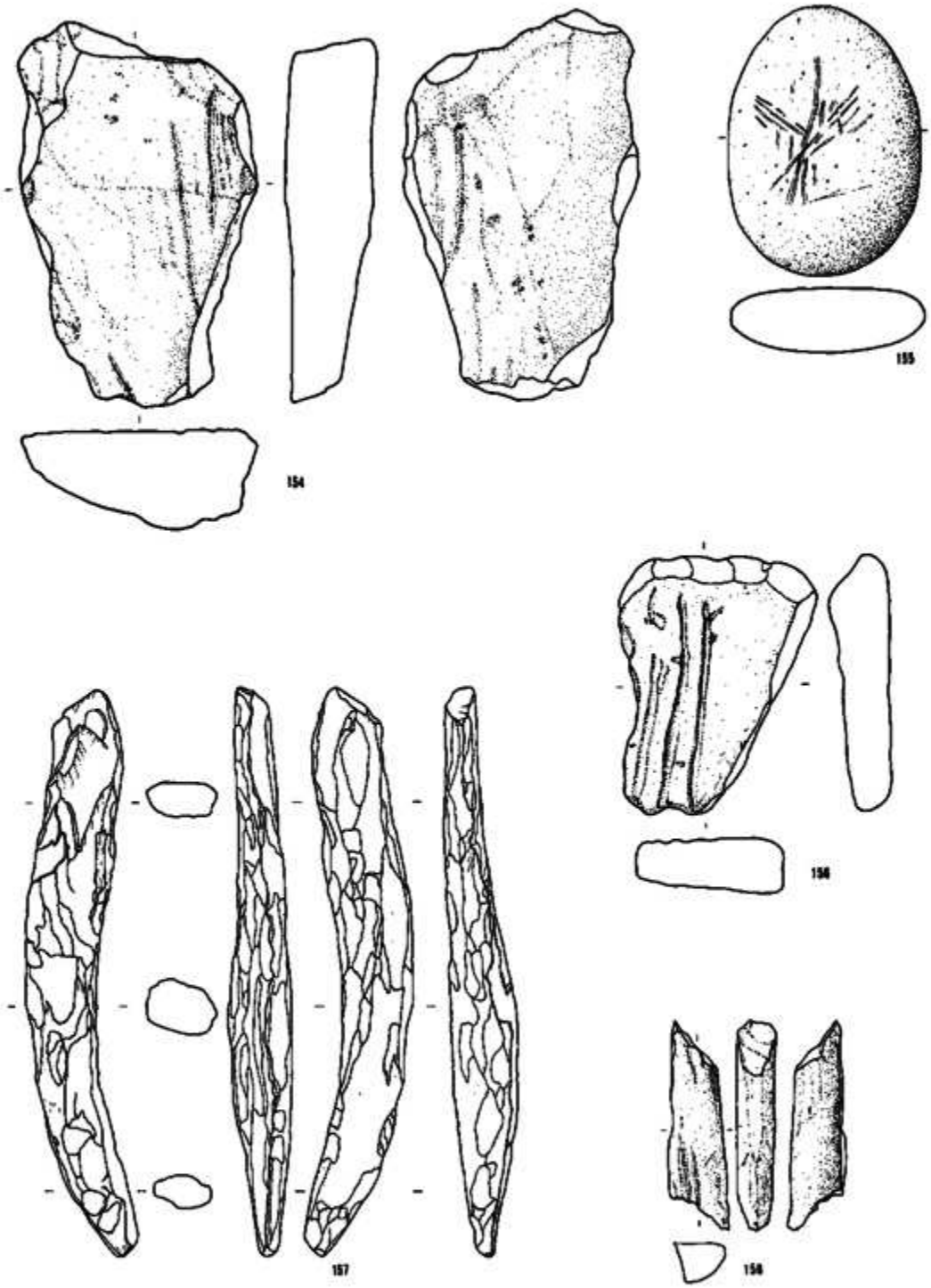
図版18　石器実測図５


125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
0
5
10cm

図版19　石器実測図6



図版20　石器実測図７



図版21　石器実測図 8

図版	番号	グリット名	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
	1	C−12	II	6.5	1.1	0.7	6.58	玻璃質安山岩
	2	C−12	II	4.6	1.2	0.6	3.52	〃
	3	F−3	I	4.2	0.9	0.3	2.13	玻璃質石英安山岩
	4	D−11	II	4	1.1	0.6	2.75	〃
	5	E−5	II	3.8	0.7	0.5	1.5	〃
	6	C−12	II	3	0.7	0.4	0.9	玻璃質安山岩
	7	B−11ピット	2	3.8	1.6	5.5	3.15	流紋岩
	8	表採	−	2.1	1.5	0.4	0.88	〃
	9	G−2	I	4.5	1.4	0.5	3.3	玻璃質石英安山岩
	10	D−11	II	1.75	1	0.4	0.38	〃
	11	D−14	I	3	1.5	0.8	1.95	〃
	12	D−12	II	2.7	2.1	0.6	3.18	玻璃質安山岩
14	13	表採		2.8	2.1	0.5	1.5	玻璃質石英安山岩
	14	表採		2.7	2.1	0.35	1.53	〃
	15	G−6	I	2.3	1.7	0.5	0.95	流紋岩
	16	C−10	II	2.2	1.4	0.4	1.1	玻璃質石英安山岩
	17	B−11ピット	2	2.6	1.35	0.55	1.25	〃
	18	表採		2.7	1	0.35	1.2	〃
	19	D−3	I	3.9	1	0.7	2.3	〃
	20	D−8	III	3.8	1.8	04 5	1.9	玻璃質安山岩
	21	D−11	I	2.25	1.4	0.45	0.75	〃
	22	D−11	III	2.5	1.4	0.35	0.55	玻璃質石英安山岩
	23	E−14	I	2.45	1.6	0.5	0.95	〃
	24	深掘	I	2.4	1.8	0.4	1.18	〃
	25	C−8	I	2.7	1.7	0.35	0.6	玻璃質安山岩
	26	E−11	II	2.0	1.35	0.3	0.35	玻璃質石英安山岩
	27	D−6	I	1.5	1.7	0.4	0.55	玻璃質安山岩
	28	F−9	II	2.1	1.1	0.3	0.45	玻璃質石英安山岩
	29	D−12	II	1.7	1.1	0.4	0.48	〃
	30	E−14	I	2	1.3	0.4	0.7	〃
	31	C−10	II	1.7	1.3	0.3	0.4	〃
	32	D−9	II	2.5	1.7	0.5	1.2	〃
	33	表採		1.2	1.2	0.4	0.33	〃
	34	D−3	I	2.15	1	0.4	0.5	〃
	35	E−14	II	2.35	1.25	0.3	0.45	〃
	36	表採		2.3	1.8	0.25	0.45	〃
	37	D−3	I	2.9	1.2	0.35	0.85	赤色チャート
	38	B−12	I	2.45	1.5	0.4	0.7	玻璃質石英安山岩
	39	E−5	I	2.5	1.2	0.35	0.65	〃
15	40	F−5	I	2	1.2	0.4	0.55	〃
	41	表採		2	1.1	0.35	0.45	〃
	42	E−3	I	2.3	1.1	0.4	1	〃
	43	F−3	I	2.2	1.25	0.5	0.6	〃
	44	C−11	III	2.1	1.3	0.3	0.45	〃
	45	表採		2	1.1	0.35	0.4	〃
	46	D−3	I	1.9	1.35	0.45	0.65	〃
	47	D−7	II	2	1	1.25	0.25	〃
	48	D−3	I	1.6	1.4	0.3	0.3	赤色チャート
	49	C−16ピット	1	1.5	0.9	0.3	0.45	玻璃質石英安山岩
	50	C−11	IV	1.7	1.35	0.3	0.4	〃
	51	F−3	II	1.8	1	0.5	0.3	〃
	52	D−3	II	1.6	1.4	0.4	0.5	赤色チャート
	53	G−9	II	1.7	1.3	0.4	0.5	玻璃質石英安山岩

石器計測表 1

図版	番号	グリット名	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
15	54	C－9	II	1.5	1.3	0.45	0.5	玻璃質石英安山岩
	55	D－12	II	1.8	1.5	0.45	0.85	〃
	56	F－3	II	1.6	0.9	0.4	0.4	〃
	57	D－8	III	1.7	1.2	0.25	0.3	〃
	58	D－14ピット	1	3.25	1.6	0.4	1.95	玻璃質安山岩
	59	B－11ピット		3.35	1.1	0.85	2.47	〃
	60	D－3	I	2.25	1.3	0.6	1.35	玻璃質石英安山岩
	61	G－3	I	2	0.4	0.4	0.3	〃
	62	D－3	I	5.5	2.1	0.9	11.13	〃
	63	G－4	I	5.9	1.6	0.5	4.2	玻璃質安山岩
	64	表採		6.7	4	1.3	24.88	玻璃質石英安山岩
	65	E－6	II	4	2.75	1	9.8	〃
	66	F－6	II	11.3	5.2	2	106.7	〃
	67	G－7	I	8.1	2.8	2.2	43.2	玄武岩
	68	G－6	II	7.5	5.2	1.4	64.7	玻璃質安山岩
16	69	B－8	II	4.4	3.1	1.2	21.38	〃
	70	E－6	II	8.1	3.9	1.5	52.95	玻璃質石英安山岩
	71	E－6	II	8.5	4	1.4	45.7	〃
	72	G－4	I	5.7	3.5	1.2	24.2	〃
	73	G－6	III	5.9	3.7	1.2	32	〃
	74	G－2	I	5.2	3.8	1.3	27.5	〃
	75	F－6	II	7	4.1	1.4	39.35	〃
	76	G－3	I	6.4	4.2	2.5	72.2	〃
	77	D－3	I	7.5	3.8	2	59.5	〃
	78	F－7	II	9.2	4.8	2.1	88.5	〃
	79	E－3	I	3	2	0.9	4.18	〃
	80	B－11ピット	2	2.2	2.7	0.9	6.45	〃
	81	B－13	II	2.4	2	0.8	4.55	〃
	82	F－6	I	3.1	2	0.6	3.1	〃
	83	B－13	II	3.4	1.8	0.9	4.9	〃
	84	B－11ピット	2	2.7	2.3	0.8	4.5	〃
	85	C－12	II	3	2.1	0.7	3.7	〃
	86	C－12	III	1.9	2.3	0.7	2.8	〃
	87	D－13	I	2	3	0.9	4	〃
	88	B－11ピット	2	2.7	2	1	4.25	〃
	89	表採		3.7	2.6	1	9.55	〃
17	90	D－11	III	1.9	2.1	0.6	2.2	〃
	91	B－11ピット	2	2.3	2.1	0.8	2.85	〃
	92	G－2	I	2.7	2.1	0.7	3	〃
	93	D－8	II	2.3	2.3	0.6		流紋岩
	94	E－10	II	2.3	2.6	1	4.3	メノウ
	95	D－14	II	2.5	1.9	0.7	3	玻璃質石英安山岩
	96	F－6	II	3.6	1.8	0.8	3.8	〃
	97	D－3	I	2.8	3.7	0.9	8.6	〃
	98	F－2	II	2.4	1.7	0.7	3.3	〃
	99	C－12	II	4	2.7	1.5	19.85	〃
	100	D－3	I	4.6	2.7	0.9	8.85	〃
	101	D－14	I	3.2	2.5	0.9	8.05	〃
	102	B－11ピット	2	4.2	3.7	1.5	18.65	流紋岩
	103	C－17	I	2.9	3.5	0.6	4	玻璃質石英安山岩
	104	C－8	II	4	6	1.2	25.25	〃
18	105	F－4	III	4.2	3.9	1	14.2	〃
	106	B－16	II	5.7	4.1	1.1	24.7	〃

石器計測表 2

図版	番号	グリット名	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
	107	C−12	II	4.4	6.2	1.2	20.08	玻璃質石英安山岩
	108	C−12	III	6.1	3.9	1.1	30.01	〃
	109	C−9	II	6.4	4.1	1.3	31.05	〃
	110	D−3	I	7.9	6.2	2	82.8	玻璃質安山岩
	111	D−6	II	8	6.6	2.1	101.3	玻璃質石英安山岩
18	112	E−3	I	5.8	3.2	1	21.6	〃
	113	E−6	II	8.2	4.2	1.8	52.95	〃
	114	B−10	I	6.2	4.8	1.3	28.95	玻璃質安山岩
	115	C−16ピット		4.6	7.4	1	35.8	玻璃質石英安山岩
	116	D−11	II	6	5.1	2.1	56.15	〃
	117	D−13	II	6.4	3.9	0.9	17.7	流紋岩
	118	G−4	I	4.5	6.2	1.4	36.9	玻璃質石英安山岩
	119	D−4	I	5.9	3.1	1	20.45	〃
	120	C−15	I	4.3	3.3	1	12.45	〃
	121	G−6	II	7.6	4.6	2.5	67.6	〃
	122	A−12	II	7	3.3	1.5	22.7	〃
	123	B−9	I	4.5	3.7	1	15.05	〃
	124	G−1	I	6.1	3.3	1.6	28.95	〃
	125	D−14	I	3.2	1.6	0.65	4.6	蛇紋岩
	126	B−12	I	3.1	2.9	1.15	14.65	〃
	127	D−3	II	2.6	1.6	0.75	5.95	緑色岩
	128	D−14	I	2.3	1.7	0.7	4.95	蛇紋岩
	129	G−4	I	4.1	2.5	0.9	15.85	〃
	130	表採		4.3	2.7	1.35	24.9	粘板岩
	131	E−3	I	9.3	4.5	2.8	195.5	珪岩
	132	G−6	I	8.7	4.8	2.7	172.8	〃
	133	D−14	I	12.2	5.1	2.3	234	斑糲岩
	134	C−16	I	5.8	3.5	2.3	60.5	珪岩
19	135	C−12	II	5.6	3.8	2.6	73.5	〃
	136	D−13	II	8.6	5.6	3.1	209	〃
	137	D−3	I	8.3	4.9	2.6	168.1	〃
	138	表採		6.2	3.3	1.7	57.65	蛇紋岩
	139	D−7	II	6.4	4.5	2.6	135.9	珪岩
	140	C−8	I	6.9	3.8	2.3	126.5	〃
	141	B−11ピット	2	14.9	6.7	2.2	305	凝灰質頁岩
	142	C−3	I	13.5	6	4.4	415	砂岩
	143	G−2	II	10.3	6.8	3.5	255	珪岩
	144	D−14	I	8.3	8	4.1	270	〃
	145	A−13	I	12.3	6.8	3.2	240	凝灰岩
	146	D−11	II	10.6	8.1	4.7	420	〃
	147	B−16	I	11.7	7.9	6	540	玻璃質石英安山岩
	148	G−2	I	9.9	6.6	4.3	360	流紋岩
	149	表採		9	8	4.9	440	珪岩
	150	D−11	II	8.4	7.1	4.7	385	〃
20	151	G−4 E−2	I	14.3	8.8	4.3	810	玻璃質安山岩
	152	表採		14.4	13.8	4.2	1,240	砂岩
	153	D−8	I	4.1	3.9	1.5	705	凝灰岩
	154	C−9	I	17.1	10.3	3.8	780	砂岩
	155	C−9	III	11.7	8.3	2.8	385	凝灰質砂岩
21	156	表採		11.5	7.5	2.8	200	凝灰岩
	157	D−3	I	24.9	3.5	2.5	265	凝灰質粘板岩
	158	B−11ピット	2	7.6	2.7	1.8	50	砂質粘板岩

石器計測表 3

V. ま　と　め

以上、町場－Ⅲ遺跡の遺構、遺物について述べてきたが、ここで若干の考察を加えてまとめとする。

1. 遺　構

本遺跡で検出された遺構は焼土遺構1基とピット7基であり、遺跡の広さからみて少ない。焼土遺構は前述のごとく、住居址として確定づける資料はなく、住居址に伴う炉址としての性格づけはできない。現地性の焼土であり、焼土内より縄文式土器の細片を1片検出していることから縄文時代に形成された屋外炉的な性格を持つと推定される。

ピットは7基検出され、いずれも基本層序第Ⅲ層上面で検出されている。平面形態や埋土の状態、出土土器の有無などに違いはあるものの同一時期と考えられる。時期としては、検出面上位の遺物包含層（第Ⅰ層）に縄文時代後期の土器片が多いことや、ピット上部及びピット埋土中に縄文時代後期の土器片を含むことなど、出土遺物より推定するといずれのピットも縄文時代後期初頭頃に使用や、廃棄されたものと考えられる。各ピットの性格は形状や深さ等が異なるが、B－11ピット以外は埋土中に小礫や暗褐色土のブロック等が不規則に入り込んでおり意図的に埋められたものと推定される。さらにC－9ピット、A－12ピット、C－16ピットの上部に礫や土器片を配しているものなどがあることから埋葬施設とも考えられ、上部の礫は墓標としての役割を果していたとも考えられる。B－11ピットは砂礫層まで掘り込んだ後、黒褐色土で貼り床を造っている。非常に堅く踏み締められている。このことから貯蔵穴と考えられるものであるが、壁の保存状態が良いことや埋土がほぼ同一の土層で構成されており、廃棄時に意図的に埋めもどされたものと考えられる。

2. 遺　物

調査区内の遺物出土状況は耕作土であるⅠ層中からのものがほとんどである。出土遺物としては土器、土製品、石器がある。土器は小破片で摩滅しているものが多い。時期は縄文時代早期末頃から弥生時代まで各期にわたっているが多くは縄文時代後期のものである。第1類としたのは胎土に繊維を含むことや、底部形態より縄文時代早期末から前期初頭に位置づけられ、早稲田貝塚6類頃に相当すると考えられる。第2類としたものは隆帯による渦巻文や隆帯が丸みを帯びるなどのことから大木8b式から9式期に相当するものである。第3類より第6類までは出土量も多く本遺跡の主体をなすもので、ピット埋土中からも出土しているものである。

施文方法や文様のモチーフ等より縄文時代後期初頭に位置づけられ、関東の堀ノ内Ⅰ式、東北北半の大湯式、十腰内Ⅰ式などに類似するものである。土製品は土偶、鐸形土製品、耳栓、円盤状土製品が後期の土器片と共に出土した。土偶はいずれも破損品であり、五体が分離している。G－6グリット、E－2グリット出土のものは胴部に沈線による衣類のような文様を表わしている。他の土偶の胴部はいずれも無文である。掌はスプーンのように窪んでおり、脚は胴部に比して短かく足裏も円形状に広がっている。また欠損部分にはアスファルト状のものが付着しており、修復して使用したことがうかがえるものもある。石器は石鏃、石錐、石匕、石槍、など種類としては一般的なものが多い。なかでも石鏃の出土量が多く、有茎で逆刺のあるものが注目される。石器の出土状態は、散在しており特に集中的に出土することはなかった。

3．遺跡の性格

遺跡及び遺跡周辺の現状は前述のごとく、学校用地、宅地、牧草地、砂利採集取地であり、旧地形を残している部分が少なく、遺構のひろがりを把握することができなかった。しかし調査区域より、遺構、遺物が検出され、遺構が調査区内の西側寄りに検出されることや、調査区西側、学校用地北側の砂利採取跡で遺物が採集できたとの地元民の話などから今回調査した部分は遺跡の一部とも考えられる。調査区域では、住居址等直接生活に結びつく遺構は発見できないが、出土遺物より縄文時代早期末から弥生時代にかけての生活の場であったと推察される。また後期の土器片と共にピットが検出され、遺物も後期のものが多いなどの点から、特に縄文時代後期頃の時期に生活の場としていたと考えられる。

参考文献

①	「大湯環状列石」	鹿角市教育委員会	1976年
②	「十腰内遺跡」	十腰内遺跡調査団	
③	「中の平遺跡」	青森県教育委員会	昭和50年３月
④	「早稲田貝塚」上北考古学会報告１	上北考古学会	1960年
⑤	「港南台」	神奈川県教育委員会	1976年
⑥	「崎山弁天遺跡」	大槌町教育委員会	1974年
⑦	「門前貝塚」	陸前高田市教育委員会	1974年
⑧	「卯遠坂遺跡」岩手県文化財調査報告書第31集	岩手県教育委員会	昭和54年３月
⑨	「岩手県埋文センター文化財調査報告書第13集	(財)岩手県埋文センター	昭和55年３月
⑩	「雫石町史」先史時代	雫石町・町教育委員会	昭和54年
⑪	「考古資料の見方(遺物編)」地方史マニュアル６	柏書房	1977年
⑫	「日本考古学辞典」	東京堂	昭和48年１月
⑬	「考古風土記第３号」		
⑭	吉田格「関東の石器時代」	雄山閣	昭和49年
⑮	K. P. オークリー「石器時代の技術」	ニューサイエンス社	1971年

遺跡の全景　北から

調査終了後(御所ダム完成)近景　西より

調査中近景　北から

調査終了後(御所ダム完成)遠景　東より

基本土層(B－11ピット土層断面)

基本土層

写真図版1　遺跡の全景、基本土層

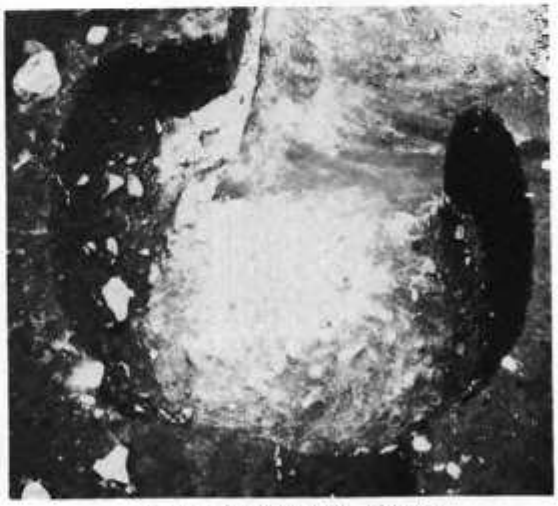
E－3焼土遺構ピット検出

C－9ピット上部石検出状況　南より

E－3焼土遺構完掘後　南から

C－9ピット完掘後　南から

E－7ピット完掘後　南から

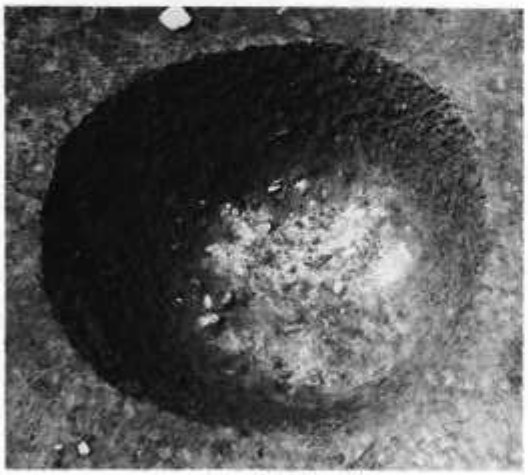


B－11ピット完掘後　南から

写真図版２　焼土遺構ピット検出状況

D－14ピットNo.1・No.2完掘後　北より

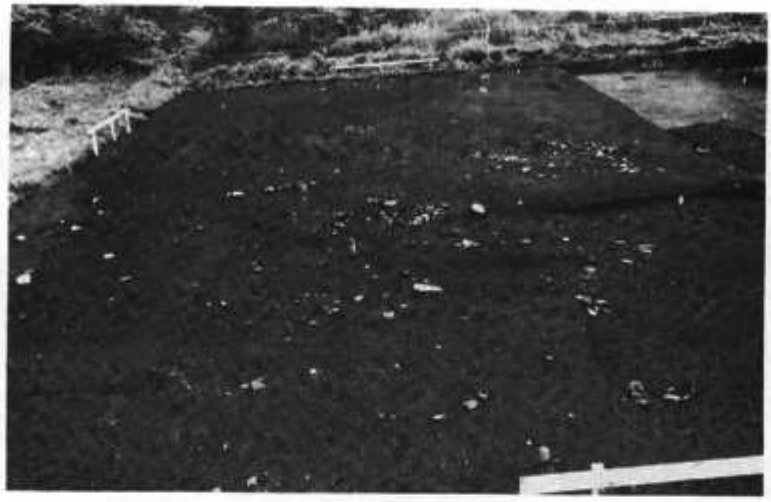
C16ピット上部礫土器出土状況　北から



A－12ピット完掘後　北から

C－16ピット完掘後　北から

写真図版３　ピット検出状況



写真図版４　遺物散布状況

写真図版５　遺物出土状況

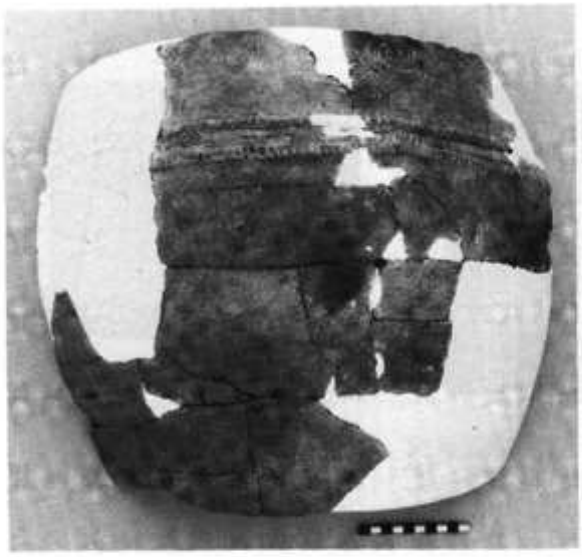
1

2

3

4

5


7

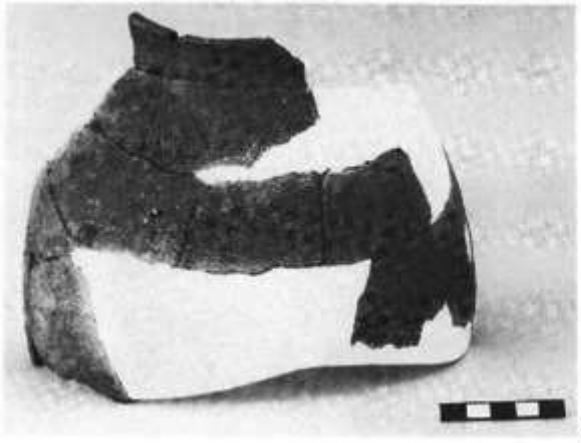
写真図版６　土器A

9

10A

10B

8


6

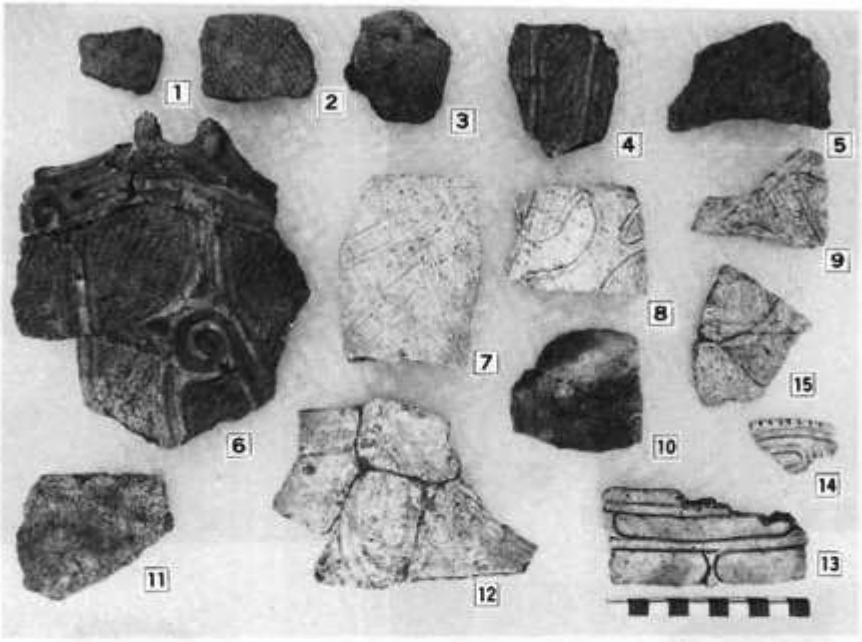
13

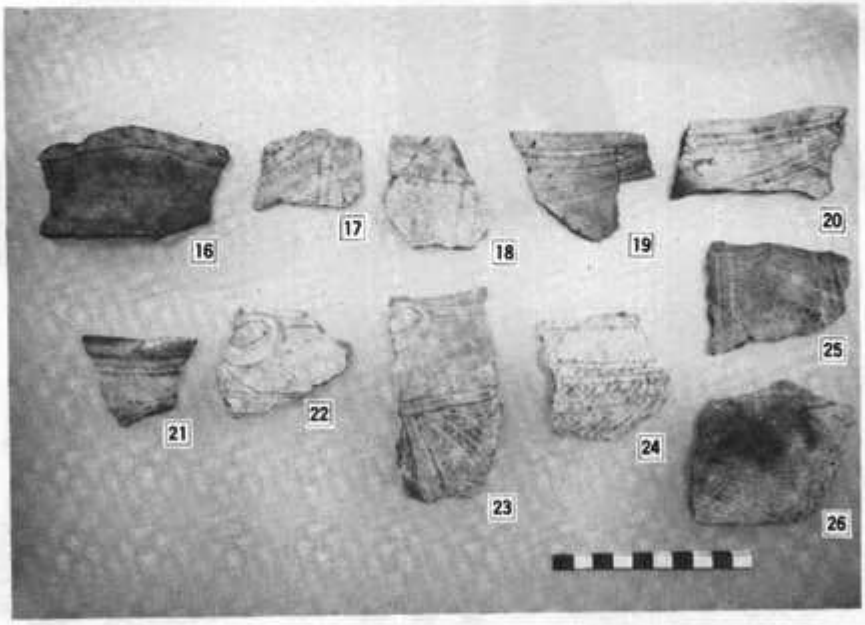
14

11

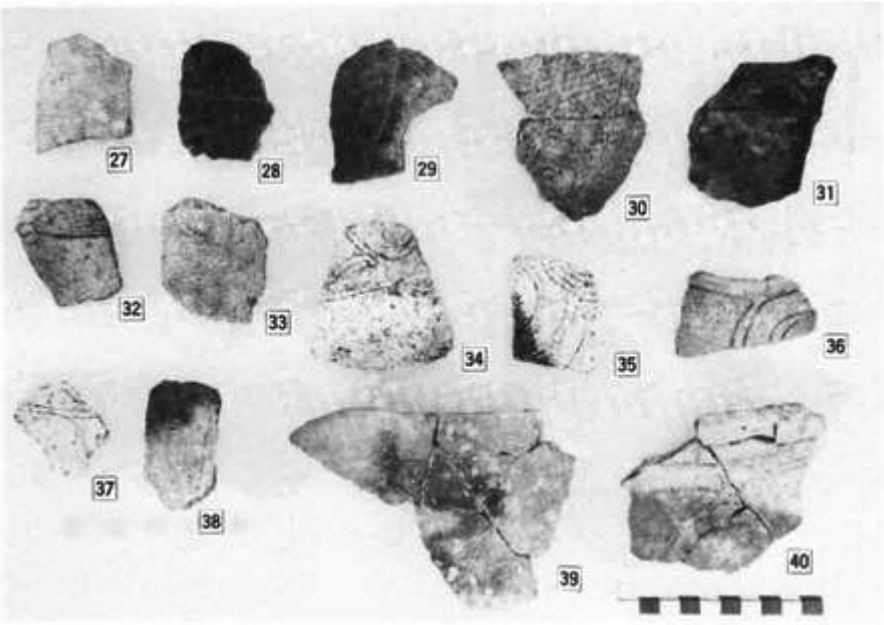
12

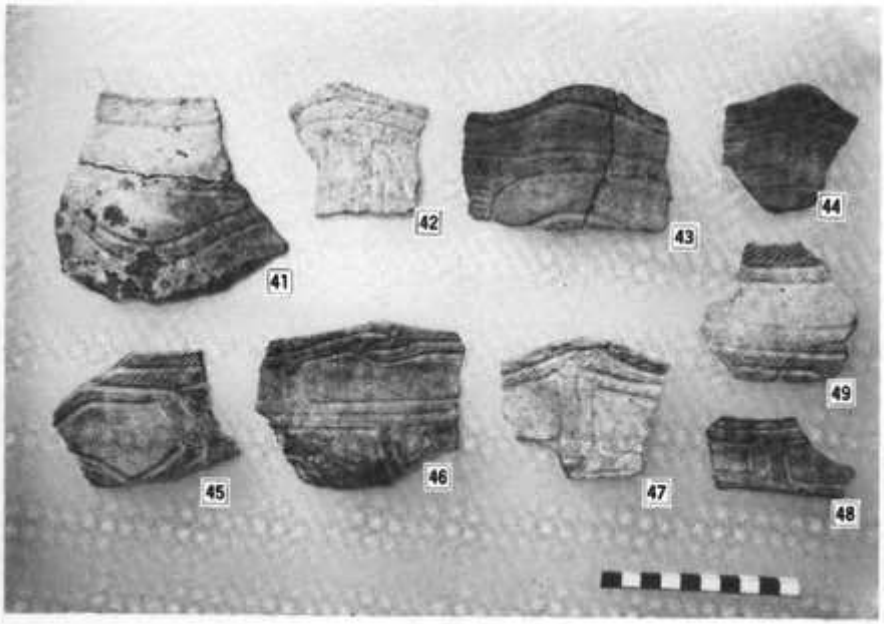
写真図版７　土器B



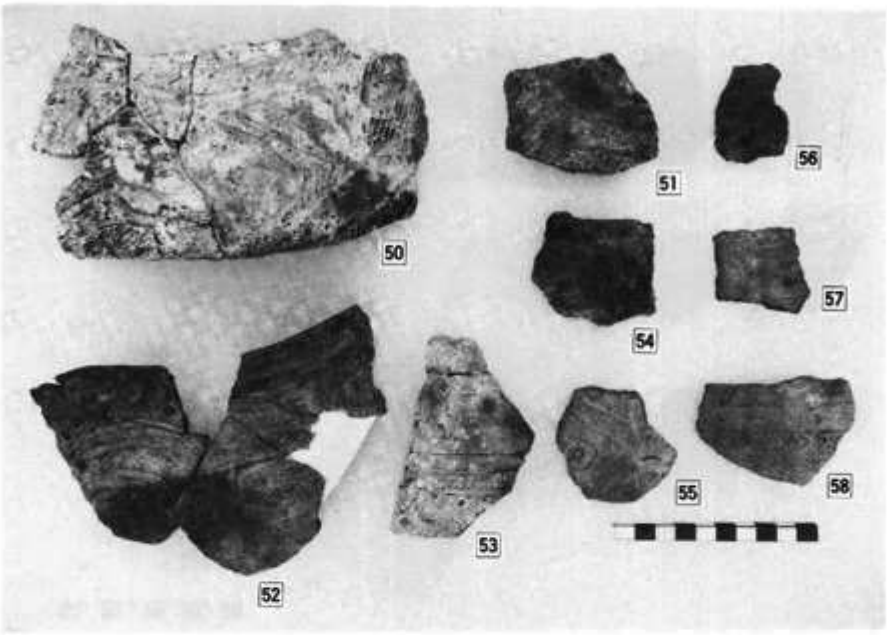


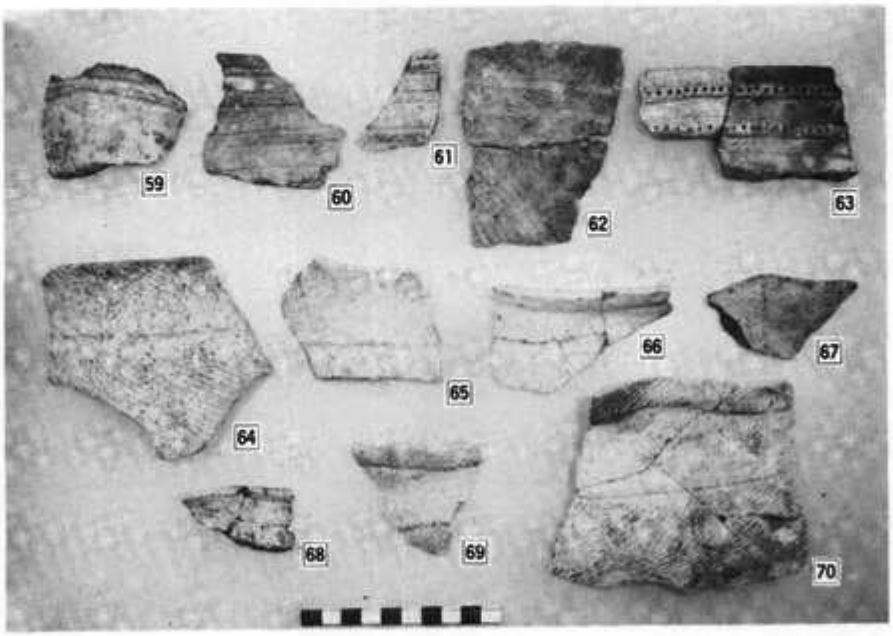
写真図版８　土器C



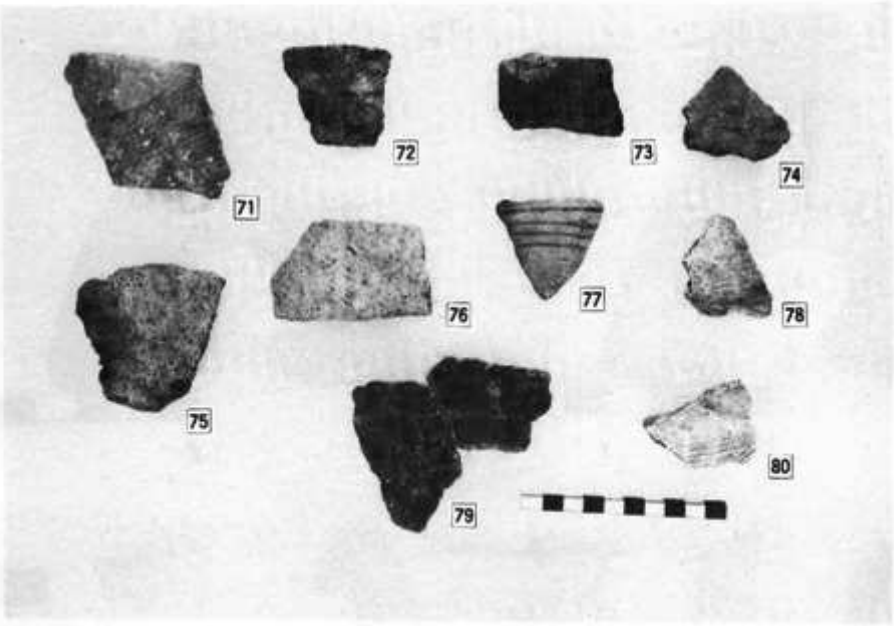


写真図版９　土器D





写真図版10　土器E

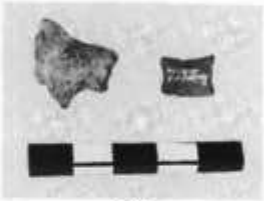


20

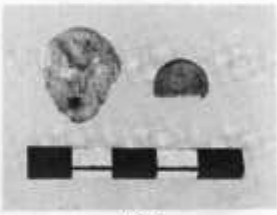
写真図版11　土器F

1表

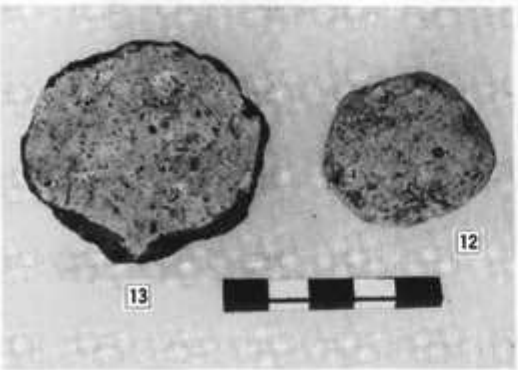
1裏



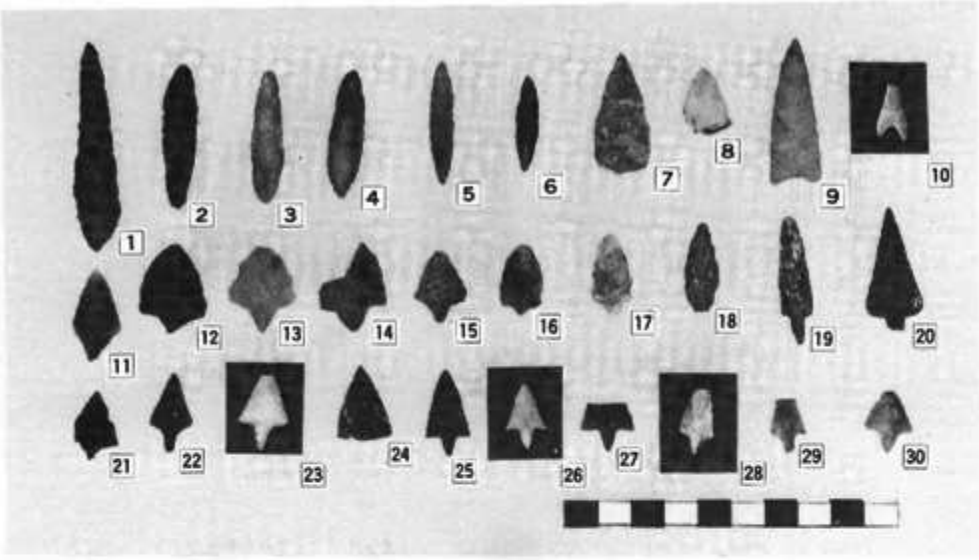
9A

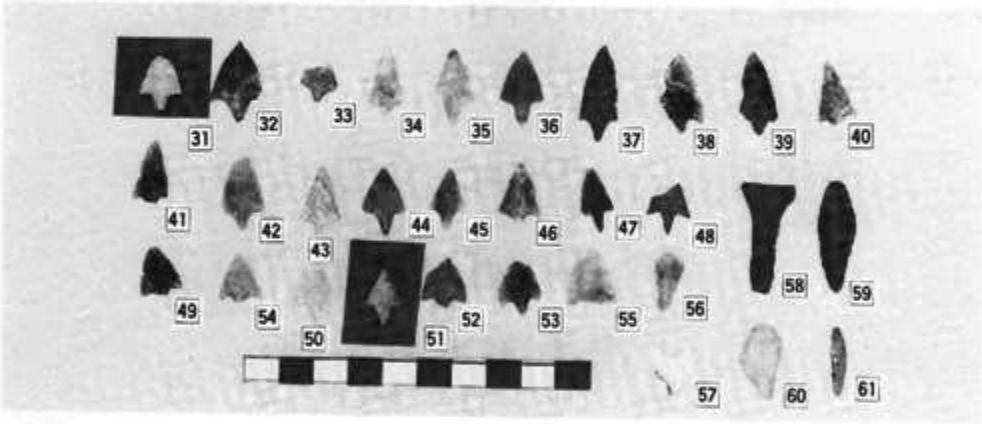


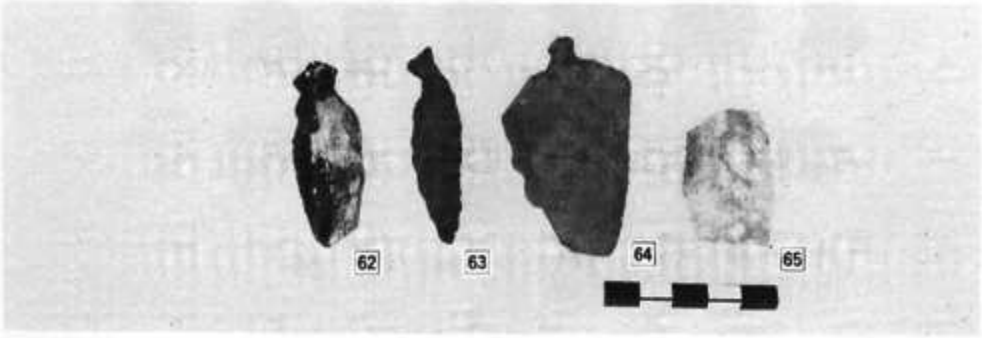
9B



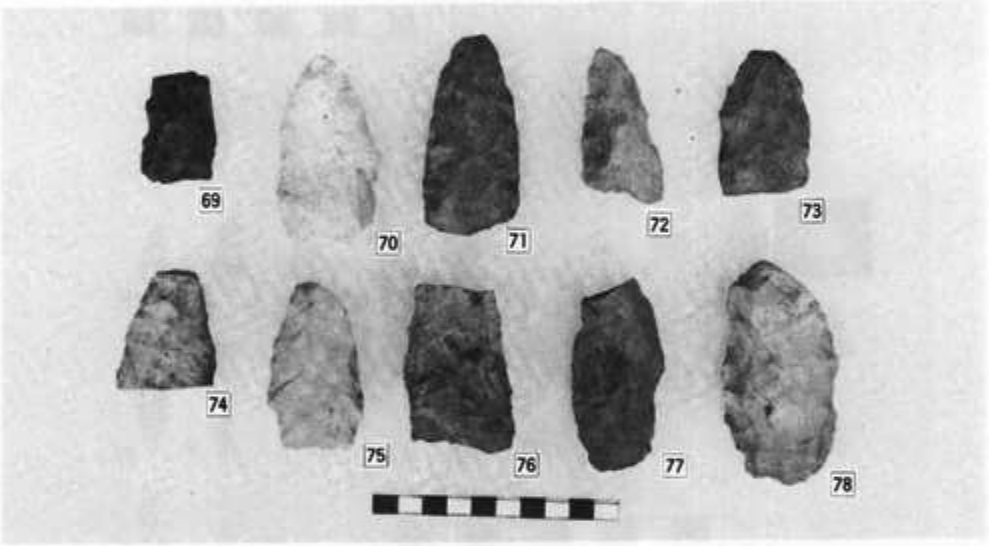
写真図版12　土偶土製品

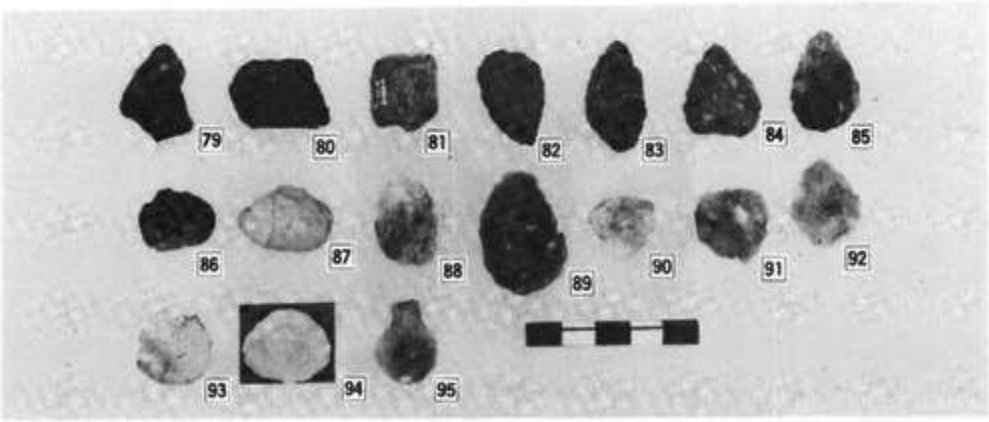




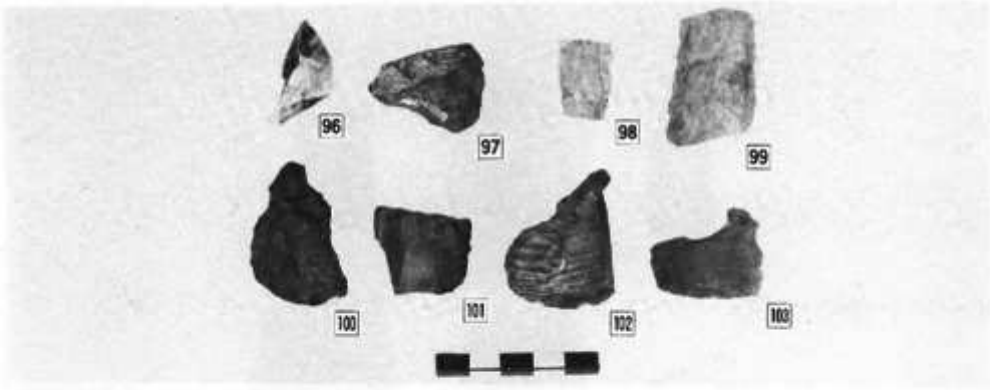


写真図版13　石器、石鏃、石ヒ



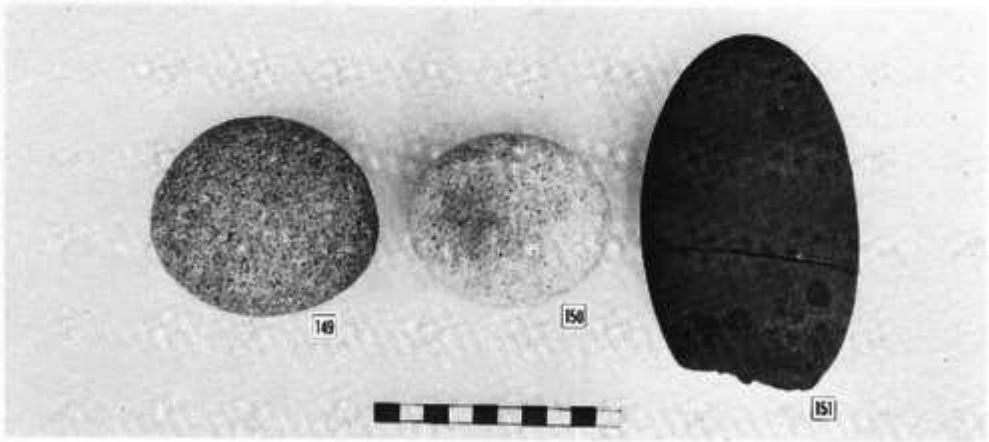


写真図版14　石槍、石ベラ、スクレーパー

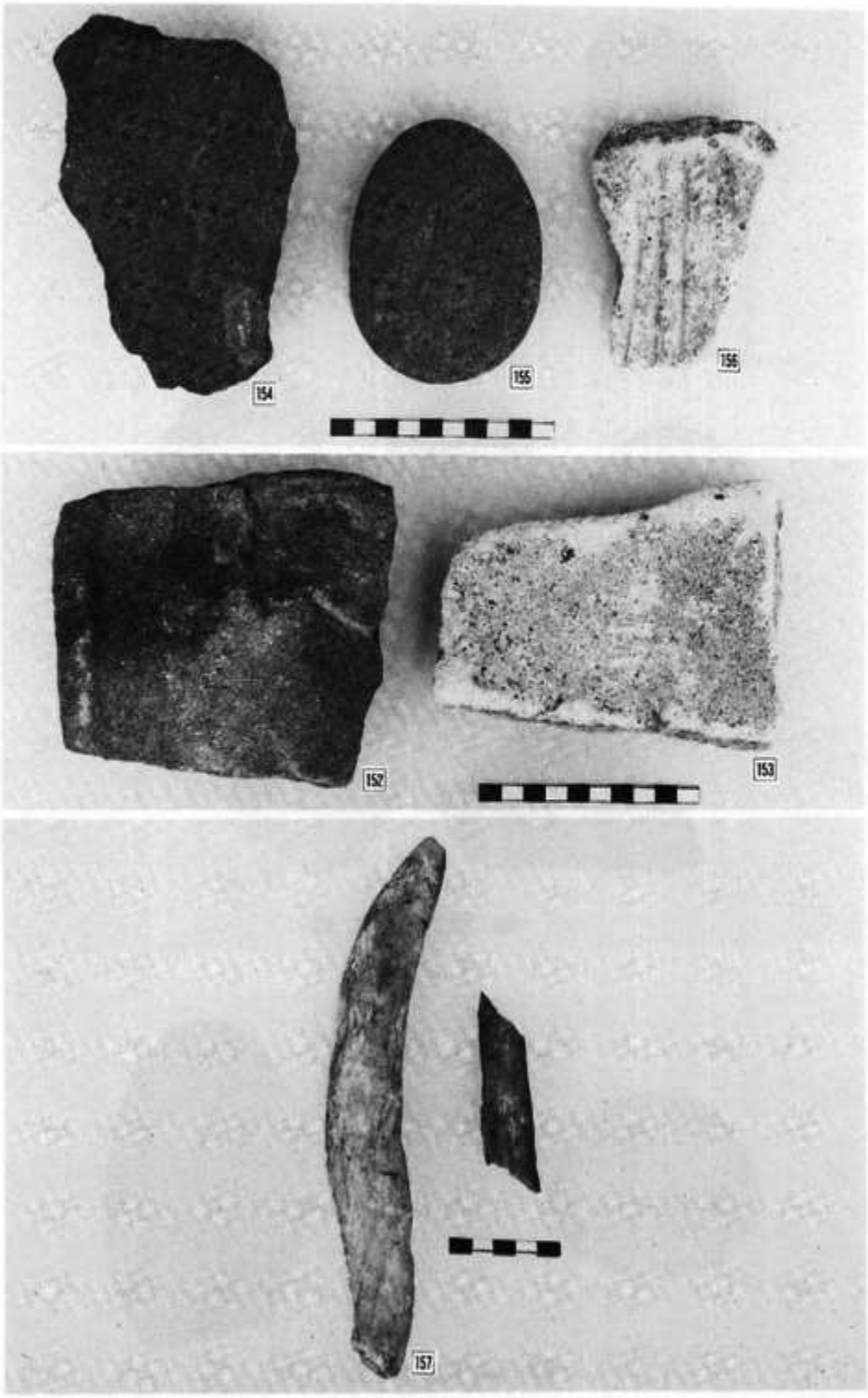


図写図版15　スクレーパー

写真図版16　石斧



写真図版17　凹石、磨石、大型粗製刃器状石器



写真図版18　石皿、石皿、石刀

下猿田Ⅱ遺跡

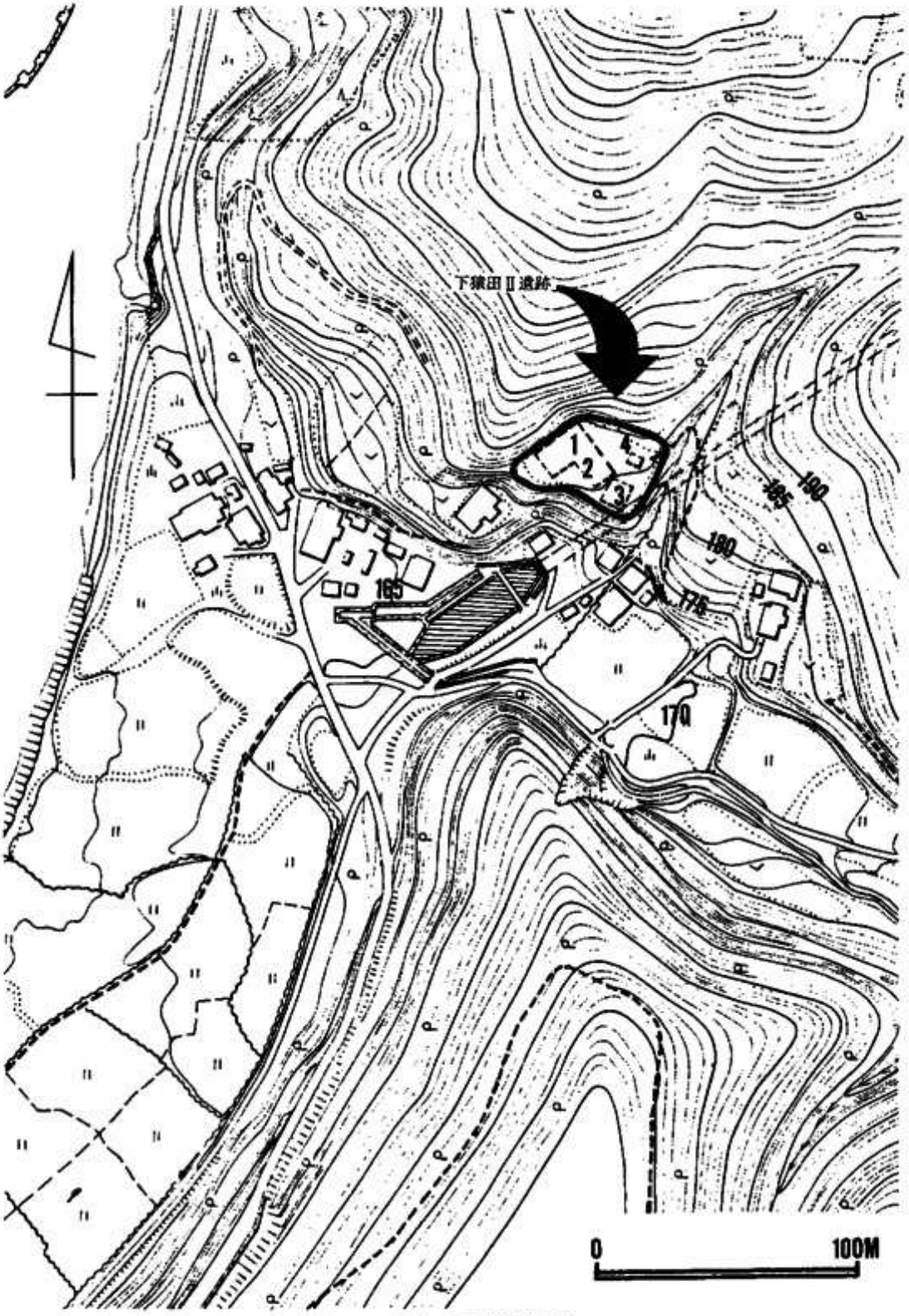
Ⅰ．遺跡の位置と環境

下猿田Ⅱ遺跡は岩手県盛岡市下猿田に所在し、盛岡駅より直線距離にして約9km西の山合いの小さな河岸段丘面上に位置する。また御所ダムのダムサイトにも近く、旧下猿田部落中の民家一軒が遺跡内に建っていた。

下猿田地区の基盤は凝灰質頁岩と凝灰質角礫岩の互層で、遺跡地内でも大分風化が進んだ凝灰岩が見うけられる。遺跡の南を流れる小繋沢は冬には沢に沿って冷たい風が間断なく吹き荒れるので、当部落を俗称「ミミトリ」とも呼ばれている。

遺跡の中央に今は岩手県紫波郡矢巾町に住んでおられる瀬川一二三氏宅の曲り家が建っていた。発掘調査時点ではダム水没補償も終わり曲り家を解体し移転後数年間経ていたので、雑草灌木がしげり、また当遺跡の山ぞいの一段高所は山を重機で削ったひな壇の造成地のため、この余った土が下に流され遺跡が部分的に1m埋っている所も見うけられた。

遺跡の海抜は180m前後で、同レベルで西に下猿田Ⅰ遺跡、同じく小沢をへだてて東に下猿田Ⅲ遺跡、また調査前に破壊されたすぐ上の段の下猿田Ⅳ遺跡がある。共に縄文早期から前期中葉を中心とした遺構遺物が発見されている。



図版1　下猿田Ⅱ遺跡位置図

II. 調査方法と経過

1．調査方法

町場II遺跡と同様に東北X系の基準点測量を利用して相対座標を求め、それに拠って遺構確認、遺構調査、遺構測量を行った。その測量に必要な2点の基準点測量を東日本設計測量株式会社に依頼した成果は次の通りである。

基ーI（下猿田II地区）

X＝－34,860.827m

Y＝＋17,486.833m

H＝　　181.084m

基ーIから基ーIIへの方向角と距離

125°27′02″、63.640m（平面距離）

基ーII（距離の関係で下猿田III地区内に設置）

X＝－34,897.738m

Y＝＋17,538.675m

H＝　　180.935m

基ーIIから基ーI·への方向角と距離

305°27′02″、63.640m（平面距離）

調査範囲が狭いため8×8mグリットを基とし全面粗掘方法をとり、近世・近現代遺構は上記グリットにのっとり、その下層から発見される旧い遺構遺物は、近世・近現代調査で得られた遺物資料と、同時に地山まで下げた横断面観察のためのテストピットから得られた資料から8×8mグリットにとらわれず、グリット掘りあるいはトレンチ掘りを利用する事にした。

2．経　過

昭和54年6月7日発掘調査を開始する。雑草、灌木伐採と一部曲り家の表土はがしを始める。18日には曲り家の精査と平行して付属建物址2軒の粗掘りを開始する。元来発掘調査が始まる前に調査員の手にあるべき基準点測量の成果が開始されて約20日経た25日にとどき、早速遺構測量のためのやり方を設置する。28日には墓址とおぼしき円形の平面プランが発見され、骨片、寛永通宝などの貨幣が出土する。7月に入り曲り家の調査が終わると同時にその下層遺構の土坑、柱穴群の精査に入る。7月26日には、曲り家にL字状にトレンチを入れ、石器・剝片など多数出土し、下層から焼土面も見つかる。8月6日に井戸址の調査を開始するが水量が多いため中途で打ち切る。今回の調査は雨天の日が多く、期日も延長をよぎなくされ盆前にようやく終わる。

Ⅲ．発見された遺構と遺物

1．近世・近現代の遺構と遺物

(1)　1号建物址

1号建物址は盛岡雫石地方では典型的な礎石建ての曲り家で、L字型の直角方向が北に向き、南に開いた型で、一般的民家の曲り家よりやや大きめの建物である。遺跡の中央に1号建物址の礎石が並ぶため、発掘調査開始とほぼ同時に建物址の粗掘りを開始した。

また、図版2中の相対座標原点Oは

X＝－34,860.00m

Y＝＋17,480.00m

a　遺　構

母屋の長軸方向は、N－52°21′－Eで母屋と直角に南東方向に土間と厩がつき、南東、北西の建物全長距離は22m、北東、南西の母屋長軸方向は19.2mの規模をもつ。

南東一北西5.8m、北東一南西7.8mを測る1区厩は、周囲を礎石列が回り、その内側は皿状に窪み、非常に固い床面がつくられている。周囲を囲む礎石の東から南にかけては、そのほとんどが移動している。厩中央には10個ほどの小柱穴がうたれているが、その覆土に木くずがつまっており、柱を建てた穴ではなく別な用途の柱穴であろう。

Ⅱ区の土間部（南東一北西8m、北東一南西7.8m）はⅠ区と同様非常にかたい床をもち、北壁に接して、1間×3.5間のやわらかい暗褐色土の床をもつ別区画がある。

Ⅲ区（台所）は南東一北西8.2m、北東一南西7.2mの規模をもち、やや東よりに凝灰岩の切石で造られたカマドが発見された。2連房で、南東に焚き口部がある。焚き口から向って左の壁は凝灰岩の切石が連結し、コ字状に囲みその上に人頭大の河原石を1段のせている。右の壁は同じ河原石のみで2段に積み上げ、コ字に組んでともに内は炭と灰焼土ブロックが充満している。天上部は崩壊している。町場Ⅱ遺跡の曲り家と同様に、Ⅲ区床近くから多数の貨幣が出土し、特にカマド部の内外に多い。また礎石上に墨書された墨縄痕もⅢ区からⅣ区にかけて集中している。

扁平面を利用した河原石配石群がⅣ区内に3カ所発見されているが、やはりこの周囲に貨幣が多く、組み上げた炉の基礎石かと思われる。

Ⅴ区座敷部は南東一北西9.8m、北東一南西6.2mで西側の礎石は家屋取りこわしの時の重機撹乱のため相当移動している。配水のためⅤ区からⅣにかけて蛇行した小溝が崖から前方向の谷に向かって流れ落ちている。

b　遺　物

当建物址から出土した遺物のうち貨幣は床面から112枚出土し、他の曲り家と同様にⅢ区台所

付近が圧倒的に多い。その比率は寛永通宝を中心とする近世に流通した貨幣は92枚で総数の82%、明治以後昭和23年発行までの近代貨幣は14枚で14%、現代も使用されている現行貨幣は6枚出土で全体の約5%である。寛永通宝などの82%出土率は、他の曲り家調査では前例がなく、曲り家自体かなりの古さを示している。曲り家から出土した他の遺物には、木器、鉄器、陶磁器、セルロイド類などさまざまあるが、図版12ではキセルとかんざしの出土を示した。他に大小さまざまな凝灰岩製の円盤類がある。大きい円盤は径5cmで厚さ1cm、小さい方は径2cmで厚さ0.5cmまで計4個出土している。表面にはさまざまな方向に条痕がきざまれ、また周囲をみがいている。他に凝灰岩製で3.4×2.2×1.1cm長方体をした板状の個体も1個出土している。特に縄文時代の遺構に伴なうことはなく、曲り家の覆土床からの出土であって、現在では忘れさられた遊び道具の一種かと思われる。

c　墨縄痕

上屋を建てる時寸法を測る基準とするための墨縄の痕が16個の礎石上面に墨書されていた。その図は「－」「＋」「⊹」印の三種である。a・bの礎石は礎石列からはみ出しているので利用できないが、他の礎石間は1間の近似値を示している。

d－g	3.86m	g－l	3.86m
g－h	1.82m	h－k	1.82m
l－m	1.87m	h－i	1.92m

これらの平均値は1·894mである。また

e－f	0.87m	i－j	0.88m

これらの礎石間は平均値1間＝1,894mの半間を示している。

またV区の南の2礎石間は、

h－o	1.49m	n－p	1.49m

とまた別の値を示している。

(2)　2号建物址

a　遺　構

1号建物址の調査終了後、その礎石をはがし先行する遺構の調査を開始して間もなく、2号建物址、柱穴列、コ字状溝、方形土坑、井戸址などが発見された。

2号建物址は掘立柱建物址で、北東と北西に庇をもつ平面が長方形の建物である。また、この母屋の南西に直角に建物がはり出しているため、曲り家風である。母屋の長軸はN－52°－Wで長辺の長さは柱の中心で13.4m、短辺は6.8m、はり出し建物は母屋に接している辺5.4m、その直角辺は6mを測る。

母屋は柱穴の配置から3室に分けられる。柱穴の2.3は底に河原石を置き、柱のささえとし

たが他は柱穴にそのまま柱を据えたため、柱穴底の柱位置がグライ化している。当建物址は他遺構（kの井戸、a～jの柱穴列、m・nの方形土坑、1のコの字状溝）のすべてに切られているため、これらより古い。

b　遺　物

柱穴から出土した遺物はないが、1号建物址の床面レベルより出土した貨幣が数枚発見されている。これらは1号建物址一覧表に入るが不明である。

母屋の柱穴は庇部の柱穴、はり出し部の柱穴よりその径が大きい。母屋柱穴の掘り方径は45～50cm、その据え方径は20cmを測り、庇部柱穴とはり出し部の柱穴の掘り方径は30cm、据え方径は15cmである。

母屋の庇をのぞいた桁行は全長12.5mの6間で、1間は約2.08m、梁行全長は5.9mの3間で、1間は約1.97mを測る。

c　他の諸遺構

井戸址

2号建物址の北東に接して発見された。2号建物址の柱穴と切り分っており、井戸の方が新しい。壁上方はかなり崩壊が進み、平面は円形に近い型を示すが、井戸の落ち口より1mほど下の壁は形を呈する。水が多量に吹き出しポンプで配水を行ったが、発掘期間の問題もあり、プラン確認面から2mの深さまで掘り下げた所で調査中止にした。遺物は多量の人頭大の河原石と小木片を出土したのみである。

コの字状溝

1号建物址の礎石の下にコの字状溝が発見された。1号建物址より旧いが、2号建物址の柱穴1個を切っているのでこれより新しい。溝巾約70cm、垂直に近い壁をもち、深さは50～60cmである。コの字状溝の両端はふくらんだ形で溝が止っている。遺物はなく、用途は不明。

方形土坑

m、nとも平面1辺は1.9mの正方形で、深さは60cmを測り、壁は垂直に近い。またm、nともに2号建物址の柱穴を切っており、それより新しい遺構である。縄文式土器細片を出土したのみで他の遺物はない。

柱穴列

a～jとr、sの柱穴列はdの柱穴で2号建物址を切っている。軸が2号建物址の長軸より7°40′西にずれている。aからj柱穴まで一列に並び中央に近いj、h柱穴の東北1.1mの所にこれより大きい掘り方（掘り方径55cm、据え方径25cm）をもつ柱穴が2個並び、先のa～j柱穴とほぼ平行であり同一遺構の一部かと思われるが、遺物はなく遺構の性格、時期は不明である。o、pは焼土範囲で、位置からすると1号建物址の土間の下に来るが、土間の面では焼

土はまったく現れてはいなかった。

(3) 3号建物址

3号建物址の相対座標点Oは下記のとおりである。

X＝－34,880.00m

Y＝＋17,490.00m

1号建物址である曲り家の南東に位置し、主家に対し当礎石建物址は小屋址である。東と南は崖に接し、人一人歩けるほどの余地しかない。四隅の礎石間は東西6.65m、南北7.6mを測り、1間を約1.9mの場合、東西3.5間、南北4間となる。建物址南⅔の礎石下はほぼ礎石が半分うまる位の小穴を地山に掘り、それを埋めて固定しているが、北⅓は地山の上面に凝灰岩のバラスを敷いて地面を水平にした後、礎石を固定している様である。四隅の礎石は他に比較して大きく40～50cmばかりの平面を水平に置き、縦はそれの1.5倍の大きさで地面深くくい込んでいる。

1号建物址の礎石上にみられる墨縄痕はまったく発見できない。また遺物は粗掘中に現行貨幣である一円アルミ貨が1枚出土している。

3号建物址の調査終了後、礎石下部を縦横にトレンチを設け掘り下げたが遺構を発見することはできなかった。

(4) 4号建物址

4号建物址の相対座標点Oは下記のとおりである。

X＝－34,850.00m

Y＝＋17,490.00m

1号建物址である曲り家の主屋に対し、それの北東の一段高所に礎石建物址（4号建物址）が位置する。小さい建物址で倉が当所にあったという。北の山よりを削り南を埋めて小テラスを造成して4号建物を建てており、発掘調査開始時にはまったく礎石は見られなかったが、粗掘り後、10個の小礫石が一部並び、建物址の観を呈してきた。2.5間×2間と思われ、長軸は北西一南東に向く。

遺物は、粗掘り中に近代貨幣である小型五十銭黄銅貨が1枚出土している。

(5) 墓　　址

ダム水没補償後の家屋移転の際、墓址も墓碑とその下を掘り返して人骨などを移動するのが常であるが、しかし世代が変るにつれて墓は忘れさられ、無縁仏化となる。当遺跡の墓址も1号建物址に代々居住している者の墓所であり、当主も同じく家屋移転の際墓所を掘って数体人骨をとり上げ、他所に移動して再び埋葬したが、やはり他の遺跡と同様にとり残しが18体以上発掘された。旧い墓は一般的に骨は土と化し、副葬品も少ないが、近世以後の墓址からは骨以

外に角釘、貨幣、キセル、鏡、陶磁器、仏具などを出土し、屋敷地内を同一遺跡と考えた場合、墓と建物はセットとして興味深い考察ができる。

墓址は下猿田II遺跡の北東隅に発見できた。しかも1号建物址より3.5m高いレベルである。

墓の相対座標点Oは下記のとうりである。

X＝−34,850.00m

Y＝+17,492.00m

墓域は南へ約6°下がる緩傾斜をもち、浅い表土をはがせば黄橙色土の地山である。土壙覆土の大半が黄橙色の地山ブロックを多量に含む暗褐色土で、下層までほとんど変化は見ない。表土をはがし土壙の平面プランを確認し、その地点から人骨の一部が発見され副葬品の貨幣が出土して、浅い土壙もあることが判明した。平面プランも円形から正方形、長方形までさまざまである。

① 1号墓址

墓域の東はずれに位置し、平面は東西0.65m、南北0.7mのほぼ円形を呈し、深さは約0.15mで皿状に窪みをもつ。副葬品はなく、骨粉すらも発見できなかったが、覆土が黄橙色の地山ブロックを多量に含む荒い黄褐色土で、2号、4号墓址にも近接していることから、墓址としたい。

② 2号墓址

1号墓址の南西に隣接し、半径0.65mの円形で覆土の深さ0.20mの窪みをもつ1号墓址とほとんど同型の規模である。中央に頭骨を輪切りにした様な灰白色土が平面プラン確認時点から見られ、他に土への同化一歩手前の骨片も発見されたが、骨を取りあげる時点で風化した。
他に角釘とも鉄銭とも見分けのつかない鉄片が3個ほど出土した。

③ 3号墓址

3号墓址は2号墓址の南西に近接し、1号、2号墓址とは違って長辺1.07m、短辺0.82mの長方形プランで、掘り込み面の深い所では0.4m、浅い所では0.05m、壁は垂直に近く、四辺がはっきりしている。長軸はほぼ北西一南東向きで、土壙の北西部に頭骨が置かれ、南西に向かって四肢骨がのびる様に人骨が発見された。全体的に頭骨がしっかりしているわりには歯は15本のみ出土し、大腿骨様の骨片がわずかに出土した。角釘が覆土中から7本出土しているが、元来角釘を出土する墓址は数本ではなく数10本の出土が常で、この3号墓址の上位に4号、5号墓址の多量に角釘を出土する墓址が発見されていることから、それが覆土にまぎれ込んだと考えられる。

副葬品としては陶器椀1、キセル1、六道銭が骨と同レベルで出土している。陶器椀は口径10.7cm、器高6.1cm、高台径4.2cm、器厚0.5cmで、やや内弯ぎみである。内外面に浅黄色の釉がかかり、またカン入がみられ、椀の⅓が欠損している。銅製のキセルは吸い口雁首と

もに出土している。6枚が密接して出土した貨幣はいわゆる六道銭で、三途の川の渡し賃である。6枚とも銅製で、5枚が新寛永通宝の一文銭で内2枚は「文寛永」である。他の1枚は西暦1094～1097年に鋳造された「紹聖元宝」(北宋銭)である。

鑑定結果から3号墓址の人骨は40歳代で、キセルや寛永通宝が出土していることから江戸時代の40歳代男性であろう。

④　4号墓址

当墓址は1号墓址の西に近接し、5－1号墓址とわずかに切り合い関係にあるが、その新旧は不明である。規模は径1.07mで、プラン確認面から土壙の底まで0.95mを測る墓群中最も深い掘り込みである。調査中も大部水が湧き出し、遺物をただ拾うだけであった。よって人骨は歯5本のみ拾うことができ、他に頭骨の一部と膝を立てた様に出土した大腿骨、部位不明の骨片が少量出土した。角釘が覆土中から15本出土したが、3号墓址と同様5－1号墓址の流れ込みかと思われる。

副葬品には、土器1、キセル1、貨幣3個が出土している。土器は浅い丸底の淡黄色をした素焼きで、口径7.6cm、器高1.3cmを測り、内外面にロクロ痕を持ついわゆるカワラケの完形品である。銅製のキセルは3号墓址と同様吸い口と雁首が出土している。貨幣は「古寛永」1枚と新寛永銅一文銭が2枚出土しているが、錆がはげしく不明な点が多い。

鑑定結果と出土遺物から当人骨は江戸時代後期の40歳代男性であろう。

⑤　5－1号墓址

当墓址は4号墓址の北西に密接し、5－2号墓址を切って掘られている。長軸が北西、南東に向く長方形を呈し、長辺1.20m、短辺0.94m、深さ0.40mを測る。図版7にみられる5－2号墓址内人骨は実際は5－1号墓址にともない、頭骨他四肢骨の一部が出土したが、土への同化が進み人骨をとり上げた段階で頭骨・歯3個他骨少量が残った。角釘の出土量はこの墓址群中最も多く、破片も含めて115個出土している。

他の副葬品としては陶磁器類2と多量の貨幣がある。オリーブ灰色の釉がかかった高台付皿状陶器の完形品は、口縁に5カ所のエグリがあり、身込みには亀甲状の沈線模様が入る。口径9.7cm、器高2.8cm、高台径3.8cmを測る。また乳白色の釉がかかった小型の完形磁器は、口径4.6cm、器高1.4cmで、やや上げ底風である。外面は貝殻状の縦模様が入る。当土壙にかぎって新寛永銅一文銭が29枚、新寛永鉄一文銭とそれとおぼしき貨幣が23枚、計52枚と、底面からかたまって多量に出土した。鉄銭は錆の進行が早く、それぞれ銅銭なども含めて癒着し、文字の判読が不明な貨幣が多数出土している。

歯の鑑定結果から当人骨は40歳以上とのことである。

⑥　5－2号墓址

当墓址は5－1墓址にややずれて、しかもそれより旧い。一辺が0.85mの正方形の掘り方で、土壙の深さは0.6mを測る。正方形に近い平面プランは他に7号、12－2号、14号墓址がある。角釘は覆土から細片も含めて20本出土し、最下面からは骨粉状にわずかに残った人骨と下顎骨を含め歯が24本出土した。また同レベルから貨幣の一部を入れた小型椀と、5－2号墓址と同様に多量の貨幣が出土している。

貫入が入る灰色の釉がかかった小型の高台付磁器椀は、口径6.4cm、器高径3.0cmで、土圧によってか上から押しつぶされた様に割れて出土した。出土貨幣はすべて寛永通宝で、新寛永銅一文銭は22枚、新寛永鉄一文銭は13枚の計36枚がまとまって出土した。

歯の鑑定結果は55歳とのことである。

⑦　6号墓址

土壙は径0.72mの円形、深さ0.10mと浅い掘り込みである。下顎骨を含め頭骨の保存状態はこの墓群中では良好である。角釘らしき鉄片が1個出土した他は古寛永銭1枚と新寛永銅一文銭が出土している。

歯の鑑定結果は30歳代の女性である。

⑧　7号墓址

当墓址は8号墓址と切り合っているが、その新旧関係は不明である。平面形は1.10m×1.03m、やや正方形に近く0.5mの掘り込みである。人骨はほとんど土と同化して頭骨大の骨粉を含む土質を確認するのみである。覆土中から角釘58本出土し、他の副葬品としてはキセルの雁首が底部近くより出土、キセルの近くから新寛永銅一文銭5枚と錆によって付着した新寛永鉄一文銭が4枚出土している。

⑨　8号墓址

平面形は径0.93m～0.84mの不整円形、掘り込みは0.3mとやや深い。人骨の土への同化が進んでおり、頭骨大骨粉を含む土質の範囲と歯の細片、四肢骨の一部分を確認した。覆土中から角釘が4個出土したが、北西に隣接した7号墓址中の角釘の流れ込みと考えられる。発見された貨幣はすべて寛永通宝で、古寛永銭1枚、新寛永銅一文銭20枚、新寛永鉄一文銭13枚の割合いである。

⑩　9号墓址

9号墓址は径1mの円形で、深さ0.3mを測る。11号墓址と切り合っているが、その新旧関係は不明である。下顎骨、歯（30本）を含む頭骨は保存状態はやや良好であるが、他はほとんど土と同化して覆土中から取り上げる際くずれてしまった。出土した貨幣総数は25枚である。この内、古寛永銭1枚、新寛永銅一文銭11枚、新寛永鉄一文銭は13枚である。また六道銭も含まれる。

⑪ 10号墓址

東西0.7m、南北0.74mを測り、不整五角形である。浅い覆土で、人骨の部位不明の小骨が数個、下顎骨と歯20本が土壙中央から出土した。副葬品は発見されていない。

鑑定によると3歳の人骨である。

⑫ 11号墓址

当墓址は9号墓址の西に接し、また13号墓址より旧い墓である。平面はほぼ1mの円形で、0.44mの掘り込みをもつ。人骨を発見することができなかったが、貨幣7枚と角釘2個が覆土下層より出土していることから、人骨はすでに土と化したと思われる。貨幣は6枚1組と1枚別に出土した。6枚組は六道銭と思われ、古寛永銭1枚に新寛永銅一文銭5枚の割合いである。他に副葬品は出土していない。

⑬ 12－1号墓址

当墓址は12－2号墓址の覆土内部に造られているため、その形状はまったく不明である。わずかに骨粉が含まれる土質が12－2号墓内の北部にみられ、またそれが12－2号墓址底面から50cm上方に分布し、その周辺から貨幣や釘が密集して出土したことから、12－2号墓址より新しい墓址と考えられる。

角釘は細片も含めて16本、貨幣は新寛永銅一文銭8枚、一部に錆による付着がみられる新寛永鉄一文銭が3枚の計11枚出土している。

⑭ 12－2号墓址

12－2号墓址は平面が1辺1.14mの正方形で、掘り込みは0.85mに達する当墓群では深い土壙である。13号、12－1号墓址より旧い。人骨はやや保存の良い方で、頭骨を西にして東方に四肢骨が散在する。

副葬品としては磁器椀2個、柄鏡1個、貨幣19枚出土している。小さい磁器椀は口縁から胴部にかけての一部のみで、推定口径7.7cm、器高不明、オリーブ灰色の釉が内外にかかる。大きい方のオリーブ灰色釉がかかる磁器椀は½欠損しているが、口縁から高台まであり、口径10.1cm、器高5.9cm、高台径3.8cmを測る。銅製の柄鏡は鏡の径10.4cmに長さ8.7cmの柄を着装している。鏡背の中央には剣かたばみ紋が陽刻され、その右下に同じく「天下一」と刻まれている。また紋の右上には径1.5mmの小穴が穿たれている。柄には文字が線刻されているが判読できない。貨幣19枚の内訳は古寛永通宝4枚、新寛永銅一文銭15枚（背元1枚、背文4枚）である。

鑑定結果と出土遺物から人骨は20歳前後の女性であろう。

⑮ 13号墓址

当墓址は12－2号、11号墓址より新しい。平面プランは壁の一部を確認したにすぎないので、全体プランは不明である。掘り込みも約10cmばかりで、出土した人骨も部位が不明な骨片が多

い。歯10本を含め頭骨の一部と大腿骨と覆土中から釘29本を出土した。またキセルの雁首のみ頭骨の付近から出土し、貨幣は新寛永銅一文銭3枚と新寛永鉄一文銭3枚が土壙内からバラバラに出土している。

当墓址の人骨は鑑定結果と出土遺物から考え合わせて30歳代の男性であろう。

⑯ 14号墓址

当墓址は墓域の南西に位置し、10cmの掘り込みをもち1辺0.6mの正方形の浅い土壙である。人骨は歯10本のみ出土した他、副葬品もない。

鑑定結果から人骨は4歳位である。

⑰ 15号墓址

当墓址は11号墓址の北に接して発見された。浅い掘り方の上に3基の墓址らしきプランが切りあって不明な点が多い。約0.6mの円形プランかと思われ、わずかに覆土中に骨粉が含まれる部分が見られ、貨幣も古寛永銭1枚と新寛永銅一文銭2枚が覆土中から出土した。

⑱ 16号墓址

当墓址も15号墓址と同様新寛永銅一文銭1枚とわずかな骨片とが出土したのみで、平面プランは不明である。

2．1に先行する遺物

(1) 縄文時代の土器

本遺跡の出土土器は、遺構に伴いかつ層位的に把握されたものは皆無で、全て粗掘り段階において基本層序第1層（表土）より確認したものである。出土土器は量的に少なく、本稿では形態的特徴の明瞭な口縁部、胴部破片を抽出し、文様構成、器形、胎土の性状等を軸として時期別に一群として分類した。

① 第Ⅰ群土器

貝殻文、条痕文を主体とする土器で、時期的に縄文早期前半～中葉に位置付けられるものと考えられる。しかし、いずれも断片的資料のみで、土器群の実体を充分満してはいない。

第1類土器（図版22－1、2）

口縁部資料2点の出土で、図版22－1は口縁部上面に貝殻圧痕を有し、体部には同一原体による連続的な縦位の貝殻文が施文されている。図版22－2は口縁部上面に密に連続した刻目を有し体部に比較的浅い斜位の貝殻文が施文されている。時期的には早期前半の白浜式、物見台式、ムシリⅠ式、早稲田貝塚第1類土器に比定されるものと考えられる。

第2類土器（図版22－3、4）

表裏両面ともに横、斜方向の条痕乃至擦痕の観察される一群で、胎土に植物繊維の混入が認められず、焼成も良好で堅緻な作りである。時期的には縄文早期中葉の早稲田貝塚第3類土器

ムシリⅠ式土器に比定されるものと考えられる。県内においては下猿田Ⅲ遺跡第Ⅰ群第2類土器に類似した様相を呈する。

② 第Ⅱ群土器

本群土器は胎土に若干の粗砂及び植物繊維の混入する一群で、第Ⅰ群土器同様いずれも断片的資料のみで、土器群の実体を充分満してはいない。時期的に縄文早期末葉から前期初頭に比定されるものを一括した。

第1類土器（図版 22－5～13）

本類土器は体部地文として、不均等な羽状縄文のみが施文される一群で、口唇部上面の形状が若干内削ぎされ、篦状工具等により入念に整形されているのが特徴的である。なお胎土には僅かに繊維の混入が認められる。焼成は比較的良好で堅緻な作りで、色調はにぶい褐色および明褐色を呈する。時期的には縄文早期末葉から前期初頭の早稲田第5類土器、長七谷地第Ⅲ群土器に比定されるものと推定される。

第2類土器（図版 22－14～23、図版 23－1～5、7、8）

体部地文として単節斜縄文のみが器面全体に施文される一群で、胎土には相当量の植物繊維及び粗砂の混入が観察され、焼成も粗悪で脆弱な作りのものが多い。図版7、8より推定すると、器形は丸底調の深鉢形土器を呈するものと推定される。本類土器は胎土の性状、文様手法、器形等の諸特徴から早稲田貝塚第5類、第6類土器、室浜式、桂島式に比定されるものと考えられる。

第3類土器（図版 23－6）

体部地文として、撚糸文が斜位にやや一定して施文される土器で、第2類土器同様胎土に相当量の繊維及び粗砂の混入が認められ、焼成も粗悪で脆弱な作りである。早稲田貝塚第5類土器、長七谷地貝塚第Ⅳ群b類土器に非常に類似した特徴を呈する。

③ 第Ⅲ群土器

胎土に植物繊維の混入が全く認められず、時期的に中期末葉から後期に位置付けられるものを一括した。

第1類土器（図版 23－9）

単節斜縄文に加え、沈線十磨消技法による文様構成を有する土器で、時期的には縄文中期末葉の大木10式に比定されるものと考えられる。

第2類土器（図版 23－10～14）

体部の地文（単節斜縄文）以外に型式を規定する主体文様を有しない土器群で、図版23－10、11は口唇部上面がやや丸みをもち、入念に整形されている。図版 23－12～14 は胴部破片で、胎土に若干粗砂を含み、焼成も粗悪で脆弱な作りのものが多い。

第3類土器（図版23－15～17）

無文地で、表裏両面に僅かに篦状工具等による器面調整痕（撫痕）が観察されるものである。胎土に粗砂及び細礫を多く含むが、焼成は比較的良好で、堅緻な作りである。色調は橙色および明赤褐色を呈する。

第4類土器（図版23－18～20）

口縁部に凹状の2条の平行沈線による文様帯を有する土器で、胎土及び焼成も良好で堅緻な作りである。口唇部上面が若干内削ぎされ、やや外反気味の口縁部形態を呈する。時期的には後期初頭十腰内Ⅰ式（大湯式）、貝鳥貝塚第Ⅱ群第4類土器に比定されるものと考えられる。

④ **第Ⅳ群土器**（図版23－21～23）

本群土器は、体部に細緻なやや縦位の撚糸文を有する土器で、胴央部破片のため全体的な器形等は把握できなかった。胎土には少量の砂粒が混入し、色調はにぶい黄橙色を呈する。器厚は0.3cm±～0.5cm±と概して薄く堅緻な作りである。本群土器は広瀬Ⅱ遺跡、上野遺跡等より出土した弥生式土器に非常に類似した様相を呈する。

(2) 縄文時代の石器

本遺跡から出土した石器及び石片数は第24図版～第31図版までに数片の剥片を除き、そのほとんどを収録した。これら石器及び石片類の出土層位は地表面における表面採集資料から第Ⅴ層としたものまでの中に散在しているが、ごくわずかの例を除き圧倒的に多くのものが検出されたのは第Ⅰ層及び第Ⅰ下層の2層に集中している。第Ⅱ層中よりは1点、第Ⅳ層中より4点第Ⅴ中層より3点の出土をみたのみで、第Ⅲ層中よりは1点の出土層も存在しなかった。第1層及び第Ⅰ下層としたものは遺跡背後の傾斜地より崩落して堆積した土層であるとみられるため、本遺跡においてこの項で記述する石器類等を包含するであろう時代の遺構等がまったく検出されなかった事実と合わせ、これら石器類が層位的にまとまりのある状態でないことを示唆するものと言えよう。よって本項ではこれら石器類の時代的、時期的差異による考察を行なうことは不可能であるために単に形態による分類のみを行なうこととする。

発見された石器類は、石鏃、石槍、石匙、石ベラ、掻器（スクレーパー類）及び若干の加工もしくは使用痕とみられるものを有する石片等である。

① **石　鏃**（図版24、1～3）

大小3点が発見された。細く長身のもので基部に抉り込みを有し、左右の脚部も細く作りだされている。両縁辺はほぼ直線状で比較的急角度の並行した剥離による加工が施されており、従って横断面は菱形に近い形を呈するもの（図版24－1）、前者に比してやや巾広で短く茎部を有するもの（図版24－2）、ほぼ正三角形に近い形を呈するもの（図版24－3）、なである。図版24－2のものは図版24－1のものと同様並行した急角度の剥離による加工であり、前者同

様やや肉厚の断面をもつが、三角形のものは非常に薄く仕上げられている。

薄く仕上げられている。

② 石 槍（図版24－4・5）

わずか2点の出土である。全体の½を欠損していると考えられる1点は細長く、かつ薄く作られている。他の1点は完形であるが一面がやや細い加工により平らに近い形に仕上げられているが他の面は剝離も粗く、その角度もやや急である。完形のものは基部より先端部にかけてその両側の線が中央部で角をもっており細長い台形ともいえる形態を示している。

③ 石 匙（図版25－1～5）

完形及び欠損品を含めて5点が発見された。図示した如くすべて縦形のもののみである。図版25－1は横断面が三角形を呈する細長いものである。表面の加工は急角度に左右両縁から剝離が加えられ中央部で1線の陵をなしている。つまみ部分をわずかに欠損しているが、残存部よりの観察によれば、くびれ部分を除いて円形を出すために大変細い剝離が施されている。両側縁は表面よりみて左側縁が先端部近くで右側に曲っており、ナイフの先端のような形を呈している。裏面はつまみを作り出すくびれ部分に左右より2～3回の加工が加えられたのみで大部分が第1次剝離面のまま残されている。図版25－2は巾広の剝片を使用して製作したものであるが、表面の加工は一部を除いて粗い。つまみ部分の作り出しも完全とは言えない状態である。裏面は一側縁部には明らかに細部加工を施した痕がみられるが他は第1次剝離面のまま残されている。他の側縁部にみられる剝離状の痕は明確に人為的なものとは言い難い。また先端部分を欠損しているが裏面には折損部にさらに数回の加工を施した痕があり、作製途上に先端部を折り、さらに完全な形へと仕上げる過程のものかと考えられる。このことは表面の粗い加工部分及びつまみ部分の加工も完全でない点からみても考えられよう。図版25－3は完形品である。同図版1に比して巾広の形を呈しているが加工、形態ともに同様のものである。裏面の一方の側縁には加工もしくは使用によって生じたとみられる剝離痕が残されている。図版25－4・5はいずれも同図版3と同様の石匙の欠損品であり、共につまみ部分に近い方を欠損している。図版25－5は同図版26－7と同様の加工であるが刃部先端が直線状になっている。図版25－4は表面右側のみに刃部加工が施されており、他方は何ら第2次調整が行われていない。

④ 石ベラ（図版26－1～6、27－6～6、8、）

石ベラとしたものは図示した如く、肉厚で大形の剝片を加工したもので刃部と目される部分が巾広で直線ないしはゆるやかに弯曲しており、刃部を形成する加工が表裏どちらかの側から急角度を呈するように施されたものを指すのであるが、本遺跡より発見されたものの中には、刃部加工が急角度をなさない形のものもみられる。これら急角度の加工を有さないものは両面

加工の打製石斧として考えられる。このようなことから本文では石ベラとして図示した石器類の中に異質のものを含むことを断っておく。

縦断面の先端部（刃部と考えられる部分）の加工が一方より急角度の形をなす、いわゆる片刃状のものは図版26－1～3・5、27－1・3・4・6・8がある。これらのうち図版3－2・3及び27－3・4は一面に第1次剥離面または自然面を残している半両面加工のもので、図版26－1・5、27－1・6・8は両面ともに第2次剥離が施されている。刃部が表裏から比較的スムースに形成されているものは図版26－4・5などがある。前述した石斧として考えられる石器としては、図版26－4・5に示した2点があげられる。これら2点は両面ともに大きくはあるが比較的平坦な加工痕を有しており刃部とみられる部分には表裏ともにさらに細かい加工が施されている。図版27－2は他のものに比して小形の両面加工のものであるが、刃部とみられる部分に表裏両面から大きく剥離が加えられ、しかもその部分がわずかに抉り込んだような形に作られている。図版27－6に示したものは両面加工の石ベラの中に含めておいたが、他のものと比して加工も粗く完成した形のものとは考えられない点がある。この石器は一端が急角度の断面を呈しており、その部分の加工はエンド・スクレーパーにみられるような並列した剥離痕を残している。さらに同一部分の裏面は内弯するような状態に大きな一条の剥離が加えられている。この石器は石ベラと言うよりも本遺跡周辺の広瀬II、鷲III、南ノ又、上野、町場III遺跡などから発見された大形粗製刃器もしくはコア・スクレーパーなどと呼ばれている石器に近いものであるかもしれない。他のものは（図版27－5、28－5）いずれも欠損品であり、確実に石ベラ類とは言い難いが、加工の状態よりみて一応この分類中に入れた。

前述した如く石ベラと呼ばれる石器についての特徴的なものは、その形態、加工などからみて一定の形を設定しうるものがあるとみられる。本遺跡で発見されたごくわずかの例からみれば、半両面加工で刃部の形成が片刃をなすようなものが第1にその類にあてはまると考える。また両面加工のものでも刃部の形態によってその中に含まれるものも多くあるであろうが、打製石斧における片刃、両刃など加工の状態等の差異に関連してさらに検討される必要があろう。

⑤　スクレーパー類

スクレーパー類としたものは、サイドもしくはエンド・スクレーパーとしてのある特定の形態を呈するであろうと思われるもの　（完全な形のものはない）　から不定形の剥片に加工を施したものまで含めてこの類に入れた。形態的に明らかに分類しうる石器がないために図版及び写真図版の番号等は入れなかった。図示されたものは後者が大多数を占める。サイド・スクレーパーとして分類しうると考えられるものは図版29－9ただ1例である。またエンド・スクレーパーとしての形態を的確に示すものはない。ただ加工の部位、凹凸の有無等によってみれば図版28－7、29－4・7はコンケイブ（凹形）スクレーパーとみることもできよう。他のも

のはすべて不定形の剥片の一部に若干の加工を施し刃部として活用させているものである。これらスクレーパーとした剥片の中にはスクレーパー本来の機能であるところのケズル、もしくはカクと言う機能よりも、むしろキルと言う機能に適したと考えられる加工痕を有するものが少くない。いわゆる石匙の機能を特定の形態を整えない剥片に与え使用したものと考えてさしつかえないであろう。これらキル・ケズル・カクと言った機能は加工痕を残さない剥片の中にも与えられた可能性は多くあるものと考えてよい。またこの他、小形両面石器と称されるような石器（図版24－8～12・14、25－7）が発見されている。これら小形の両面加工された石器類はそれ自体で完成されたものとみられるもの（図版24－9～12・14、25－7）となんらかの小形石器（石鏃等）の未成品と考えられるもの（図版24－8）とがある。それ自体で完成したものと考えられる小形石器は片面に第1次剥離面を残す部分があり、左右どちらか一側縁に細部加工の施されたもので、つまみのない小形石匙としての機能を有するかのようである。

その他、図版1－6・7・13・15などはそれ自体が加工された剥片等の分類には入らず石匙等の石器の欠損部分であろうと考えられる。

他に1点特異な形態を呈する石器（図版25－6）がある。図示した如く茎部と思われる作りだしをもち、胴は巾広くなり先端部に小さな突起が残されている。この石器はおそらく有茎の石鏃として考えて良いものであろう。

以上本遺跡で発見された石器について述べて来たが、最初に記した如く本遺跡からはこれら石器群が属すると考えられる時代、時期の遺構は全く検出されなかった状況ではあるが石器類の形態、種類からみて縄文期のものであろう事は容易に推測される。

Ⅳ. ま　と　め

1号建物址の礎石配置は西側座敷の梁行礎石列を除いてほぼ定位を保って検出された。平面プランも他の一般的曲り家より一回り大きめの規模で、要所には径70～80cmの河原石を礎石として利用している。出土貨幣は100枚を超え、特に江戸時代流通した寛永通宝が現行貨幣の枚数をはるかに凌駕していることは、1号礎石建物址の創建当初を考察する上で重要な意味をもつ。礎石上に記された墨縄の痕は、そのスパンを測ることによって当建物址創建当初の造営尺を求めることは可能である。

さらに2号(掘立柱)建物址が1号建物址の下層から発見されたことは、建物の変遷過程を明確にしてくれる。2号建物址は母屋に対してその一端から直角に建物がはり出している。掘立柱建物址なので厩が内蔵されていたか否かは確めるすべもないが、掘立柱建物址で平面が曲り家型式をとる他の調査例としては盛岡市下猿田Ⅲ遺跡の3号建物址、盛岡市稲荷町遺跡、花巻市小瀬川館遺跡に各1例ずつ報告されている、がこれらの遺構に伴う遺物はないに等しく、いわゆる曲り家をきめる厩の固められた皿状窪みや土間などが付されていない。

屋敷地内の一画から墓址群が調査されたが、それは同じ建物に住んだ関係者の墓であり、埋葬された人骨鑑定、副葬品などから屋敷の歴史と生活の一端を知る上で墓址の調査は欠かせない。

(文責本沢慎輔)

下猿田II遺跡　1号建物址

番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
1	新寛永銅四文銭	近世			2.90	6.43	方	180.70	IV		
2	新十円銅貨	現代	昭和39年	1964	2.40	4.55	無	180.82	II		
3	〃	〃	昭和38年	1963	2.40	4.50	〃	180.76	III		
4	古寛永銭	近世			2.38	3.50	方	180.86	〃		
5	新寛永鉄一文銭	〃			2.40	2.99	〃	180.84	〃		
6	新寛永銅一文銭	〃			2.50	2.94	〃	180.84	〃		
7	古寛永銭	〃			2.42	2.82	〃	180.90	〃		
8	新寛永銅一文銭	〃			2.50	2.50	〃	180.81	〃		
9	〃	〃			2.48	2.31	〃	180.77	〃		
10	新寛永鉄一文銭	〃			2.35	2.40	〃	180.85	〃		
11	新寛永銅四文銭	〃			2.90	4.05	〃	180.77	〃		
12	新寛永鉄一文銭	〃				2.34	〃	180.78	〃	破片２コ	
13	新寛永銅一文銭	〃				2.60	〃	180.76	〃		
14	新寛永鉄一文銭	〃				2.85	〃	180.80	〃		
15	新寛永銅一文銭	〃	寛文２年	1668	2.55	3.36	〃	180.77	〃		背「文」
16	新寛永鉄一文銭	〃				3.00	〃	180.78	〃		
17	旧五円黄銅貨	現代	昭和26年	1951	2.25	3.54	円	180.91	〃		
18	新寛永銅一文銭	近世			2.50	3.50	方	180.77	〃		
19	新寛永鉄一文銭	〃				1.75	〃	180.79	〃	破片	
20	旧五円黄銅貨	現代	昭和27年	1952	2.25	3.40	円	180.81	〃		
21	新寛永鉄一文銭	近世				2.45	方	180.74	〃	火をうけ、そっった	
22	〃	〃				1.70	〃	180.72	〃	破片	
23	〃	〃				2.55	〃	180.69	〃		
24	新寛永鉄四文銭	〃				7.50	〃	180.70	〃		
25	新寛永銅一文銭	〃			2.40	3.00	〃	180.70	〃		
26	新寛永鉄一文銭	〃				2.24	〃	180.75	〃	破片	
27	新寛永銅一文銭	近世			2.40	2.95	方	180.75	III		
28	〃	〃			2.40	2.20	〃	180.75	〃		背「元」
29	一銭錫貨	近世	昭和19年	1944	1.60	1.35	無	180.81	〃		
30	新寛永鉄一文銭	近世				4.95	方	180.73	〃		
31	新寛永銅一文銭	〃				1.05	〃	180.73	〃	半われ、半欠	
32	〃	〃			2.20	1.60	〃	180.73	〃		
33	新寛永鉄一文銭	〃				3.65	〃	180.78	〃		
34	十銭錫貨	近代	昭和19年	1944	1.96	2.40	円	180.88	〃		
35	新寛永鉄一文銭	近世				3.95	方	180.72	〃		
36	〃	〃				3.10	〃	180.72	〃		
37	〃	〃				1.74	〃	180.74	〃	半われ、半欠	
38	〃	〃				3.00	〃	180.78	〃		
39	新寛永銅一文銭	〃			2.40	2.84	〃	180.78			
40	桐一銭銅貨	近代	大正10年	1921	2.30	3.62	無	180.78	〃		
41	新寛永鉄一文銭	近世				2.24	方	180.84	〃		
42	古寛永銭	〃			2.41	3.22	〃	180.82	〃		
43	新寛永鉄四文銭	〃				4.90	〃				
44	新寛永鉄一文銭	〃				2.11	〃	180.71	III	半欠	
45	新寛永銅一文銭	〃			2.50	2.63	〃	180.72	〃		
46	新寛永銅一文銭	〃			2.37	2.65	〃	180.77	〃		
47	新寛永鉄一文銭	〃				2.75	〃	180.76	〃	われ	
48	半銭銅貨	近代	明治10年	1877	2.30	3.29	無	180.72	〃		
49	新寛永鉄四文銭	近世				5.75	方	180.75	〃		
50	〃	〃				5.98	〃	180.71	〃		
51	新寛永銅一文銭	〃			2.48	2.09	〃	180.71	〃		
52	新寛永鉄一文銭	〃				3.56	〃	180.72	〃		

番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
53	新寛永銅一文銭	近世			2.40	2.30	方	180.75	Ⅳ		
54	新寛永鉄一文銭	〃				3.40	〃	180.74	〃		
55	旧十円銅貨	現代	昭和27年	1952	2.40	4.34	無	180.78	〃		
56	半銭銅貨	近代	明治10年	1877	2.28	3.32	〃	180.72	〃		背「足」(足尾)
57	文久永宝銭	近世			2.70	3.68	方	180.67	〃		玉宝
58	新寛永鉄四文銭	〃				6.60	〃	180.73	〃	われ	
59	新寛永鉄一文銭	〃				2.27	〃	180.65	〃		
60	〃	〃				2.50	〃	180.64	〃		
61	古寛永銭	〃			2.50	4.24	〃	180.64	〃		
62	旧十円銅貨	現代	昭和28年	1953	2.40	4.43	無	180.65	〃		
63	新寛永銅一文銭	近世	寛保元年	1741	2.31	2.10	方	180.66	〃		背「足」(足尾)
64	新寛永鉄四文銭	〃				6.50	〃	180.69	〃		
65	新寛永銅一文銭	〃	寛文2年	1668	2.52	3.50	〃	180.87	〃		背「文」
66	新寛永鉄一文銭	〃			2.45	3.35	〃	180.65	Ⅴ		
67	銅一銭銅貨	近代	不明		2.35	3.83	無	180.55	〃		
68	富士一銭アルミ貨	〃	昭和17年	1942	1.64	0.60	〃	179.85	〃		
69	銅一銭銅貨	〃	昭和13年	1938	2.35	3.55	〃	179.90	〃		
70	新寛永銅一文銭	近世			2.40	2.23	方	180.70	Ⅲ		
71	新寛永鉄四文銭	〃				5.00	〃	180.77	〃		
72	銅一銭銅貨	近代	大正11年	1922	2.35	3.65	無	180.74	〃		
73	新寛永銅一文銭	近世			2.39	2.45	方	180.74	〃		
74	十銭アルミ銅貨	近代	昭和14年	1939	2.22	3.94	円	180.72	〃		
75	古寛永銭	近世			2.34	3.58	方	180.71	〃		
76	〃	〃			2.50	3.46	〃	180.81	〃		
77	新寛永鉄一文銭	〃				2.76	〃	180.76	〃		
78	〃					3.99	〃				
79	新寛永鉄一文銭	近世				2.96	方	179.77	Ⅲ		
80	〃	〃				2.80	〃				
81	新寛永鉄四文銭	〃				5.10	〃	180.66	Ⅲ	われ	
82	新寛永銅一文銭	〃	寛文2年	1668	2.50	4.10	〃	180.74	〃		背「文」
83	新寛永鉄四文銭	〃				5.50	〃	180.72	〃		
84	新寛永鉄一文銭	〃				3.55	〃	180.75	〃		
85	新寛永銅一文銭	〃			2.30	2.16	〃	180.77	〃		背「元」
86	新寛永鉄一文銭	〃				3.10	〃	180.76	〃		
87	〃	〃				2.27	〃	180.74	〃		
88	新寛永銅一文銭	〃			2.45	2.64	〃	180.73	Ⅳ		
89	古寛永銭	〃			2.50	3.10	〃	180.71	Ⅲ		
90	新寛永鉄一文銭	〃				3.10	〃	180.75	Ⅳ		
91	新寛永銅一文銭	〃			2.40	2.24	〃				
92	〃	〃				0.50	〃	180.67	Ⅳ	破片の一部	
93	新寛永鉄一文銭	〃				2.73	〃				
94	〃	〃				1.45	〃	180.73	Ⅲ	破片	
95	新寛永銅一文銭	〃			2.40	2.10	〃	180.73	〃		
96	〃	〃			2.41	2.55	〃		Ⅳ		
97	〃	〃			2.50	2.86	〃	180.66	Ⅱ		
98	菊十銭アルミ貨	近代	昭和18年	1943	2.25	0.95	無	180.80	Ⅲ		
99	富士一銭アルミ貨	〃	昭和17年	1942	1.60	0.62	〃	180.82	〃		
100	新寛永鉄一文銭	近世				2.10	方	180.67	Ⅱ	半われ	
101	〃	〃				3.60	〃	180.67	〃		
102	古寛永銭	〃			2.50	3.72	〃	180.56	Ⅲ		
103	新寛永銅一文銭	〃			2.40	2.35	〃	180.64	〃		
104	新寛永鉄四文銭	〃				6.15	〃	180.55	〃		
105	半銭銅貨	近代	明治19年	1886	2.25	3.42	無	180.54	Ⅲ		

番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
106	新寛永銅一文銭	近世			2.30	1.60	方				
107	〃	〃				1.43	〃			半われ、欠	
108	新寛永鉄一文銭	〃				3.06	〃				
109	桐一銭銅貨	近代	大正9年	1920	2.38	3.50	無				
110	仙台通宝銭	近世	天明4年	1784		3.64	方				
111	新寛永銅一文銭	〃				1.43	〃			半欠	
112	新寛永鉄一文銭	〃				2.55	〃				
	倉址										
1	小型五十銭黄銅貨	近代	昭和23年	1948	1.90	2.46	無	不明	不明		
	小屋址										
1	一円アルミ貨	現代	不不明明		2.07	1.00	無	不明	不明		

下猿田II遺跡　3号墓址

番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
1	新寛永銅一文銭	近世			2.30	2.50	方	不明	不明		
2	〃	〃			2.50	3.34	〃	〃	〃		背「文」
3	〃	〃			2.50	3.73	〃	〃	〃		〃
4	北宋紹聖元宝銭	中世			2.40	3.15	〃	〃	〃		真書、初鋳紹聖元年(1094)
5	新寛永銅一文銭	近世			2.20	2.39	〃	〃	〃		
6	〃	〃			2.48	3.41	〃	〃	〃		

下猿田II遺跡　5－1号墓址

番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	重目	穿	レベル	位置	遺物	
1	古寛永銭	近世			2.40	3.24	方	不明	不明		
2	新寛永銅一文銭	〃			2.40	3.20	〃	〃	〃		
3	〃	〃			2.45	4.15	〃	〃	〃		背「文」
4	〃	〃			2.50	3.65	〃	〃	〃		〃
5	〃	〃			2.50	3.70	〃	〃	〃		〃
6	〃	〃			2.60	3.53	〃	〃	〃		
7	〃	〃			2.50	3.75	〃	〃	〃		背「文」
8	〃	〃			2.50	3.32	〃	〃	〃		〃
9	〃	〃			2.50	3.75	〃	〃	〃		
10	〃	〃			2.30	3.36	〃	〃	〃		
11	〃	〃			2.50		〃	〃	〃		背「文」
12	〃	〃			2.30		〃	〃	〃		
13	〃	〃			2.30		〃	〃	〃		
14	〃	〃					〃	〃	〃		
15	〃	〃			2.30		〃	〃	〃		左上につめ
16	〃	〃			2.40		〃	〃	〃		
17	〃	〃					〃	〃	〃		
18	〃	〃			2.20		〃	〃	〃		
19	〃	〃					〃	〃	〃		
20	〃	〃			2.50		〃	〃	〃		背「文」
21	〃	〃			2.50		〃	〃	〃		〃
22	〃	〃			2.50		〃	〃	〃		〃
23	〃	〃					〃	〃	〃		
24	古寛永銭	〃			2.50		〃	〃	〃		
25	新寛永鉄一文銭	近世				3.92	〃	〃	〃		
26	〃	〃				3.50	〃	〃	〃	われ	
27	〃	〃				4.81	〃	〃	〃		鉄銭2枚と銅銭1枚が錆により接着
28	新寛永銅一文銭	〃			2.30	2.83	〃	〃	〃		
29	〃	〃			2.36	2.95	〃	〃	〃		
30	〃	〃			2.40	3.18	〃	〃	〃		
31	〃	〃			2.49	3.50	〃	〃	〃		
32	新寛永鉄一文銭	〃				4.45	〃	〃	〃		鉄銭2枚接着
33	〃	〃				2.00	〃	〃	〃	われ、半欠	
34	〃	〃				2.00	〃	〃	〃	われ	
35	〃	〃				5.06	〃	〃	〃		鉄銭2枚接着
36	〃	〃				2.70	〃	〃	〃	われ	
37	〃	〃				2.00	〃	〃	〃	われ、半欠	
38	〃	〃				1.41	〃	〃	〃	われ、半欠	
39	〃	〃				6.00	〃	〃	〃		鉄銭2枚接着
40	〃	〃				2.28	〃	〃	〃	われ、半欠	
41	〃	〃				9.03	〃	〃	〃		鉄銭3枚接着
42	〃	〃				4.35	〃	〃	〃	われ	鉄銭2枚接着
43	〃	〃				1.23	〃	〃	〃	われ、半欠	
44	〃	〃				2.75	〃	〃	〃	われ	

下猿田II遺跡　5－2号墓址

番号	名称	年号			形			出土状況			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
1	新寛永銅一文銭	近世			2.30	2.30	方	不明	不明		
2	〃	〃			2.15	1.88	〃	〃	〃		
3	〃	〃			2.24	2.10	〃	〃	〃		背「元」
4	古寛永銭	〃			2.40	2.30	〃	〃	〃		
5	新寛永銅一文銭	〃			2.45	3.20	〃	〃	〃		
6	〃	〃			2.25	2.61	〃	〃	〃		
7	古寛永銭	〃			2.30	2.45	〃	〃	〃		
8	〃	〃			2.44	3.33	〃	〃	〃		
9	新寛永銅一文銭	〃			2.40	2.02	〃	〃	〃		
10	〃	〃			2.35	2.20	〃	〃	〃		
11	古寛永銭	〃			2.40	3.40	〃	〃	〃		
12	新寛永銅一文銭	〃			2.30	1.75	〃	〃	〃		
13	〃	〃			2.50	3.16	〃	〃	〃		
14	〃	〃			2.25	1.90	〃	〃	〃		
15	〃	〃			2.35	2.15	〃	〃	〃		
16	〃	〃			2.55	2.55	〃	〃	〃		
17	〃	〃			2.30	2.16	〃	〃	〃		
18	〃	〃			2.30	2.21	〃	〃	〃		背「元」
19	〃	〃			2.45	3.30	〃	〃	〃		
20	〃	〃			2.20	2.23	〃	〃	〃		
21	新寛永鉄一文銭	〃				3.14	〃	〃	〃		
22	〃	〃				1.40	〃	〃	〃	半われ	
23	〃	〃				1.07	〃	〃	〃	〃	
24	〃	〃				8.42	〃	〃	〃		銭3枚接着
25	〃	〃				2.91	〃	〃	〃	われ	
26	〃	〃				1.68	〃	〃	〃	半われ、半欠	
27	〃	〃				9.75	〃	〃	〃		鉄銭3枚接着
28	〃	〃				8.55	〃	〃	〃		〃
29	新寛永銅一文銭	〃				3.41	〃	〃	〃		銅銭1枚と鉄銭2枚接着
30	〃	〃				0.81	〃	〃	〃		

下猿田II遺跡　6・7号墓地

番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
	6号墓址										
1	古寛永銭	近世			2.40	3.16	方	不明	不明		
2	新寛永銅一文銭	〃			2.40	1.20	〃	〃	〃		
3	〃	〃			2.40	1.70	〃	〃	〃		
4	〃	〃			2.37		〃	〃	〃		
	7号墓址										
1	新寛永銅一文銭	近世			2.36	2.32	方	不明	不明		
2	〃	〃			2.40	2.23	〃	〃	〃		
3	〃	〃			2.41	2.65	〃	〃	〃		
4	〃	〃			2.30	1.67	〃	〃	〃		
5	〃	〃			2.40	1.58	〃	〃	〃		
6	新寛永鉄一文銭	〃				4.45	〃	〃	〃		鉄銭2枚接着
7	〃	〃				6.10	〃	〃	〃		〃

下猿田II遺跡　8号墓址

番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
1	古寛永銭	近世			2.45	1.88	方	不明	不明	われ	
2	新寛永銅一文銭	〃			2.34	2.30	〃	〃	〃		
3	〃	〃			2.40	2.80	〃	〃	〃		
4	〃	〃			2.50	3.01	〃	〃	〃		背「文」
5	〃	〃			2.30	2.00	〃	〃	〃		
6	〃	〃			2.35	2.02	〃	〃	〃		
7	〃	〃			2.30	2.28	〃	〃	〃		
8	〃	〃			2.10	0.72	〃	〃	〃	一部われ	
9	〃	〃			2.45	2.32	〃	〃	〃		背「?」
10	新寛永銅一文銭	〃			2.40	2.20	〃	〃	〃		
11	〃	〃			2.51	2.25	〃	〃	〃		
12	〃	〃				1.43	〃	〃	〃	粉状にわれ	
13	新寛永鉄一文銭	〃				3.18	〃	〃	〃		
14	〃	〃				4.76	〃	〃	〃	われ	
15	〃	〃			2.60	4.05	〃	〃	〃		
16	〃	〃			2.70	6.66	〃	〃	〃	一部われ	鉄銭2枚接着
17	〃	〃				8.30	〃	〃	〃	〃	鉄銭2枚と銅銭1枚接着
18	新寛永銅一文銭	〃			2.40	2.32	〃	〃	〃		
19	〃	〃				3.44	〃	〃	〃		
20	〃	〃				10.3	〃	〃	〃		銅銭3枚接着
21	〃	〃				5.40	〃	〃	〃		銅銭1枚と鉄銭1枚接着
22	新寛永鉄一文銭	〃				8.05	〃	〃	〃		鉄銭2枚接着
23	〃	〃				18.06	〃	〃	〃		鉄銭3枚と銅銭1枚接着
24	〃	〃					〃	〃	〃		

下猿田II遺跡　9号墓址

番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
1	新寛永銅一文銭	近世				1.61	方	不明	不明		六道銭
2	〃	〃			2.50	2.85	〃	〃	〃		〃
3	〃	〃				1.06	〃	〃	〃	われ、錆侵行	〃
4	古寛永銭	〃			2.45	2.22	〃	〃	〃		〃
5	〃	〃			2.40	2.00	〃	〃	〃		〃
6	新寛永銅一文銭	〃			2.48	2.75	〃	〃	〃		〃
7	寛永銅一文銭	〃				2.96	〃	〃	〃		鉄錆付着
8	〃	〃				2.76	〃	〃	〃		〃
9	〃	〃				2.57	〃	〃	〃		〃
10	〃	〃				3.56	〃	〃	〃		〃
11	〃	〃				3.48	〃	〃	〃		〃
12	新寛永鉄一文銭	〃				10.26	〃	〃	〃		鉄銭3枚接着
13	〃	〃				7.75	〃	〃	〃		鉄銭2枚接着
14	〃	〃				17.18	〃	〃	〃		鉄銭4枚接着
15	〃	〃				7.45	〃	〃	〃		1枚か?
16	〃	〃				12.45	〃	〃	〃		鉄銭2枚と銅銭1枚接着
17	〃	〃				4.34	〃	〃	〃		

下猿田II遺跡　12－1墓址　4号墓

番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
1	新寛永銅一文銭	近世			2.44	2.50	方	不明	不明		
2	〃	〃			2.30	2.70	〃	〃	〃		
3	〃	〃			2.35	1.38	〃	〃	〃		
4	〃	〃			2.35	2.02	〃	〃	〃		
5	〃	〃				7.29	〃	〃	〃		銅銭2枚
6	〃	〃				3.82	〃	〃	〃		銅銭1枚と鉄銭1枚接着

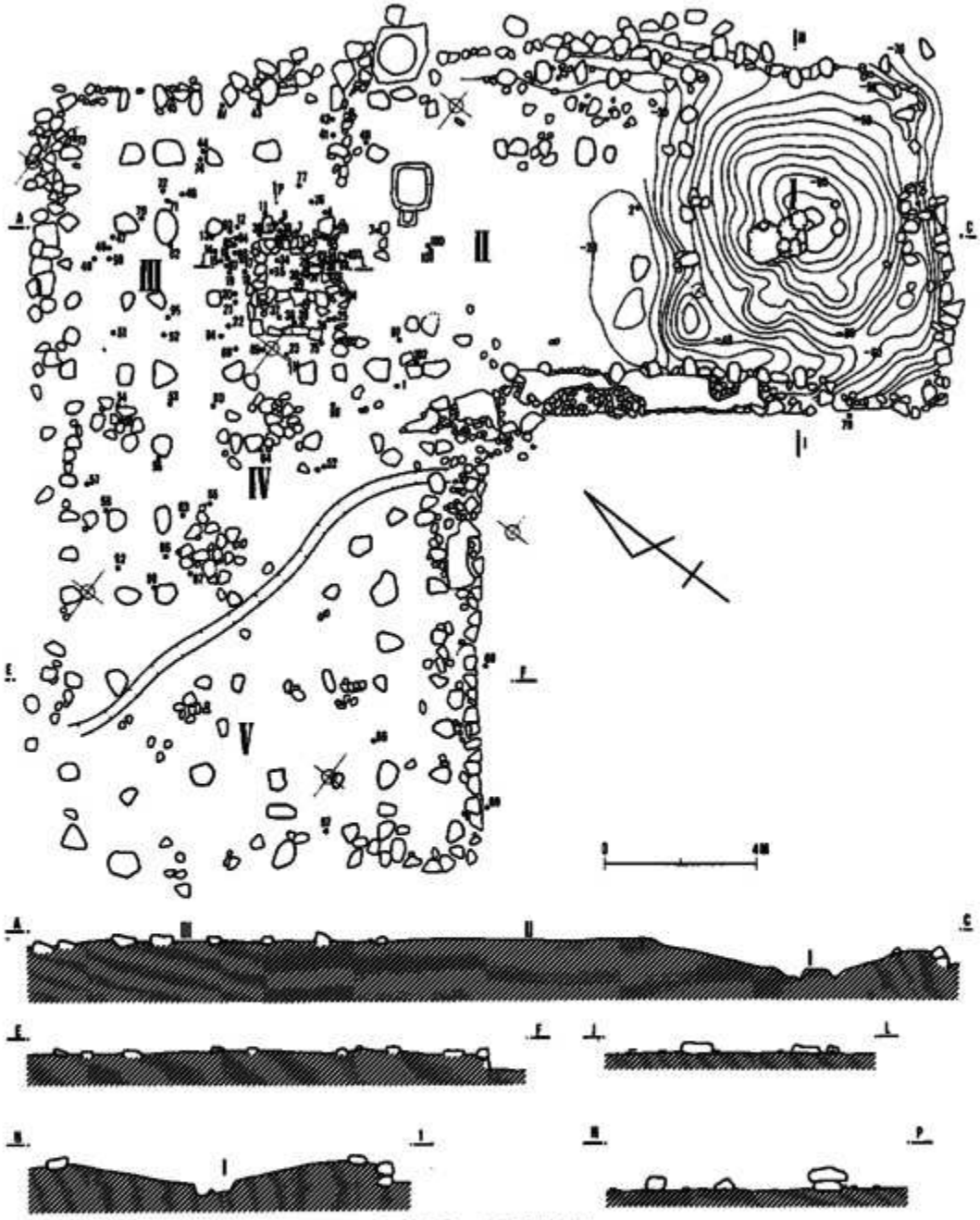
番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
7	新寛永銅一文銭	近世				4.68	方	不明	不明		銅銭1枚＆鉄銭1枚接着
8	新寛永鉄一文銭	〃				1.30	〃	〃	〃	半欠	
9	〃	〃				2.06	〃	〃	〃	〃	
	4号墓址										
1	新寛永銅一文銭	近世			2.50	2.60	方	不明	不明		
2	〃	〃			2.35	2.13	〃	〃	〃		
3	古寛永銭	〃			2.55	3.75	〃	〃	〃		

下猿田II遺跡　12号－2墓址

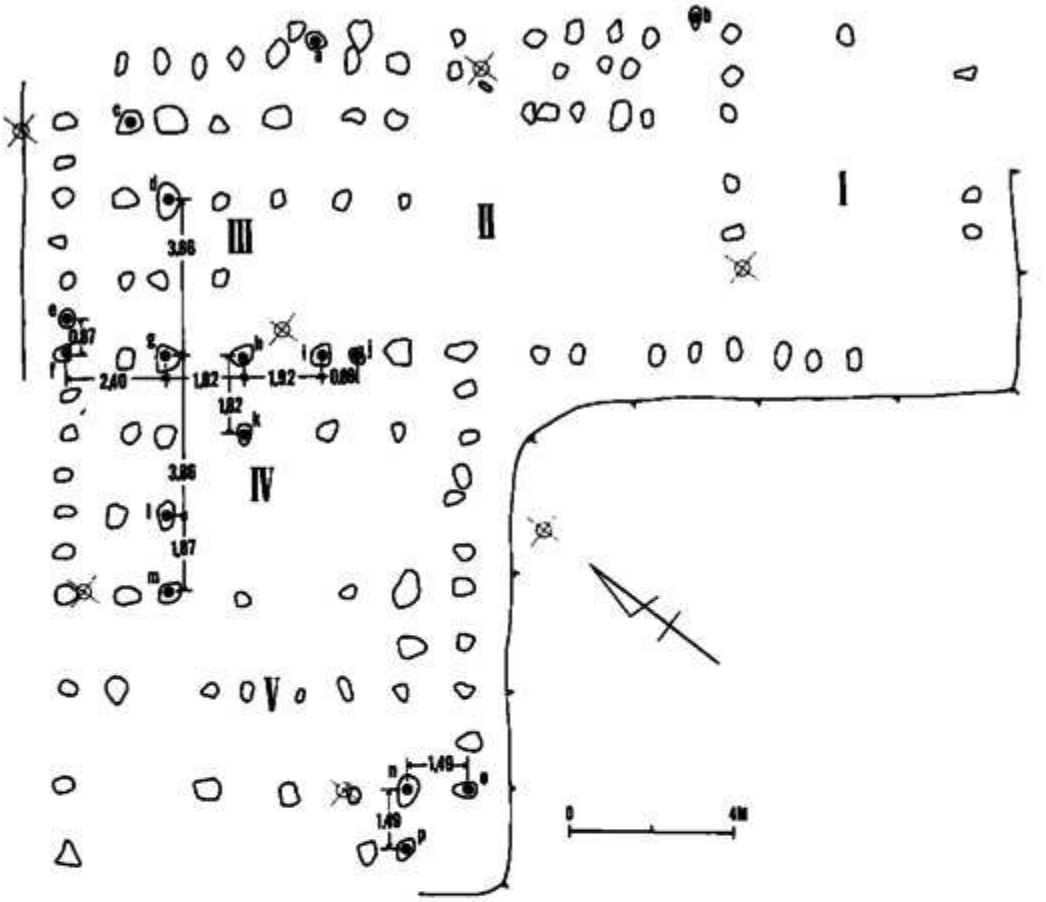
番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
1	新寛永銅一文銭	近世			2.21	1.75	方	不明	不明		背「元」
2	〃	〃			2.40	3.00	〃	〃	〃		
3	〃	〃			2.40	2.65	〃	〃	〃		
4	古寛永銭	〃			2.52	3.50	〃	〃	〃		
5	新寛永銅一文銭	〃			2.49	4.00	〃	〃	〃		
6	〃	〃			2.36	2.05	〃	〃	〃		
7	〃	〃			2.55	2.86	〃	〃	〃		背「文」
8	〃	〃			2.50	3.05	〃	〃	〃		
9	〃	〃			2.32	2.40	〃	〃	〃		
10	〃	〃			2.35	2.00	〃	〃	〃		
11	〃	〃			2.52	3.12	〃	〃	〃		背「文」
12	〃	〃			2.52	2.57	〃	〃	〃		〃
13	〃	〃			2.50	3.09	〃	〃	〃		
14	古寛永銭	〃			2.43	3.50	〃	〃	〃		
15	〃	〃			2.50	2.31	〃	〃	〃		
16	〃	〃			2.60	2.77	〃	〃	〃		
17	新寛永銅一文銭	〃			2.51	3.45	〃	〃	〃		
18	〃	〃			2.50	2.15	〃	〃	〃	われ	背「文」
19	〃	〃			2.30	2.12	〃	〃	〃		

下猿田II遺跡　11号・13号・15号・16号墓址

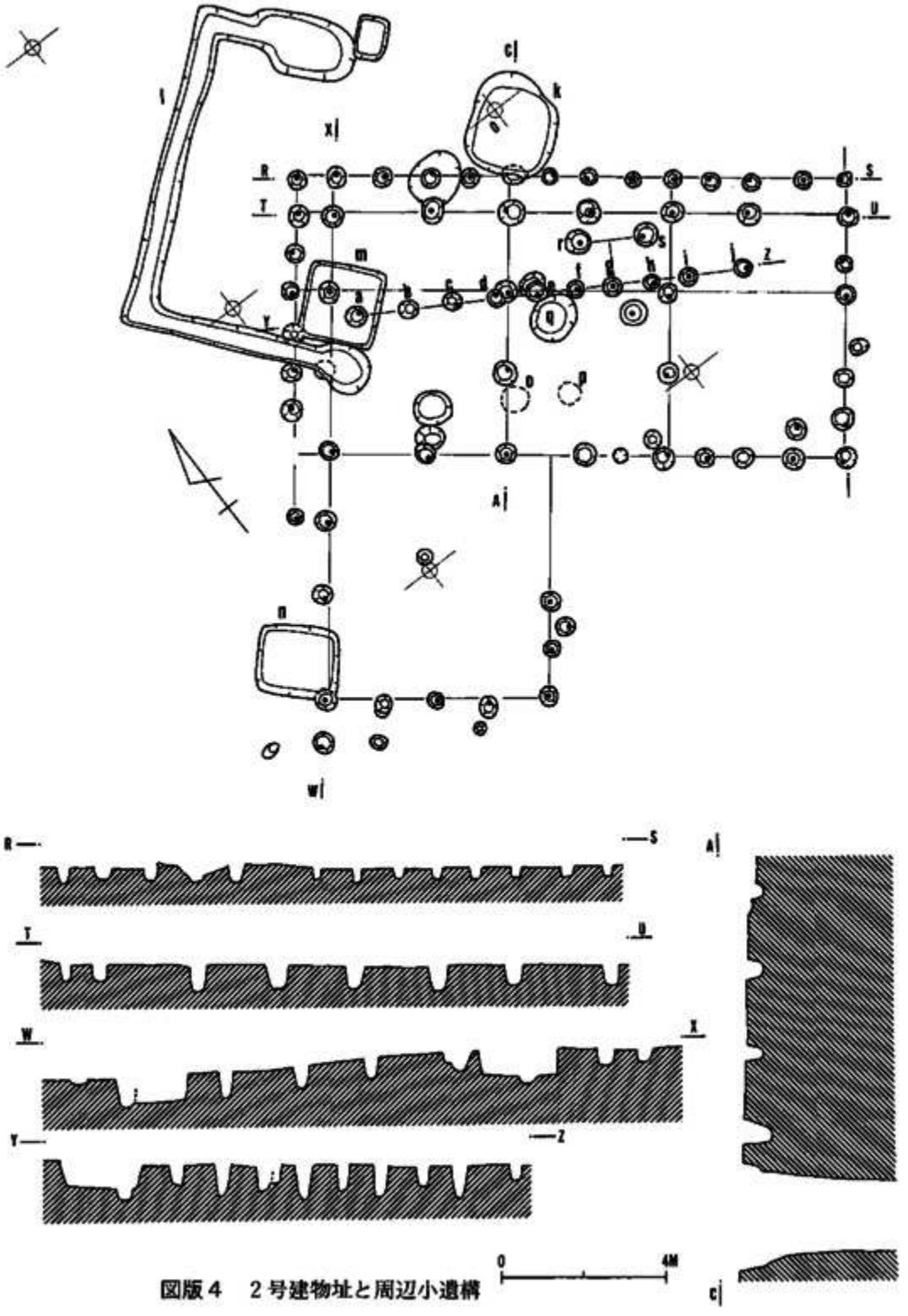
番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
1	新寛永銅一文銭	近世				2.25	方	不明	不明		六道銭
2	〃	〃				1.98	〃	〃	〃		鋳秋田、六道銭
3	〃	〃				1.77	〃	〃	〃		〃　〃
4	〃	〃				2.00	〃	〃	〃		六道銭
5	〃	〃				1.73	〃	〃	〃		〃
6	古寛永銭	〃				3.10	〃	〃	〃		〃
7	新寛永銅一文銭	〃			2.25	2.04	〃	〃	〃		
	13号墓址										
1	新寛永銅一文銭	近世			2.28	1.97	方	不明	不明		
2	〃	〃			2.37	2.19	〃	〃	〃		
3	〃	〃			2.52	2.75	〃	〃	〃		背「文」
4	新寛永鉄一文銭	〃				3.31	〃	〃	〃		
5	〃	〃				3.36	〃	〃	〃		
6	〃	〃				3.40	〃	〃	〃		
	15号墓址										
1	古寛永銭	近世			2.54	3.00	方	不明	不明		
2	新寛永銅一文銭	〃			2.50	2.76	〃	〃	〃		背「文」
3	〃	〃			2.50	2.74	〃	〃	〃		〃
	16号墓址										
1	新寛永銅一文銭	近世			2.50		方	不明	不明		背「文」



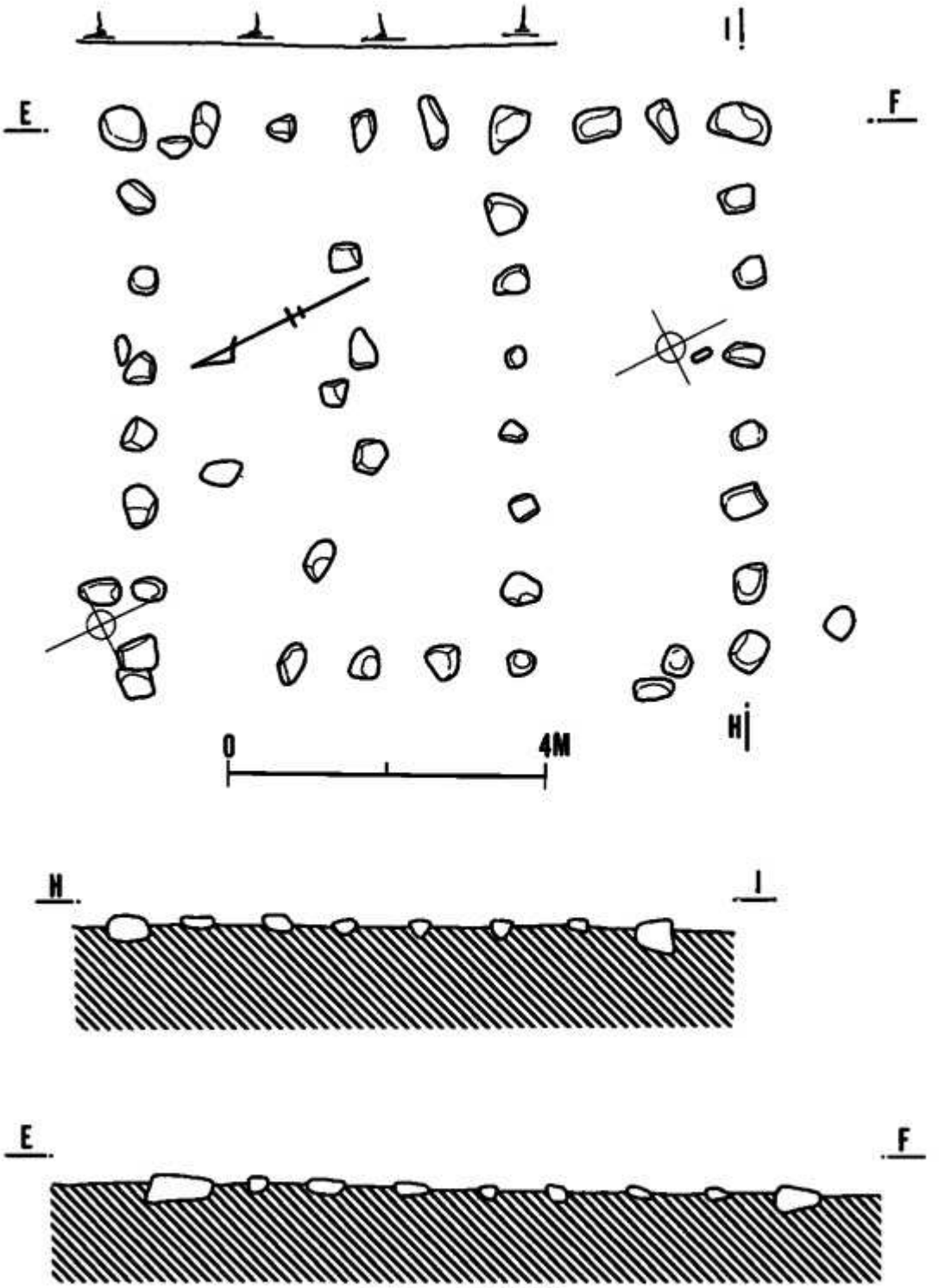
図版２　１号建物址



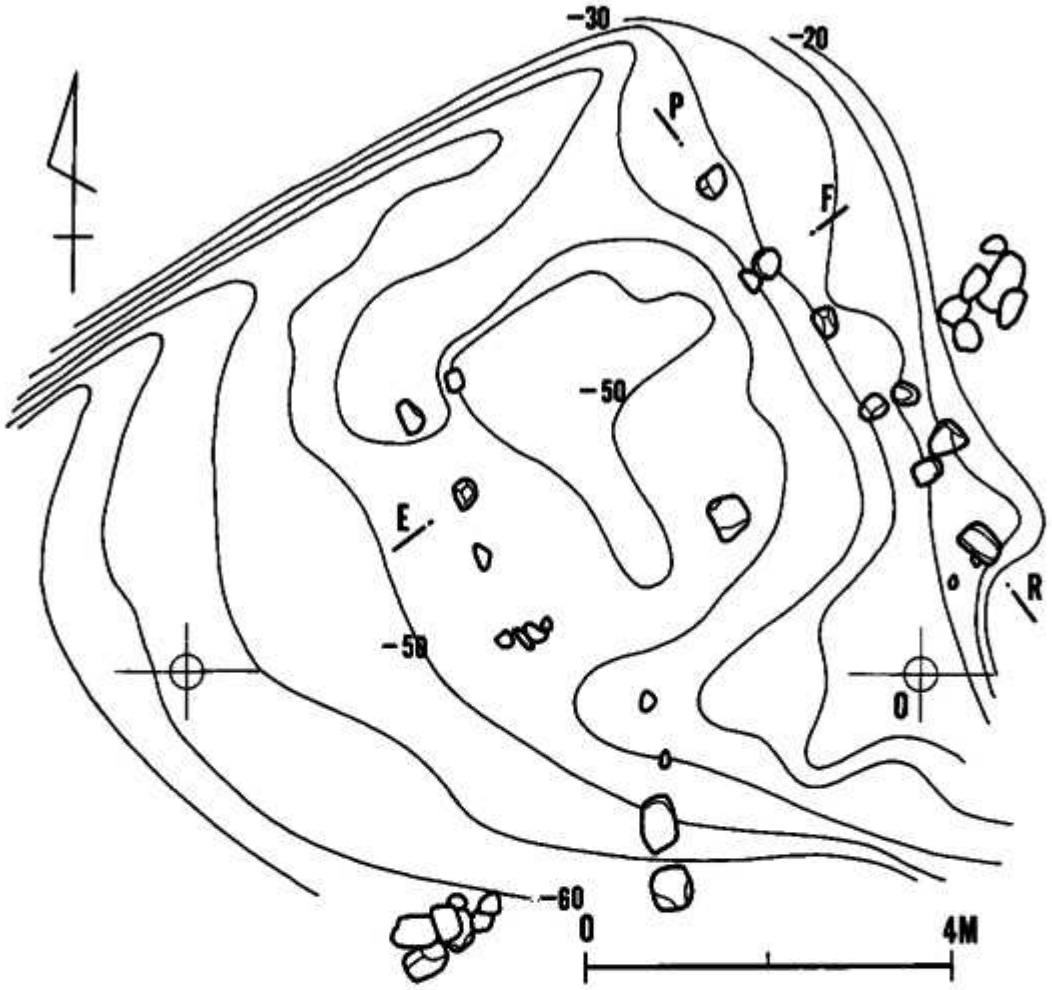
図版.3　1号建物址

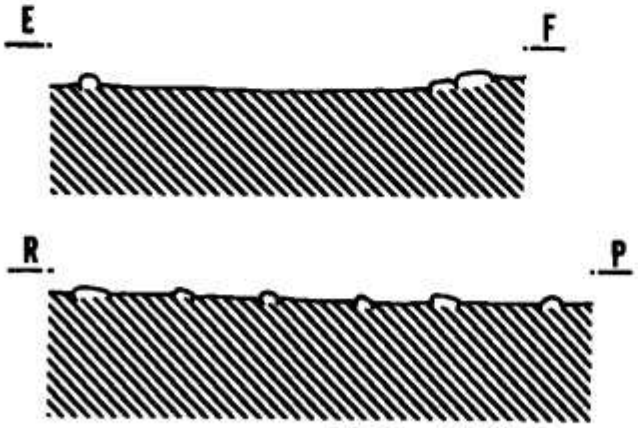


図版４　２号建物址と周辺小遺構

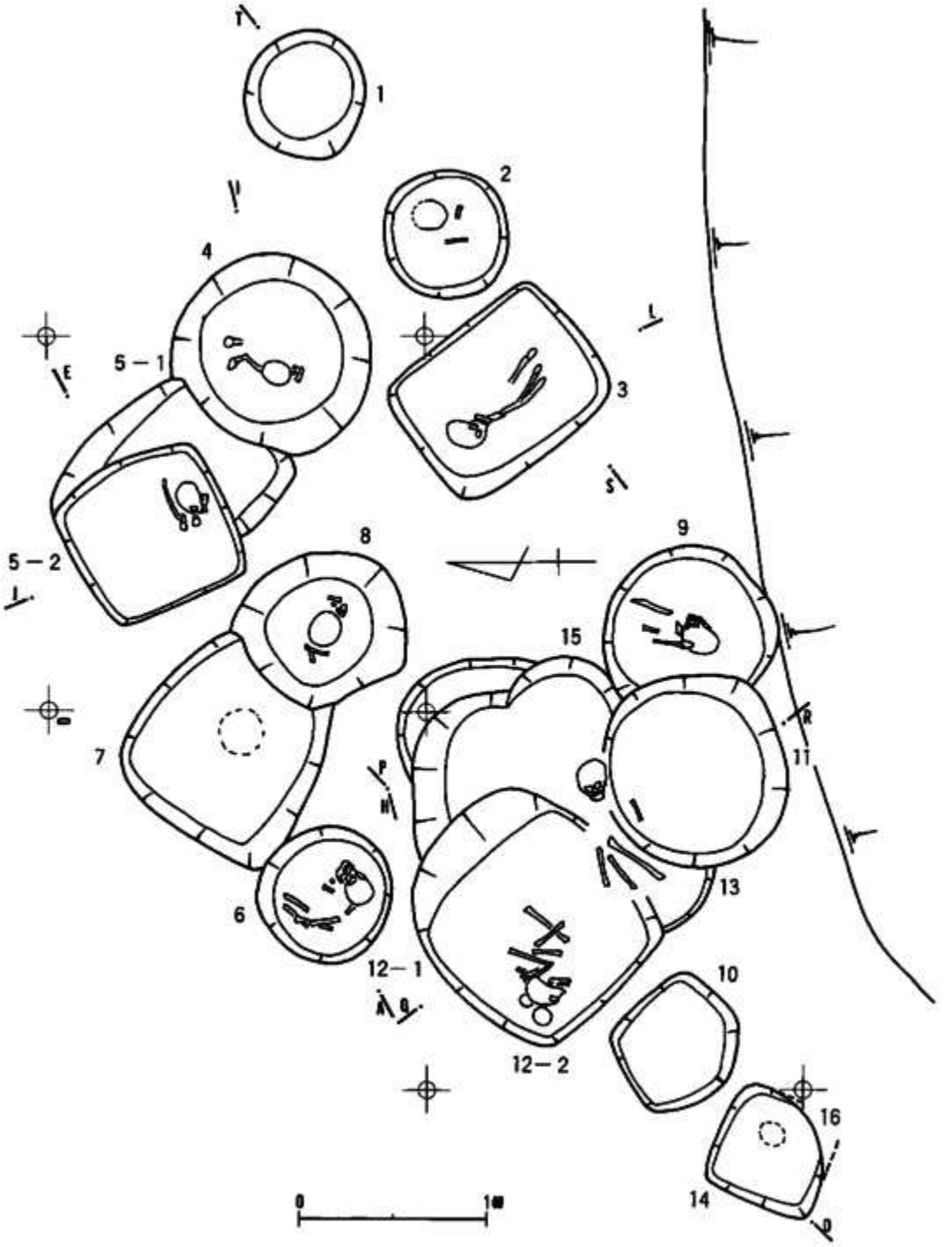


図版５　３号建物址

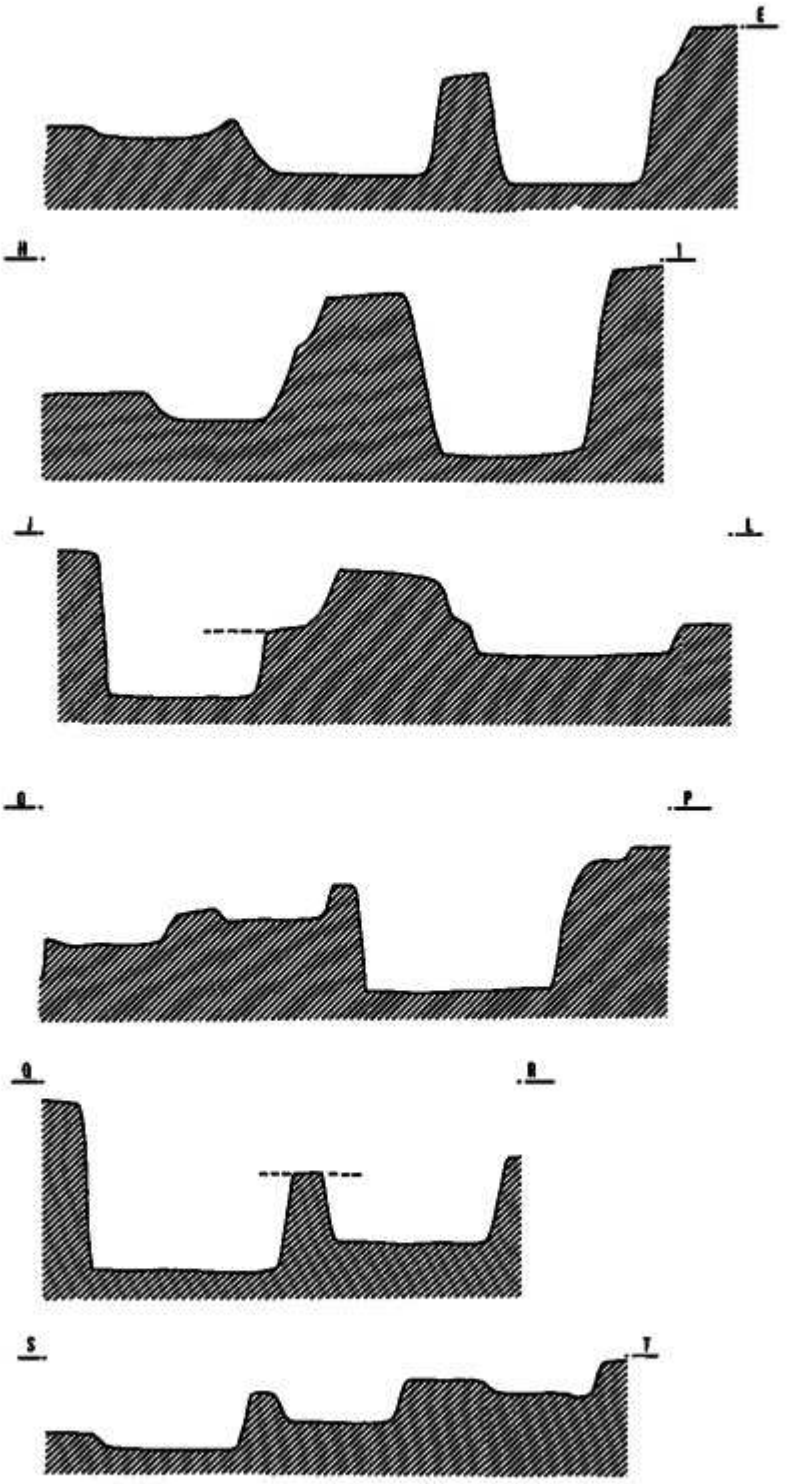




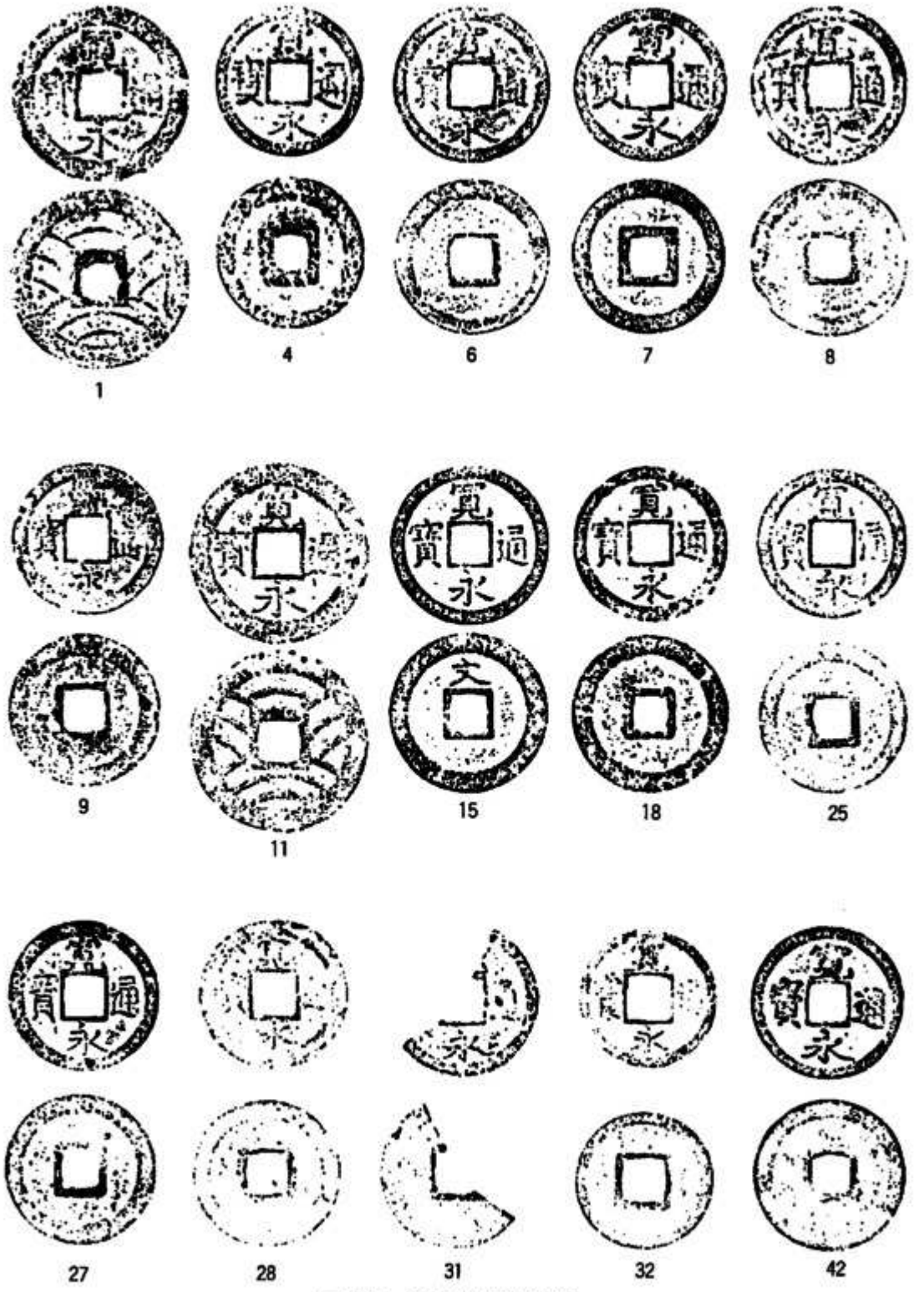
図版６　４号建物址



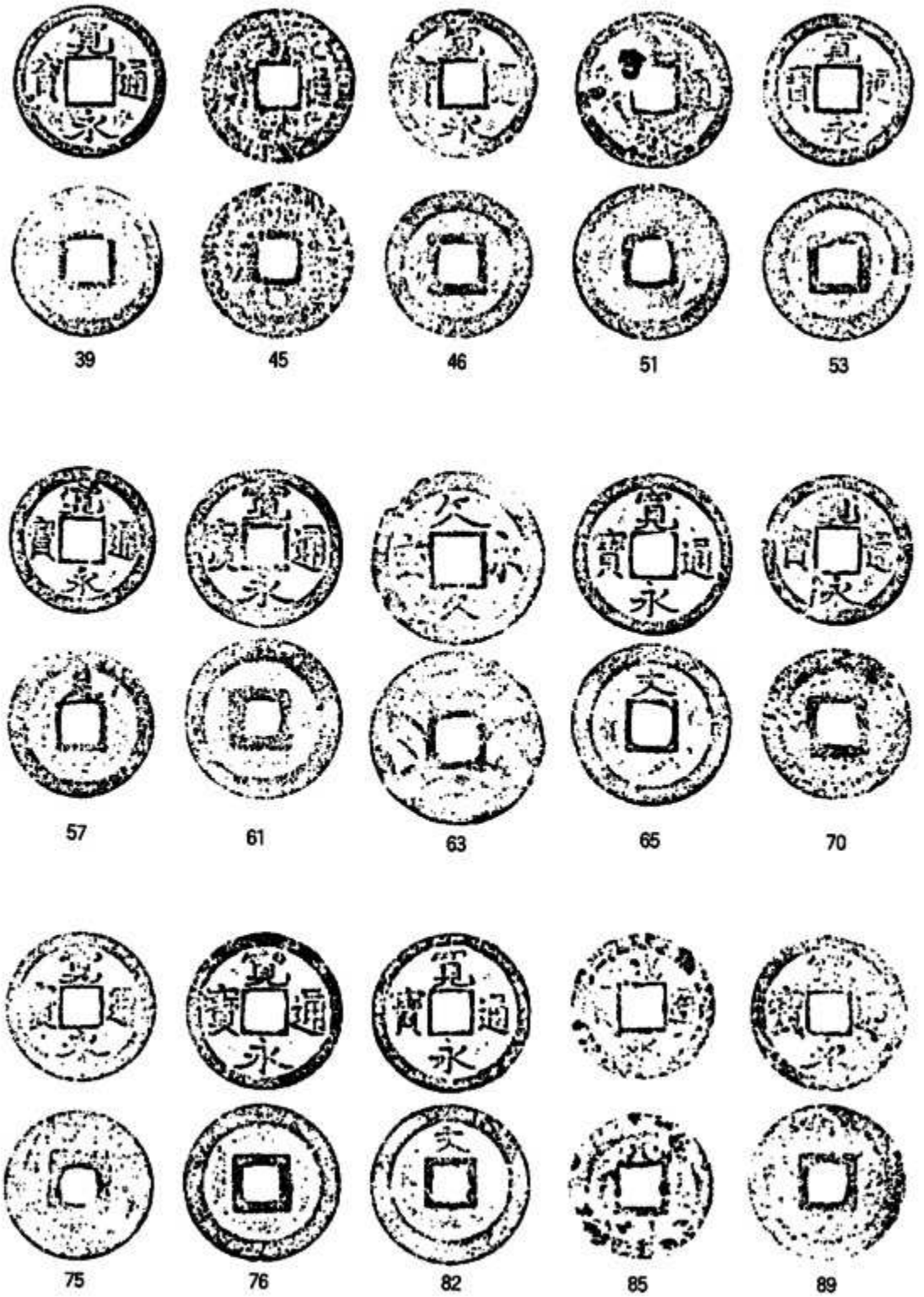
図版７　墓址平面図



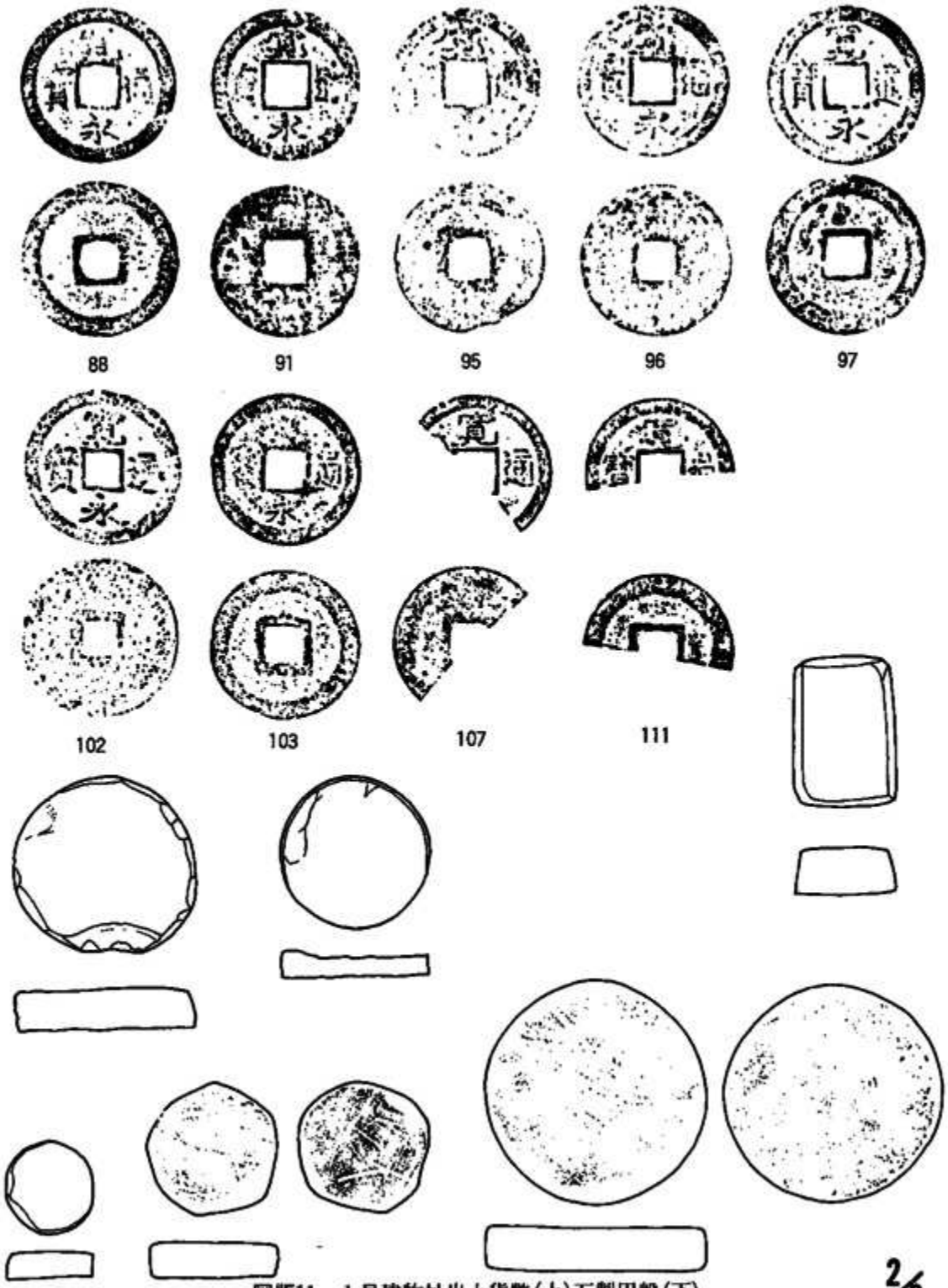
図版８　墓址エレベーション図　0 ―― 1M



図版９　１号建物址出土貨幣

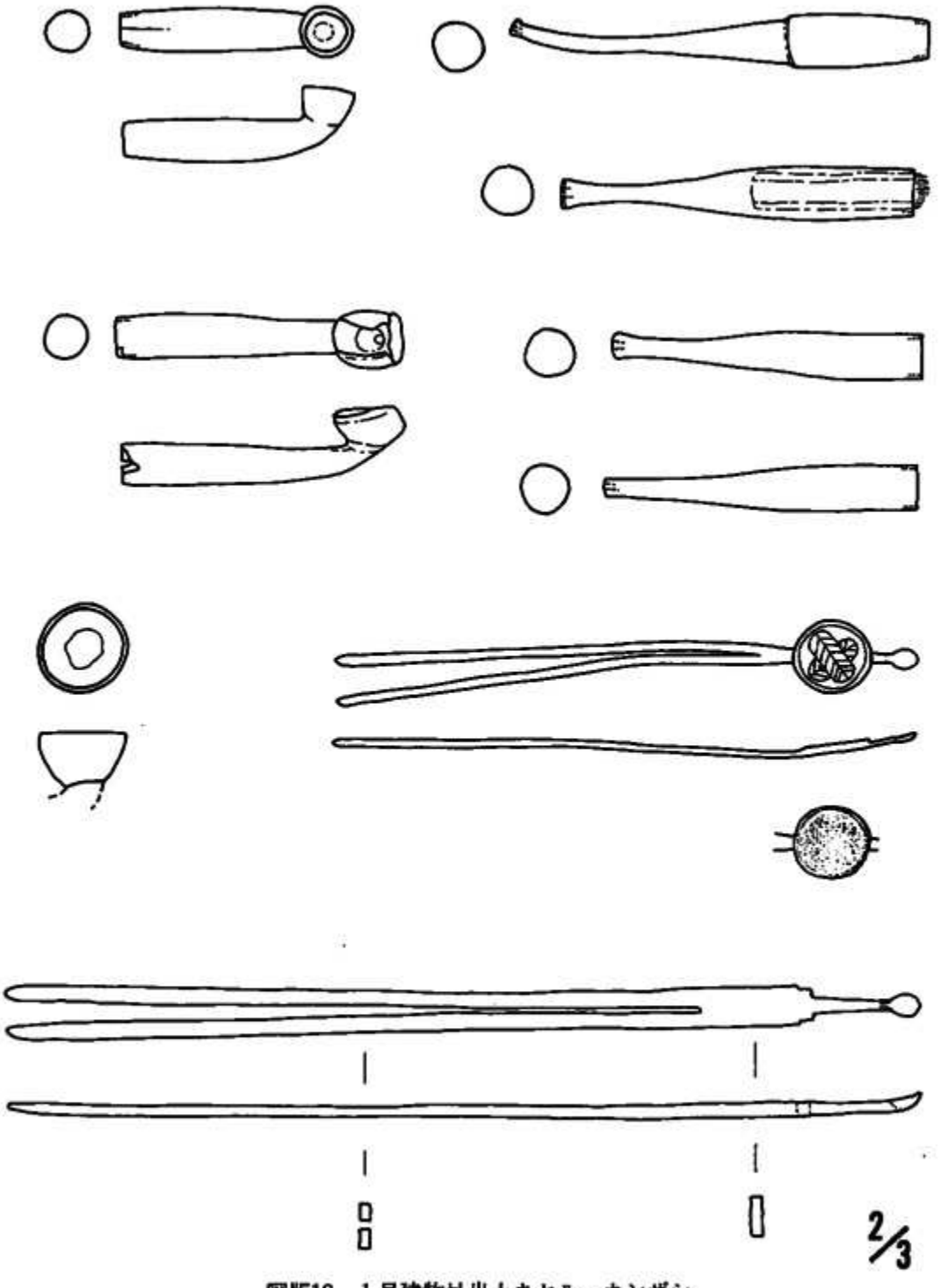


図版10　1号建物址出土貨幣

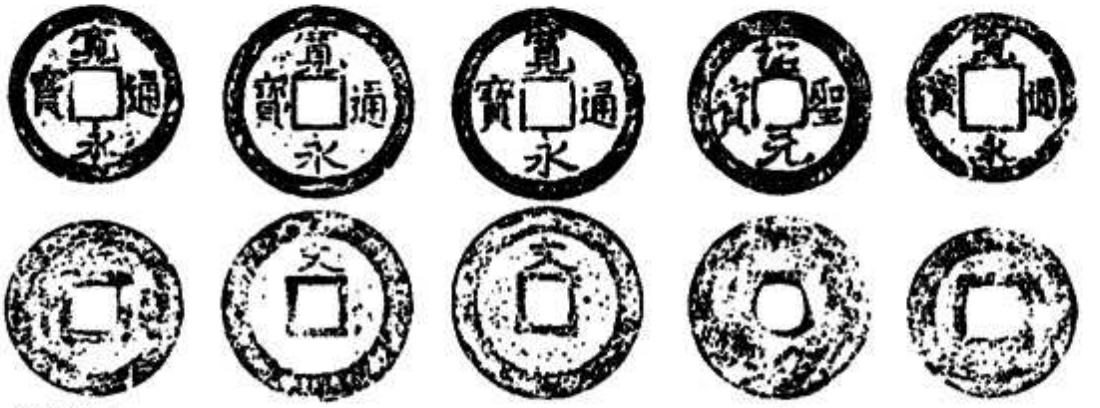


図版11　1号建物址出土貨幣(上)石製円盤(下)

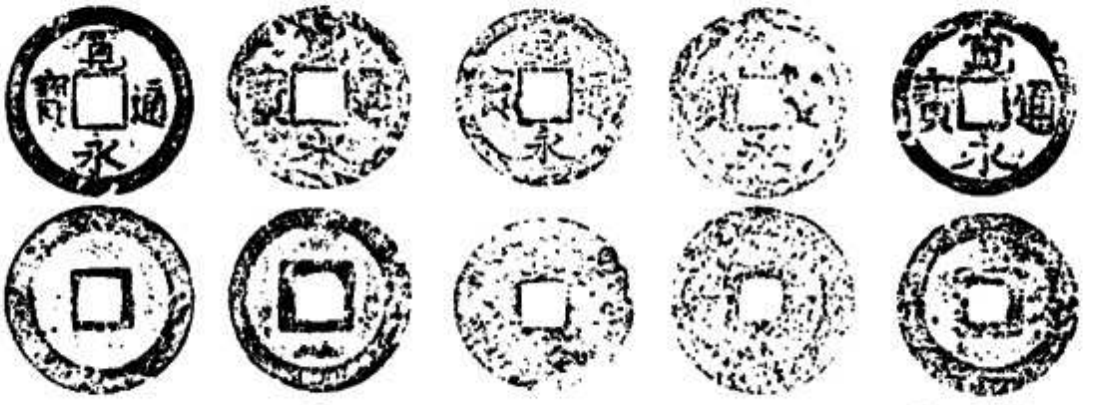
2/3



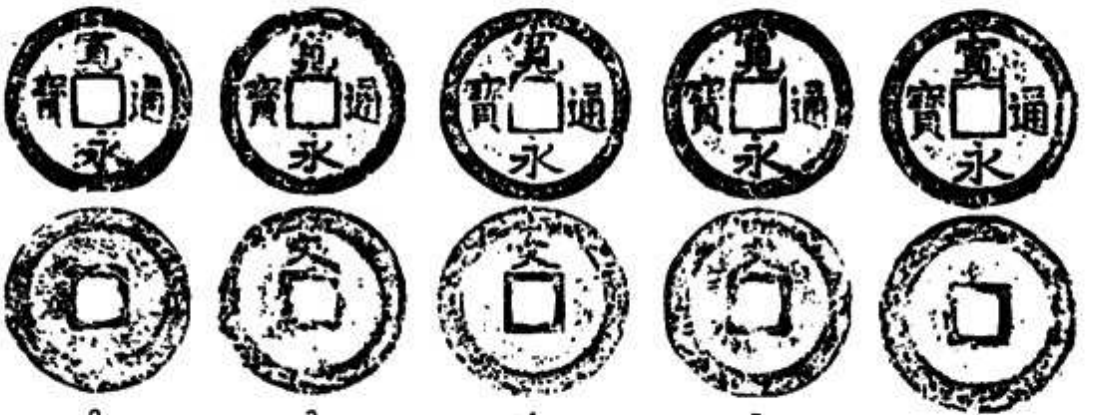
図版12　1号建物址出土キセル・カンザシ



3号墓址 1　2　3　4　5

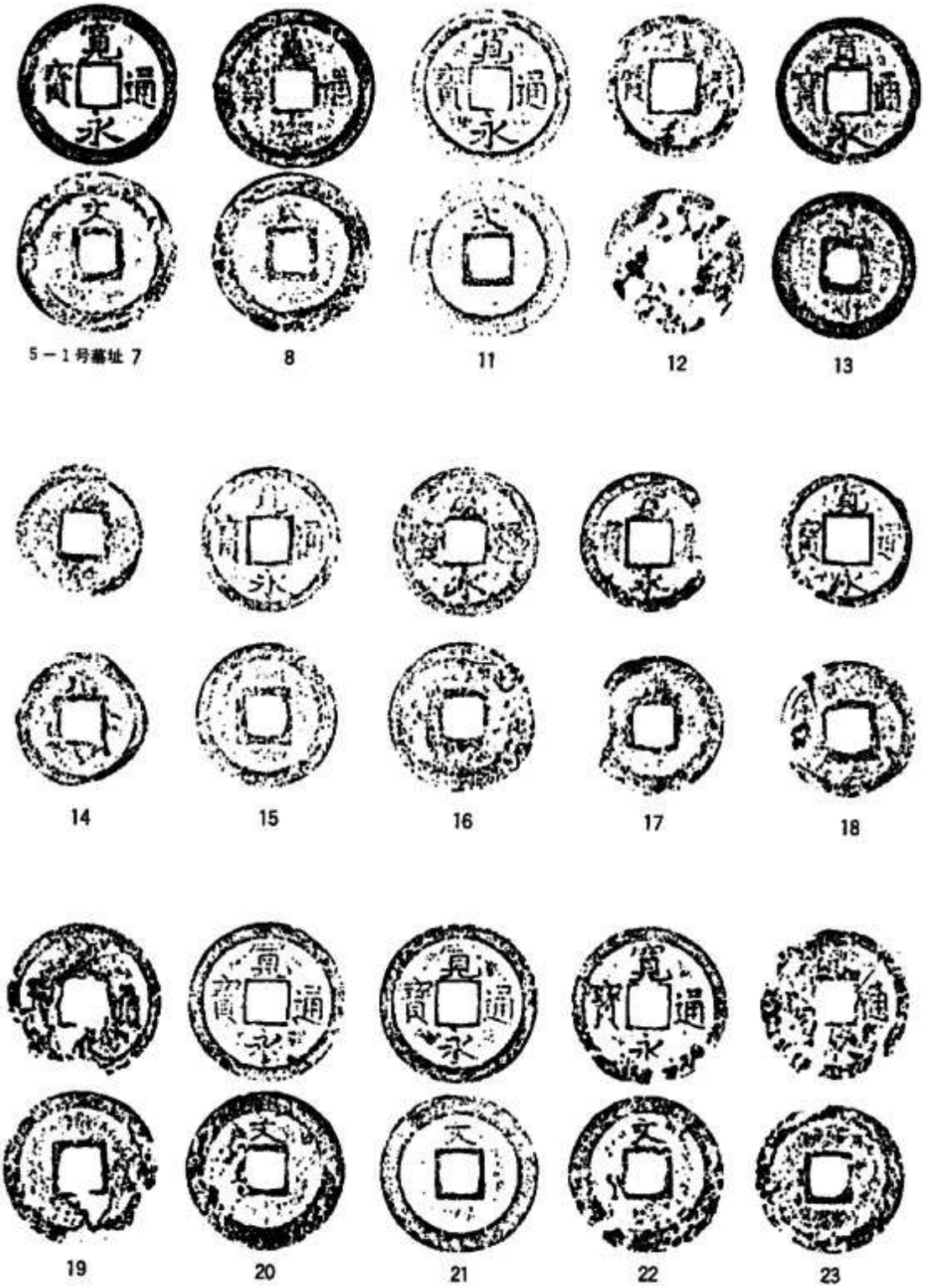


6　1　2　3　5－L号墓址 1

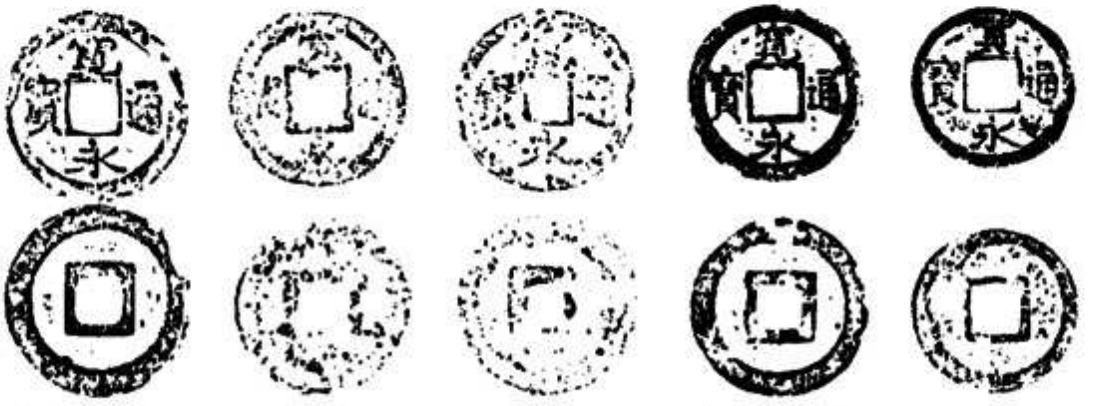


2　3　4　5　6

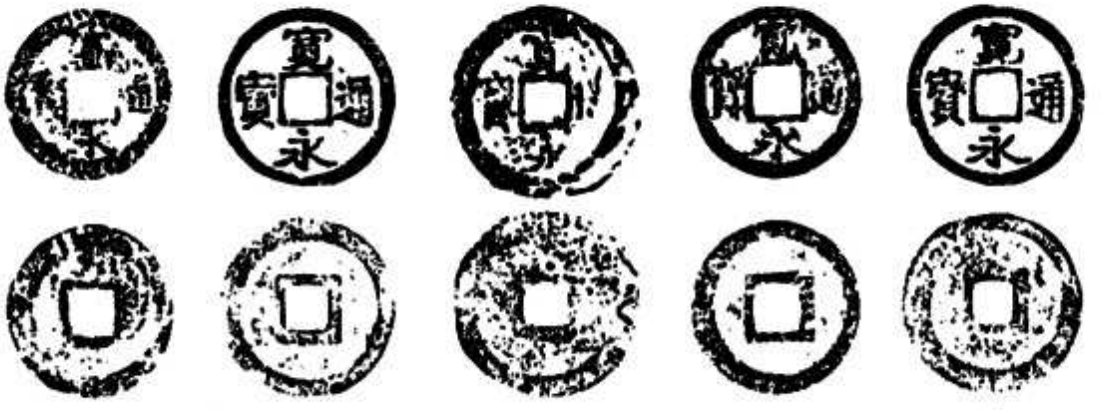
図版13　墓址出土貨幣



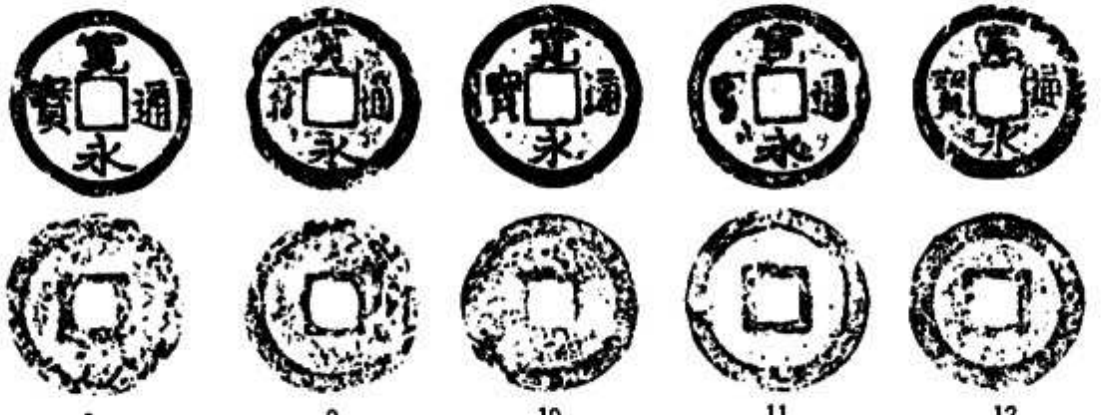
図版14　墓址出土貨幣



5－1号墓址 24　28　29　5－2号墓址 1　2

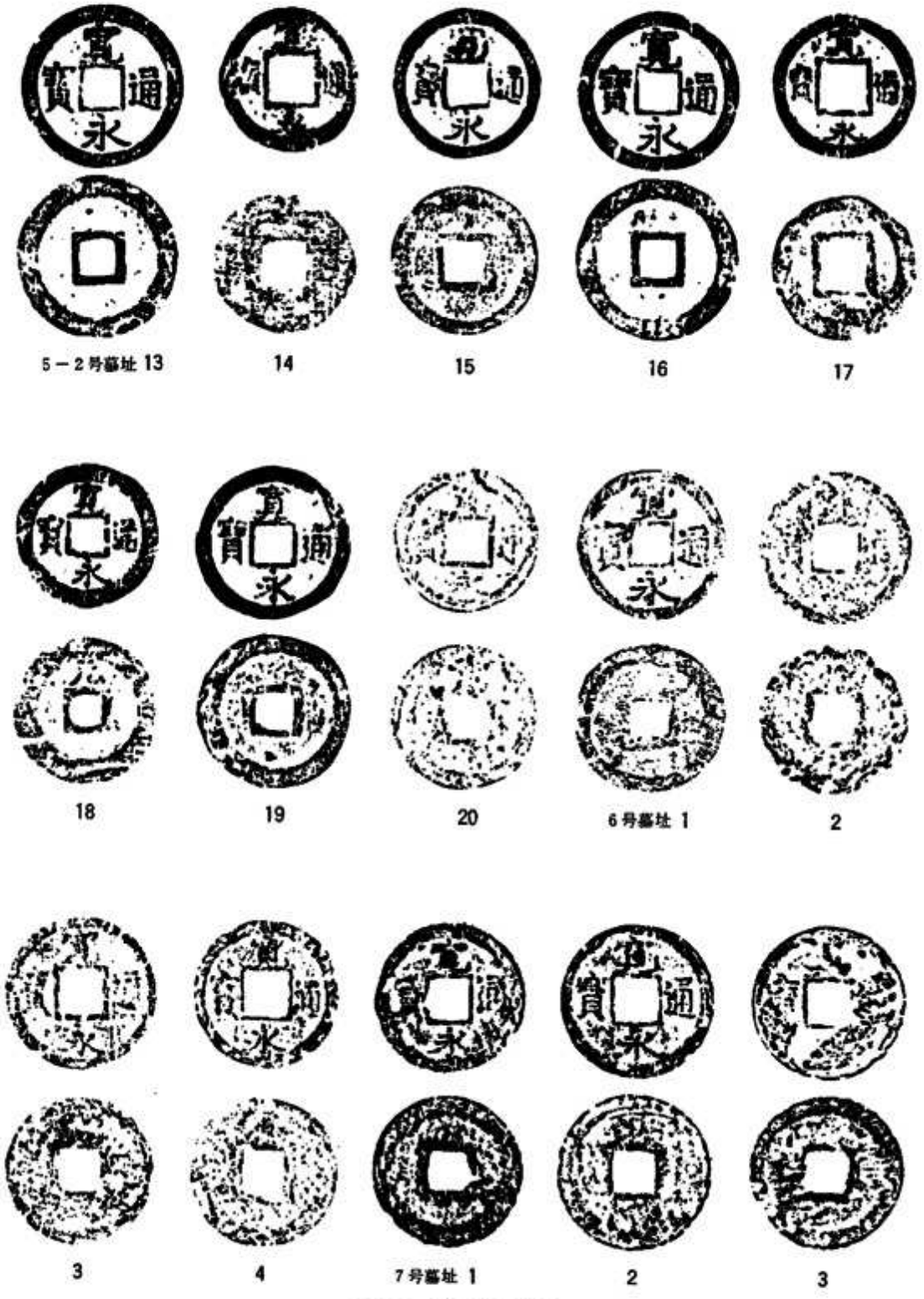


3　4　5　6　7

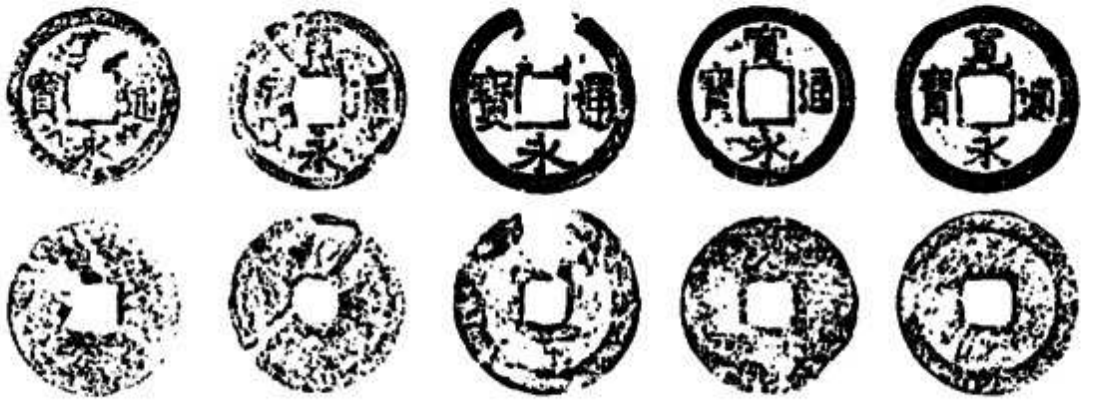


8　9　10　11　12

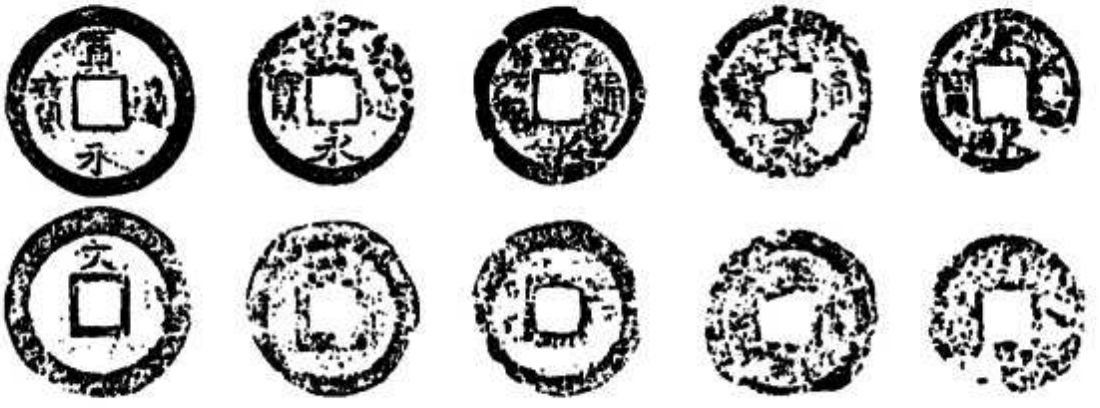
図版15　墓址出土貨幣



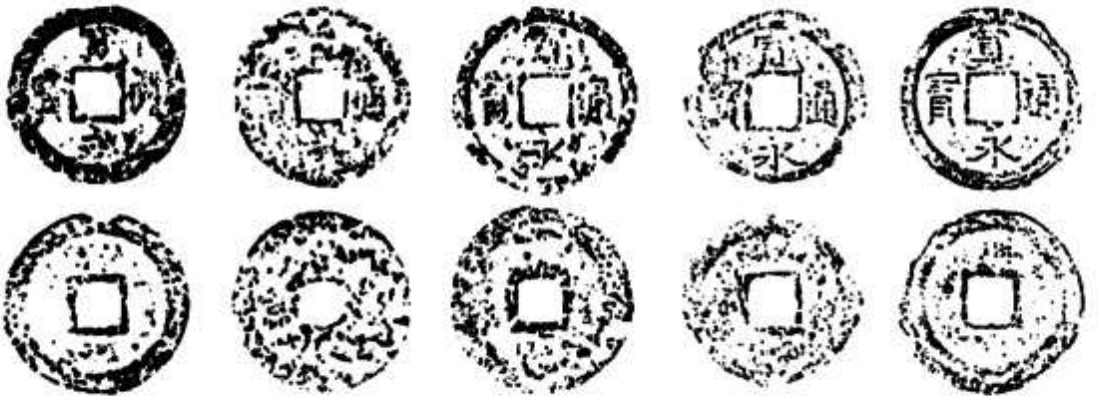
図版16　墓址出土貨幣



7号墓址 4　　5　　8号墓址 1　　2　　3

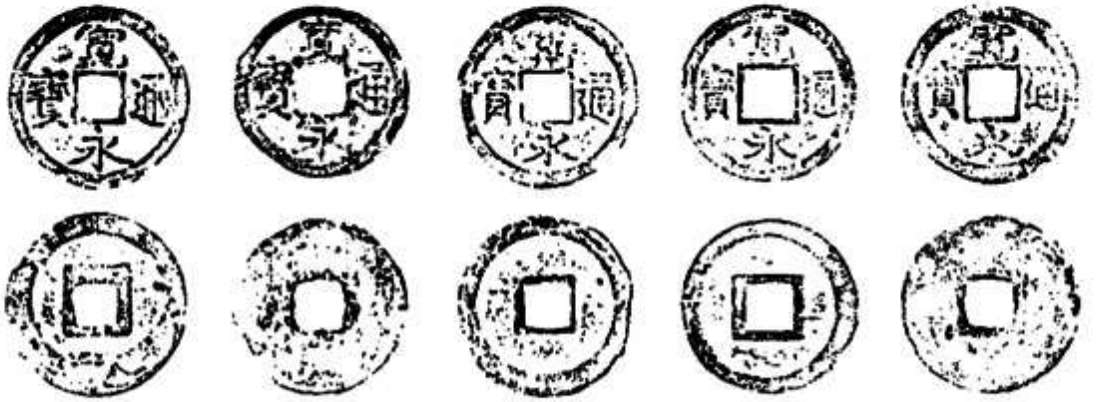


4　　5　　6　　7　　8

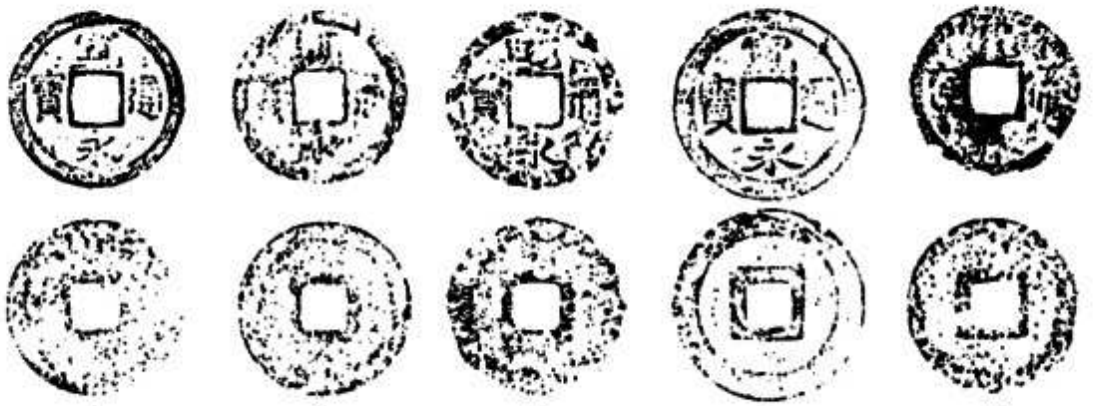


9　　10　　11　　9号墓址 1　　2

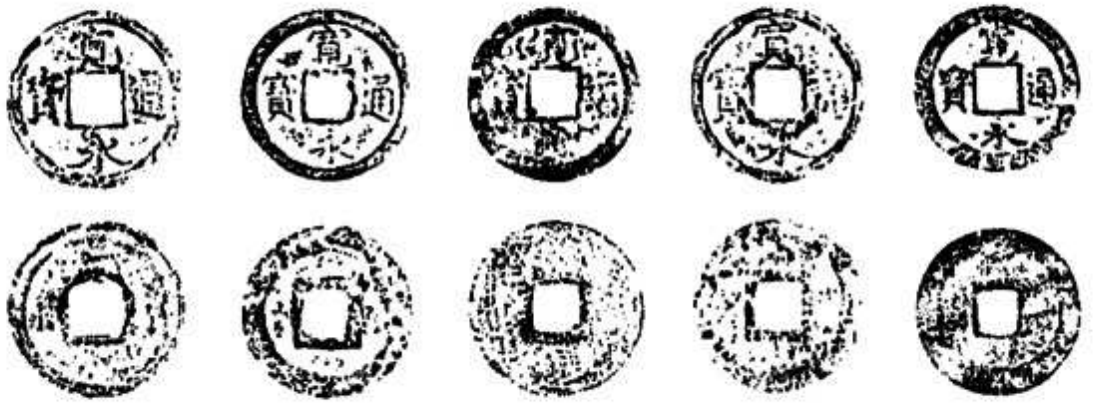
図版17　墓址出土貨幣



9号墓址 4　　5　　6　　11号墓址 1　　2

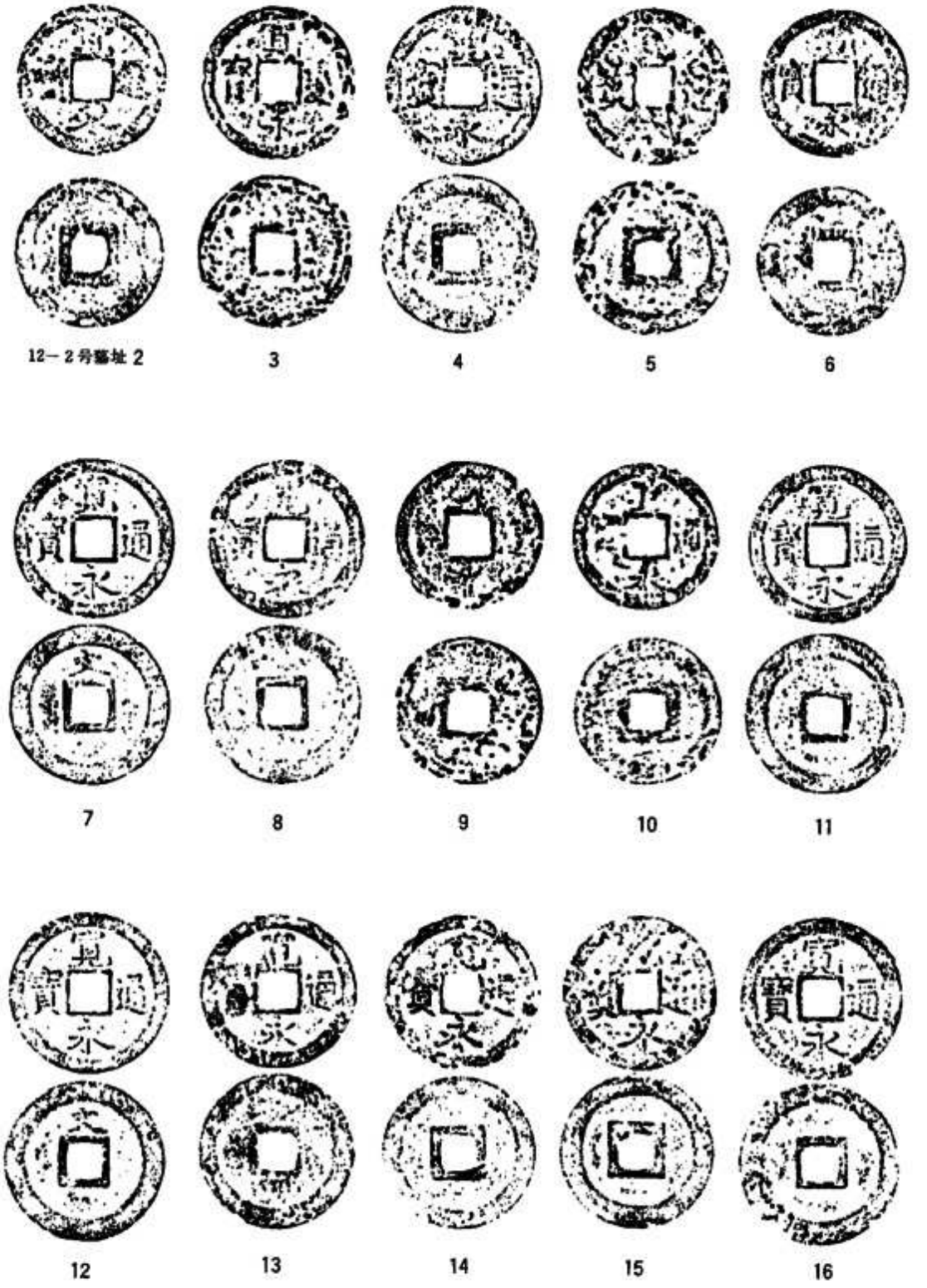


3　　4　　5　　6　　7

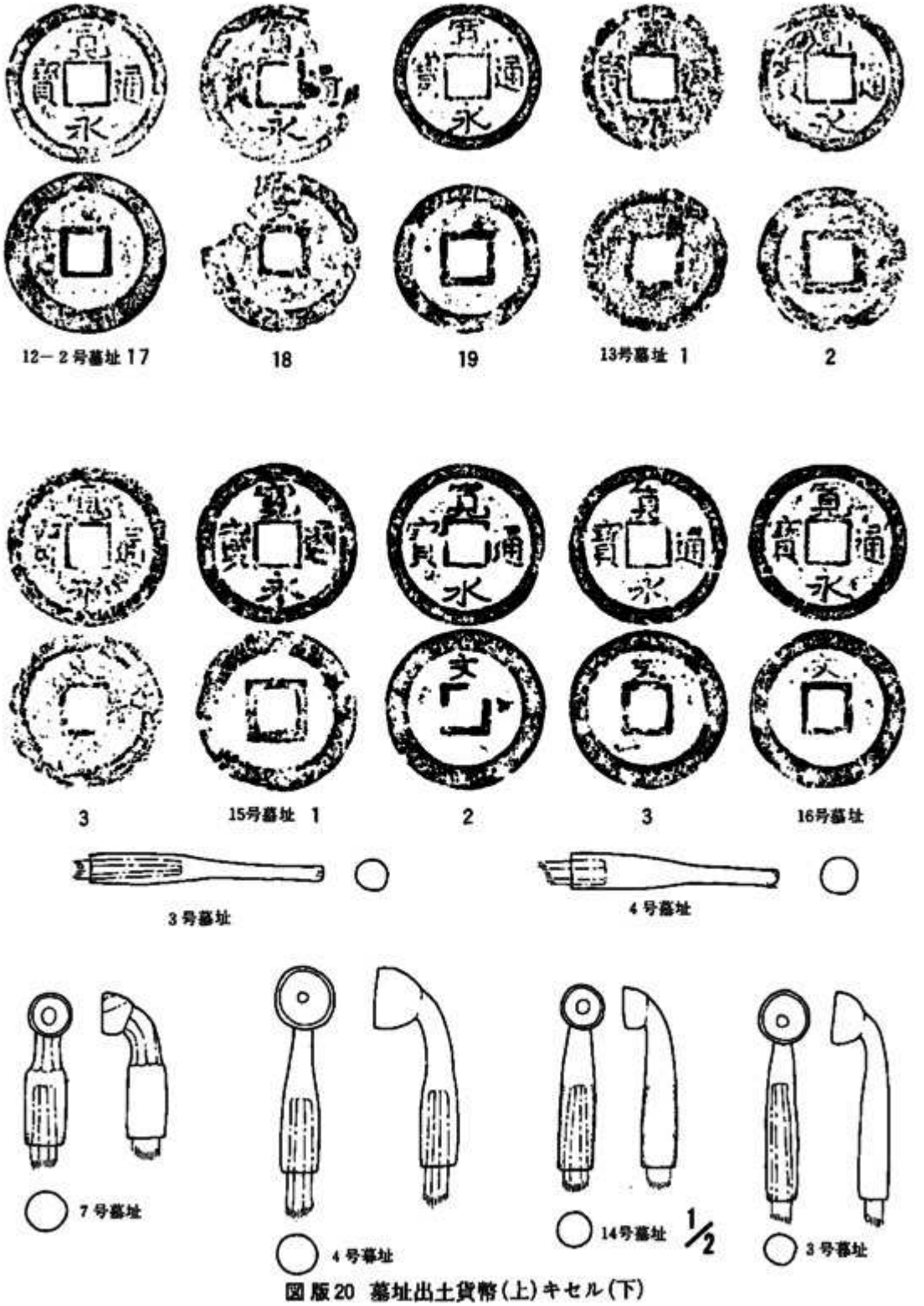


12－1号墓址 1　　2　　3　　4　　12－2号墓址 1

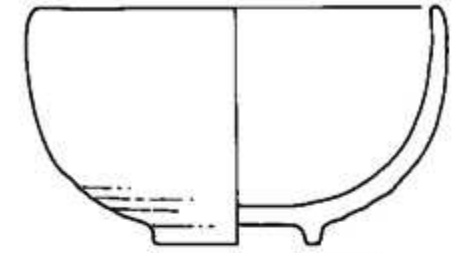
図版18　墓址出土貨幣



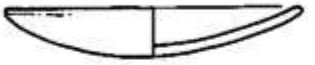
図版19　墓址出土貨幣



図版20 墓址出土貨幣(上)キセル(下)

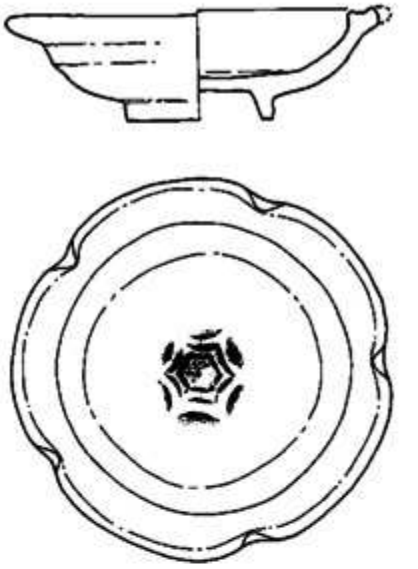


3号墓址

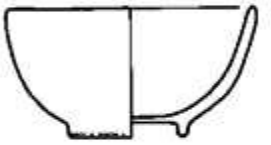


4号墓址

5－1号墓址

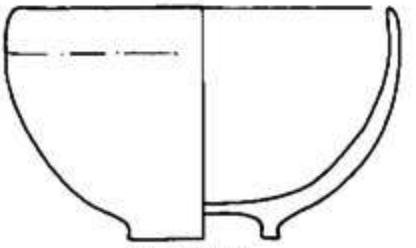


5－1号墓址

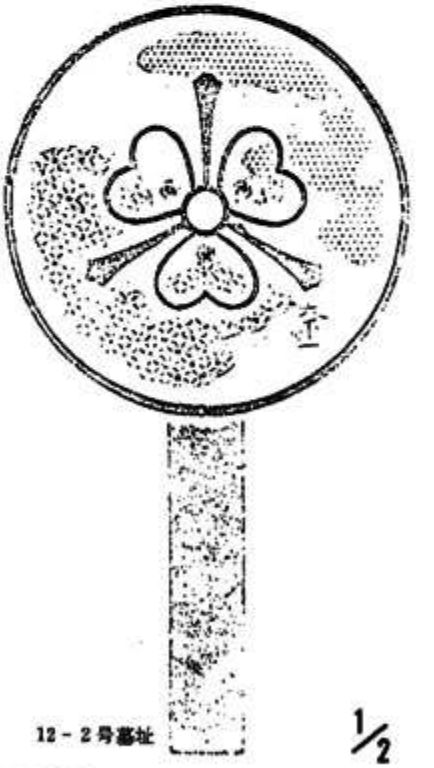


5－2号墓址

12－2号墓址



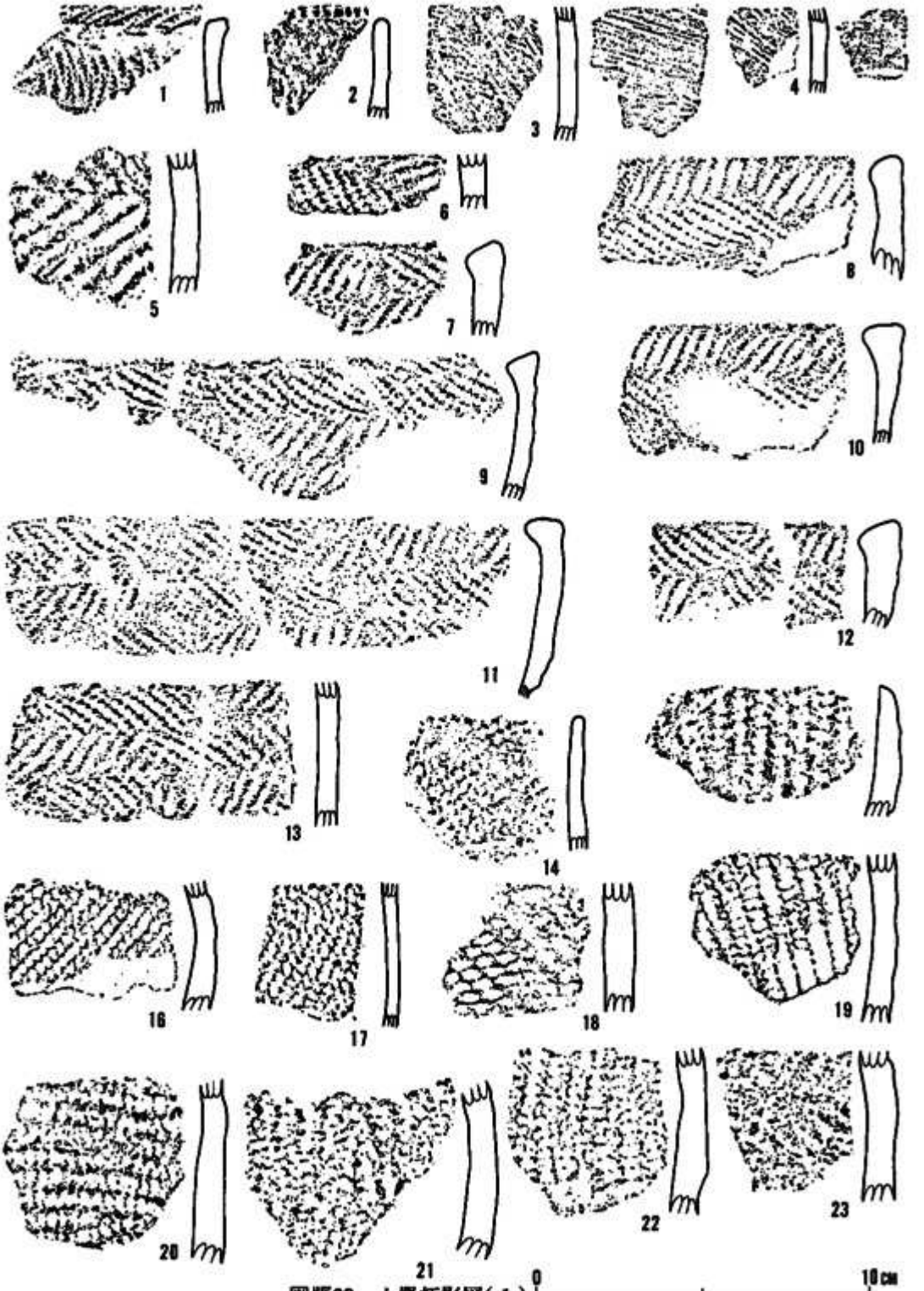
12－2号墓址



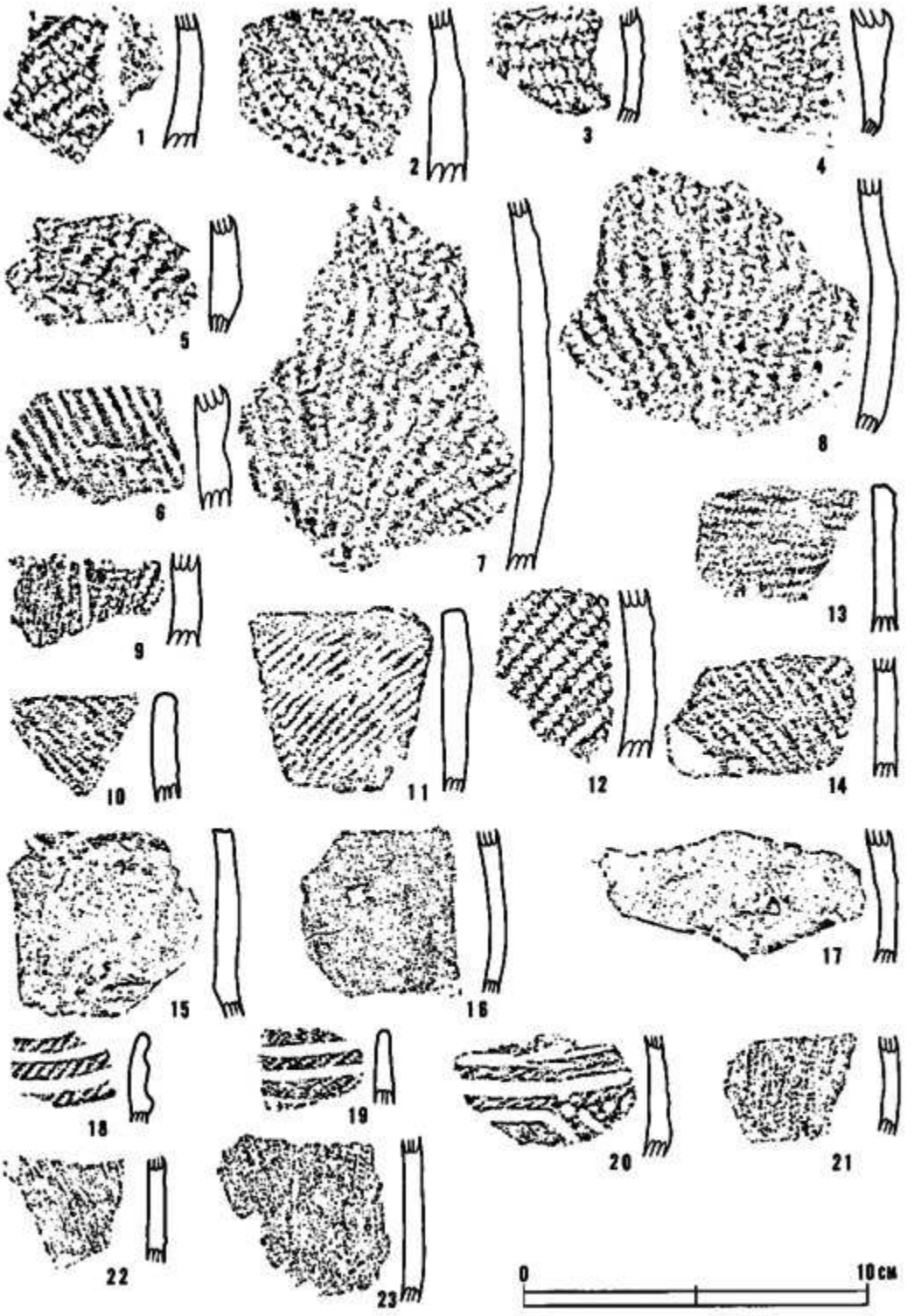
12－2号墓址

1/2

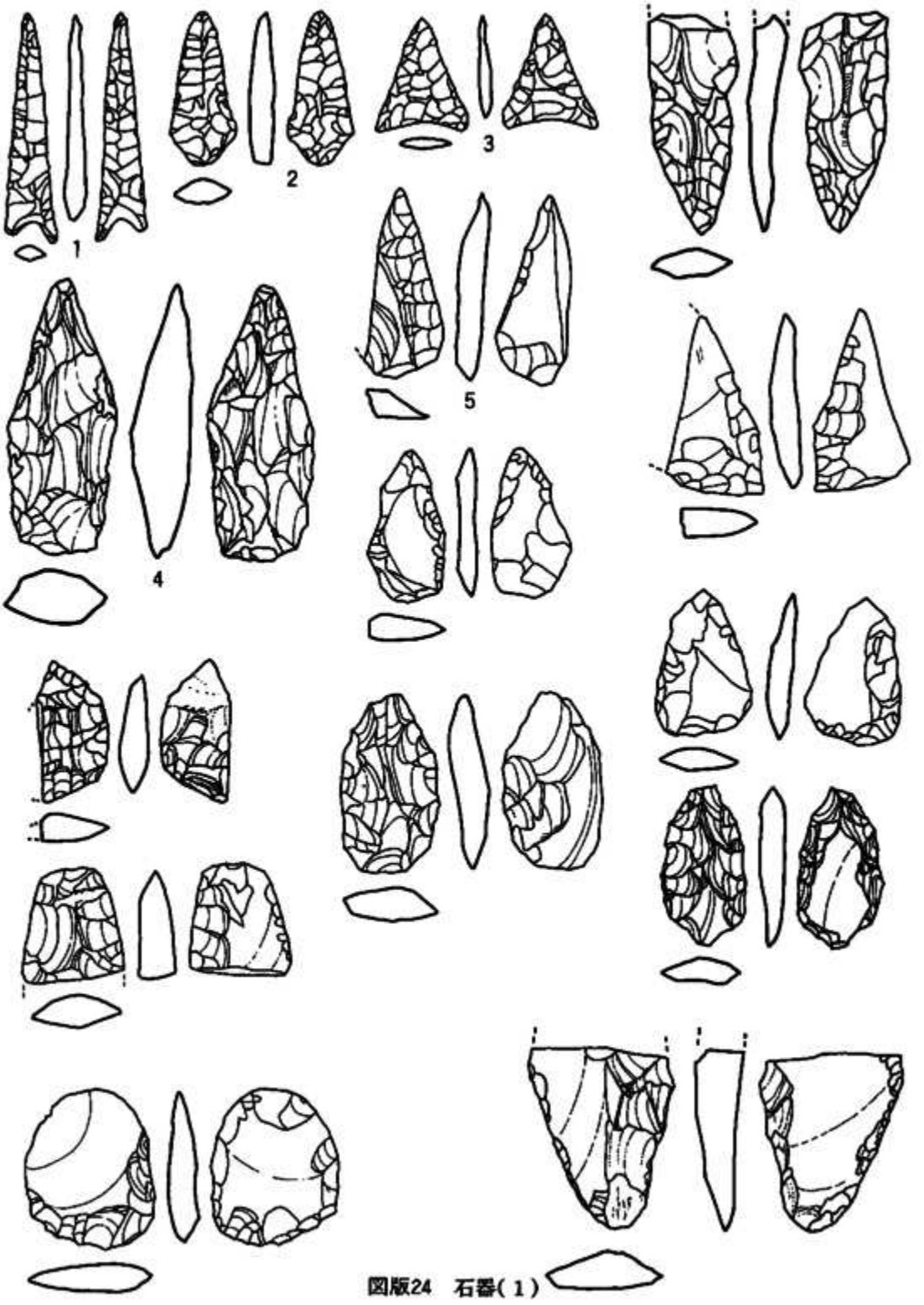
図版21　墓址出土陶磁器柄鏡



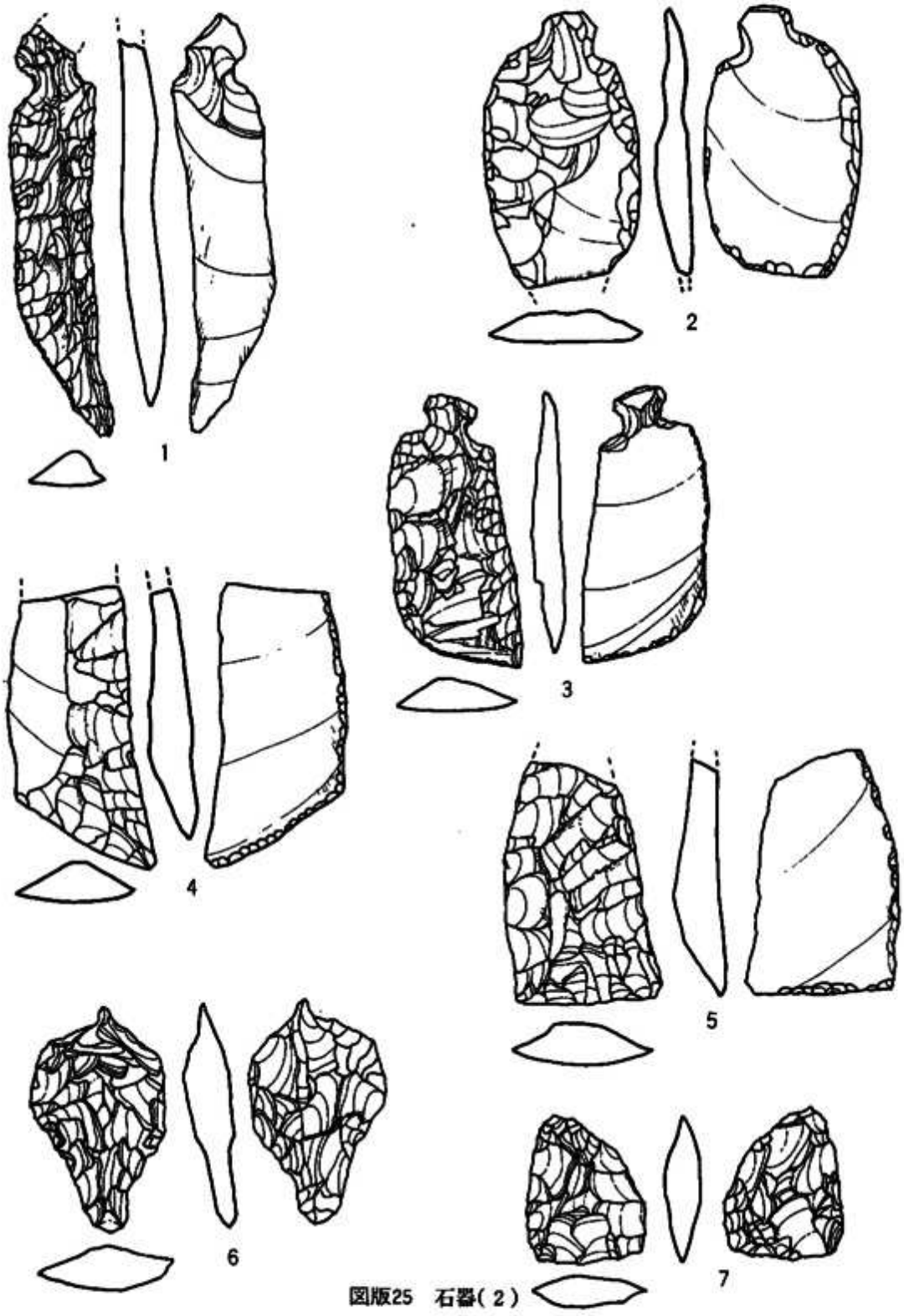
図版22　土器拓影図(1)



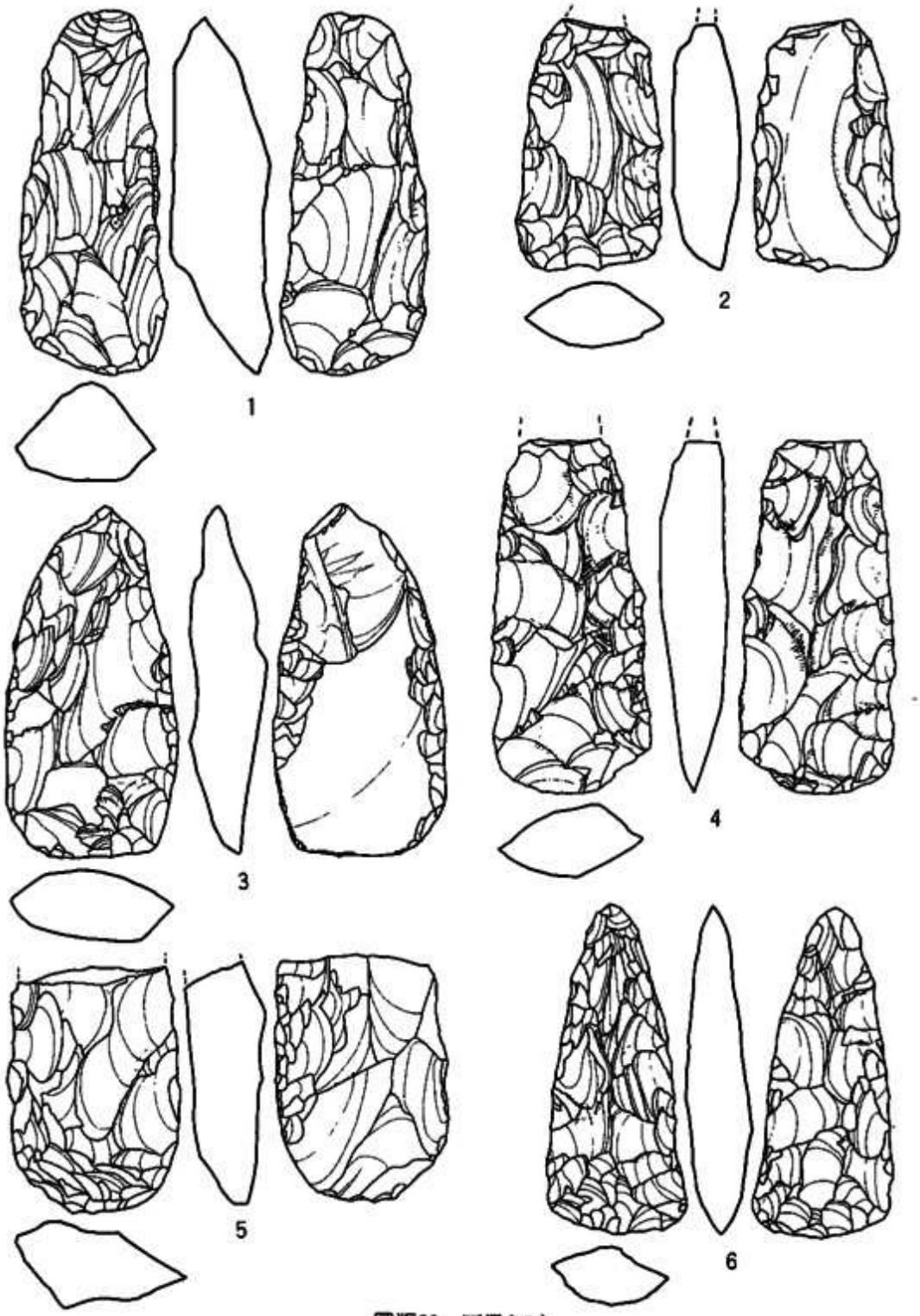
図版23　土器拓影図(2)



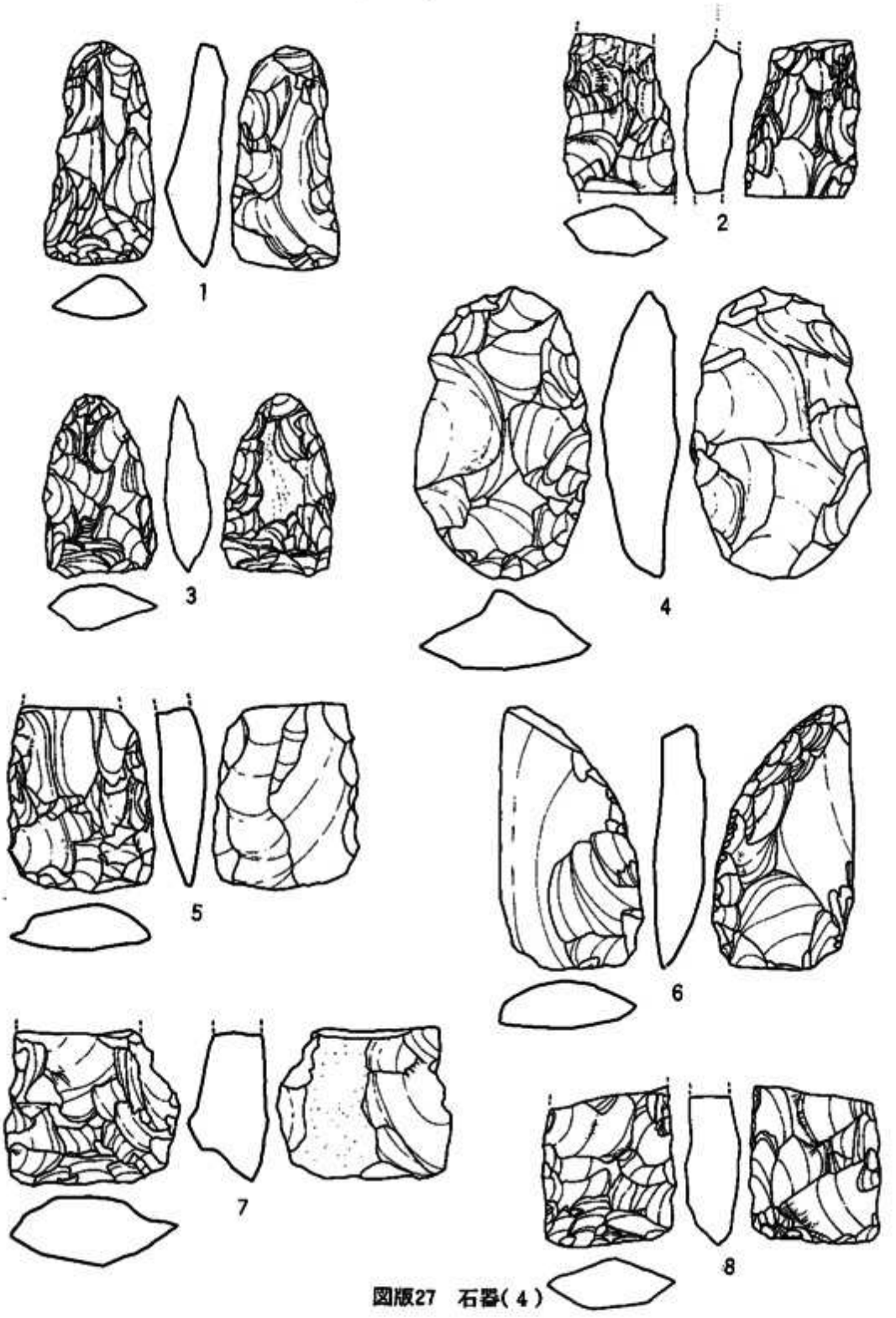
図版24　石器(1)



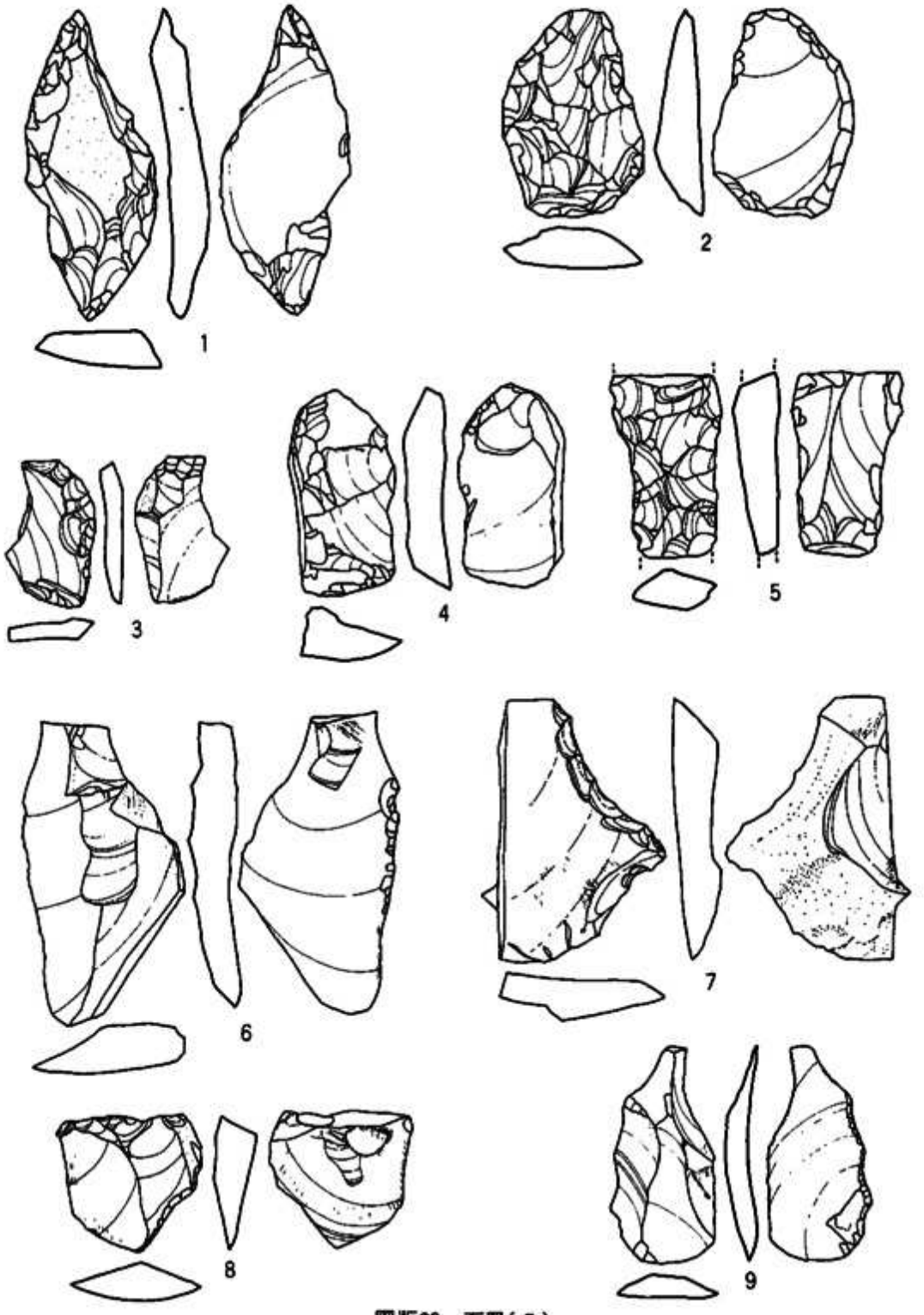
図版25　石器(2)



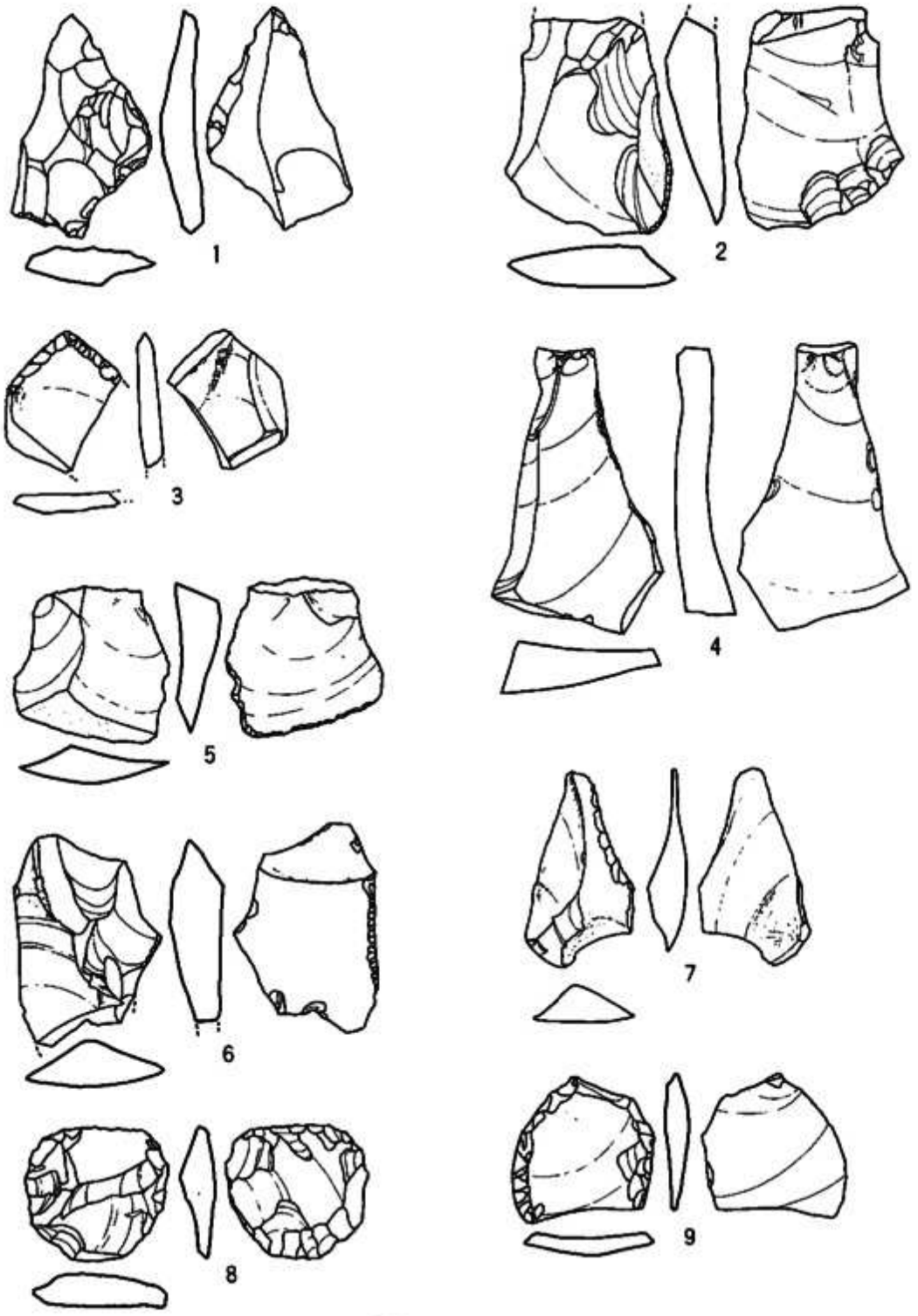
図版26　石器(3)



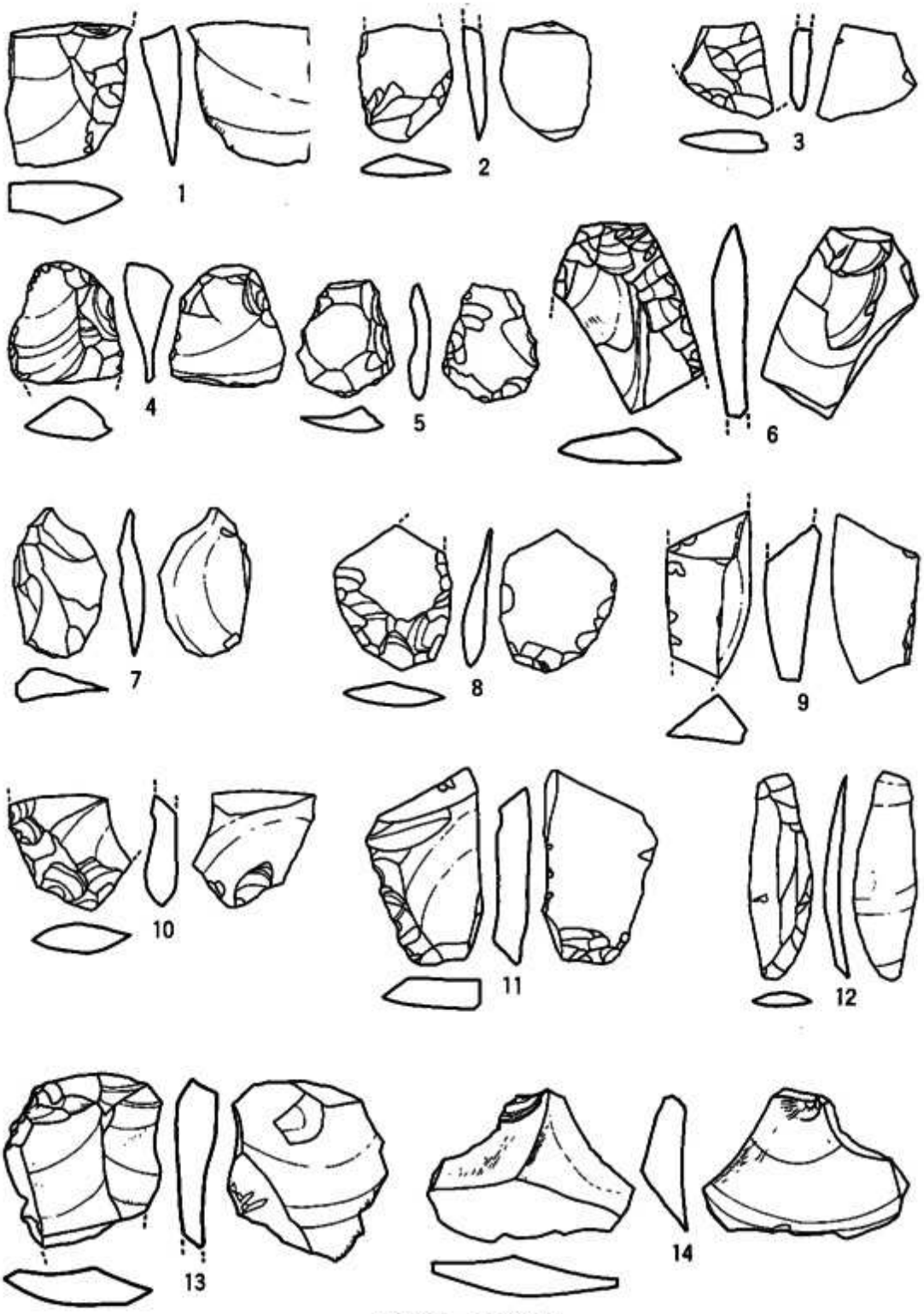
図版27　石器(4)



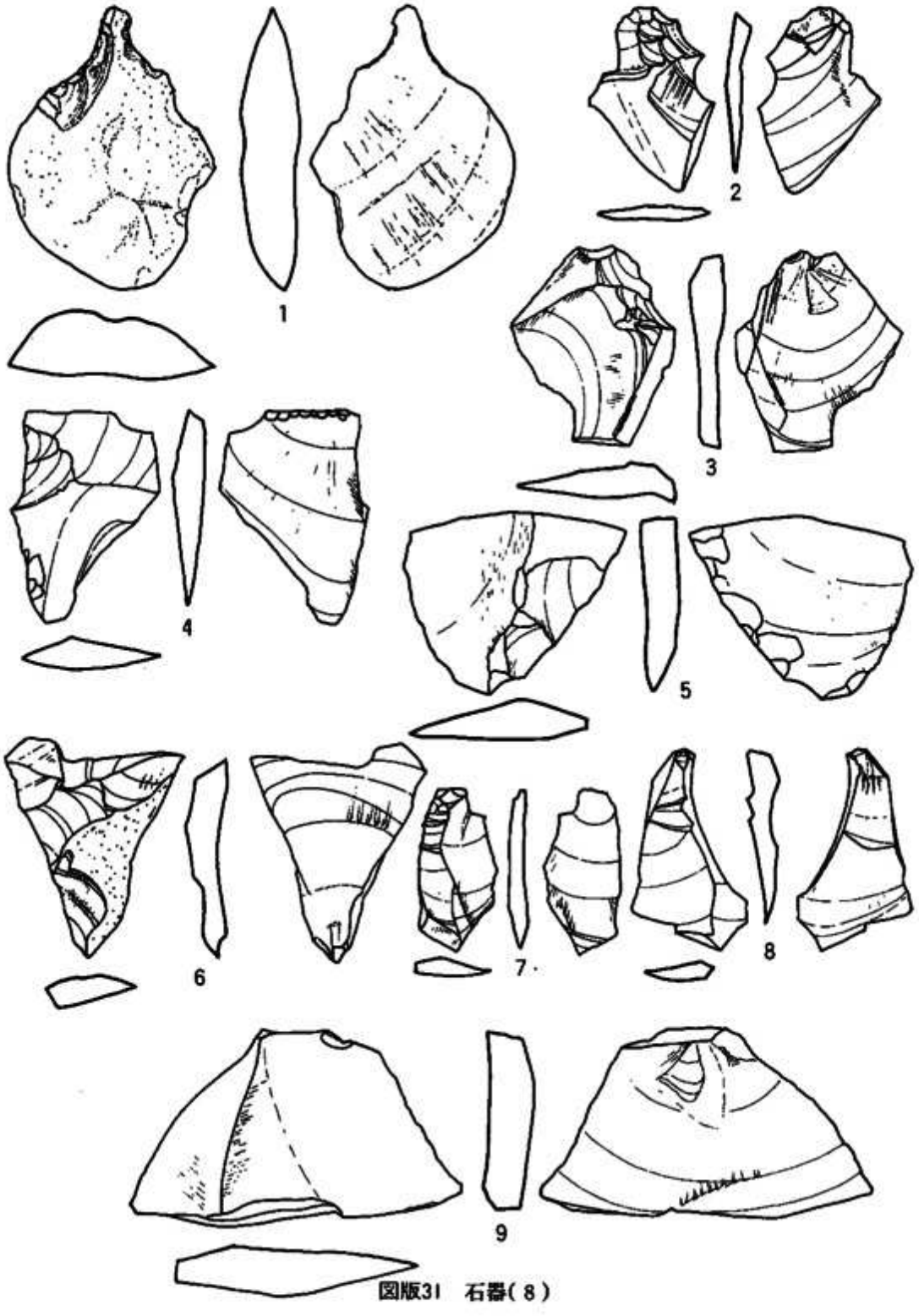
図版28　石器(5)



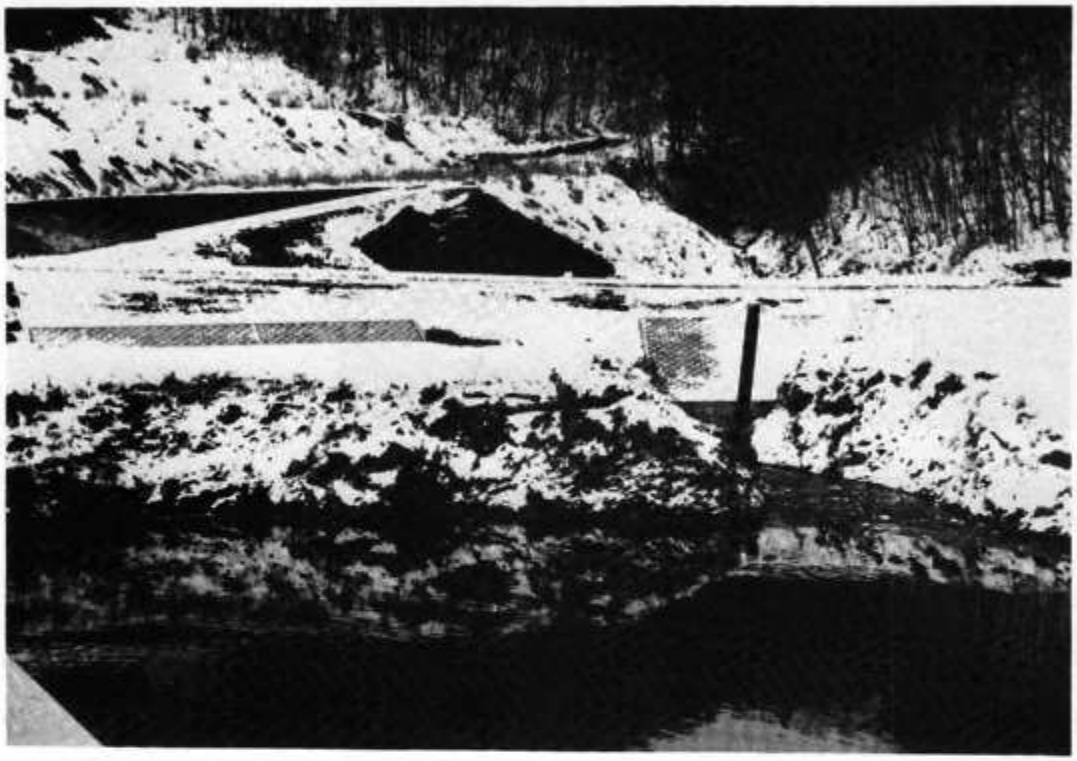
図版29　石器(6)



図版30　石器(7)



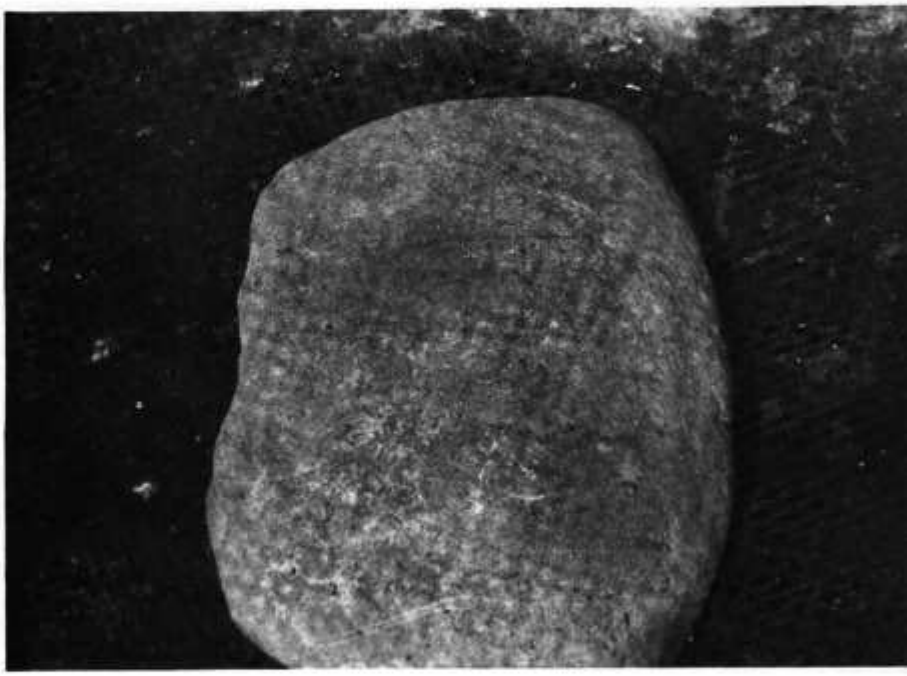
図版31　石器(8)



写真図版１　ダム完成後遺跡全景、曲り家遠景

写真図版２　１号建物址

1号建物址カマド



1号建物址墨縄痕

3号建物址

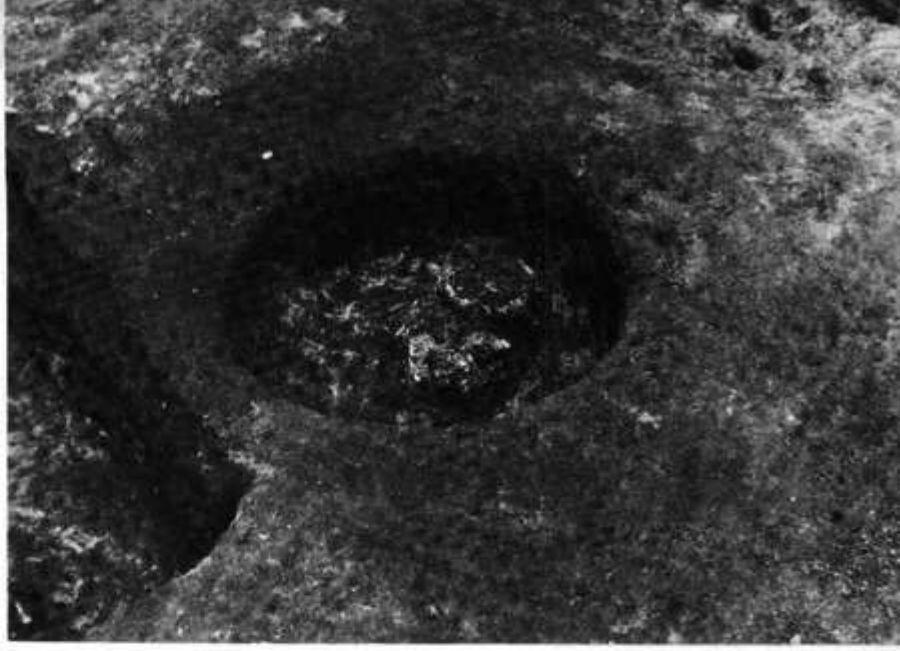
写真図版3

4 号建物址

2 号建物址

2 号建物址

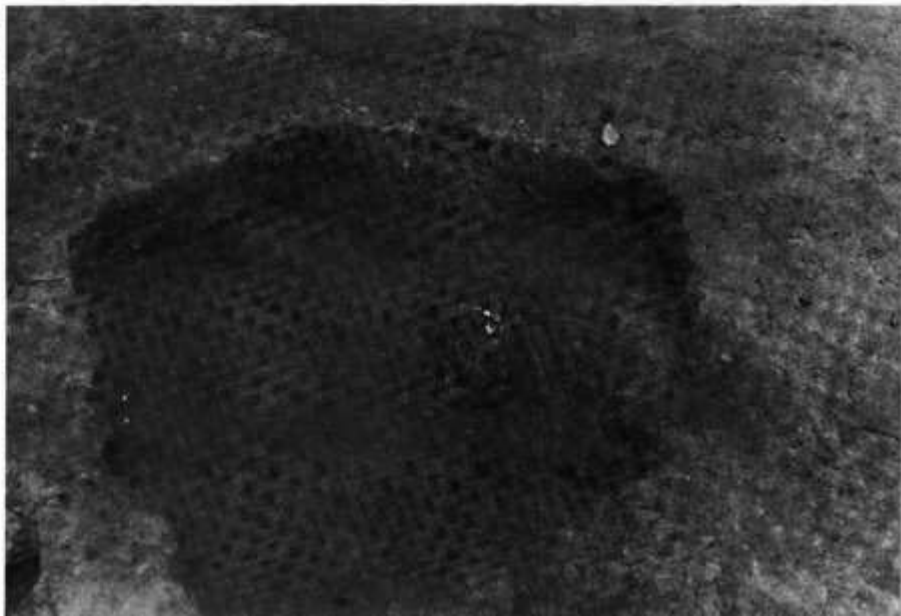
写真図版 4



2号墓址

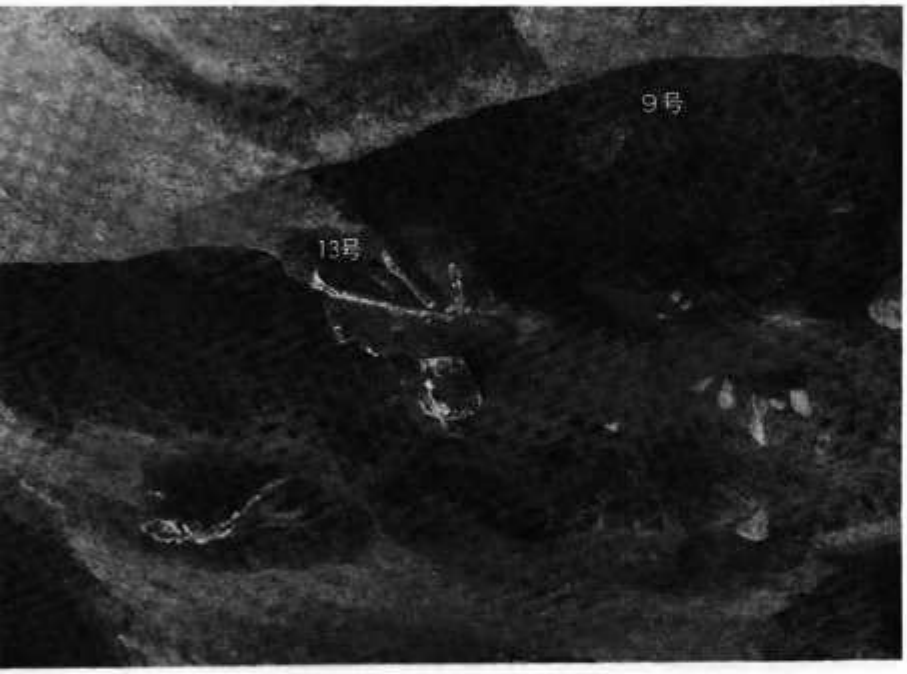
9号墓址

10号墓址



写真図版5　墓址

3号墓址

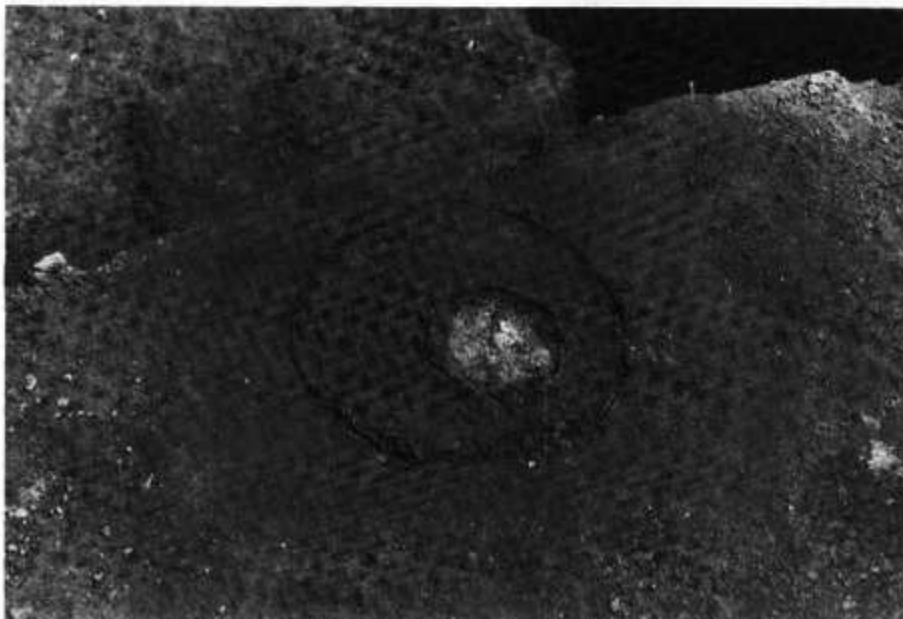


写真図版6　墓址

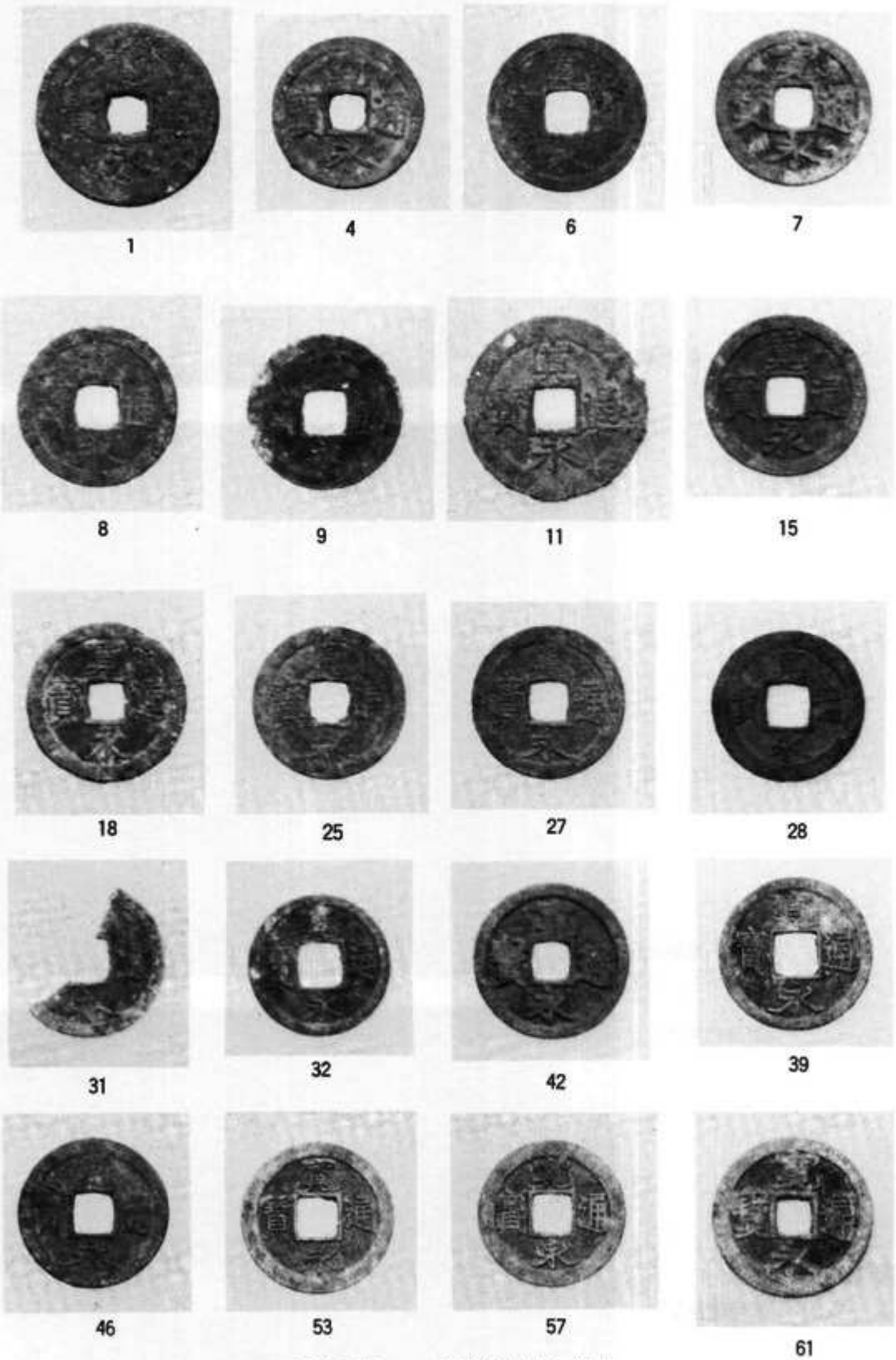
9号墓址

墓址全景

2号建物址据え方



写真図版7　墓址、
2号建物址

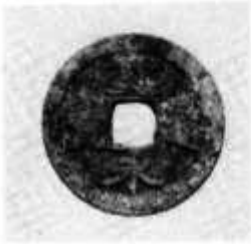


写真図版８　１号建物址出土貨幣

63

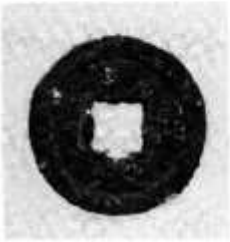
65

70


75

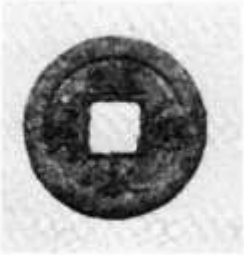
76

82


85

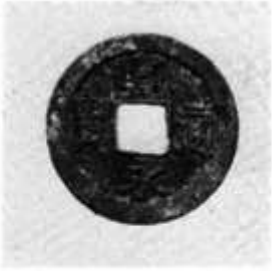
89

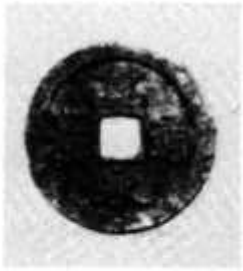
88


91

95

96


97

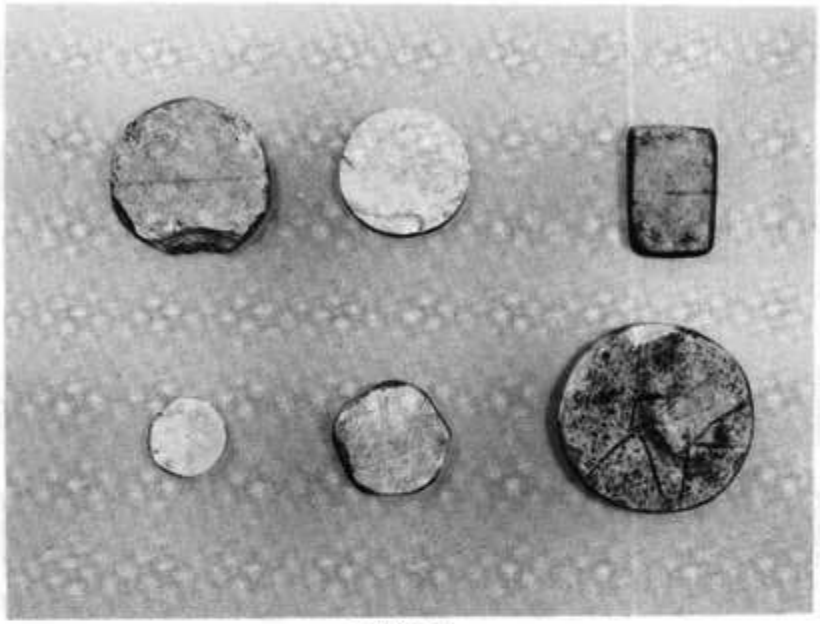

102

103

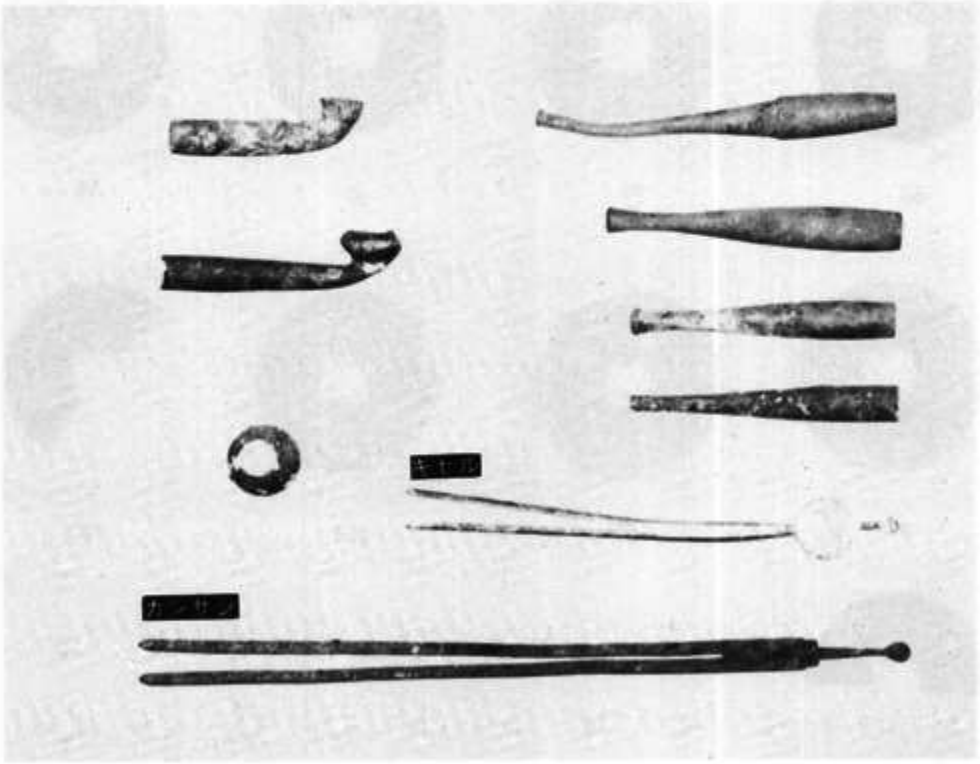
107

111

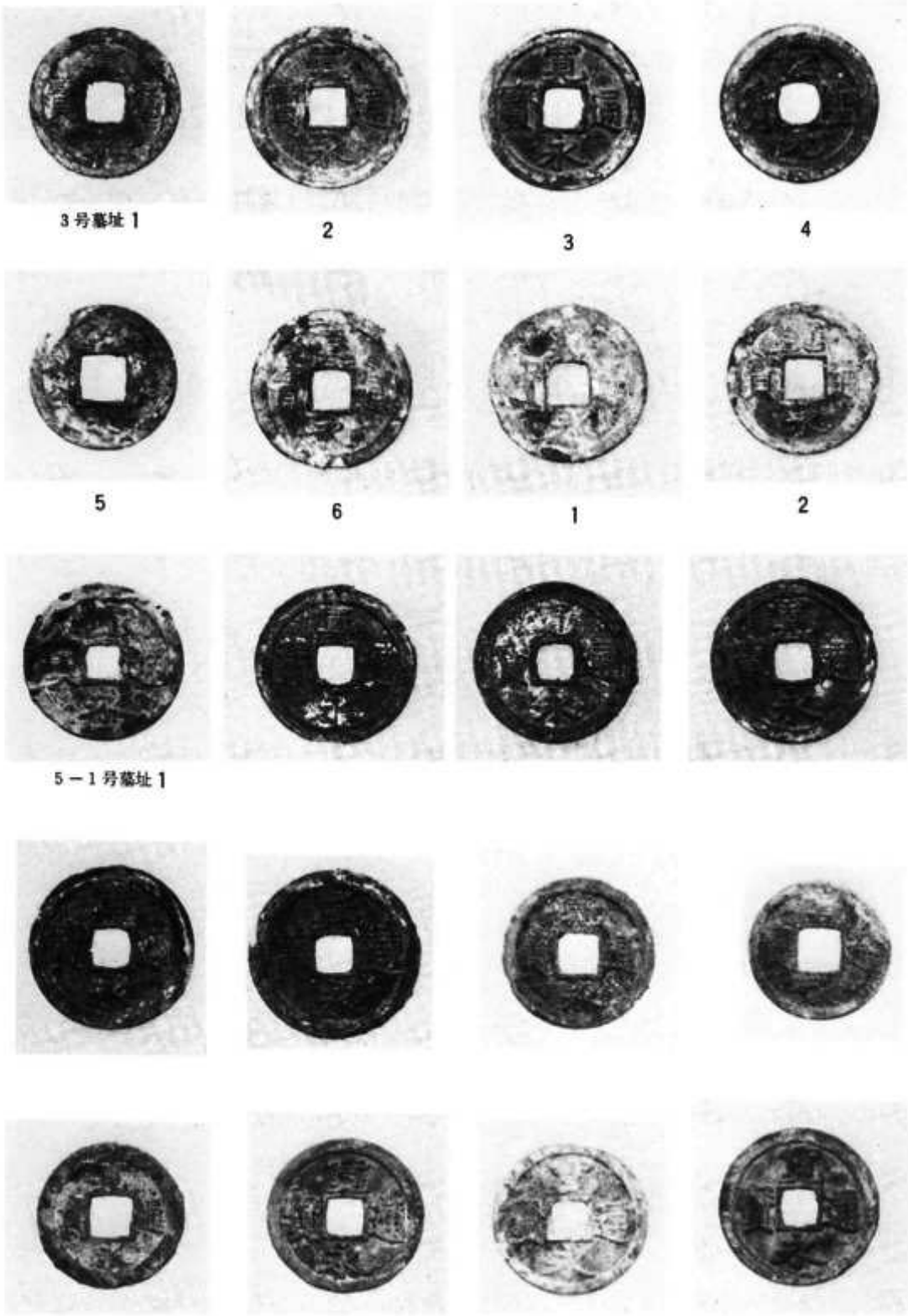
写真図版９　１号建物址出土貨幣



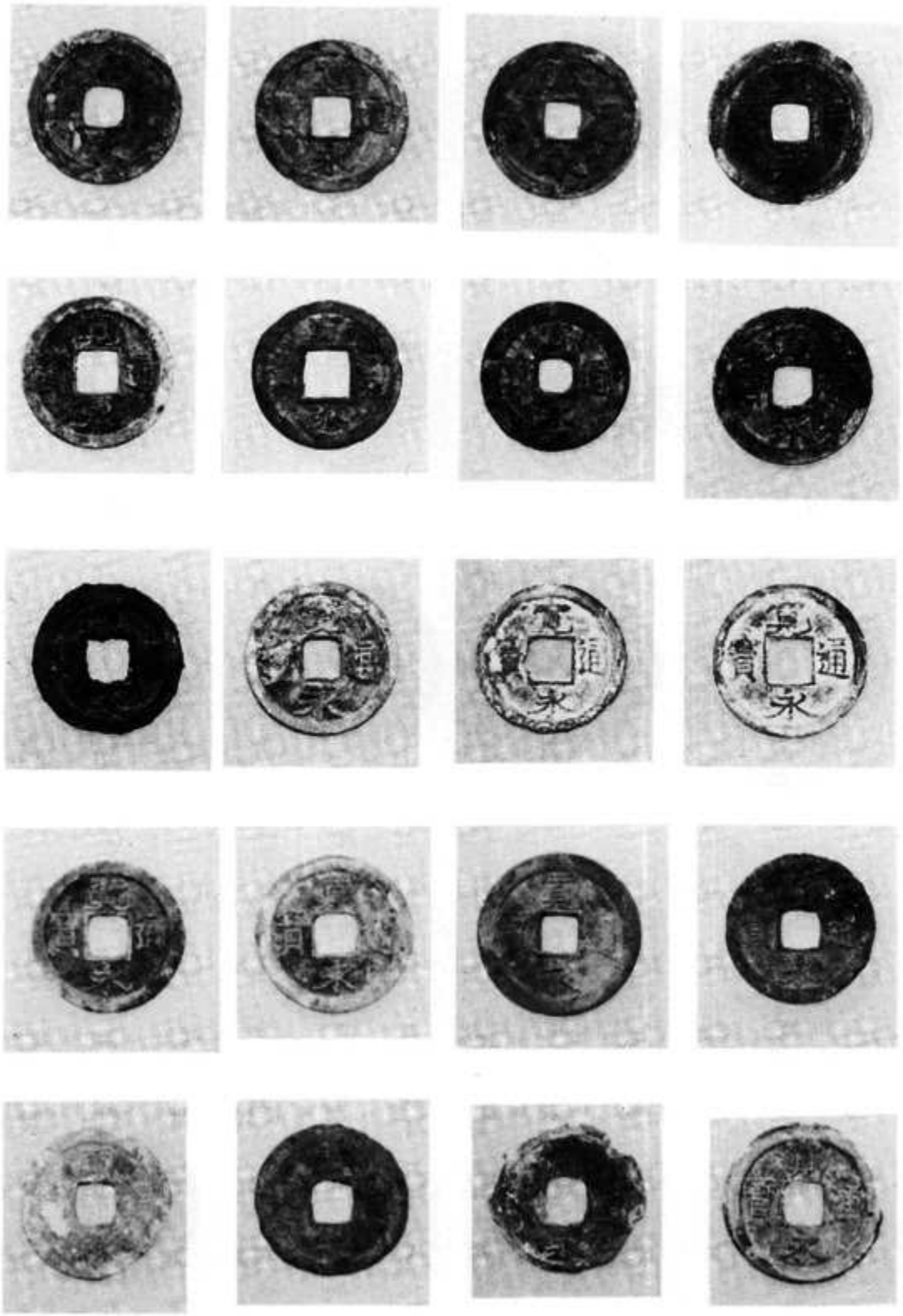
石製円盤



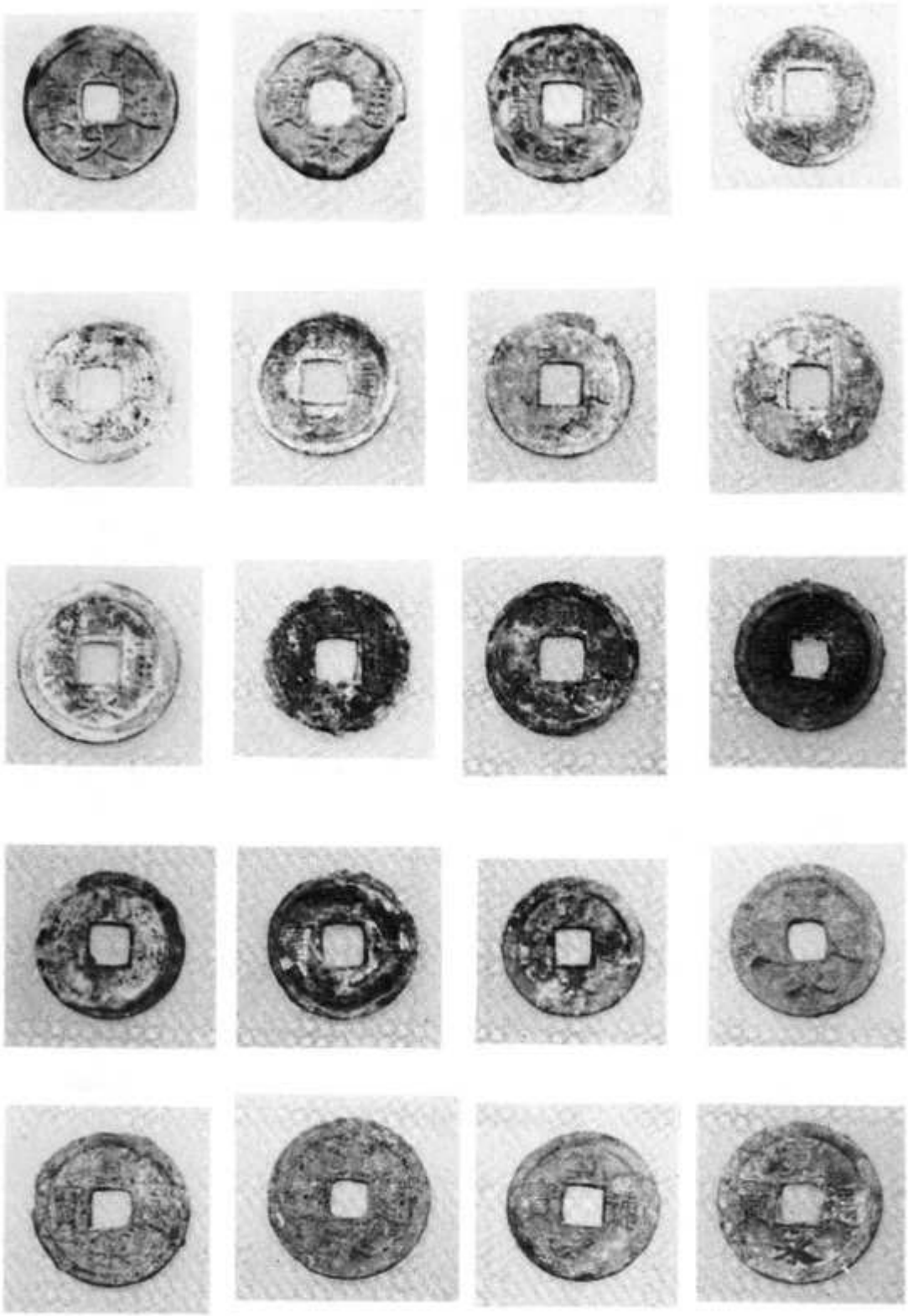
写真図版10　1号建物址出土遺物



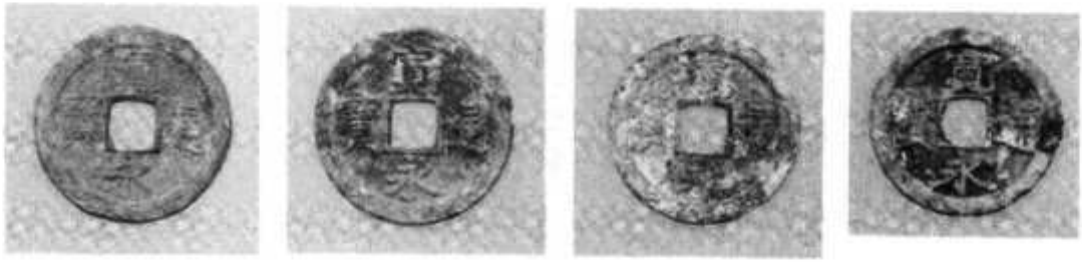
写真図版11　墓址出土貨幣

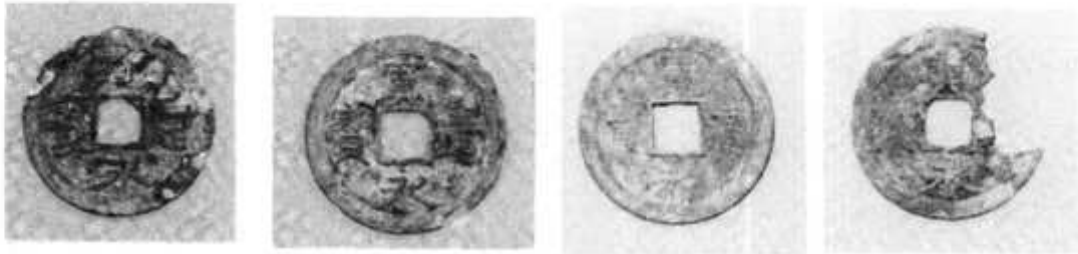


写真図版12　墓址出土貨幣

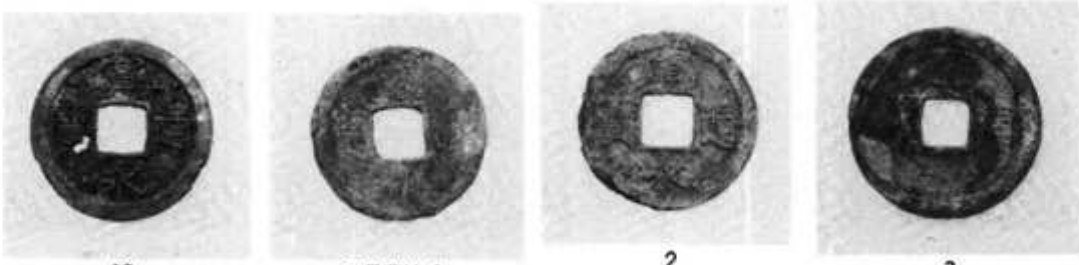


写真図版13　墓址出土貨幣

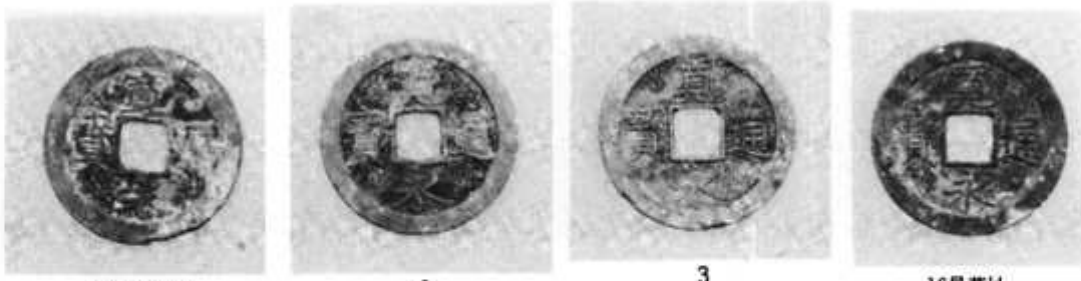




12－2号墓址 17　　18

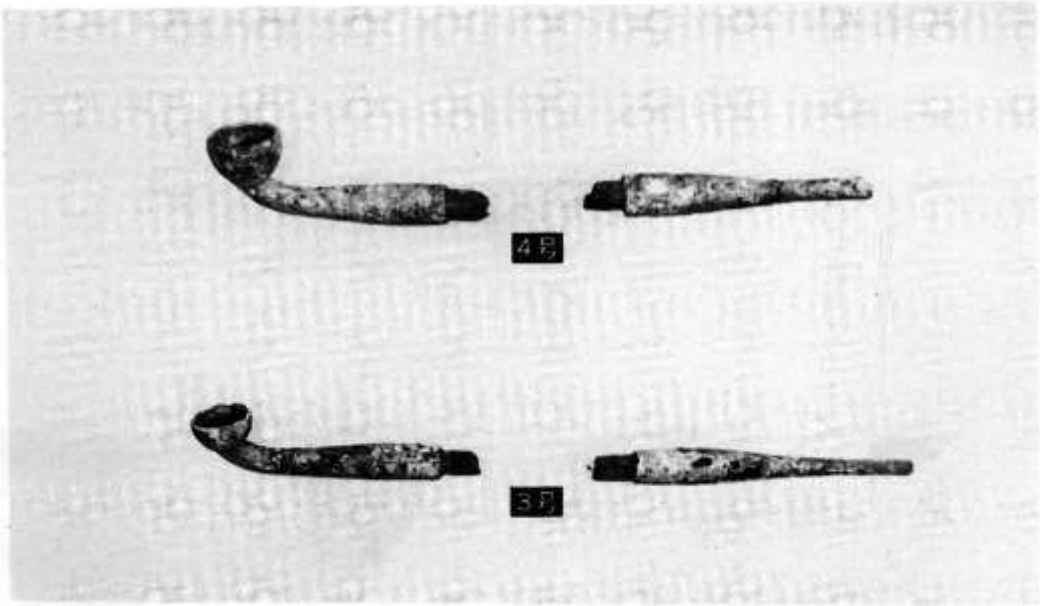


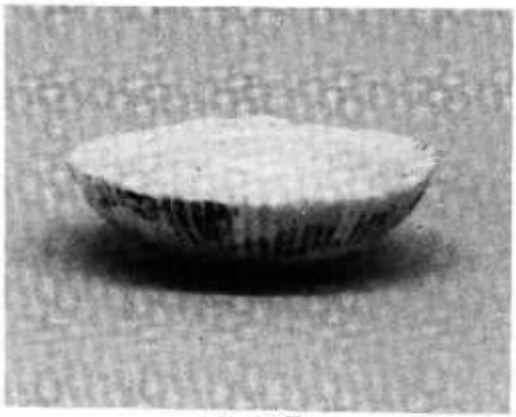
19　　13号墓址 1　　2　　3



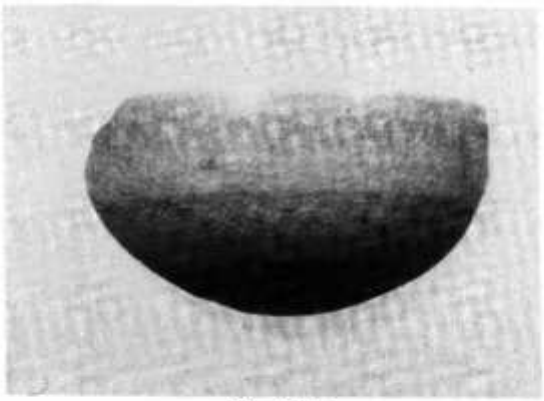
15号墓址 1　　2　　3　　16号墓址

写真図版14　墓址出土貨幣





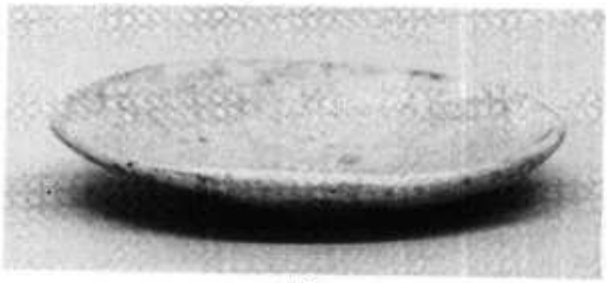
5－1号



12－2号

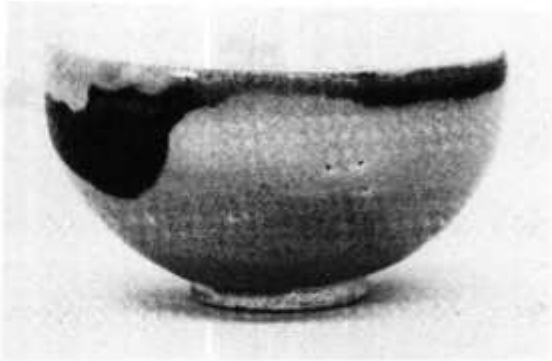
3号

写真図版15　墓址出土遺物



4号

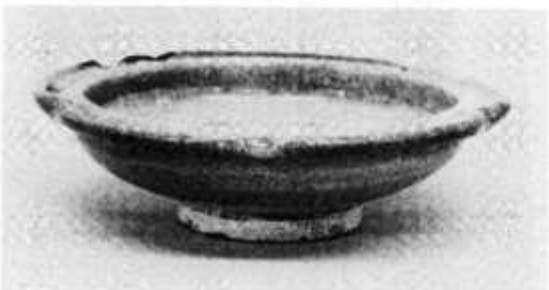
5－2号



12－2号

5－1号

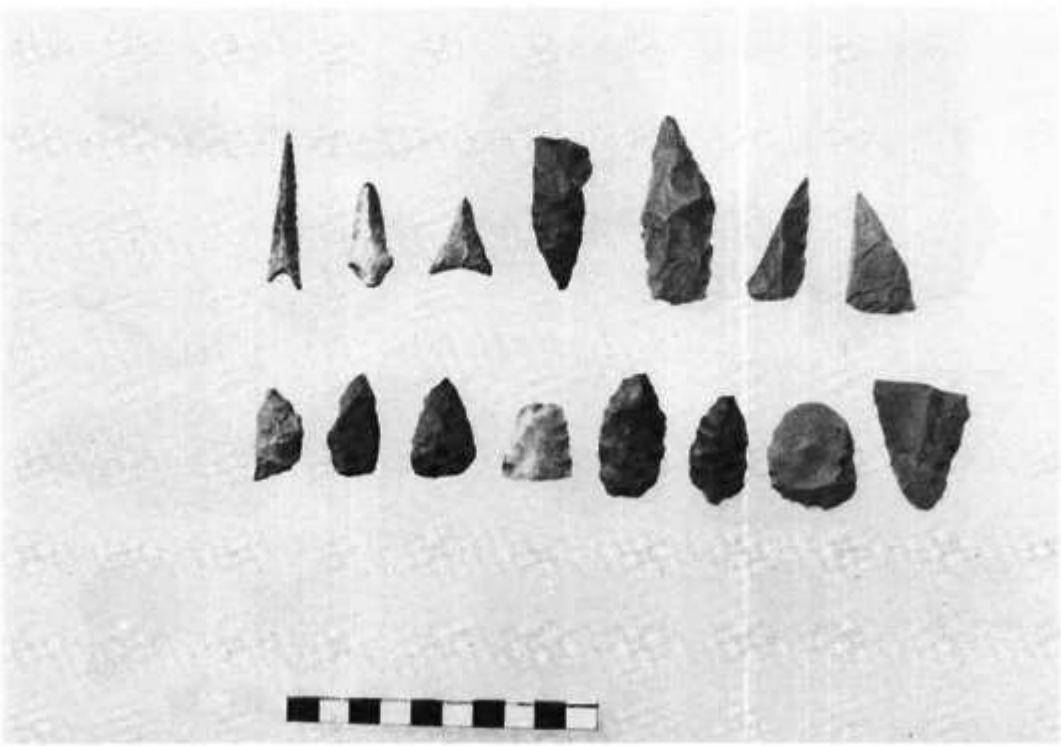
12－2号



5－1号

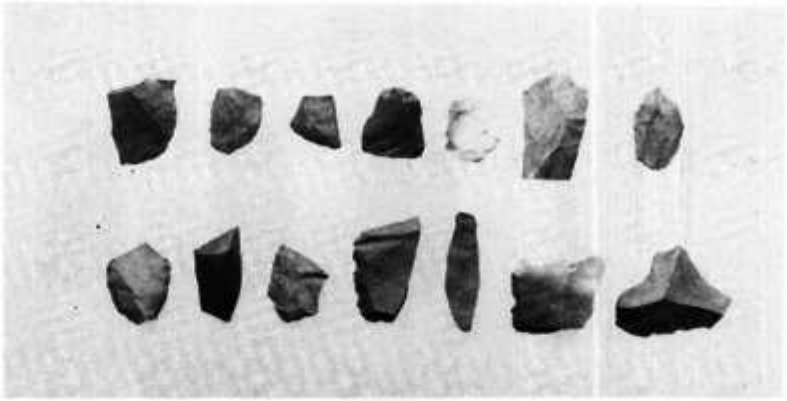
写真図版16　墓址出土遺物

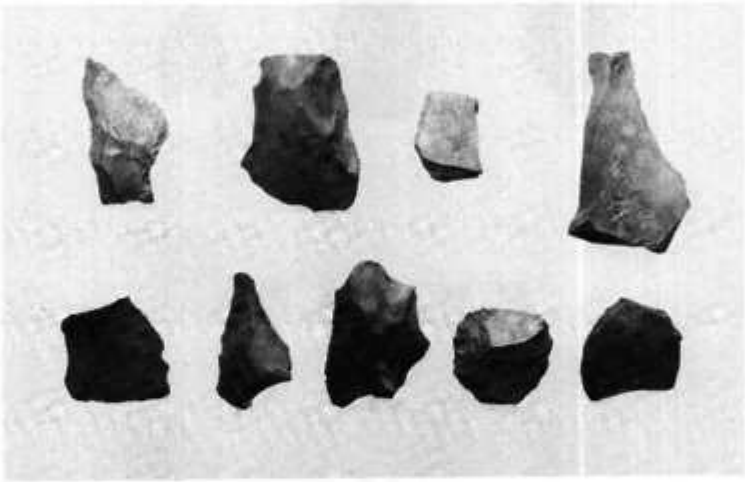
写真図版17　縄文土器



写真図版18　縄文土器・石器

写真図版19　石器





写真図版20　石器

写真図版21　石器

下猿田Ⅲ遺跡

I. はじめに

本調査は、御所ダム建設に伴い破壊される諸遺跡の緊急発掘調査の一つです。これは（財）岩手県埋蔵文化財センターが建設省御所ダム工事事務所より委託を受け、関連工事により煙滅する遺跡を事前にできるかぎり詳細に調査記録し、それらの遺跡のもつ歴史的価値を永く後世に伝えることを目的としています。

下猿田III遺跡

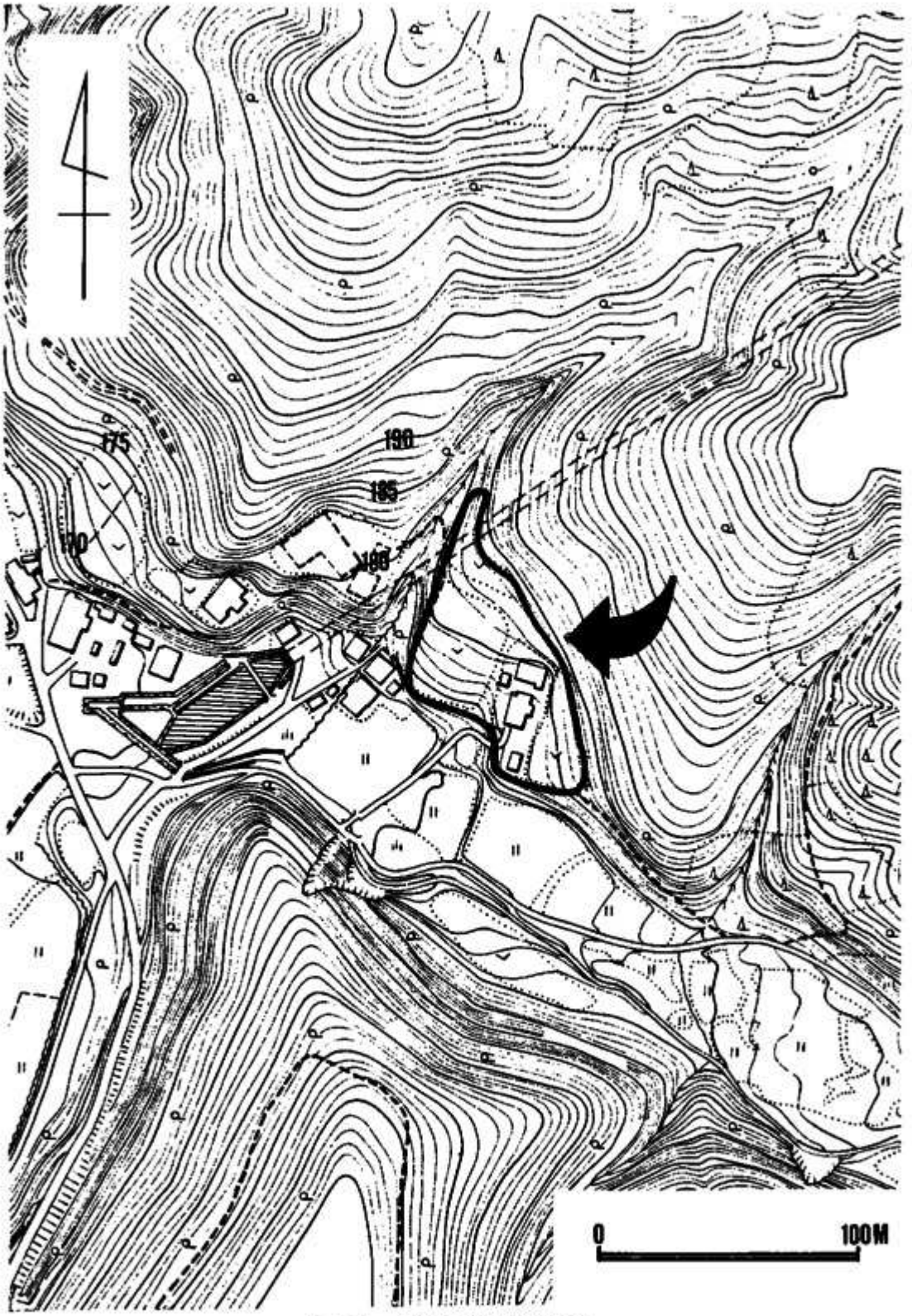
1．遺跡所在地	盛岡市繋第4地割字下猿田
2．事業主体	建設省御所ダム工事事務所
3．調査主体	（財）岩手県埋蔵文化財センター
4．調査員	専門調査員高橋正之、本沢慎輔
5．調査面積	2，200㎡
6．遺跡記号	SST－III'79
7．調査期間	昭和54年9月3日～昭和54年11月15日

II. 遺跡の位置及び立地

下猿田III遺跡は、盛岡市繋第4地割字下猿田に所在し、東北本線盛岡駅を起点とする田沢湖線小岩井駅より南東約4kmの地点に位置する。遺跡の立地する「繋第4地割字下猿田」は標高318 mの中起伏山地大欠山の南東寄り末端部に突出した尾根上台地にあたり、標高175 m±～182 m±の緩傾斜面をなし、尾入野の北方遥かに岩手山の雄壮な姿が眺望される。

東西に120 m±、南北に70m±の広がりをもつ本遺跡の最西端には、中起伏山地大欠山中腹より流出する通称「蟹沢」によって浸蝕された急峻な崖が形成され、全体として東西に一部平坦面を残し、遺跡の南側約10m±を西流して雫石川に併流する「大繋沢」に向って緩傾斜面を呈するようである。

なお周辺の諸遺跡としては、大欠山から北西寄りに張り出した尾根上台地の末端部に下猿田I遺跡、本遺跡と蟹沢を挟んだ尾根上台地に下猿田II遺跡、対岸尾入野の開析段丘には堂ケ沢I遺跡（縄文中期大木9式～10式の集落跡）が存在する。



図版1　下猿田Ⅲ遺跡位置図

Ⅲ．調査方法と経過

1．調査方法

下猿田Ⅲ遺跡については、前回発掘調査を行なった沢向いの下猿田Ⅱ遺跡で使用した基準点をもとにグリットを設定した。基準点測量は東日本測量設計株式会社に依頼した。

基準点1（下猿田Ⅱ地区）　X＝－34,860.827m
Y＝＋17,486.833m
H＝　181.084m

基準点1から基準点2への方向角と距離
125°27′02″　63.640m（平面距離）

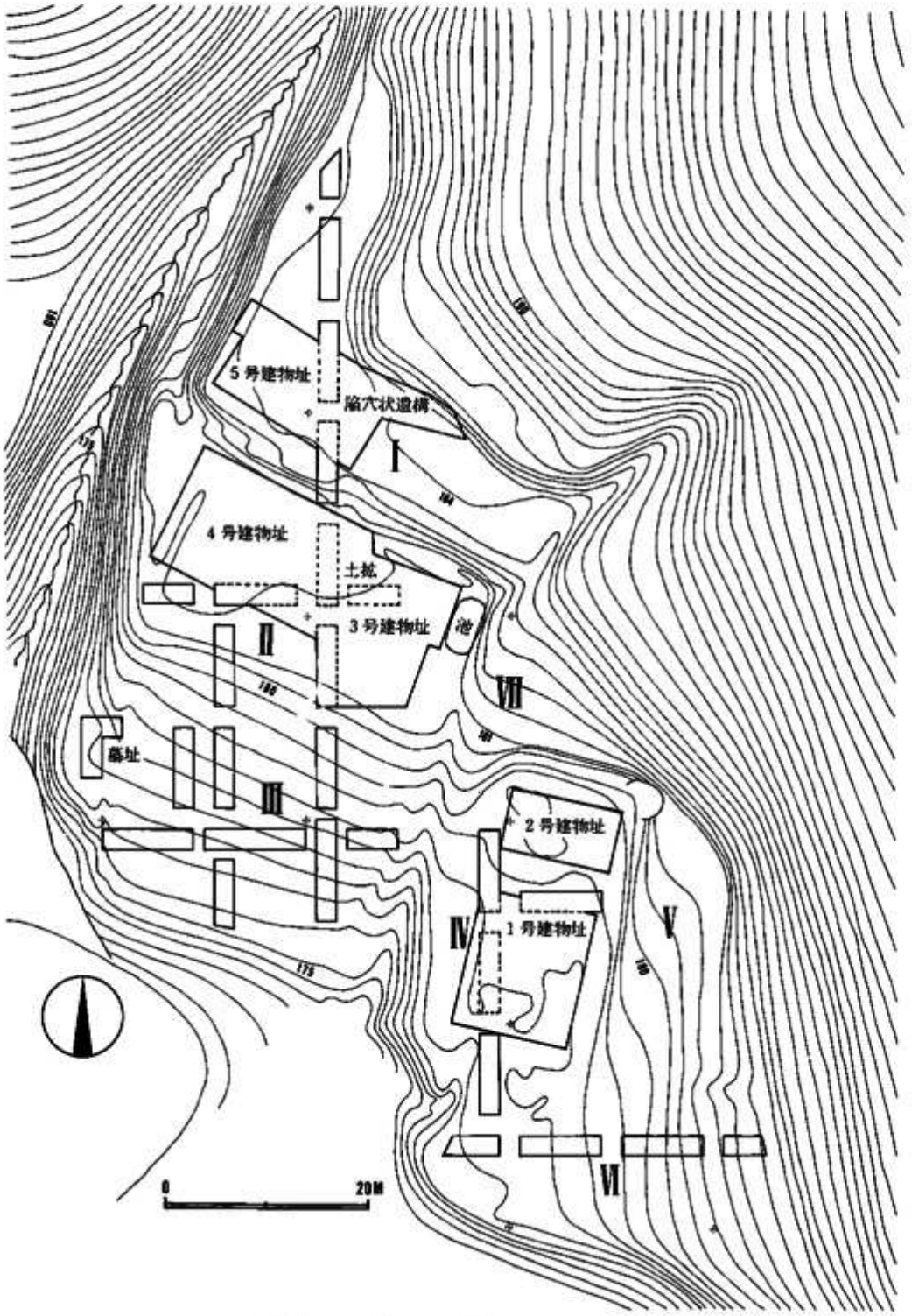
基準点2（下猿田Ⅲ地区）　X＝－34,897.738m
Y＝＋17,538.675m
H＝　180.935m

基準点2から基準点1への方向角と距離
305°27′02″　63.640m（平面距離）

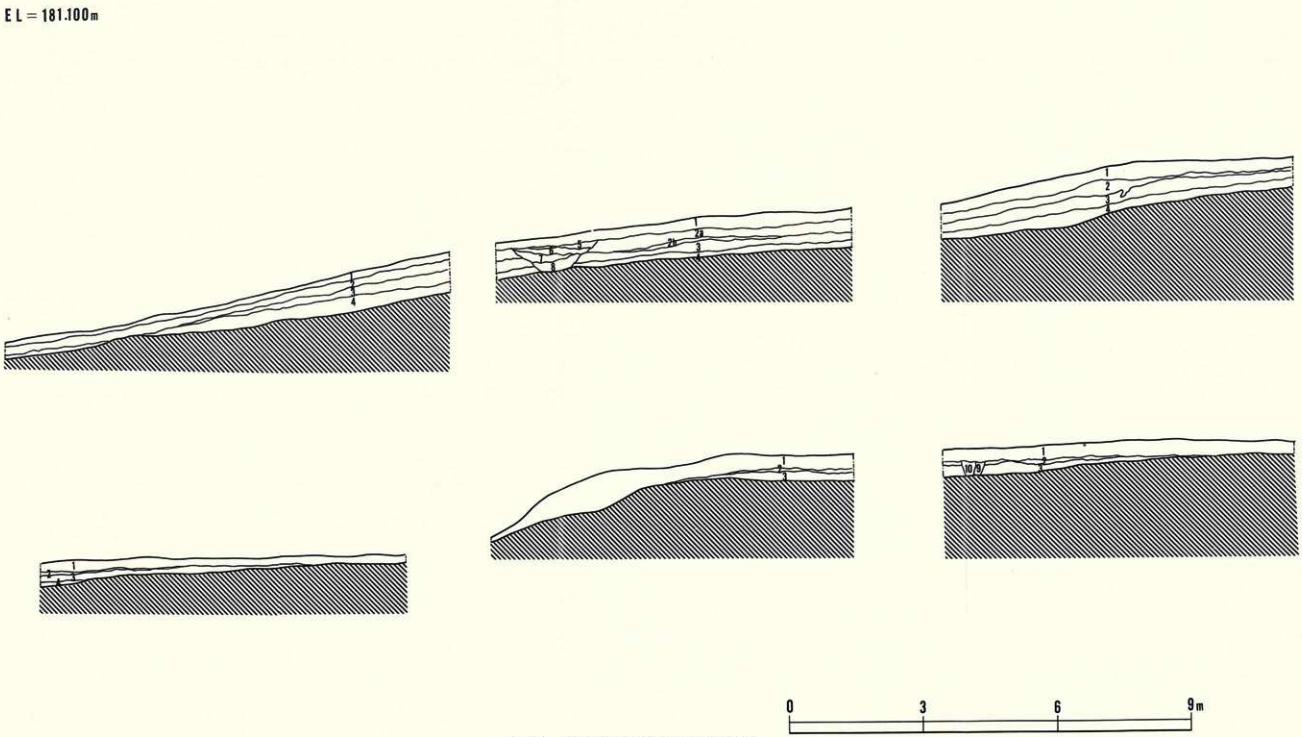
下猿田Ⅲ遺跡の場合、下猿田Ⅱ遺跡より広い面積をもち、それがテラスと緩傾斜とに分かれるため、10×10mのグリットを設定し、それにのっとって調査を開始した。相対座標点であるグリット杭は端数のない割り切れる距離の位置に打ち込んだ。

2．経　過

9月3日から下猿田Ⅲ遺跡発掘調査を開始した。家屋移転後、宅地畑地を放置し荒れるにまかせてあったため、雑草かん木がおい茂り、それらの刈り払いに数日を要した。9月6日、2基の基準点を利用して相対座標を組み、交点に杭打ちをしながら、それと平行して遺跡とその周囲の1/500地形図（50cmコンター）作成を開始した。9月12日からは先に打ったグリット杭に沿って2×2mのトレンチを東西南北に続けて掘り、土層の観察と遺構、遺物の確認を急いだ。9月17日、わずかに地表に頭を出している礎石を手がかりに1号、2号建物址の表土剝しを行ない、20日にはトレンチ掘りで発見した3号掘立柱建物址の平面プランの確認調査をはじめた。8日には同じくトレンチ掘りで見つかった4号、5号の掘立柱建物址の拡張を行ない、5号建物址に切られている陥し穴状遺構を3基連続して発見し、10月22日から陥し穴状遺構のつながりを追い、合計6基確認した。10月後半は主にそれぞれの平面図、断面図作成に力を入れ、11月中旬に調査を終了した。



図版２　下狼田Ⅲ遺跡グリット配置図



図版３　下猿田Ⅲ遺跡南北ライン上層断面図

Ⅳ. 基 本 層 序

本遺跡における基本層序は、調査対象区（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区）南北ライン東壁より作成したもので、図版3に示す通り大きく4層に分類される。なお本遺跡が(1)畑地、宅地として造成されていたこと(2)大鷲沢に向かう緩斜面に立地することなどから、全体的に表土（基本層序第1層耕作土）の攪乱、流亡が顕著に観察された。以下その概要を説明する。

第1層	Hue 10YR 3/3	暗褐色を呈し、ボソボソした感じで植生根が多い。
第2a層	Hue 10YR 3/2	黒褐色を呈し、やや軟質でしまり有り。
第2b層	Hue 10YR 3/2	黒褐色を呈し、粗砂の混入有り。
第3層	Hue 10YR 3/4	暗褐色を呈し、やや軟質で粘性有り。
第4層	Hue 10YR 5/4	褐色を呈し、やや粘性有り。
第5層	Hue 10YR 2/1	黒色を呈し、やや軟質でしまり有り。
第6層	Hue 10YR 5/3	にぶい黄褐色を呈し、粘性及びしまり有り。
第7層	Hue 10YR 3/3	暗褐色を呈し、にぶい黄褐色土の混入有り。
第8層	Hue 10YR 3/3	暗褐色を呈し、凝灰岩風化礫を多量に含む。
第9層	Hue 10YR 2/3	黒褐色を呈し、にぶい黄褐色土の混入有り。
第10層	Hue 10YR 2/3	黒褐色を呈し、褐色粘性土がブロック状に混入。

Ⅴ. 縄文時代の遺構及び遺物

1. 遺　構

本遺跡において縄文期と推定される遺構は、遺跡の北端平坦地（調査対象区Ⅰ区）より陥し穴状遺構6基が検出されている。以下その概要を説明する。（図版4）

陥し穴状遺構Ⅰ号（図版5）

本遺構は開口部径240cm±×110cm±、底部径273cm±×21cm±の規模を有し、深さ120cm±を測る。横断面形は開口部と底部との中間部分より若干くびれる「Y」字状を呈する。縦断面形は両端下部が奥に抉り込まれた袋状を呈し、底部は南側に向い32cm±程低くなっている。

長軸はN－27°－Eの方向を示す。埋土は上位層の黒色土、黒褐色土、若干硬くしまる暗褐色土、中位層のやや粘性を有する明黄褐色土、黄褐色土、最下層の暗褐色土の混入する黄褐色土により構成されている。出土遺物は存在しない。

陥し穴状遺構Ⅱ号（図版５）

本遺構は開口部径 232 cm±× 110 cm±、底部径 240 cm±×30cm±の規模を有し、深さは 110 cm±を測る。横断面形はほぼ急傾斜で落ち込む上方のやや広い「U」字状を呈する。縦断面形は南端下部が若干奥に抉り込まれた袋状を呈し、底部は南側に向い24cm±程低くなっている。

長軸はN－14°－Eの方向を示す。埋土は上位層の黒色土、黒褐色土、中位層から最下層の暗褐色土により構成されている。出土遺物は存在しない。

陥し穴状遺構Ⅲ号（図版５）

本遺構は開口部径 200cm±×72cm±、底部径 220 cm±×21cm±の規模を有し、深さは 100 cm±を測る。横断面形はほぼ急傾斜で落ち込む上方のやや広い「U」字状を呈する。縦断面形は南端下部が若干奥に抉り込まれた袋状を呈し、底部は南側に向い40cm±程低くなっている。

長軸はN－27°－Eの方向を示す。埋土は上位層の黒色土、黒褐色土、中位層の黄褐色土、やや粘性を有する明黄褐色土、最下層の暗褐色土により構成され、出土遺物は存在しない。

陥し穴状遺構第Ⅳ号図版５）

本遺構は開口部径 240 cm±×63cm±、底部径 280 cm±×20cm±の規模を有し、深さは86cm±を測る。横断面形は開口部位よりほとんど急傾斜をもって落ち込む細長の「U」字状を呈する。

縦断面形は両端下部が奥に抉り込まれた袋状を呈し、底部はほぼ平坦で、長軸はN－47°－Eの方向を示している。埋土は上位層の黒色土、黒褐色土、やや硬くしまる暗褐色土、中位層の黒色土が若干混入する黄褐色土、明黄褐色土、最下層の黄褐色土ブロックを含む黒褐色土により構成されている。出土遺物は存在しない。

陥し穴状遺構Ⅴ号（図版５）

本遺構は開口部径 192 cm±×70cm±、底部径 170 ±×20cm±の規模を有し、深さは85cm±を測る。横断面形は開口部位よりほとんど垂直に下る細長い「U」字状を呈する。縦断面形は鍋状を呈し、底部は南側に向かって12cm±程低くなっている。長軸はN－30°－Eの方向を示している。

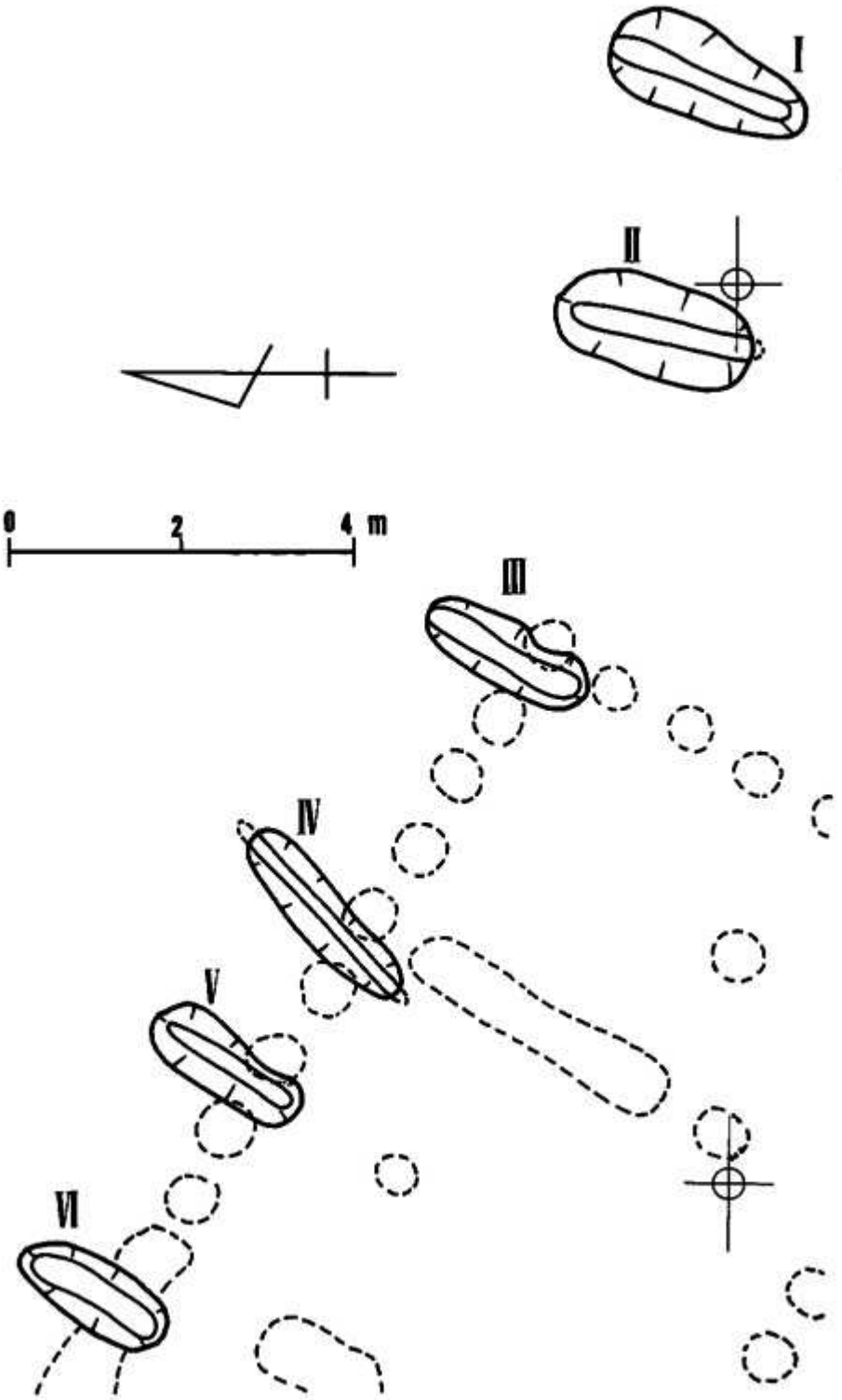
埋土は上位層から中位層にかけて黒色土、黒褐色土、黄褐色土、中位層下半部から最下層の黒色土粒子の混入する明黄褐色土により構成され、出土遺物は存在しない。

陥し穴状遺構Ⅵ号（図版５）

本遺構は開口部径 184 cm±×75cm±、底部径 150 cm±×30cmの規模を有し、深さは62cm±を

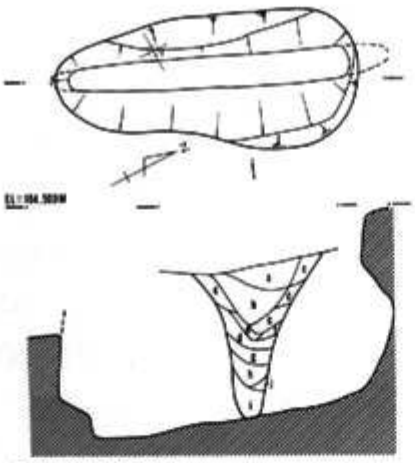
測る。横断面形は開口部位がやや広く、除々に傾斜をもって落ち込む「U」字状を呈している。

縦断面形は鍋状を呈し、底部はほぼ平坦である。長軸はN－32°－Eの方向を示している。埋土は上位層から中位層の黒色土、黒褐色土、黄褐色土、最下層の明黄褐色土により構成され、出土遺物は存在しない。



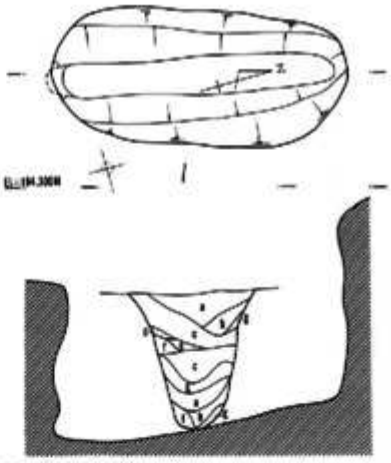
図版４　陥し穴状遺構配置図

陥し穴状遺構Ⅰ号



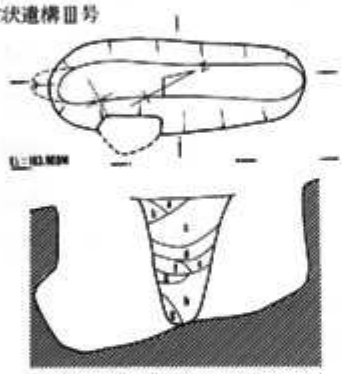
〔陥し穴状遺構Ⅰ号埋土〕
a. Hue10YR 3/1 黒色土。
b. Hue10YR 3/2 黒褐色土。
c. Hue10YR 3/3 暗褐色を呈し、若干しまり有り。
d. Hue10YR 3/4 黄褐色を呈し、若干暗褐色土が混入。
e. Hue10YR 3/3 暗褐色を呈し、黄褐色と粒子を多く含む。
f. Hue10YR 3/3 暗褐色を呈し、さらさらしている。
g. Hue10YR 5/6 明黄褐色を呈し、粘性有り。
h. Hue10YR 5/4 黄褐色を呈し、若干暗褐色土が混入。
i. Hue10YR 5/4 黄褐色を呈し、若干粗砂混入。
j. Hue10YR 5/4 黄褐色を呈し、やや粘性有り。

陥し穴状遺構Ⅱ号



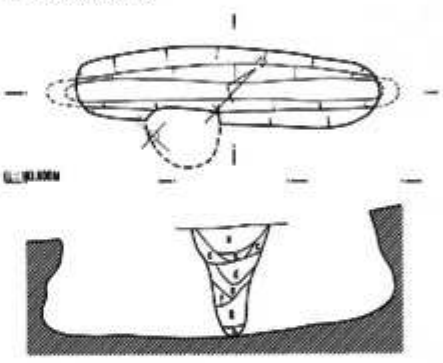
〔陥し穴状遺構Ⅱ号埋土〕
a. Hue10YR 3/1 黒色土。
b. Hue10YR 3/2 黒褐色土。
c. Hue10YR 3/3 暗褐色土。
d. Hue10YR 3/3 暗褐色土。
e. Hue10YR 3/3 暗褐色を呈し、黒色土の混
f. Hue10YR 3/3 暗褐色を呈し、黒色土の混入有り
g. Hue10YR 3/3 暗褐色を呈し、黒褐色土混入によるにごり有り。

陥し穴状遺構Ⅲ号



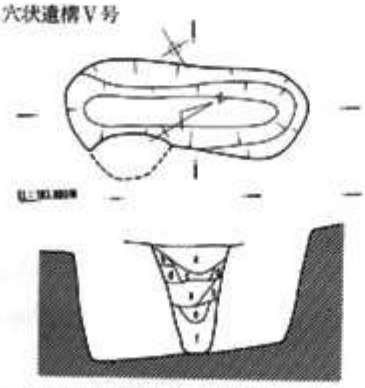
〔陥し穴状遺構Ⅲ号埋土〕
a. Hue10YR 3/1 黒色土。
b. Hue10YR 3/2 黒褐色土。
c. Hue10YR 3/2 黒褐色土。
d. Hue10YR 3/2 黒褐色を呈し、明褐色土がブロック状に混入。
e. Hue10YR 5/6 明黄褐色土。
f. Hue10YR 3/3 暗褐色を呈し、若干粘性有り。
g. Hue10YR 5/4 黄褐色土。
h. Hue10YR 3/3 暗褐色を呈し、シルト質。

陥し穴状遺構Ⅳ号



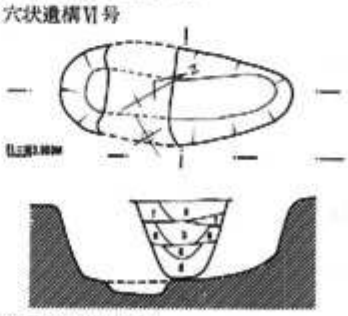
〔陥し穴状遺構Ⅳ号埋土〕
a. Hue10YR 3/1 黒色土。
b. Hue10YR 3/2 黒褐色土。
c. Hue10YR 3/3 暗褐色土。
d. Hue10YR 3/2 黒褐色を呈し、やや軟質
e. Hue10YR 3/4 黄褐色を呈し、黒色土の混入有り。
f. Hue10YR 5/6 明黄褐色土。
v. Hue10YR 5/6 明黄褐色を呈し、硬くなる。
h. Hue10YR 3/3 黒褐色を呈し、若干黄褐色土がブロック状に混入する。

陥し穴状遺構Ⅴ号



〔陥し穴状遺構Ⅴ号埋土〕
a. Hue10YR 3/1 黒色土。
b. Hue10YR 3/1 黒色を呈し、やや褐色粘性土の混入有り。
c. Hue10YR 3/2 黒褐色を呈し、やや軟質。
d. Hue10YR 5/6 黄褐色土。
e. Hue10YR 5/6 明黄褐色を呈し、ややしまり有り。
f. Hue10YR 5/6 明黄褐色を呈し、若干黒色土の混入有り。

陥し穴状遺構Ⅵ号



〔陥し穴状遺構Ⅵ号埋土〕
a. Hue10YR 3/1 黒色土。
b. Hue10YR 3/2 黒褐色土。
c. Hue10YR 3/3 黒褐色を呈し、若干小礫の混入有り。
d. Hue10YR 5/6 明黄褐色土。
e. Hue10YR 5/6 黄褐色を呈し、やや軟質でにごり有り。
f. Hue10YR 5/6 黄褐色土。

0 1 2m

図版5　陥し穴状遺構

2．遺　物

(1) 土　器

本遺跡の出土土器は、遺構に伴いかつ層位的に捉えられたものは皆無で、全て粗掘段階において基本層序第１層（表土）より検出したものである。出土土器は量的に少なく、本稿では形態的特徴の明確な口縁部、胴部、底部資料を抽出し、①文様構成、②器形、③成形、④胎土状態（粗砂、繊維混入の有無）、⑤色調等を軸として時期別に群として分類した。

①　第Ⅰ群土器

縄文早期中葉に比定される土器群を一括した。本群土器は胎土に植物繊維の混入が認められず、焼成も良好で堅緻な作りのものが多い。

第１類土器（図版７－１）

口縁部資料１点の出土で、器形及び文様等は全体的に把握できなかったが、口縁上部に併行する一条の細隆起線とこれから垂直に下る細隆起線とにより文様構成され、口唇部先端がやや先細りを呈しているのが特徴的である。又裏面には横走する条痕ないし擦痕が明瞭に観察される。胎土には繊維の混入が全く認められず、僅かに雲母及び細砂が観察され、焼成も良好で堅緻な作りである。色調は褐灰色ないし黒褐色を呈し、裏面は殆んど灰黄褐色に近いものである。

第２類土器（図版７－２～13）

表裏両面に条痕ないし擦痕の認められる土器群である。図版７－２は横走、斜方向の細緻な条痕ないし擦痕が施され、口唇部上端は平坦に整形されている。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には微量ではあるが細砂が認められる。焼成も良好で器厚は0.3cm土と薄いが、堅緻な作りのものが多い。図版７－３・４は口唇部内側が若干削がれて外傾気味を呈し、口縁部位に炭化物の附着が顕著に観察される。胎土、焼成ともに良好で堅緻な作りである。色調は表面がにぶい黄褐色、裏面が灰黄褐色ないし黒褐色を呈する。図版７－５～13は胴部小破片と推定され、表裏面ともに明瞭な条痕ないし擦痕が施されている。

②　第Ⅱ群土器

胎土に植物繊維の混入する土器群で、復元口縁部資料（図版６－１）１点を除き殆んど小破片のため全体的な器形等は把握できなかった。時期的には縄文早期末葉から前期初頭に比定されるものと推定される。

第1類土器（図版8－1～7）

整然とした横位羽状縄文が施される一群で、原体の末端が顕著に観察される。いずれも胎土に植物繊維及び粗砂の混入が認められ、焼成も不良で脆弱である。色調は殆んどくすんだ黒褐色を呈し、器厚は0.6cm±を測る。

第2類土器（図版8－8）

口縁部位と推定される破片で、横位の不整撚糸文と単節斜縄文とにより文様構成されている。胎土に植物繊維及び粗砂の混入が認められるが、焼成は比較的良好で堅緻な作りである。色調は灰黄褐色を呈し、器厚は0.5cm±を測る。

第3類土器（図版8－9・10）

口縁部に斜行する三条の撚糸圧痕を有する土器で、胴部に施文された羽状縄文は原体を強く回転押捺しているためか、条が深く凹状を呈している。口縁部の形態はやや内弯気味で、口唇部上面が篦状工具等により、滑らかにかつ丸味をもって整形されているのが特徴的である。胎土に粗砂及び微量の植物繊維の混入が認められるが、焼成は比較的良好で堅緻な作りである。器厚は0.6cm±を測る。

第4類土器（図版6－1）

地文として単節斜縄文が器表面に施文され、口唇部上面に地文原体による圧痕文を有する土器である。器形は底部形態が丸底調で、胴下部から胴上部までやや外傾して立ち上がり、口縁が若干内弯気味の深鉢形を呈するものと推定される。胎土には大量の植物繊維と粗砂の混入が観察され、焼成も粗悪で脆弱な作りである。色調は淡黒褐色を呈し、器厚は0.7cm±を測る。

第5類土器（図版8－11～25、9－1～12）

地文として単節斜縄文が器表面にのみ施文される一群である。器形は口縁部資料（図版8－11～14）、胴下部資料（図版8－18・19、9－10・12）等より推定すると、底部形態が丸底調で、胴下部から口縁下部までやや外傾して立ち上がる口縁直立気味の深鉢形を呈するものと考えられる。なお口縁部内側が削がれて若干傾斜をもつ図版8－13を除き、殆んどが篦状工具等により滑らかな丸味をもって整形されている。胎土は第4類土器同様、大量の植物繊維と粗砂の混入が観察され、焼成も粗悪で脆弱な作りのものが多い。色調は淡黄褐色ないし淡黒褐色を呈し器厚は全体的に厚手で0.6cm～0.7cmを測る。

第6類土器（図版9－13～17）

地文の比較的浅い単節斜縄文に加え、表裏両面に器面調整痕と推定される条痕ないし擦痕が観察される一群である。底部形態は外縁が若干張り出すのが特徴的で、底面には木葉痕が認められる。胎土は粗砂及び細礫を多く含み、植物繊維は微かに認められる。焼成は比較的良好で、堅緻な作りである。色調は灰黄褐色ないしにぶい黄褐色を呈し、器厚は0.5cm±を測る。

③ **第Ⅲ群土器**

胎土に植物繊維の混入が認められず、時期的に縄文中期後葉から後期初頭に編年される土器群を一括した。

第1類土器（図版10－1～5）

体部地文として単節斜縄文のみが施文される一群で、胴部破片数点のため全体的な器形等は把握できなかった。胎土には粗砂及び細礫の混入が顕著に観察され、焼成も粗悪で全体的に脆弱な作りである。色調は淡黄褐色ないし明褐色を呈し、器厚は0.8cm±と比較的厚手である。

第2類土器（図版10－6）

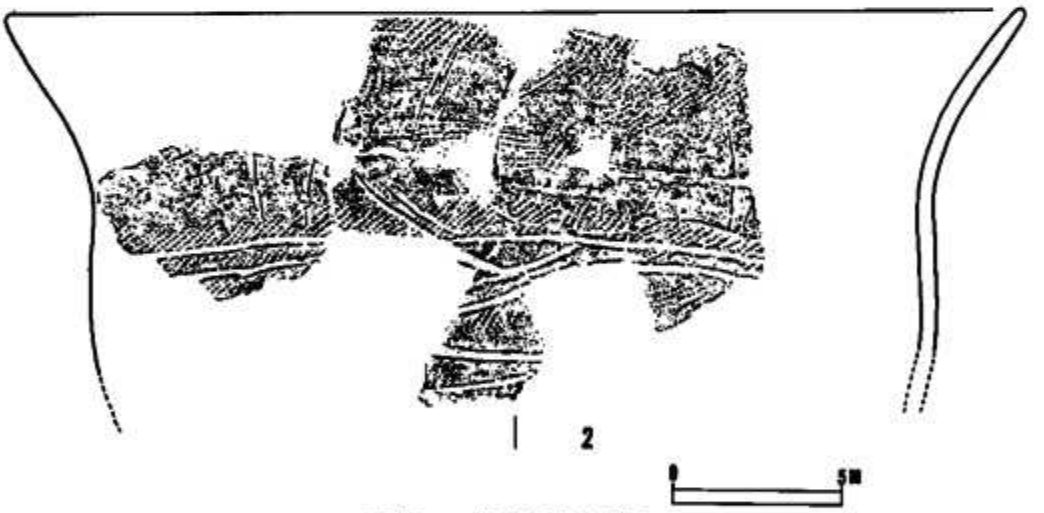
体部地文の単節斜縄文に加え、細い粘土紐貼付による装飾文様帯を有する土器で、胴部破片1点のため全体的な器形等は把握できなかった。胎土は若干粗砂の混入が認められるが、焼成も比較的良好で堅緻な作りである。色調はにぶい明褐色を呈し、器厚は0.6cm±を測る。

第3類土器（図版10－10）

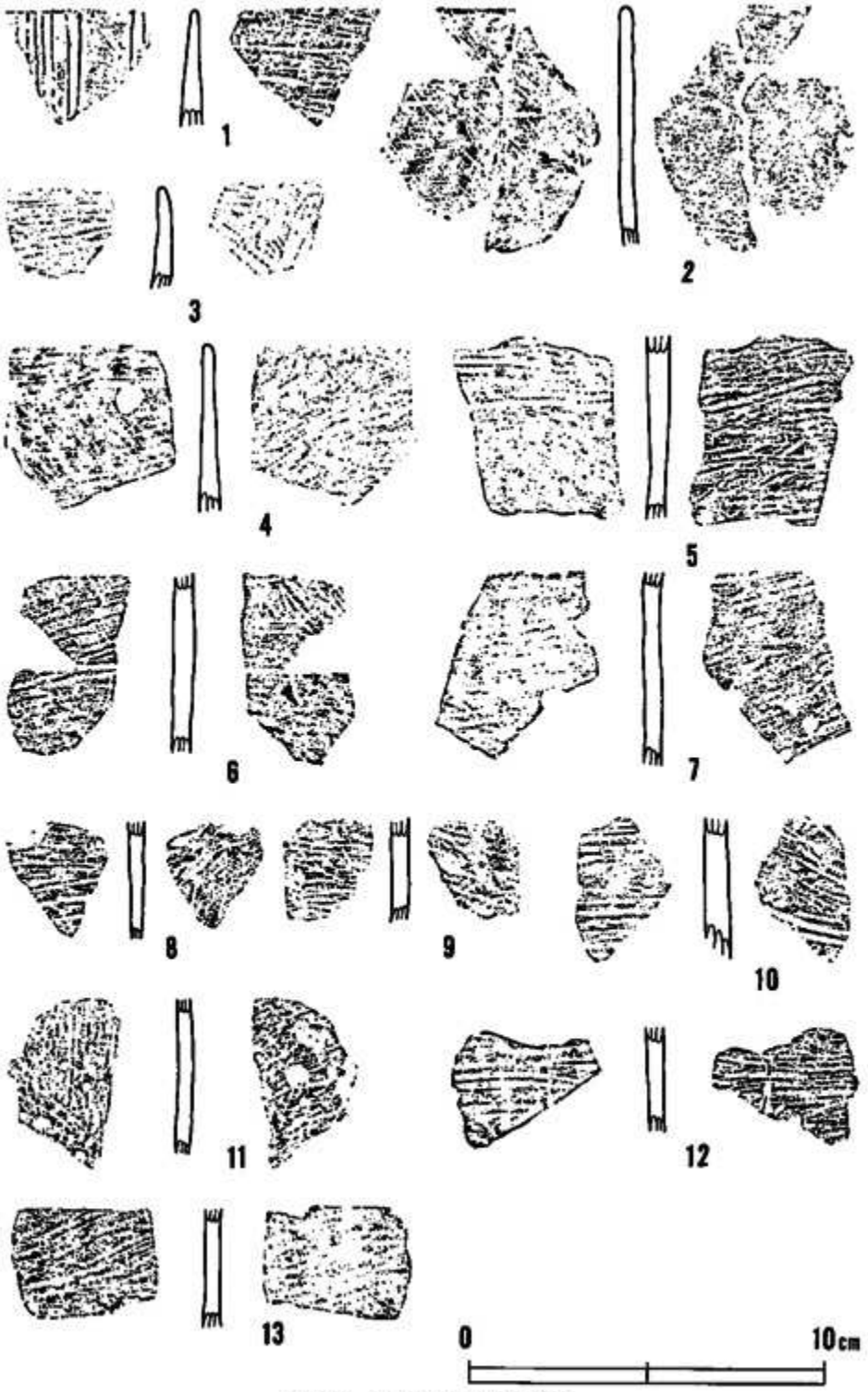
底面部資料で、体部文様の判明しないものを本類とした。その形状はほぼ平坦で、周縁部には比較的太目の縄文圧痕が施され、又わずかではあるが篦状工具等による調整擦痕も観察される。胎土は粗砂及び細礫を多量に含むが、焼成も比較的良好で堅緻な作りである。色調は明褐色ないしにぶい褐色を呈し、器厚は0.8cm±を測る。

第4類土器（図版6－2、10－7～9）

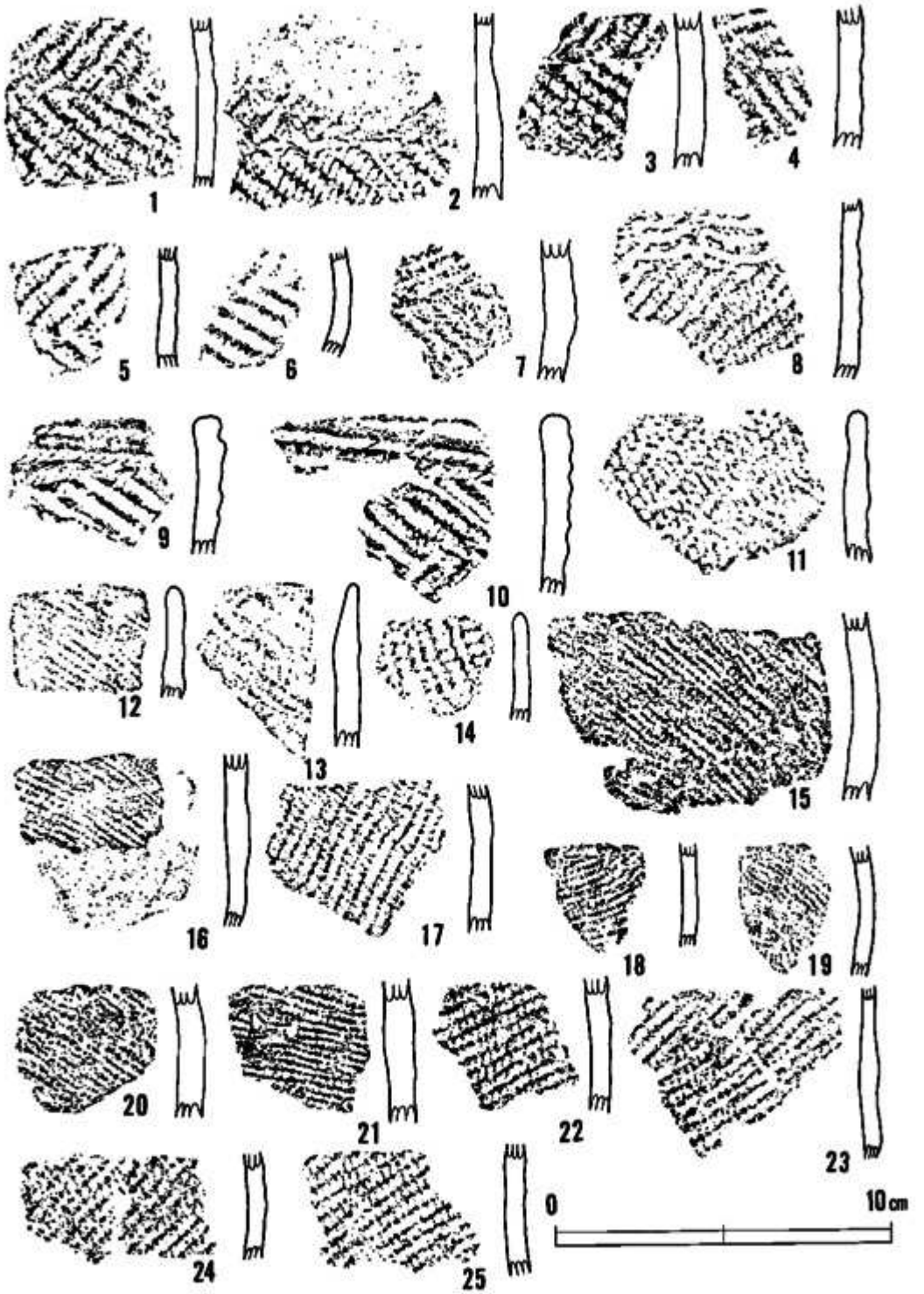
細緻な縄文地に加え、頸部以下胴央部に比較的彫りの深い沈線による装飾文様帯が集約される土器である。器形は復元口縁部資料（図版6－2）等より、頸部がやや締まり、口縁外反の深鉢形土器を呈するものと推定される。なお口縁下部に指撫による器面調整擦痕が顕著に観察される。胎土は粗砂及び細礫を多く含むが、焼成も良好で堅緻な作りである。色調は明褐色ないし橙色を呈し、器厚は0.4cm±を測る。



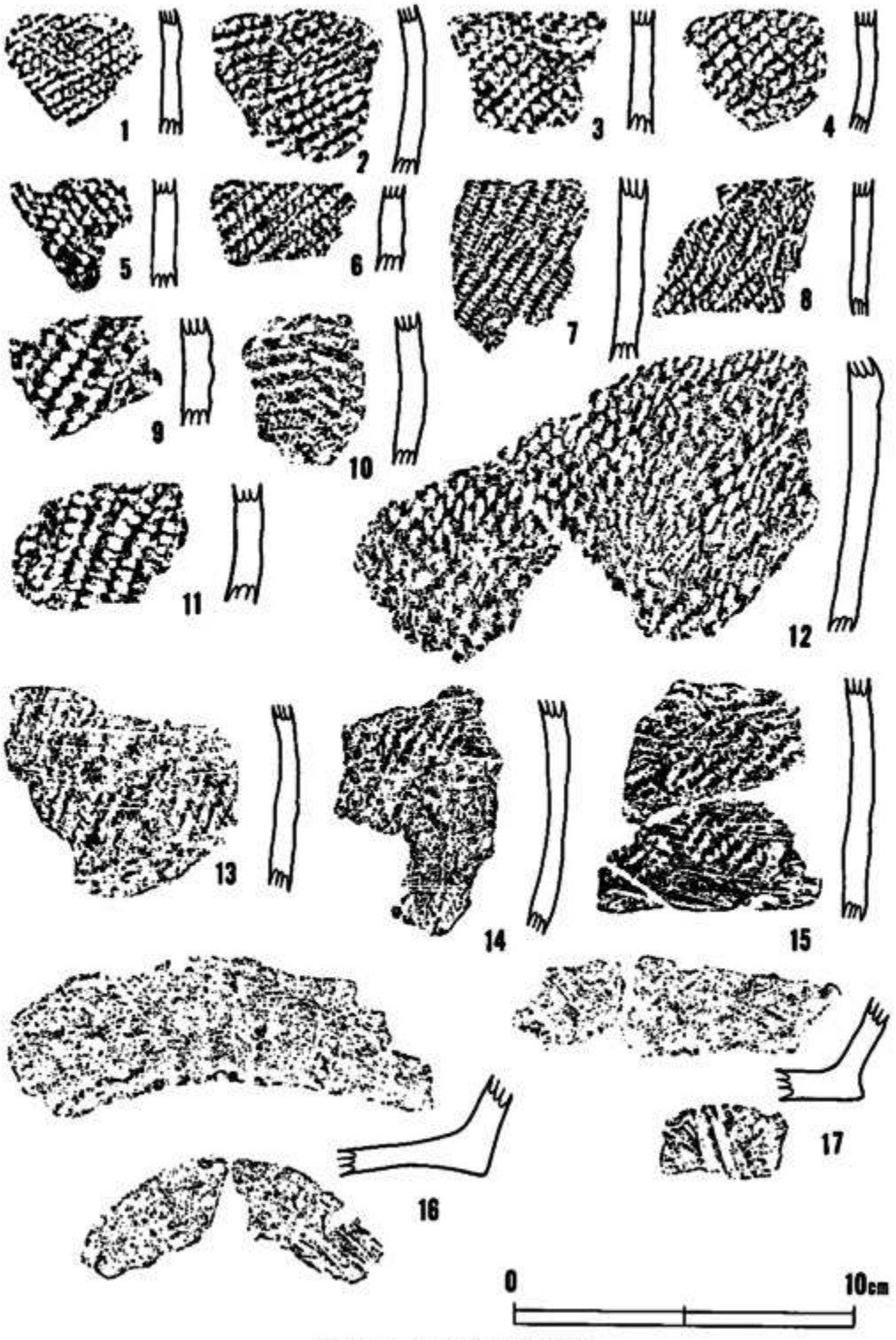
図版６　復元土器実測図



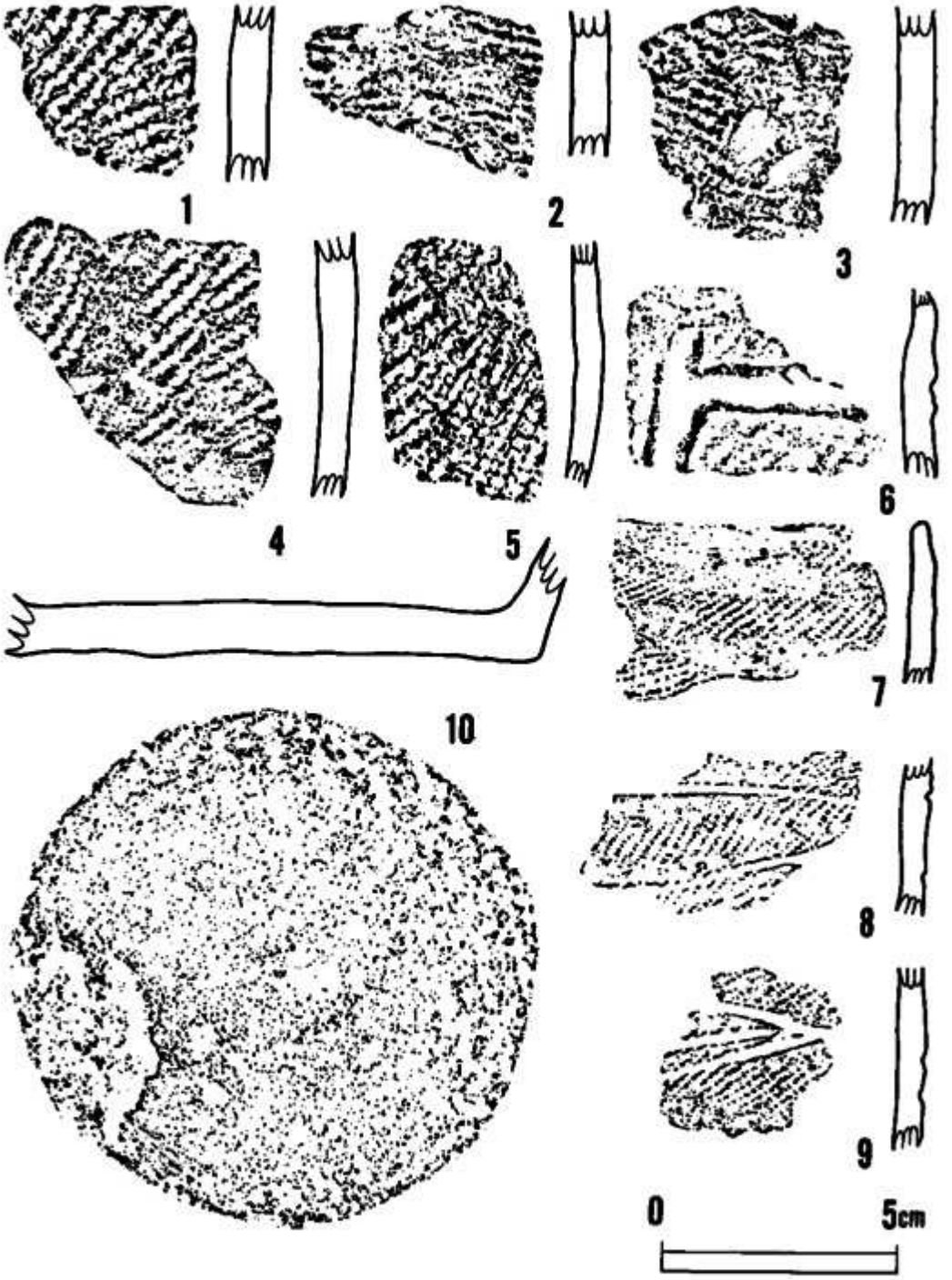
図版７　第Ⅰ群土器拓影図



図版８　第Ⅱ群土器拓影図



図版９　第Ⅱ群土器拓影図



図版10　第Ⅲ群土器拓影図

(2) 石　器

本遺跡において出土した石器の総数は、剥片（加工痕が観察されない）を除き、17点である。その殆んどが遺跡北端平坦地（Ⅰ区）、南端平坦地（Ⅳ区）の基本層序第1層（表土）より検出したもので、内訳は石鏃（4）、石槍（1）、石匙（2）、掻器（2）、石篦（6）、不定形剥片石器（5）である。

① 石　鏃

a_1類（図版11－1）

基部中央に抉りを入れて凹状にし、縦長の二等辺三角形に近い形態を有する。なお両面ともに入念な調整剥離が加えられている。石質は石英安山岩。

a_2類（図版11－2）

基部をほぼ平坦にし、尖頭部側縁が強く膨らみを有する。第一次剥離面を若干残存するが、両面側縁部に入念な調整剥離が認められる。石質はガラス質石英安山岩。

a_3類（図版11－3）

a_2類同様、基底辺がほぼ平坦で、正三角形に近い形態を有する。両面ともに入念な調整剥離が加えられている。石質はガラス質石英安山岩。

a_4類（図版11－4）

基部がやや丸味をもち、無茎と有茎の中間的形態を示す扁桃形を呈する。両面に第一次剥離面を大きく残すが、側縁部から尖頭部にかけて非常に入念な調整剥離が加えられている。石質はガラス質石英安山岩。

② 石　槍（図版11－5）

尖頭部位のみの欠損品である。最大巾がほぼ中央部に位置すると推測され、横断面形は凸状を呈する。片面に大きく第一次剥離面を残存する半両面加工で、尖頭部及び側縁部には比較的入念な調整剥離が加えられている。石質はガラス質石英安山岩。

③ 石　匙

a_1類（図版11－6）

主要刃部に対して、つまみ部軸線がほぼ直角に近い横型石匙である。つまみ部から左右に張り出す肩部までを両面加工し、刃部は片面のみに粗雑な調整剥離が加えられている。石質は石英安山岩。

a_2類（図版11－7）

主要刃部に対して、つまみ部軸線がほぼ平行に近い縦型石匙である。つまみ部から刃部周縁にかけて細緻な調整剥離の施される半両面加工品で、両面に大きく第一次剥離面を残存する。

石質は石英安山岩。

④ 掻　　器（図版11－8・9）

扁平肉厚な剥片を素材とし、腹面に大きく第一次剥離面を残存する半両面加工品である。背面にはいずれも比較的入念な調整剥離が加えられ、角度のある弧状の機能刃部が作出されている。石質は図版11－8が石英安山岩、図版11－9がガラス質石英安山岩。

⑤ 石　　箆

a_1類（図版11－10～12）

いずれも腹面に大きく第一次剥離面を残し、先端刃部及び側縁部に粗雑な調整剥離の施される半両面加工品である。又背面には比較的入念な剥離が加えられ、先端刃部がやや丸味をもって作出されている。石質は図版11－10・11が石英安山岩、図版11－12がガラス質石英安山岩。

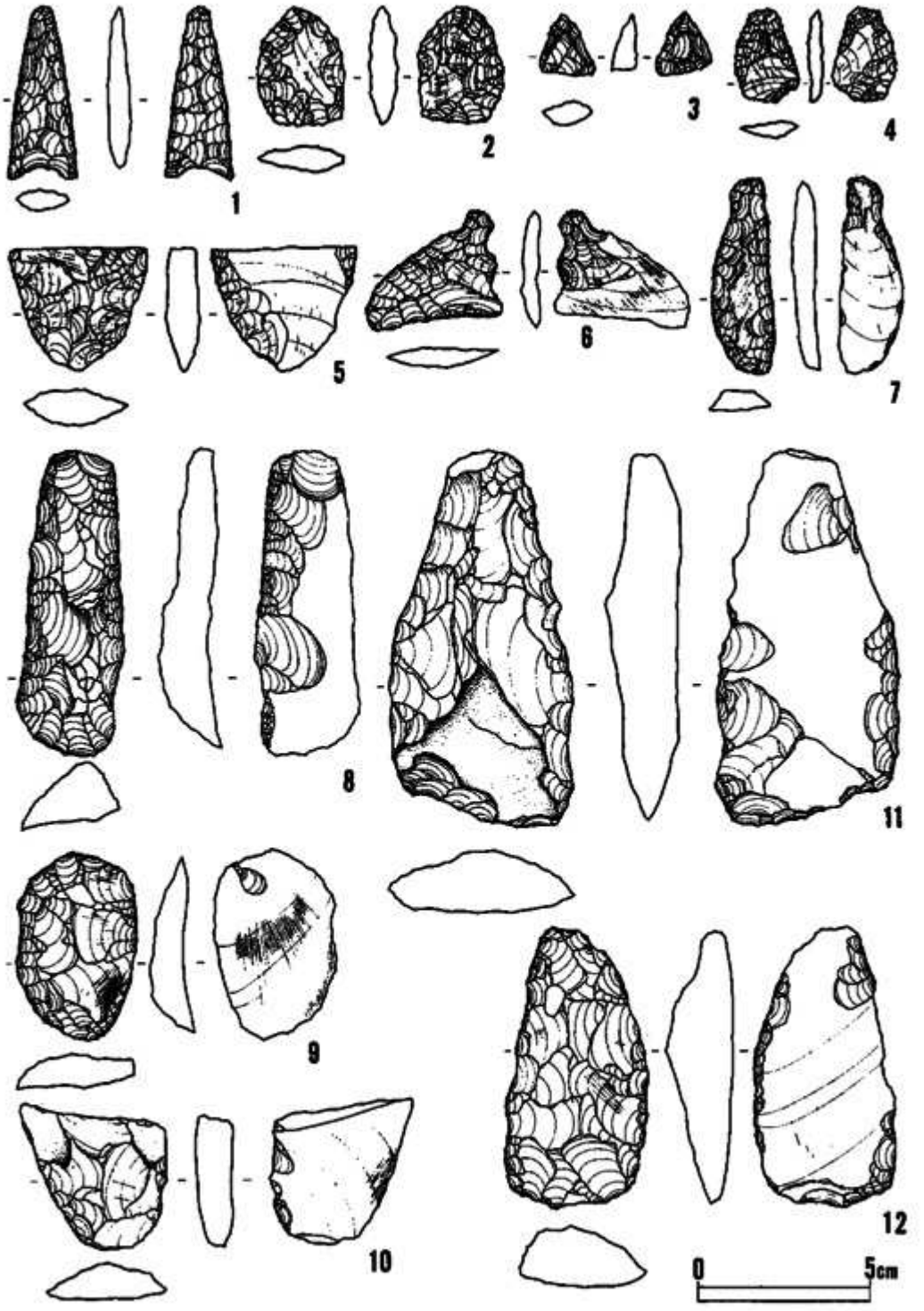
a_2類（図版12－1・2）

腹面に大きく第一次剥離面を残すが、a_1に比して側縁部の調整剥離が比較的丁寧な半両面加工品である。又背面先端刃部には細緻な調整剥離が加えられ、やや扁平状に作出されている。

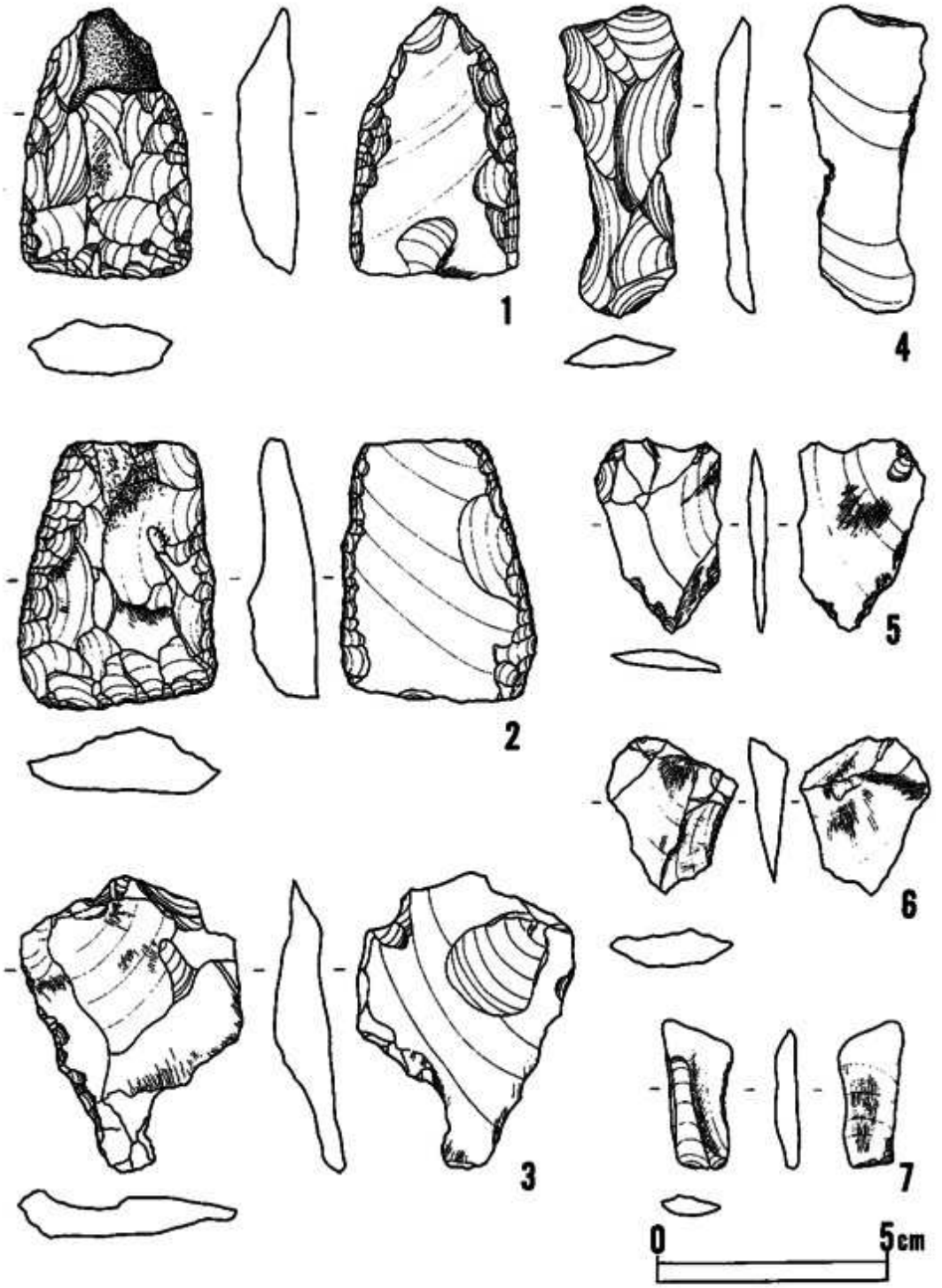
石質は図版12－1がガラス質石英安山岩、図版12－2が石英安山岩。

⑥ 不定形剥片石器（図版12－3～7）

扁平肉薄な剥片を素材とし、背腹両面側縁に若干の調整剥離が加えられているものを一括した。現段階において、これらを形態的特徴から類型化することは困難であるが、おそらく調整剥離の加えられた側縁を主要刃部とするスクレーパー的機能を有したものと推定される。石質は図版12－3・5が石英安山岩、図版12－4がガラス質石英凝灰岩、図版12－6・7がガラス質石英安山岩。



図版11　石器実測図(1)



図版12　石器実測図(2)

3．まとめと若干の考察

以上下猿田Ⅲ遺跡における縄文時代の遺構及び遺物について概要を述べたわけであるが、本項ではこれら遺構、遺物について現時点における知見をもとに若干の指摘とまとめを行なうこととする。

(1) 遺　構

陥し穴状遺構

本遺跡において、当初確認したⅣ号と対をなす陥し穴状遺構が存在するのではないかとの作業仮説から、崖線部分の遺構検出を行なった結果、北西寄り方向に2基（Ⅴ号・Ⅵ号）、南東寄り方向に3基（Ⅰ号、Ⅱ号、Ⅲ号）をそれぞれ発見することができた。以下各項目別に概要をまとめてみたいと思う。

○確　認　　本遺構は、遺跡北端平坦地（Ⅰ区）の蟹沢崖線方向に沿い2ｍ±～2.5ｍ±の間隔をおいて配置しているように認識される。

○平面形　　本遺構の殆んどが細長の不整楕円形プランを呈し、最大規模のものは開口部径240cm±×110cm±の陥し穴状遺構Ⅱ号、最小のものは陥し穴状遺構Ⅵ号である。

○横断面形　　開口部と底部との中間部位より若干くびれ、全体として「Y」字状を呈するもの（陥し穴状遺構Ⅰ号）と開口部位がやや広く、徐々に傾斜をもって落ち込む「U」字状を呈するもの（陥し穴状遺構Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ号）の2形態が観察された。

○縦断面形　　両端下部が奥に抉り込まれ袋状を呈するもの（陥し穴状遺構Ⅰ号、Ⅳ号）、南西端下部が奥に抉り込まれ歪形の袋状を呈するもの（陥し穴状遺構Ⅱ号、Ⅲ号）、全体として鍋状を呈するもの（陥し穴状遺構Ⅴ号、Ⅵ号）の3形態が観察された。

本遺跡において確認された6基の陥し穴状遺構は、耕作時の削平、攪乱等の悪条件もあり、又伴出遺物が皆無であることから、編年的位置やその性格（機能）を積極的に論述できる状態ではないが、形態的及び規模的には都南村湯沢遺跡、松尾村野駄遺跡で検出されたものとほぼ同一であり、丘陵に棲息し水辺を求めて往来する動物を捕獲するために仕掛けられた「陥し穴」的なものと推定されよう。

(2) 遺　物

土　器

本項では、Ⅴで述べた各群類土器の現段階における編年的位置付けを中心に触れておきたい。

第Ⅰ群土器

本群土器は胎土に植物繊維の混入が全く認められず、焼成も比較的良好で薄手の堅緻な作りのものが多い。細片のみで、全体的な器形等は把握できなかったが、本遺跡出土土器の中では最も古い様相を示すものである。第1類土器は、口縁に併行する一条の細隆起線とこれから垂直に下る細隆起線とによる文様手法及び胎土の性状から、縄文早期中葉の早稲田貝塚第3類土器、ムシリⅠ式土器、機木Ⅰ式土器に対比し得るものと推定される。なお県内においては、松尾村野駄遺跡の第Ⅰ群B類土器の中にほぼ同一の資料を見い出すことができる。第2類土器は表裏両面に横、斜方向の条痕ないし擦痕の観察される一群で、第1類土器同様、縄文早期中葉の早稲田貝塚第3群土器、ムシリⅠ式土器に非常に類似した様相を呈する。

第Ⅱ群土器

本群土器は胎土に植物繊維及び粗砂、細礫を含有するもので、復元口縁部資料（図版6－1）を除き、その殆んどが小破片であった。なお焼成も粗悪で、厚手の脆弱な作りのものが多い。

第1類土器は、体部地文として整然とした羽状縄文の施文される一群で、縄文早期末葉から前期初頭の早稲田第5類、第6類土器に対比し得るものと考えられる。第2類土器は、横位の不整撚糸文及び単節斜縄文によって文様構成されるもので、大木2式期において不整撚糸文が全体的に施文される傾向があることなどから、本類土器はおそらく大木1式後半期に比定されるものと推定される。第3類土器は、口縁部に3条の撚糸圧痕と、体部地文に羽状縄文の施文されるもので、縄文早期末葉から前期初頭の早稲田貝塚第5類土器、長七谷地貝塚第Ⅲ群土器、東北地方南半の上川名Ⅱ式土器に非常に類似した様相を呈する。第4類土器、第5類土器は、胎土の性状、体部の文様手法（単節斜縄文のみを施文）、器形等の諸特徴より縄文早期末葉から前期初頭の早稲田貝塚第5類、第6類土器、室浜式、桂島式に類似した様相を呈し、県内においては野駄遺跡第Ⅱ群土器の中に同一の資料を見い出すことができる。第6類土器は、体部地文の浅い単節斜縄文に加え、表裏両面に器面調整の際の条痕ないし擦痕が顕著に観察される一群で、地文、胎土の性状、底部外縁が若干張り出すといった諸特徴から、早稲田貝塚第5類土器に類似した様相を呈する。

第Ⅲ群土器

本群土器は、胎土に繊維の混入が認められず、地文及び器形等の諸特徴から縄文中期中葉～後期初頭に比定されるものを一括した。第1類土器、第3類土器は地文以外に型式を規定する主体文様をもたないが、胎土の性状、焼成等より推察して、おそらく縄文中期中葉～中期末葉（大木8b式～大木10式）に比定されるものと考えられる。第2類土器は、体部地文の単節斜縄

文に加え、細い粘土紐貼付による装飾文様を有する土器で、縄文中期中葉の大木８ｂ式に比定れるものと考えられる。第４類土器は、細緻な縄文地に加え、頸部以下に沈線による装飾文様帯を有する土器で、器形（頸部が若干締まる口縁外反の深鉢形土器）及び文様構成等の諸特徴から、縄文後期初頭の北奥羽地方における十腰内Ｉ式土器、大湯式土器に比定されるものと考えられる。

参考文献

八戸市教育委員会	(昭和50年)	「赤御堂貝塚調査報告書」
大槌町教育委員会	(昭和49年)	「崎山弁天遺跡」
青森県教育委員会	(昭和50年)	「泉山遺跡発掘調査報告書」
芹沢長介・林謙作		「岩手県蛇天洞洞穴」
伊東　信雄	(1940年)	「宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告書」
佐藤　達夫	(1958年)	「青森県上北郡早稲田貝塚」
〃	(1961年)	「六ケ所村出土早稲田第５類土器」
笹津　細洋	(1960年)	「青森県八戸市日計遺跡」
草間　俊一	(1958年)	「盛岡市史Ｉ」
青森県教育委員会	(昭和53年)	「表館遺跡・発茶沢遺跡」
秋田県教育委員会	(昭和44年)	「岩井堂岩陰遺跡発掘調査報告書」
宮城県文化財保護協会	(昭和52年)	「亀岡遺跡・金山貝塚」
岩手県埋蔵文化財センター	(昭和55年)	「御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書」
岩手県埋蔵文化財センター	(昭和55年)	「東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書」
青森県教育委員会		「長七谷地貝塚発掘調査報告書」

Ⅵ．近世・近現代の遺構と遺物

1．1号建物址

当建物址の相対座標点Oは

X＝－34,930.00m

Y＝＋17,550.00m

調査開始前から、礎石の上に土台をのせて上屋を築き、厩を内蔵するいわゆる直ご家（すごや）造りであることが地表における礎石の点在、また厩部分の表土が窪んでいることから判明しているのでトレンチ調査とともに当建物址の粗掘りをいち早く開始した。

a．遺　構

当建物址は長軸がN－11°15′－Eに向く11.4m×6.65mの長方形の平面形で、東に出入口をもつ。礎石は町場II、下猿田II遺跡にみられる建物址より小型で、墨縄痕は発見されていない。四隅の礎石は他に比較して大きく移動していないと思われるため、四隅の礎石間を計測した結果、南北の長辺は11.4mの6間で1間は1.9m、東西の短辺は6.65mの3.5間で1間は同じく1.9mを測る。

I区の礎石にかこまれた内部は掘り込み傾斜が深く、隅丸方形状で、底になるにつれてカーブが緩やかになる厩である。壁及び床は非常に硬く、II区の平面から深さ40cmを測る。北の礎石列が1間分開いており、馬の出入口であろう。

その東接したII区は固くしまった土間区域で、後の改装によるものか風呂場のコンクリート床らしき跡が中央に見られる。

III区の中央には人頭大からそれの3倍もある河原石を積み上げた炉址があり、その西区は床面がソフトな黒褐色土ながら約20cmの深さをもつ浅い窪みがみられることから、III区は東西2室に分けることができる。

またV区の座敷の礎石列の内側は30cmほどの浅い窪みをもち、歩けば足跡がはっきり残るほどソフトな黒褐色土の床面で、家屋移転の際不必要な材木を焼失した炭化材や焼土ブロックが床面上に部分的広がりをもって堆積していた。

b．遺　物

当建物址からは合計12枚の貨幣が出土している。この内、表のNo1～10は床面から他の2枚は粗掘り中からの出土である。その時代的割合を求めると、少ない出土枚数からはそれほど良い結果は得られないが、寛永通宝などの近世に主に流通した貨幣は2枚で総数の17％、明治以後の近代貨幣は6枚出土で50％、現行貨幣は4枚で約33％である。町場II遺跡4号建物址と同様

に直ご家からの出土貨幣は少なく、しかも近現代貨幣が圧倒的である。

他の出土遺物は粗掘り中のキセル4点がある。その内の一つは吸口から雁首までつながった銅製キセル、他の一つは雁首のみの出土であるが、柄の部分がラセンではなく輪積み状に盛り上がった型をしている。

2．2号建物址

当建物址の相対座標点Oは

X＝－34,910.00m

Y＝＋17,550.00m

1号建物址の北にある当建物址は主屋に対しての付屋屋で、厩と作業場でもある。レベルも1号建物址より1m高い位置に造られ、馬を必要としなくなった昭和30年代にI区の厩を廃し埋めたて、II区の床にコンクリートを張っている。

建物は礎石を置いた上に土台を重ね、その上に上屋を築く1号建物と同じ方法をとっている。長軸がやや傾くW－11°30′－S′と1号建物址と直角関係にある。四隅の礎石の中心間を計測した結果、長辺の東西は9.0mの5間で1間は1.8m、短辺の南北は4.4mの3間で1間は1.8mを測る。主屋である1号建物址の1間（スパン）は1.9mであるのに対して当建物址のそれは1.8mで土台を築いている。

東側のI区は厩で、南側に1間の出入口が造られている。レンズ状の窪みというより町場II、下猿田II遺跡の厩では見られない急激な壁をもち、床も水平に近い中央に向いたなだらかな傾斜で、また非常にハードなたたきしめられた壁と床である。厩内の北には乳状の窪みがみられる。これは下猿田II遺跡1号建物址厩中央にみられるピット群と同一構造である。

西のII区の大半は面積17㎡のコンクリート床で占められ、西端に「昭和32年6月20日」と陰刻されていることから、その時点で改装が行なわれたのであろう。

礎石上の墨縄痕や遺物は発見されていない。

3．3号建物址

当建物址の相対座標点Oは

X＝－34,890.00m

Y＝＋17,540.00m

当建物址は発掘調査対象区の中央、II地区の東に位置する。東隅に谷からの湧水を溜める多目的利用の溜池がありまた、建物址発見地を被うように長いも畑の耕作痕が南北に連続している。

a．遺　構

当建物址の発見端緒は東西にのばされたトレンチにあらわれた柱穴群プランによる。長軸は北東－南西にあり、N－22°30′－Eである。四隅の柱穴の中心間を計測した結果、長辺は約

10.5mの5.5間で1間は約1.9m、短辺は約6.6mの3.5間で1間は約1.9mを測る。南北に長い掘立柱建物址のため2ケ所に間仕切りの柱穴がみられ、当建物址は南北に大きく3区画に分けることができる。当調査区は南に低い緩傾斜のため、3区画中南区画の南辺柱穴列は黒色土中に柱穴がつくられ、しかも長いものの攪乱により南辺の柱穴列は発見することができなかった。よって実際はさらに南北に半間あるいは1間長い建物址になる可能性がある。東辺は半間の庇がつくが北の2間分は庇がなく、曲り家の様に母屋に対してため池方向に直角に建物がのびるかと思われる柱穴が2列発見された。しかし残念なことにその延長部分は溜池にぶつかり、柱穴調査の追求を不可能にしている。母屋の桁行東辺はその柱穴調査の段階で柱穴の掘り方が2つに分かれ、据り方もそれぞれ2個ずつ発見される柱穴が南北に並ぶ柱穴列の一つおきの柱穴にあることから、部分的建てかえの可能性もある。

当建物址に伴なう柱穴は延べ43個見つかり、この内据え方の判明した柱穴は33個である。柱穴の掘り方はすべて円形を呈し、母屋の柱穴の掘り方径は60cm、据え方径は25cm、庇の掘り方径は30cm、据え方径は15cmを測る。据え方底は大半が掘り方底に達しており、その接した部分の地山は灰白色で粘土化している。掘り方の土は黄橙色地山ブロックを多量につき固めた版築状を呈する。据え方の土は粗い暗褐色土で、小円礫を含む。溜め池わきの柱穴は地山がゆるいため掘り方の底に材木を入れ、礎板状にしている。

b．遺　物

当建物址出土の遺物は2個あり、粗掘り中出土した近代貨幣である桐一銭銅貨1枚と、北隅の柱穴据え方部分から出土した図版21の首のない土製品が1個ある。一部欠損しているが首部から縦に溝がつきぬけ、衿らしきところに房が2個見られるところから、山伏の人形かと思われる。

c．隣接する土坑

図版17の左下にある当土坑の相対座標点Oは

X＝－34,890.00m

Y＝＋17,530.00m

1号土坑は東西2m、南1.5m、深さ0.3mの規模をもつ。2号土坑は東西1.1m、南北1.7m、深さ0.2mの長方形である。表土の下から土坑は掘り込まれ、遺物はまったく出土していない。

4．4号建物址

当建物址の相対座標点Oは

X＝－34,884.00m

Y＝＋17,523.00m

当建物址は調査区の中央II区域、3号建物址の西に、軸はそれに対して直角に配する形で柱穴が並んだ。北に接して直接地面に塗ったコンクリート床とそれに接して厩がみられる。この厩の下に当建物址の柱穴が入るため、コンクリート床とそれに伴う厩より旧い。

a．遺　構

当建物址は掘立柱建物址であるが、四辺の柱穴の一部は溝でつながれており、溝の中に柱穴が入るいわゆる布掘りである。長方形の建物址ではあるが、厳密には四隅が直角でなくわずか3°のずれが見られる菱形である。長軸はN－62°20′－W。柱穴の間隔が不揃いではあるが東西桁行は約11.4mの6間分で1間は1.9m、南北梁行は約5.4mの3間で1間は1.9mを測る。

間仕切りの柱穴が南北に2列あり、大きく3区画に分けることが出来る。東の区画の北に、厩址と思われる固く窪んだ楕円形プランが調査されたが、建物址の北にはみ出す。また覆土が浅いため建物址と厩との新旧関係は不明である。

b．遺　物

柱穴からの出土遺物はないが、粗掘り中、近世に多量に造られた天保通宝1枚と、近代貨幣である桐一銭銅貨が1枚出土している。

5．5号建物址

当建物址の相対座標点Oは

X＝－34,840.00m

Y＝＋17,530.00m

5号建物址は掘立柱建物で、発掘調査区内では北上段のI区から発見された。また当建物址に切られ発見された縄文時代の陥し穴状土坑6基も同テラスの発見である。

a．遺　溝

当建物址は南北に連続して掘り下げた巾2mのトレンチ中に柱穴の一部が見つかり、平面プランを確認した 結果、I区テラスの西側ぎりぎりに建てられた4ケ所の布掘りをもつ掘立柱建物址、であった。長軸がN－57°30′－Eに傾く東西に長い長方形を呈する。桁行は12.5mの6.5間で1間は約1.9m、梁行は6.7mの3.5間で1間は同じく約1.92mを測る。

四辺は半間の柱穴間隔で、庇は伴なわない。4号建物址と同じく当建物址は厳密には長方形ではなく、約1°35′ずれて菱形である。柱穴の掘り方は径約50cmの円形で、据え方は径20cmの円形である。据え方の底が掘り方底に達していない柱穴は全体の3割ほどみられ、3号建物址の据え方底と同様にグライ化している。ソフトな黒褐色土層中に掘られた柱穴も同様に固くなっている。

4ケ所にみられる布掘り跡は2個の柱穴を含むそれが2ケ所、4個の柱穴を含むそれが1ケ所、5個の柱穴を含む布掘りが1ケ所と、柱穴列の全体からみれば一部にすぎない。間仕切りの柱

穴から他の建物址と同様に東西に3区画される。

b．遺　物

柱穴内出土の遺物は縄文土器片を除いて出土してない。わずかに当所の粗掘り中に、新寛永銅一文銭が1枚出土している。

6．墓　　址

図版20中の相対座標点Oは

X＝－34,902.00m

Y＝＋17,510.00m

下猿田Ⅲ遺跡Ⅰ区の北、1段高いテラスに碑を持つ墓が林の中にみられるが、調査区域外のためそのまま保存され、調査区域内からはⅢ区の西端に設けたトレンチより墓址が発見された。

1ケ所に3基の墓址が切り合って発見されたが、新旧関係は不明である。これらの規模は径0.8～1.2mの円形で、土壙の深さは0.5～0.6mに達する。

1号墓址出土の遺物としては、人骨は歯が7本付いた顎骨と骨粉状にわずかに見られる程度で、他に新寛永鉄一文銭1枚と新寛永銅一文銭2枚が出土している。

歯の鑑定結果は15歳～20歳の人骨である。

2号墓址は錆びて粉に近い新寛永鉄一文銭約5枚と鉄錆の付着した新寛永銅一文銭2枚の貨幣が出土している。人骨は歯15本と頭骨片が発見され、その鑑定結果は12歳～15歳と考えられる。

3号墓址からは貨幣の出土はみないが、ろうそくが1本出土している。人骨は土に同化したのか出土しなかった。

7．ま と め

当遺跡から検出された遺構の内近世、近現代に含まれる遺構は、建物址5、土坑2、墓址3基である。

(1)　1号、2号建物址、土台は礎石を半間ずつ水平に造成された地に固定し、厩を内蔵した直ご家である。1号建物址は主屋、2号建物址はその付属屋である。

(2)　3号建物址、平面形がL字型の掘立柱建物址、創建当初からのL字型で、下手の⅔が溜池により撹乱されている。東面に庇をもつ。

(3)　4号、5号建物址、ともに布掘りをもつ掘立柱建物址で庇はない。

これら5棟の建物址は、緩傾斜を削平造成された小テラスにそれぞれ単独に建物が配されている。1号、2号建物址は御所ダム水没補償後に廃棄された極最近まで使用されている建物であるのに対して、3号、4号、5号建物址は、畑地からの検出で旧地主もその使用と言い伝えは聞いていないことから3～5号建物址は1号、2号建物址の前身建物である。

Ⅶ. 結　　語

今回の発掘調査によって、下記のような成果を得ることができた。

(1) 下猿田Ⅲ遺跡は、標高318mの中起伏山地大欠山の南東寄り末端部に突出した尾根上台地に立地し、時期的には縄文早期中葉～前期初葉、近世～近現代に至る長い期間、先人の生活の場となった遺跡と言えよう。

(2) 縄文時代の遺構として、陥し穴状遺構6基、近世～近現代の遺構として礎石建物跡2棟、掘立柱建物跡3棟、墓壙3基、性格不明方形土壙2基がそれぞれ確認された。

(3) 縄文時代の出土遺物として土器類は、復元口縁部資料2点を除き、その殆んどが耕作時の削平、攪乱等の悪条件から細片であり、層位的に把握されたものは皆無であるが、縄文早期中葉～前期初頭における一連の諸型式の出土をみた。石器類は、石鏃4点、石槍1点、石匙2点、掻器2点、石箆6点、不定形剥片石器5点の総計17点の出土である。歴史時代の出土遺物としては、古銭、キセル、人形土製品等が若干出土している。

(4) 本遺跡は縄文時代の遺構及び遺物として、陥し穴状遺構6基と若干の土器片を確認したにとどまり、集落跡としての遺跡の広がりは知り得なかったが、雫石川流域における縄文早期中葉から前期初頭土器群の変遷に貴重な資料を提供した。

(5) 近世～近現代の遺構及び遺物より、掘立柱建物跡から礎石建物跡への移行を知る貴重な資料を提供した。

なお最後になりましたが、今回の調査にあたっては岩手県教育委員会、建設省御所ダム工事事務所等の関係機関各位の御尽力と御協力を得て無事終了することができました。厚く御礼申し上げます。

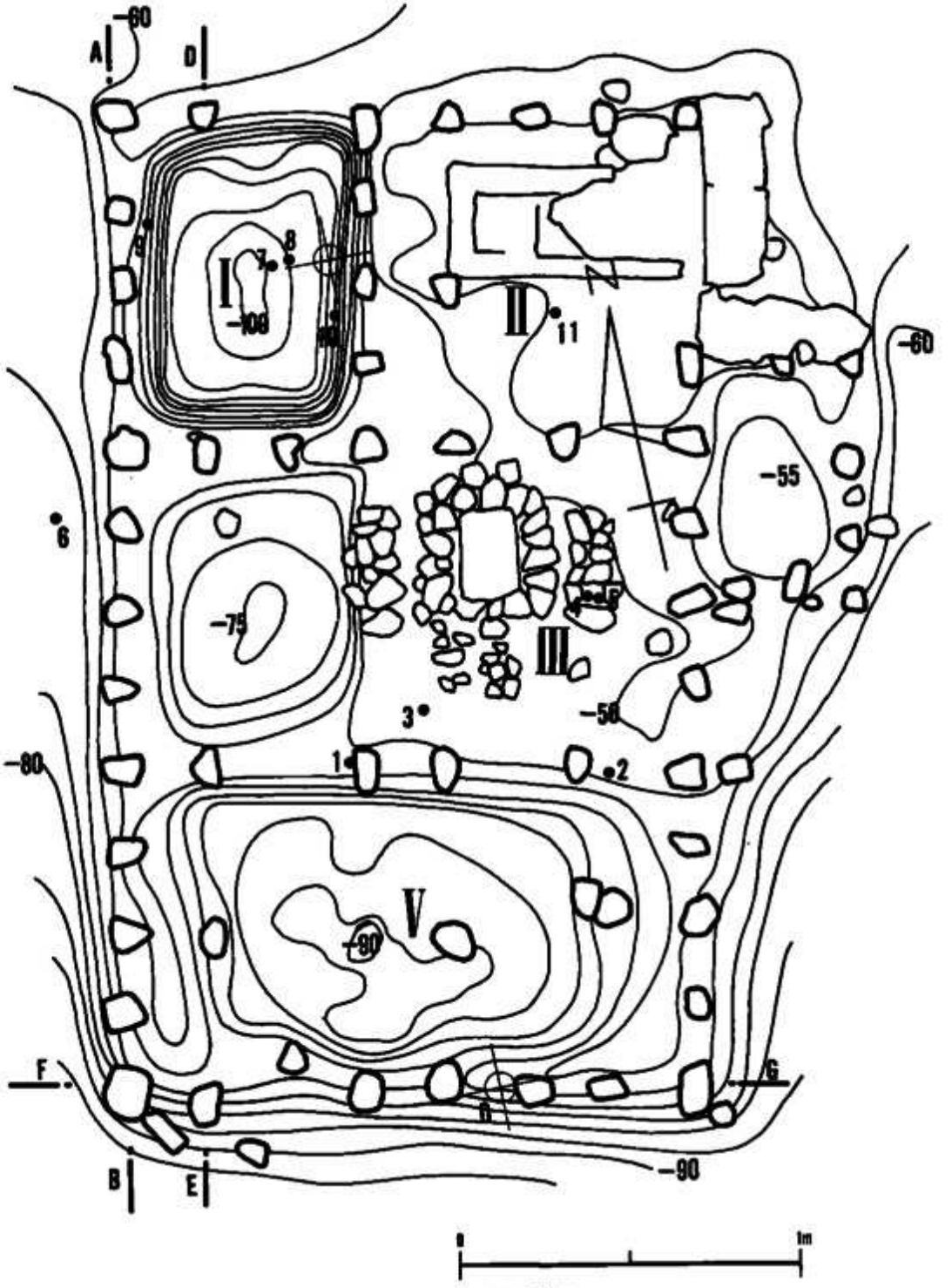
（文責高橋正之）

下猿田Ⅲ遺跡

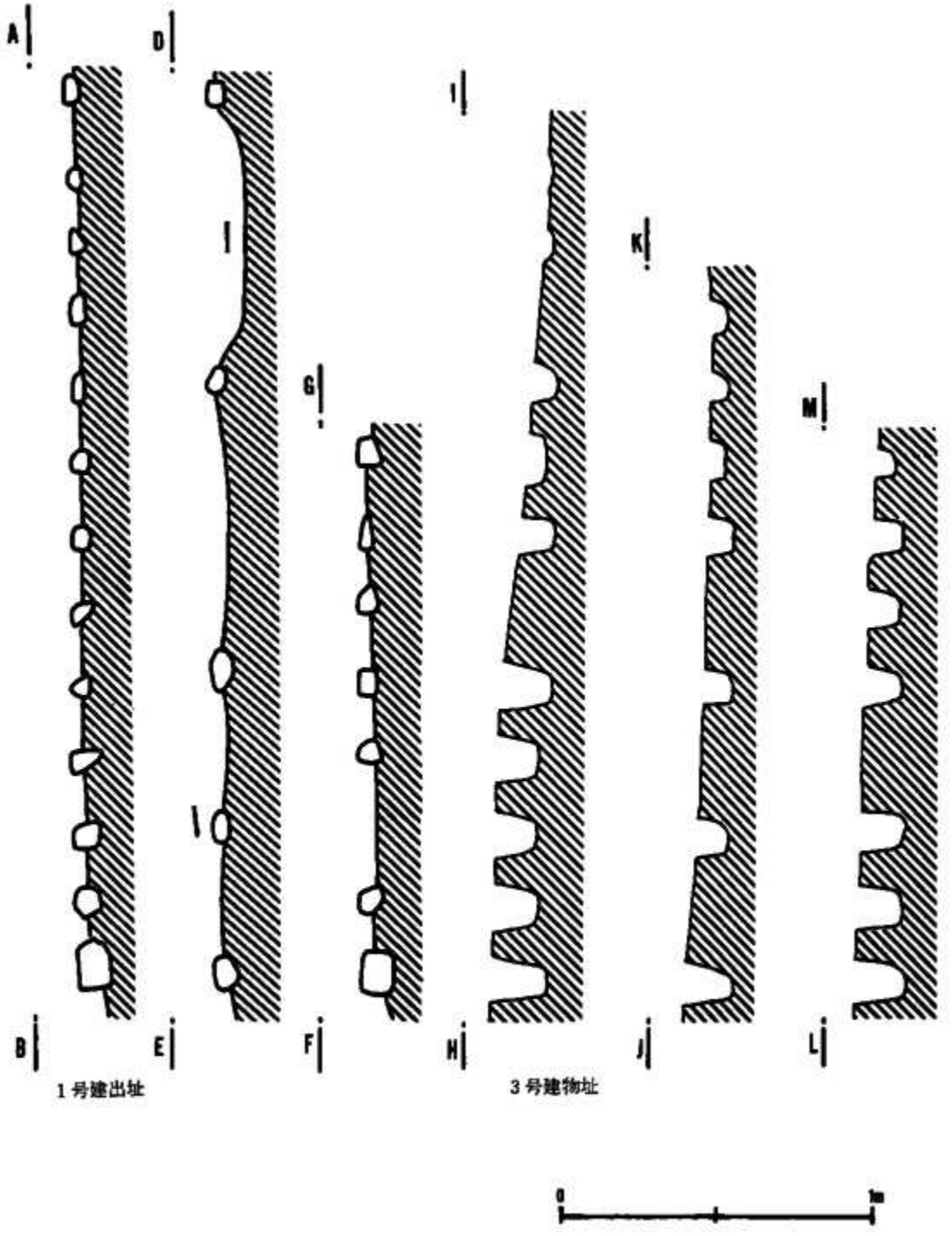
番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
	1号建物址										
1	新寛永銅四文銭	近世			2.81	4.05	方	177.988	Ⅲ		
2	桐一銭銅貨	近代	大正12年	1923	2.35	3.35		178.018	〃		
3	旧十円銅貨	〃	昭和28年	1953	2.40	4.45		177.998	〃		
4	菊十銭アルミ貨	〃	昭和16年	1941	2.22	1.45		178.048	〃		
5	鳥一銭アルミ貨	〃	昭和14年	1939	1.79	0.82		178.038	〃		
6	旧五円黄銅貨	現代	昭和28年	1953	2.21	3.50	円	177.798	〃		
7	菊十銭アルミ貨	近代	昭和15年	1940	2.25	1.47		177.568	Ⅰ		
8	不明(アルミ貨)	〃			2.25	1.08		177.578	〃	腐食進行	
9	五銭ニッケル貨	〃	昭和9年	1934	1.98	2.76	円	177.958	〃		
10	古寛永銭	近世			2.55	3.64	方	177.908	〃		
11	旧十円銅貨	現代	昭和27年	1952	2.41	4.40		不明	Ⅱ		表土中
12	一円アルミ貨	〃	昭和30年	1955	2.06	0.95		〃	不明		〃

下猿田Ⅲ遺跡

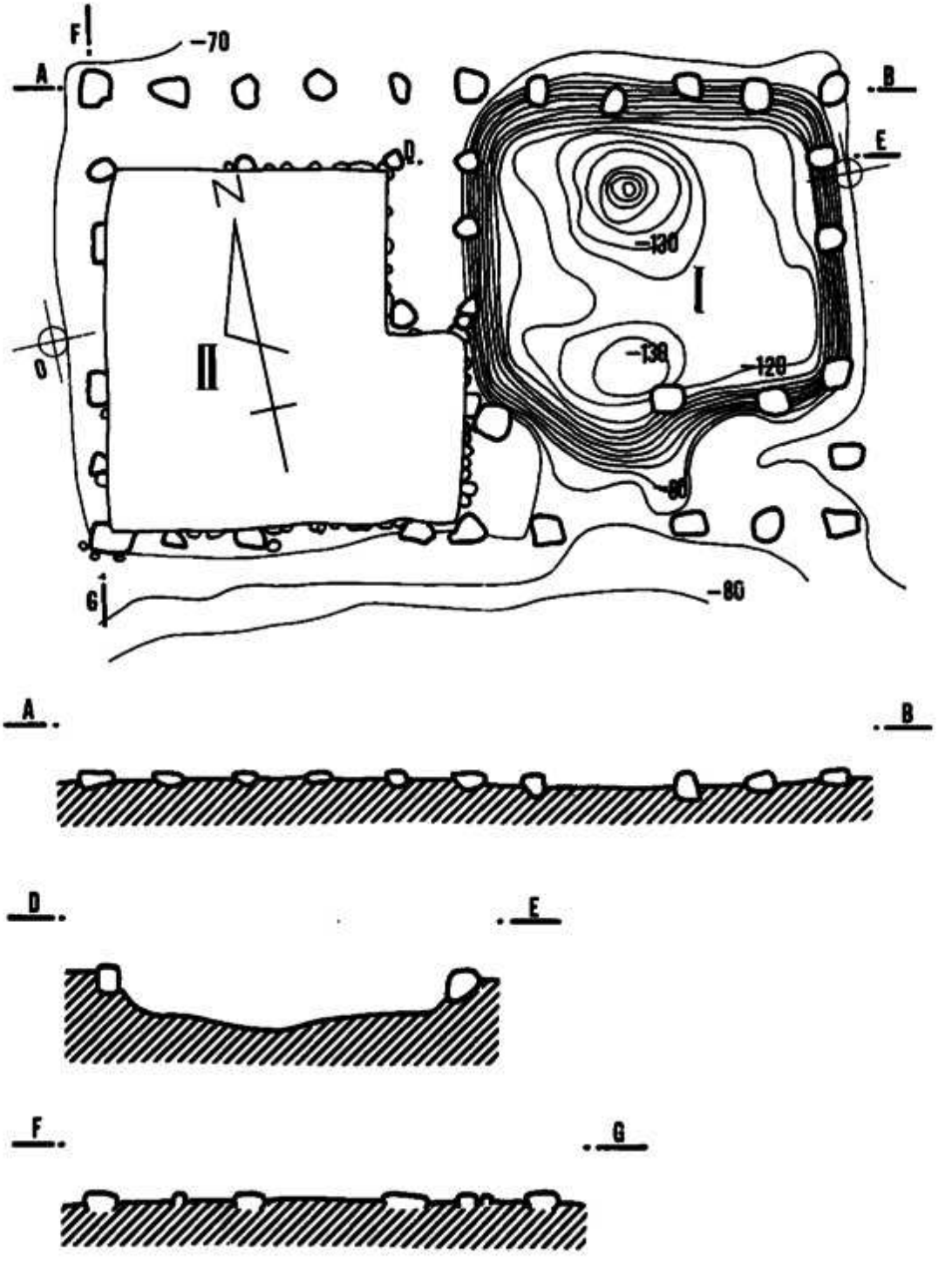
番号	名称	年号			形			出土状態			備考
		時代	和暦	西暦	直径	量目	穿	レベル	位置	遺物	
	3号建物址										
1	桐一銭銅貨	近代	大正(?)	?	2.33	3.11		耕作土層	不明		
	4号建物址										
1	天保通宝銭	近世			3.37	21.00		耕作土層	不明		天保6年(1835)以後鋳造
2	桐一銭銅貨	近代	大正13年	1924	2.34	3.55		〃	〃		
	5号建物址										
1	新寛永銅一文銭	近世			2.50	3.05		耕作土層	不明		
	1号墓址										
1	新寛永鉄一文銭	近世				1.80		不明	不明	粉状に近い	
2	新寛永銅一文銭	〃			2.38	1.68		〃	〃		
3	〃	〃			2.40	2.30		〃	〃		
	2号墓址										
1	新寛永鉄一文銭	近世				2.32		不明	不明	粉状に近い	
2	〃	〃				1.62		〃	〃	〃	
3	〃	〃				0.41		〃	〃	〃	
4	〃	〃				3.00		〃	〃	〃	
5	〃	〃				3.53		〃	〃	〃	
6	新寛永銅一文銭	〃				1.04		〃	〃	2/3われ欠	
7	〃	〃			2.50	2.86		〃	〃	文字よめず	



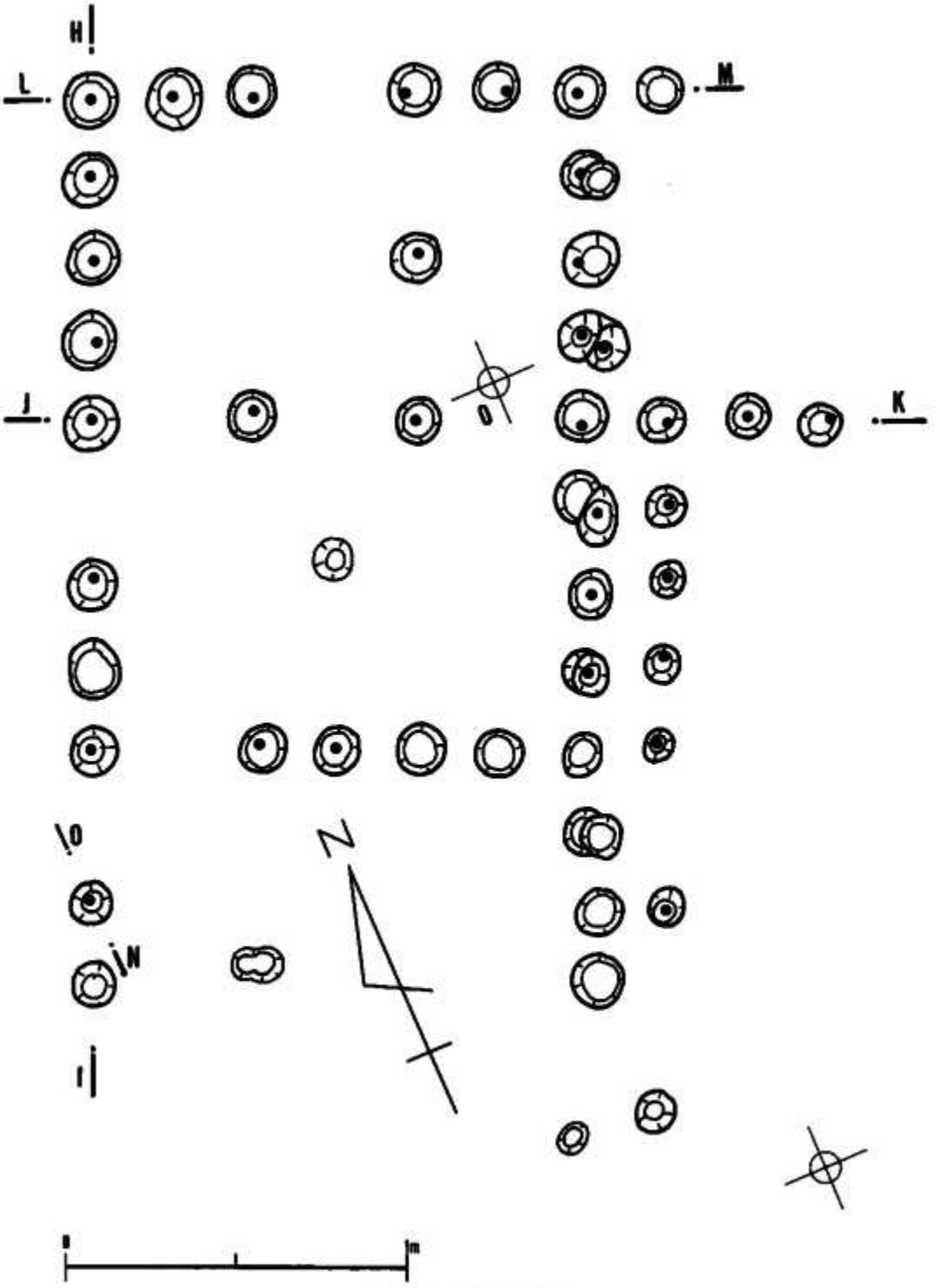
図版13　1号建物址



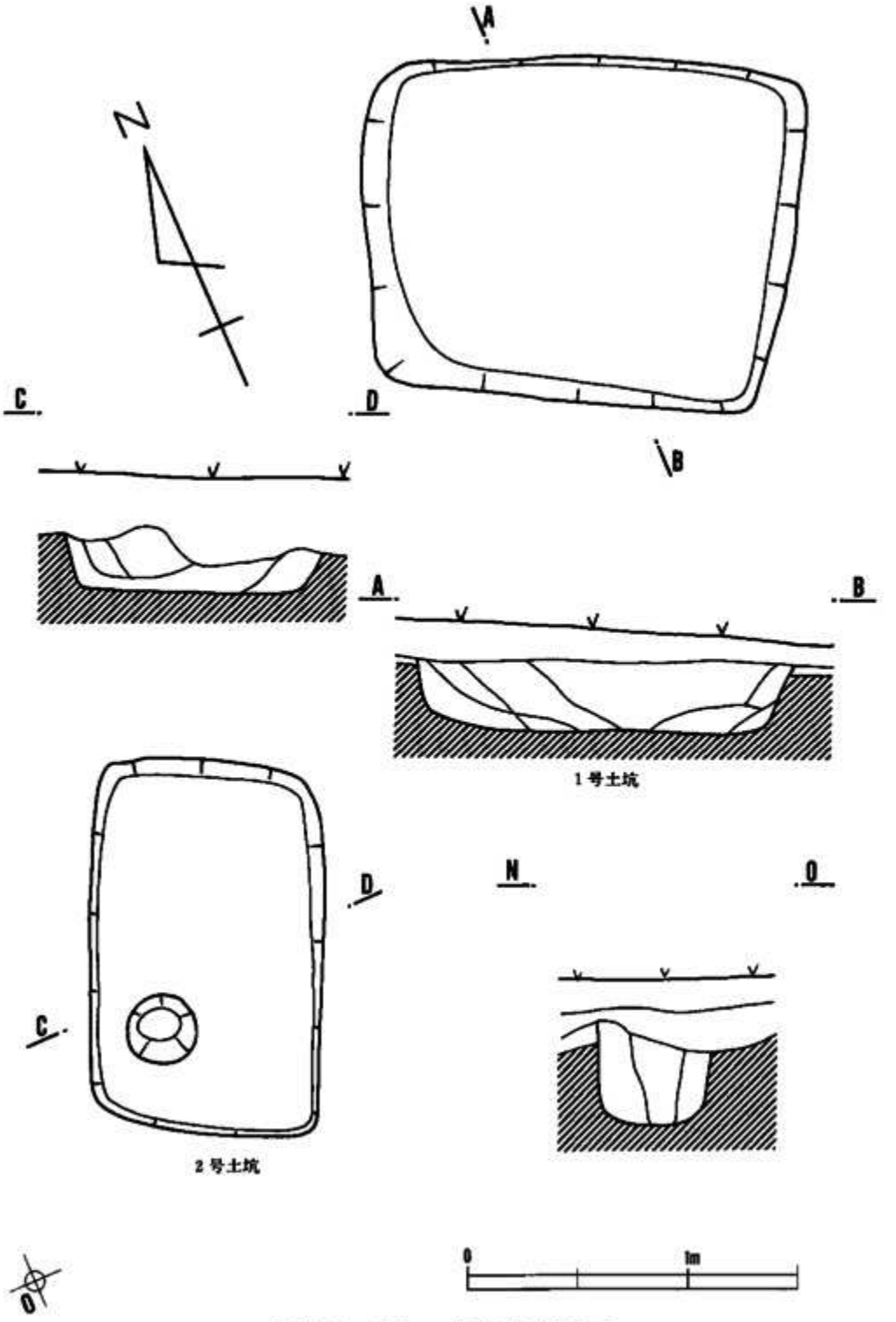
図版14　1号・3号建物址エレベーション図



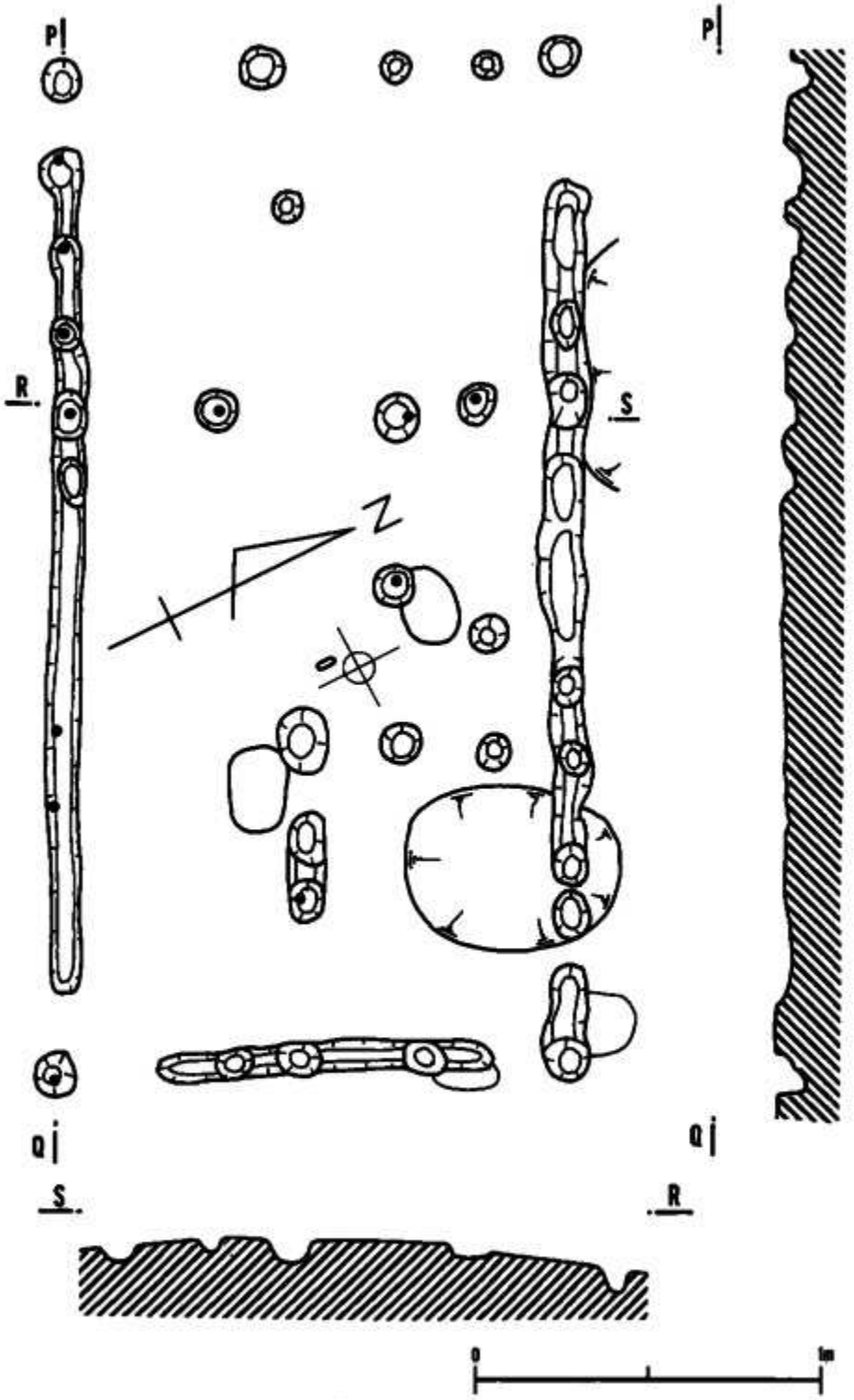
図版15　2号建物址



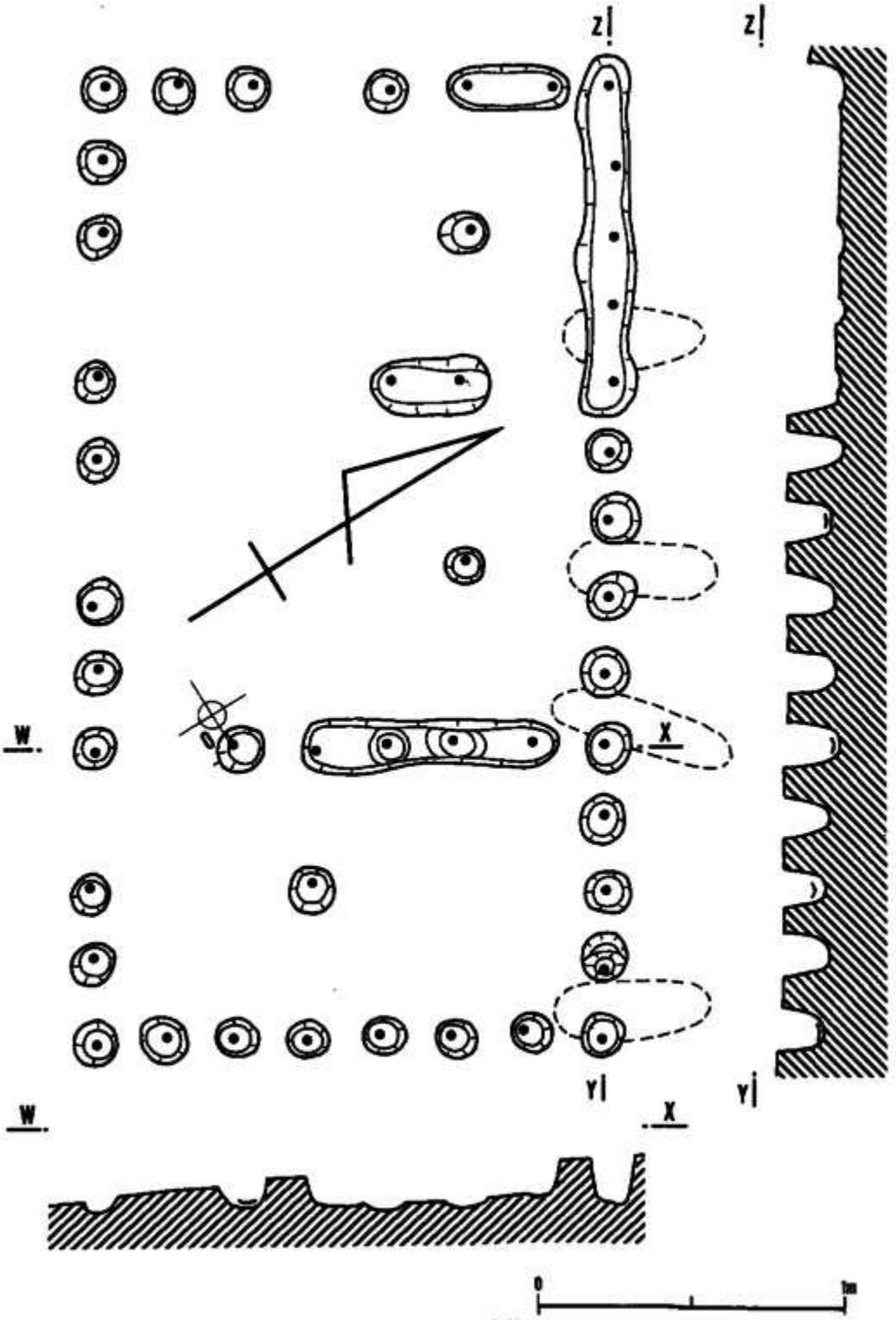
図版16　3号建物址



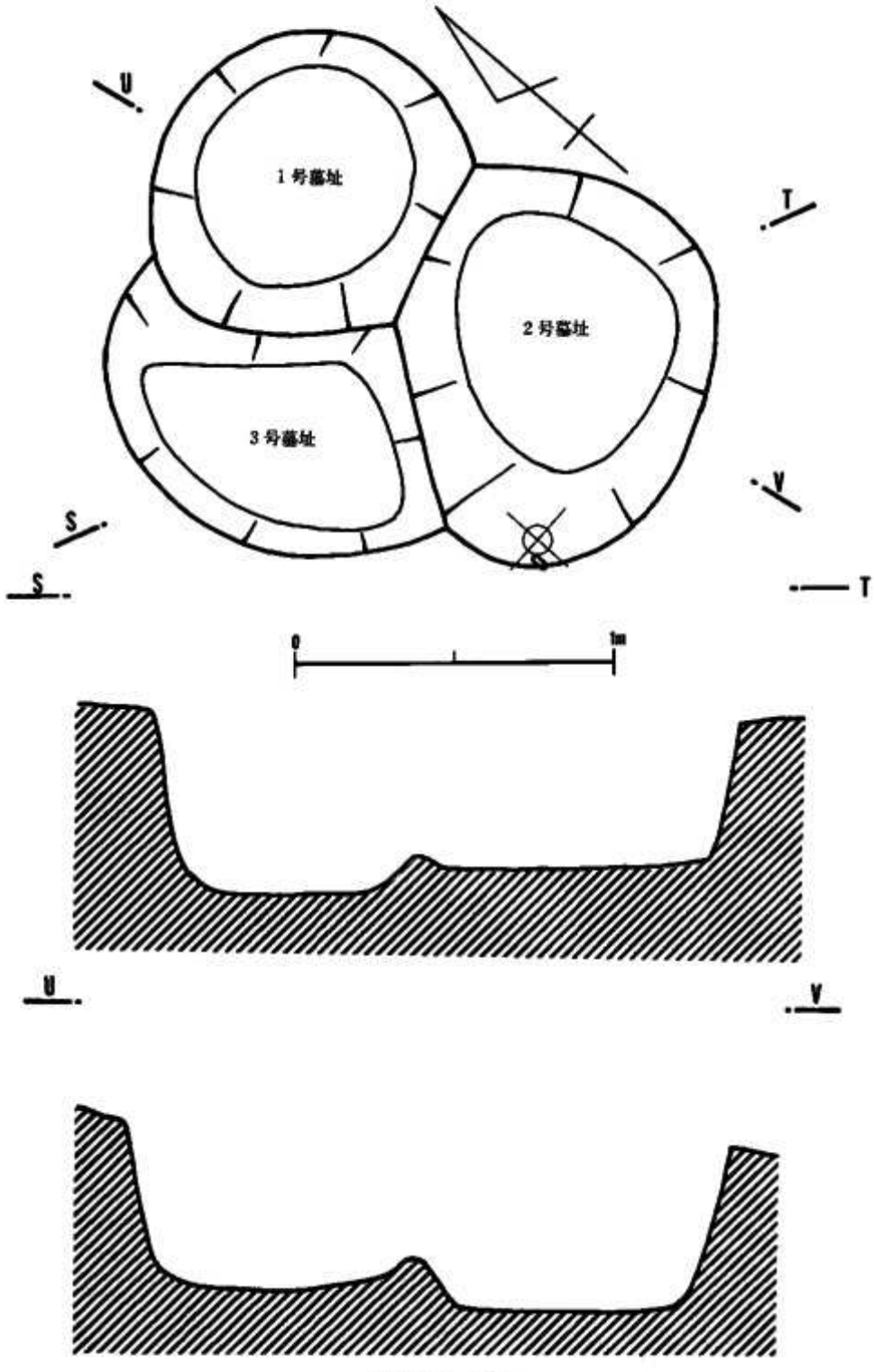
図版17　土坑、3号建物址断面図



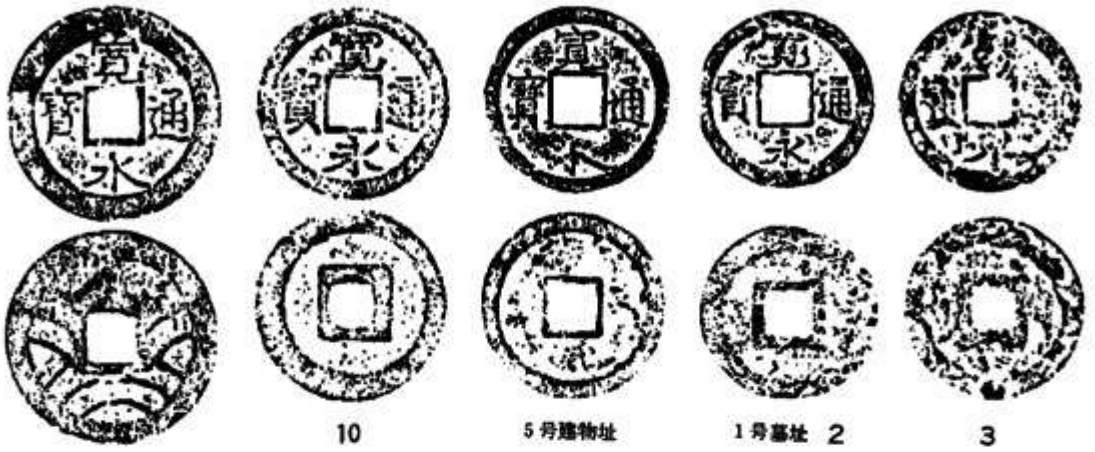
図版18　4号建物址

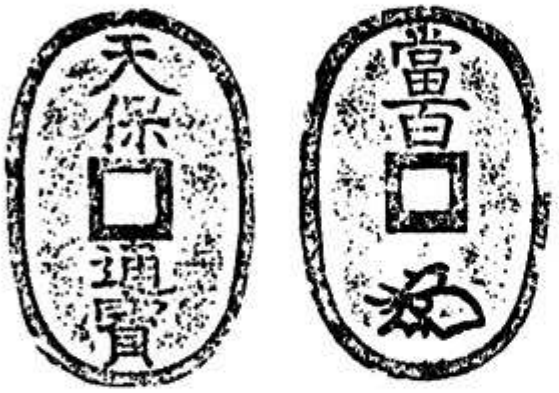


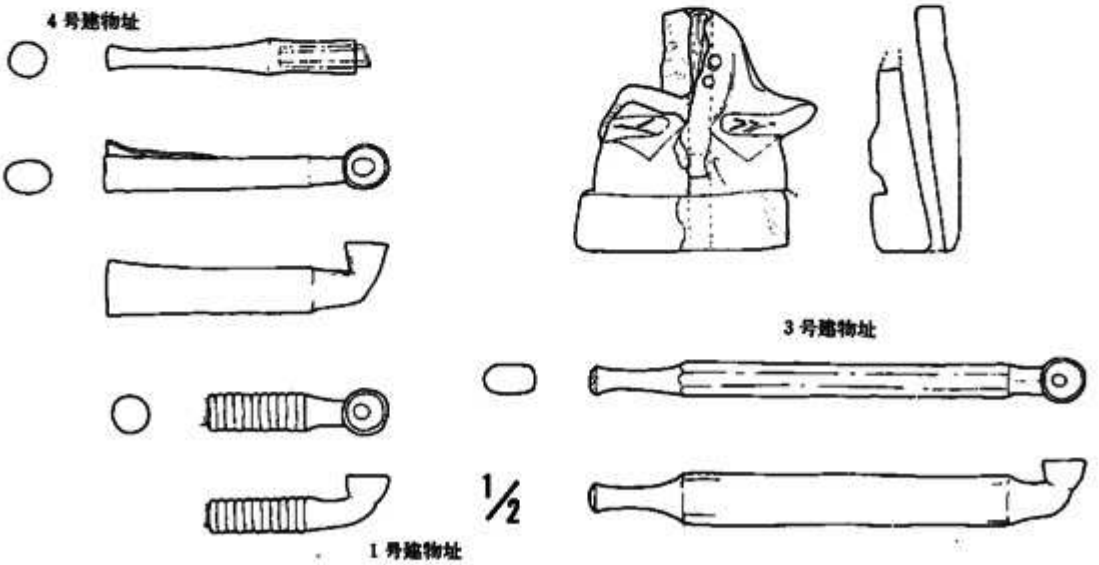
図版19　5号建物址



図版20　墓址







図版21　建物址・墓址出土貨幣(上)キセル・土製品(下)

下猿田Ⅲ調査遠景

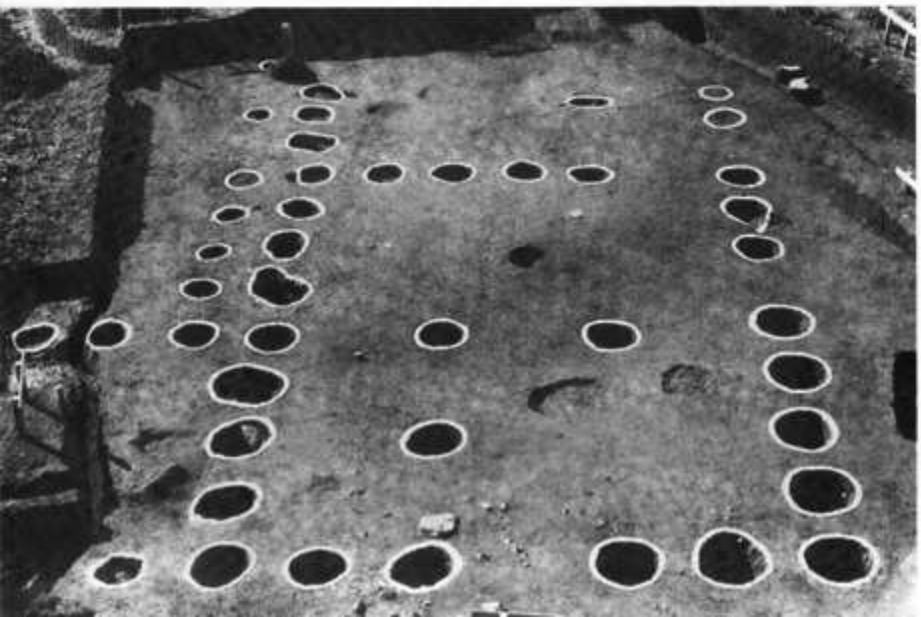
1号建物址

1号建物址

写真図版1

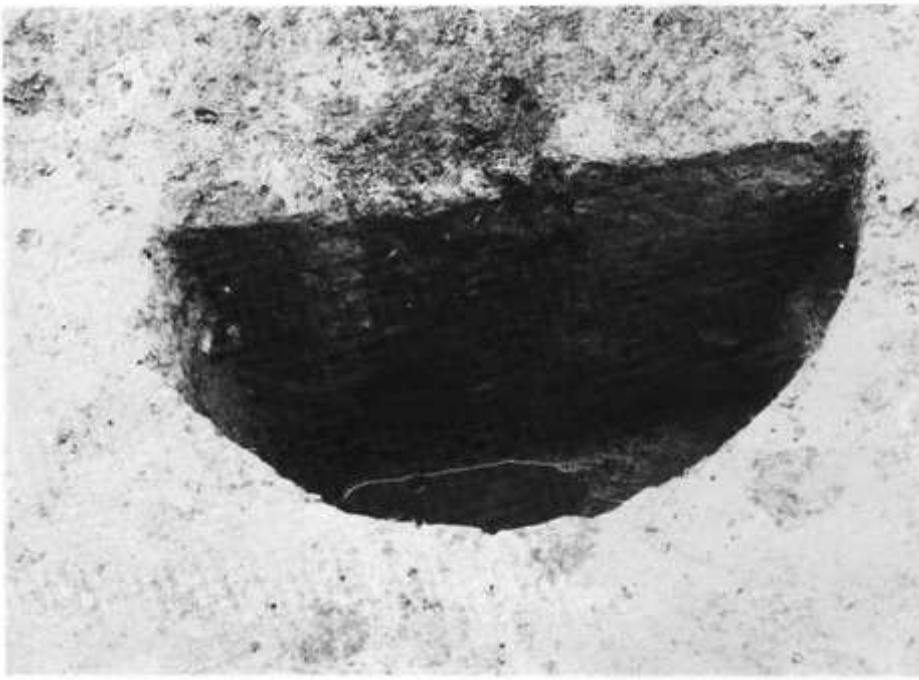
1号建物址

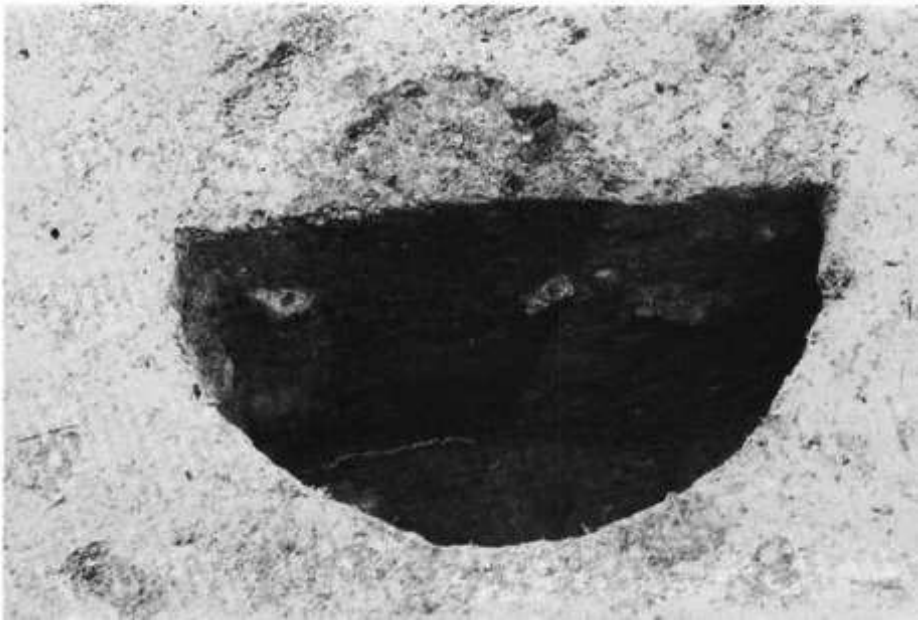
2号建物址



3号建物址

写真図版2

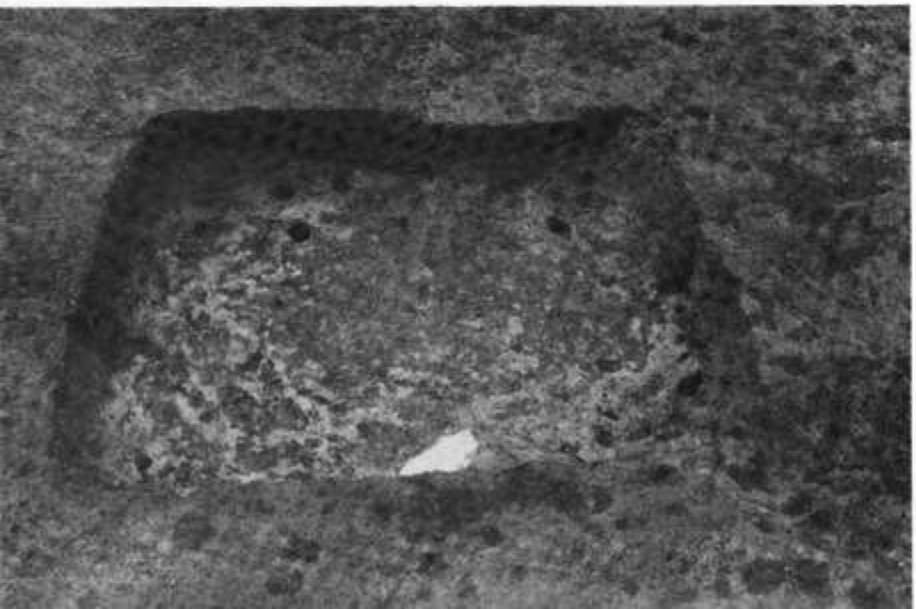




写真図版３　３号建物址
柱穴断面

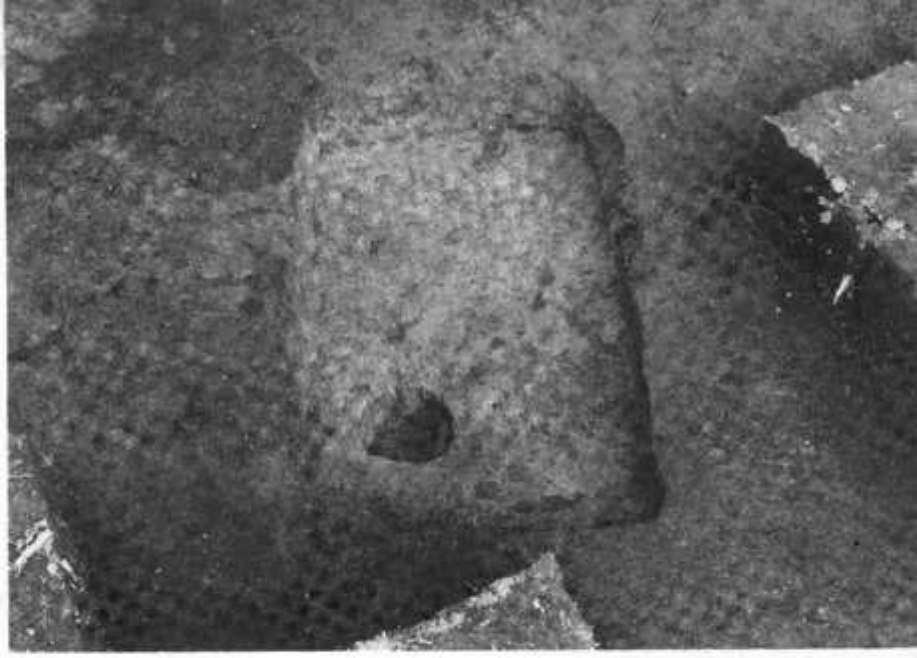
3号建物址

方形土坑

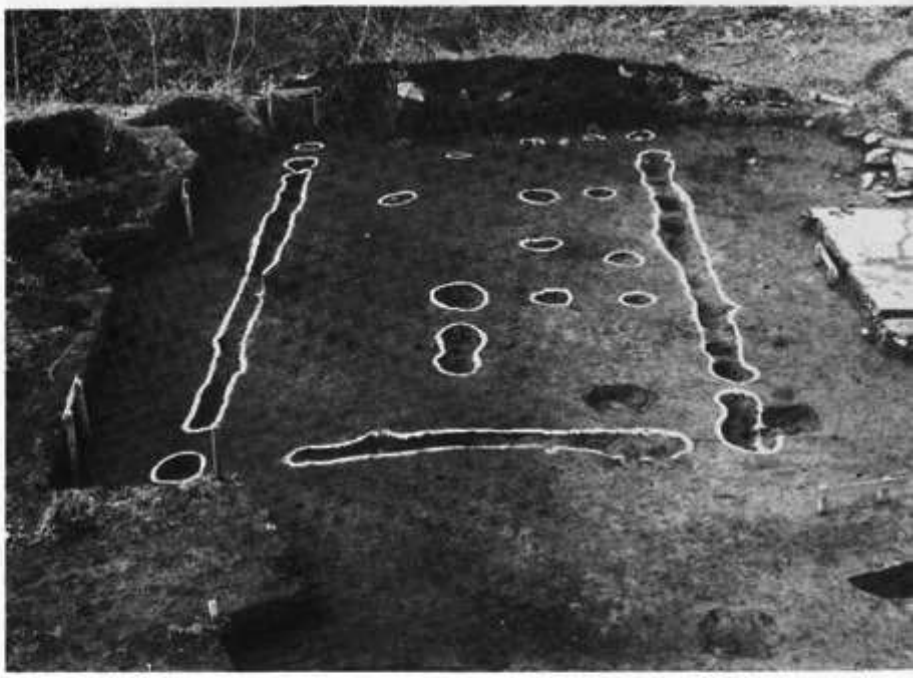


方形土坑

写真図版 4



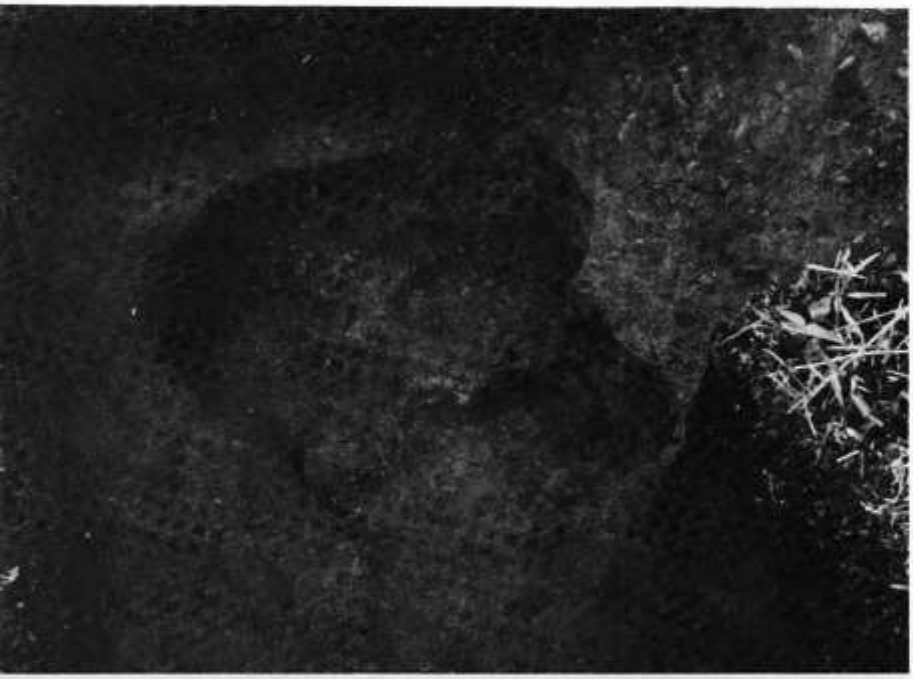
方形土坑



4 号建物址

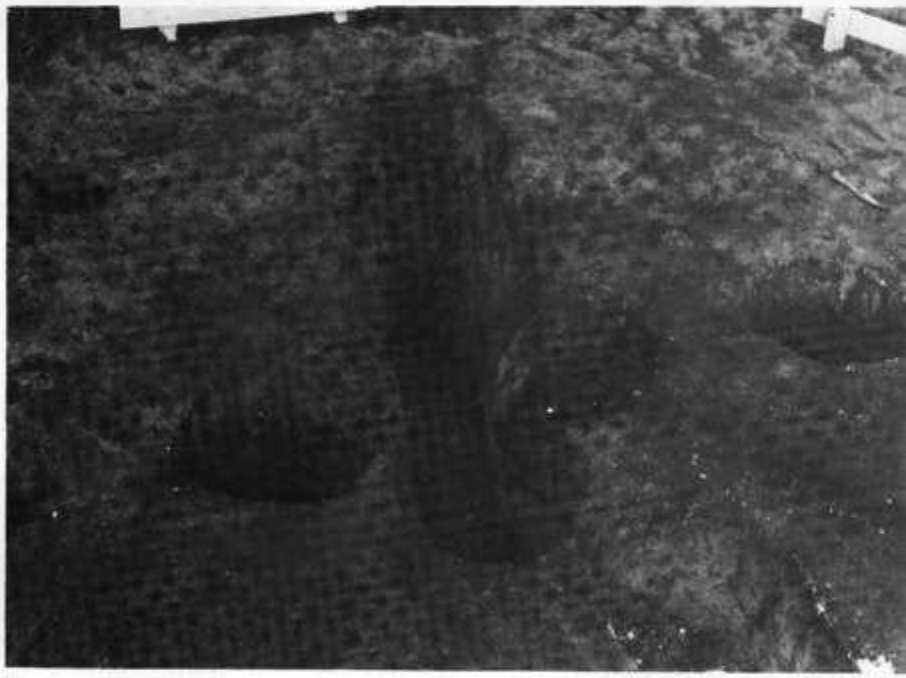
5 号建物址

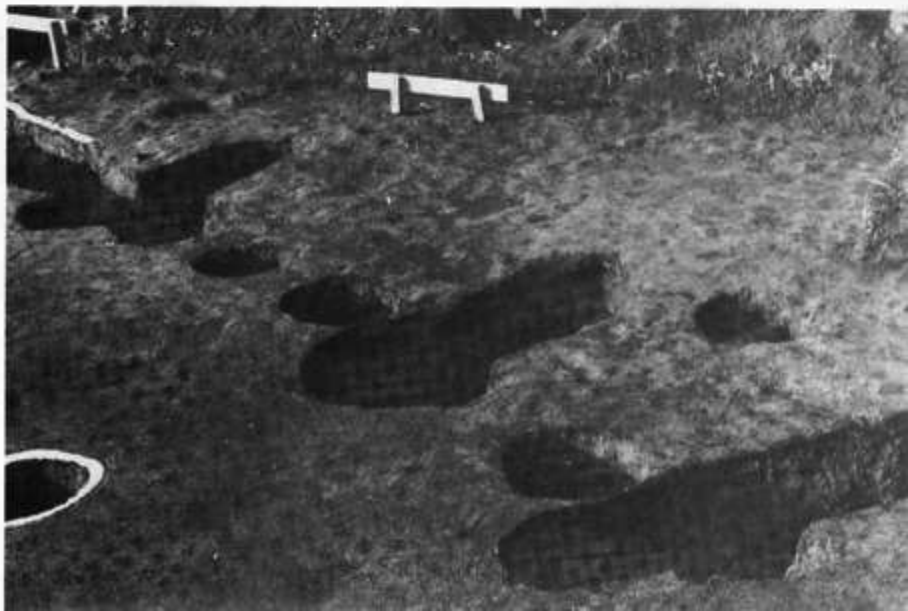
5号建物址



墓址

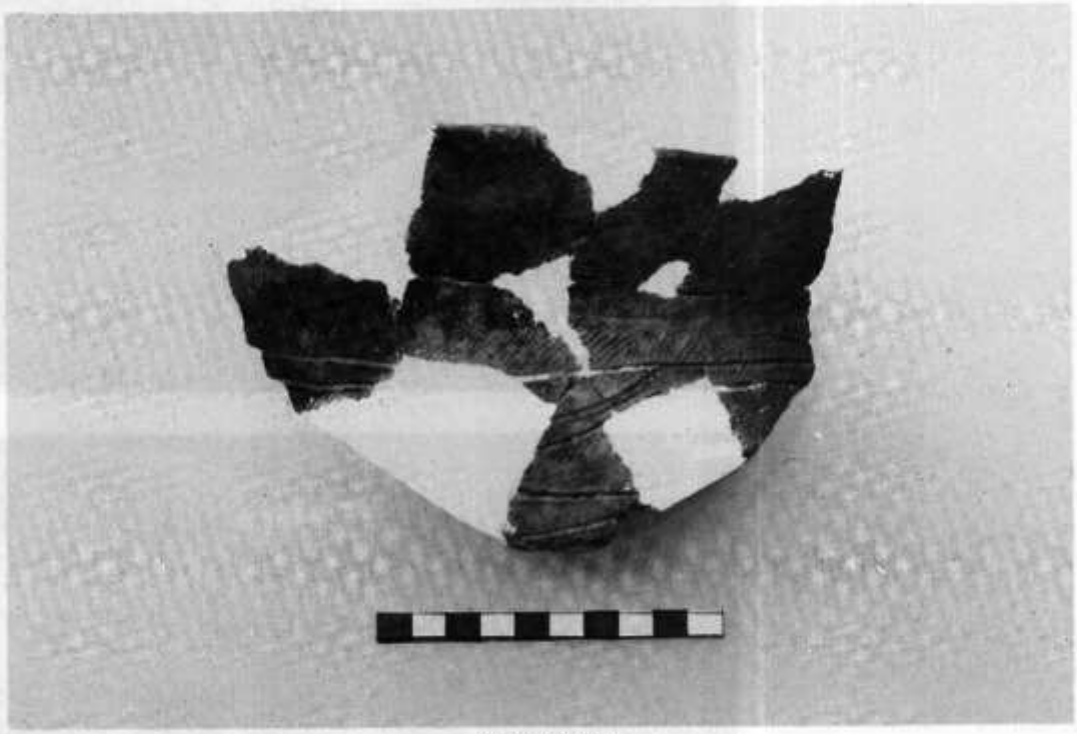
陥し穴状遺構





写真図版７　附し穴状遺構

復元土器(A)



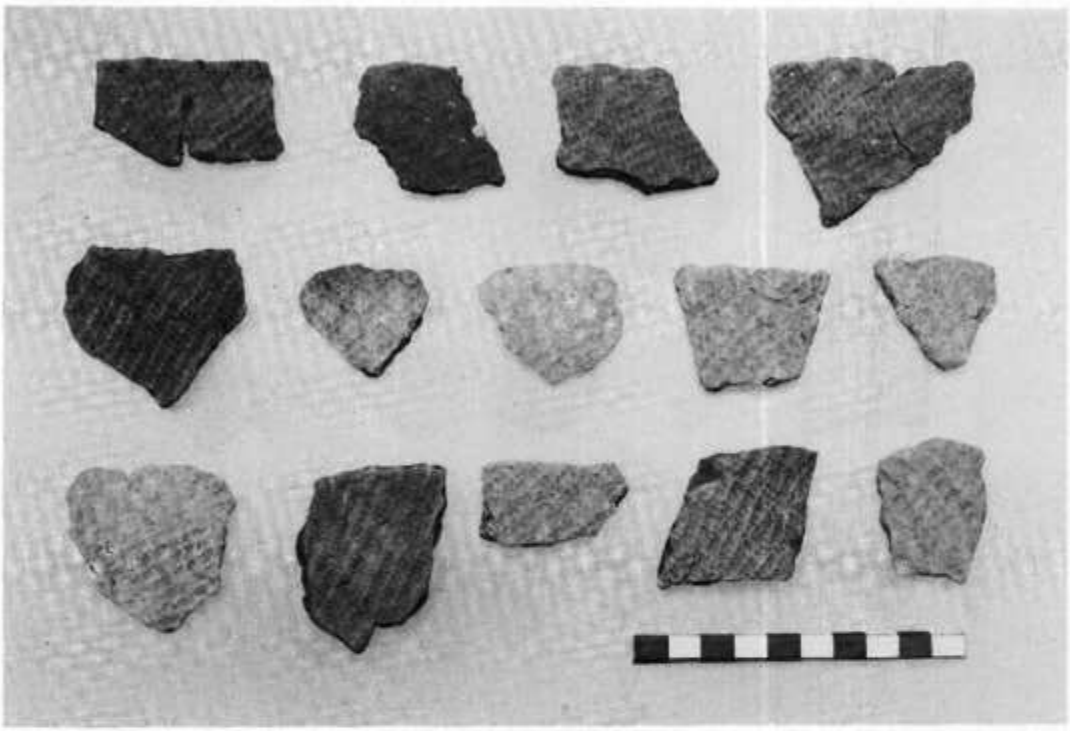
復元土器(B)

写真図版８　半完形復元在器

A．第Ⅰ群第１類、第２類土器

B．第Ⅱ群第１類～第５類土器

写真図版９



A．第Ⅱ群第５類土器

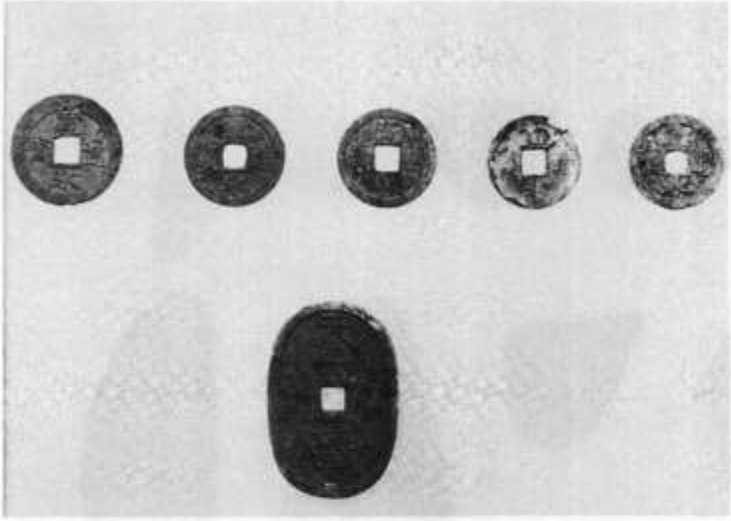
B．第Ⅱ群第５類、第６類土器

写真図版10

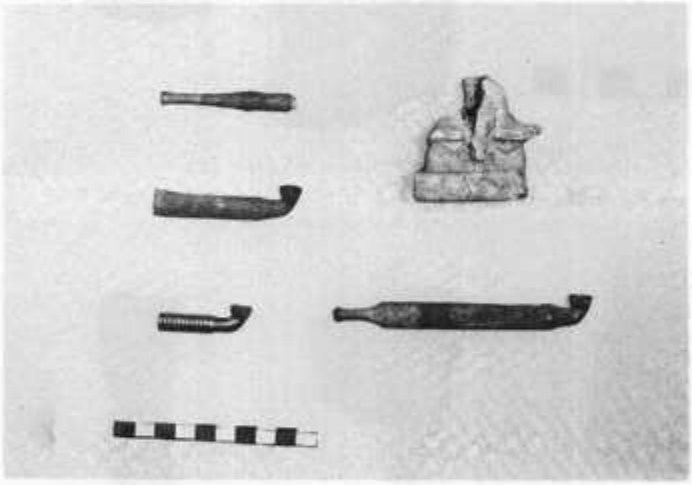
A．石鏃、石匙、石篦

B．石篦、不定形剥片石器

写真図版11



建物址出土遺物



ダム水没後の遠景

写真図版12

岩手県埋文センター文化財調査報告書第16集
御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書
盛岡市　下猿田Ⅱ・下猿田Ⅲ遺跡
雫石町　安庭古墳・伝久・町場Ⅱ
町場Ⅲ遺跡
(昭和49年度・54年度)
昭和56年3月20日　印刷
昭和56年3月25日　発行
発行　財団法人岩手県埋蔵文化財センター
〒020 盛岡市向中野字向中野39番1号
TEL (0196) 35－6622
印刷　山口北州印刷株式会社
© 岩手県埋文センター 1981